
テスト投稿：ゼロの使い魔二次作品

HUnew

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テスト投稿：ゼロの使い魔二次作品

【Nコード】

N6035V

【作者名】

H U n e w

【あらすじ】

この世界の才人には妹がいます。彼女のおかげで才人は原作より落ち着いています。また、原作世界へ行く前に別の世界で準備をします。キーワードに書かれている世界からアイテムやらなんやら持ち込みます。おかげで武器や技がチートになっています。作者の独自解釈があります。独自理論もあります。そういったものの苦手な方は回れ右を推奨します。原作準拠なのでR15としています。こんな作品（駄文）ですがよろしく願います。

1・プロローグ

兄妹で一つの部屋を使っていたのを兄妹でそれぞれ一部屋ずつ使えるようにするための家の改装、というより増改築・・・くたびれてきた家自体の耐震補強工事なんかも含めて行っただが、自分達の部屋が一時的になくなるので、あれやこれで約2ヶ月間の引越し、今日は引越しのはずだった、あの爆発が起きるまでは。

両親はそのまま工事中も家に住むのだが、自分と妹の舞華は部屋自体がなくなるので借りたアパートへ一時避難。自分達の部屋の荷物を積んだレンタカーと自分のサイドカー、HONDA CB400をベースとしたもの、それらに荷物を満載して、後は親父が家から出てきたら、出発という時に・・・

突然の爆発音と同時に周りの風景から色がなくなり一面がモノクロームの世界に変わった。

「じじはぶじじ?」

突然耳元で声がした。

「!?!」

振り向いた所に、目の色が赤く髪の毛が緑色の白いブラウスに赤い

チェックのスカートと上着を羽織った自分と同じくらいの女性がいた。

「え、？」

「ここはどこかしら？」

「え、ここは……」

混乱していたからだろうか問われるままに、「ここは東京の……」
東京の自分の住所を素直にいった。

「あ、舞華、無事か！」

「お兄ちゃん……」

ワゴンの助手席から舞華が降りてきた。

「な、何が……」

怯えた様に声がこわばっている。

「あ！」

舞華が驚いたようにこちらを見る。

「どうした？、えっ！？」

浮いていたのだ、人が……

「あら、驚かしてしまったかしら？」

50センチくらい浮いていた女性（自分と同じくらいの年恰好に見えるので

女性という言い方も変だがなぜか彼女に関しては、その言い方がしっくりくるので心の中でそう思った。）

「あ、あの・・・誰？」

「あらあら」「ニコニコしながら彼女はゆっくり地面に降りた。

「はじめまして、私の名前は・・・」

「あ、俺は才人、平賀才人、こいつが、俺の妹で舞華」

「舞華です、はじめまして」

なぜか妙に人に拒否を許さない妙な迫力でニコニコ挨拶をしてくる、空に浮かべる器用な女性に釣られて同じように返事をする俺たち兄妹

「あの、どうなったんですか？」

（あらら、人見知りする舞華が初めて会った人に自分から声かけてるよ。でも聞かれてもわかるわけないよな？）

「どうも誰かの無茶苦茶な魔法に巻き込まれたようね」

「魔法？」

「そう、魔法。私こう見えても魔法のこと少しは詳しいのよ」

「彼女」の話ではこういう事だ。

まず最初に「俺」に向けて空間だか、場所だかを飛び越えて、魔法を使った人の所へ移動する、強制移動魔法を使ったらしい。

最初に魔法そのものを作った？人はかなり複雑だがちゃんと術を完成させれば「俺だけ」をその術で唱えた人の所へ飛ばせるそうだ。

ところが、おそらくその魔法を習った人（弟子や生徒？）は何か不完全だったらしい。

魔力や術の強度？詠唱などが適切でないと無効化や暴走をするらしいが、今回はその暴走により、その術を使った世界、だけでなくほかの世界に干渉したため、友達と遊んでいた「彼女」は友達と離れて今、巻き込まれてここにいららしい。

その「彼女」の友達というのは、世界の壁を超えることが出来る能力を使えるので巻き込まれずに逃げられただろう。ということだ。

「彼女」曰く魔法や能力など不思議な技は、同じに見えても本質が違ふものが多く有るらしい。よくわからないが。

問題はその暴走時にたまたま干渉した、いくつかの世界で同じようにほかの世界に干渉するような力が働いたということらしい。

普通なら、単独では力が干渉しようが特に問題になるようなことはないのだが、今回は絶妙なタイミングでお互いが干渉しあったため、いくつかの世界を経由して本来の魔法の詠唱者のもとへ飛ぶらしい。

よく落ち着いてみると俺と舞華、それに不思議な魔法使い？の「彼女」は色がついて見える。周りはモノクロームの世界だが。

「まだ飛んでないから世界が白黒なのか？」

「まあ、そうね。ちょっと面倒なのはいつ飛ぶかということなのよね」

「判らないの？」

「うーん、後、数刻というところかしら？飛ぶのは今、サイトのいる所から、その円の中ね」

確かに自分たちの周囲、大体直径10mくらいのところが球形の幕のようになっている。試しに手を出してみると何の抵抗も無くすつと幕の向うへ手が突き抜けて行った。

「外から見たら、円の中は爆発して擂鉢みたいになってるわ。中は時間が止まっているというか、なんていうのかな？説明が難しいわね。要するに今この中にいる私たちと外の時間の流れが違っているというか、中が止まっているというか・・・」

その間、舞華はじつと俺たちの会話に聞き入っている。地面の上に正座してぎゅっとスカートの裾を握り締めて。

「中では時間は進んでいるけど、老化したり、見た目が変わったりすることはないわ」

「あくまで外とは違う時間が進んでいるだけなの」

「たぶん外から見たら、貴方達は爆発で吹き飛ばされたと思うわね」

「時間は召喚した人の所へ行けば、また流れ始めるわ」

「多分、だけど、それまでに経験したことは蓄積されるわね。時間の止まった世界で何か能力なり、魔法や力を、例えば剣術みたいなものを覚えればそれはそのまま外に出ても有効なはずよ」

「もとの魔法はサイト、貴方を狙った？のかどうかは、わからないけれど、貴方を中心に反応するはず。マイカはサイトから離れないことね。でないと、取り残されるわ」

「最終的には、サイトがこの円の中にいれば、この円の範囲にあるものが飛ばされるわ」

「でも、サイトがこの円の外に動けばサイトを中心に飛ばされるのか、円の中のものも一緒に飛ばされるのか、それともサイトだけが飛ばされるのかわからないわ」

「サイトを狙ったのならその術の中にサイト個人を特定できる部分があるはずなんだけど、ないのよ。困ったことにね」

そして、「彼女」は飛ばされるのは、「いつか」と最初に言った意

味をおしえてくれた。

簡単に言うと、世界が平行に走っている道路だとすると、今回の魔法は、通常であれば隣の車線へ移るのだが、今回の場合、いくつかの世界の力が干渉したため輻輳してしまい、隣に移る前に、一気に幾つかの、さらに向こうの車線へ飛ばされたらしい。

そして本来の隣の車線へ順に戻ってゆくのだが、今は幾つかの力が重なっているため「彼女」にもいくつ飛ばされるのかわからないらしい。

また、面倒なことに舞華をここで降ろしてしまうと、今の見た目はこの世界に止まっているように見えるものの、実際には絶賛飛ばされ中な為、このまま俺から離れると世界の狭間を迷子になるらしい。

ちなみに「彼女」は友達がその内、「気が向いたら迎えに来るでしょう」ということだ。

「なんだそれ？」と、突っ込むと、今は（術の状態が）ややこしいのもっと分り易く（ある程度飛ばされたら。）なれば、迎えに来る（だろう）。ということだ。

ちなみに「彼女」自身も魔法を使える（自分では、それなりの、といていた。）なので時間をかければ、術の内容を調査して戻れる様に魔法を組み立てる。ということだ。

それを聞いて、舞華が「よかったですね」といつてにこにこしていたが。

そうして家の方を向いた舞華の顔がこわばった。

俺もその方向をみた。塀と庭の一部が円の中に入っている。そして・

円の中から何かが周囲に飛び出している・・・爆弾に目があれば自分が爆発している瞬間を見ているように、・・・そして、その先に俺の親父とお袋がいた。

「もうじき飛ばされるわよ」

「彼女」の眩きとともに、周りの景色がゆがんで・・・

俺は意識をなくした。

2・準備(前書き)

取敢えず纏まったところまで、投稿してみます。

2・準備

「生きているものはいないわね」

世界が歪んでから、歪みが修まった世界に戻るとそこは見慣れない場所にかわっていた。

一言で言うと赤い世界。太陽がまだ上に昇っているのに夕日のように太陽の陽が赤いのだ。

今いる場所は学校のような役所のような、堅苦しそうなコンクリート製の建物が幾つか見えて、倉庫や体育館のような建物も見える。振り向くとすぐ近くに、飛行機やヘリコプターが四機ずつ並んでいる。ヘリコプターはわかるが、翼のたたまれた飛行機？滑走路もないのに？俺には理解できない飛行機もあった。

それで、今いるのは、いわゆる学校の校庭又は運動場とでも言うのだろうか？の真ん中に『飛んできた』。

「ここは・・・」舞華がつぶやく。

「自衛隊の基地かな？」何とはなしに俺が答えるように返事をする。それっぽい車両があちこちで壁際にきれいに並んで停車して有るかんだ。

舞華がこっちを見る。

俺はそれを感じながら、彼女が「生きているものはいないわね」といつているのを聞いていたはずなのに誰かいないか探すように周りを見ていた。

建物の窓などは一部が割れているもののそんなに大きく壊れている所はなさそうだ。

遠くに見えるコンクリートの床や歩廊のようになっているところの一部に赤い染みのようなものが広がっていて近くに濃い緑の服のようなものが落ちていたのを見ていた。

「うーん、大体1ヶ月後くらいかしら？もう少しかかるのかな？次に飛ぶのは」

彼女が飛んできた自分の世界の地面とこの赤い世界の地面の境目を触ったり、きよるきよる周りを見渡した後、首をかしげながら誰にともなくつぶやいていた。

「わかるの？」彼女のほうを振り向きながらの舞華の問いに彼女は「今の飛び終わった瞬間に術と力が少し見えてね、それに干渉した力も・・・とんでもないわよ、干渉した力は、私の全力に近いかも」

「私のように妖怪でもない普通の人間ばいんだけど、巫女でもないくせに・・・」

会話が成り立っているようで実は俺達の質問に彼女は独り言をぶつぶつ呟いていたわけだ。

しかし、彼女って、声はかわいいし、仕草もかわいいし、それでいてなんか神秘的なオーラを撒き散らして、飛ばされる前に言っていた、自分は妖怪で神様や妖精なんかと一緒に住んでいたって、こんなことになっているのに冷静で、人間じゃないって信じるしかないよな。などと益体もないことを考えていると、

「準備したほうがいいわね」

「なにを？」

「これから行く所、ああ、貴方を呼んだ人のところに行くことね」

「貴方の世界と今までもその世界は時々つなげて、そして貴方達の世界から何度か何かを転移させてみたいなの。少しそんな匂いがあるの」

「でね、なんか危ないところかもしれないのよ。もちろん貴方たちにとつてね」

「私？私を倒せるものはその世界にはいないわ。もちろんこの世界には・・・可能性は有るけど、彼はそんなことはしないとと思うわ」

「それと、多分だけどその世界に行く前に最低もう一つ、違う世界に飛ぶわ」

「そこも、このこと同じ生きているものがない世界とは限らないし」「準備をするに越したことはないわ」

相変わらず、分ったような分らない事を「彼女」が呟いた。

「あの・・・」

「なに、舞華」

「さつき、お兄ちゃんを呼んだ人のいる世界って、私たちの世界から何かを転移させているって、本当なんですか？」

「はっきりと術が見えたわけじゃないけど、匂いがするのよ、無理やりつなげている。ね」

「それにこの術作った人って、頭おかしいのかも、一見すると自分の世界から自分に合った生き物に交渉して使い魔として呼ぶようになってるのに。裏で特定の条件があると、何かその条件にあった人を、問答無用に貴方達の世界を含めて探し出して、貴方達のように拉致したりするのよ。しかも一方通行だし」

「だから準備しておいたほうがいいわね」

「準備？」 舞華が合いの手を入れる。

「そう、準備。ここは貴方達の世界に近い世界で、この場所は戦うための武器の有るところ」

「ここにたどり着いたのは偶然、でも意味なくこの世界にきたとは思えないわ、ここで準備しなさいって事ね。きっと」

「そ、そうなんだ・・・」

舞華が涙声でそこにしゃがみこんだ。

「で、でもお父さんも、お母さんも・・・」

舞華が泣き出した。俺はただ膝をつけて舞華を抱きしめていた。

泣き疲れて寝てしまった舞華を抱えて、先に彼女が見つけてくれた、医務室のような所で舞華をベッドに降ろし、毛布をかけると彼女の方に向き直り、「今日はありがとう」俺はそう言った。

舞華を寝かせてる間、少し話をした。

あの飛ばされる前の爆発のようなものは、俺たちがここに到着した時点で既に親父たちに到達しているらしい。

そしてあの爆発のようなものは、召還魔法を使った人が起したのではなく、別の力が干渉して、ひよっとすると彼女が俺達の世界に来たときに起きたものかもしれないし、別の力の干渉かもしれないといった。

親父たちはまず助からないだろうということだった。

信じられないことに俺は怒り出さなかった。というより、ここにこしながら理解できていることを丁寧に説明してくれる『彼女』に対して八つ当たりすらしようと思えない何かを感じていたのだった。あとから思えばあれが絶対的な強さを持ったもののオーラというのだろう。

その後、時間がたつにつれ舞華のこともあり頭の中を常に冷静になるように努力していた俺は両親の死というものに（表向きは）冷静に向き合えるようになったと思う。

彼女が見たところでは、俺を狙った誘拐魔法は一方通行で戻すよう

にはなっていないらしい。魔法を解析すれば逆動作する魔法を組んで戻れるかもしれないということだった。

ただ、この魔法にはおかしなところがあり、どうも魔法を使った人間にも選択権がない、しかも使った人間にもっとも相性のいい生き物を召還する。という作った人の頭の中の構造を疑うような代物らしい。

ほかにもいろいろ話をした。

彼女は这个世界とは別の世界に生きている妖怪と、自分のことを紹介した。また彼女は花を操る四季のフラワーマスターなのよ。といてニコニコしてた。

この世界が何かおかしいとは思っていた、彼女にあの後、さらにもう一度言われたのだ、「生きているものがない」ということに。

最初に周りを見たときに気がついて当然なのに、日本でこういった場所に当然有るべき植樹されたものが、どこにも、視界に入る中に、どこにもなかったのだ。もちろん建物の周りにある花壇らしきところにも。

それに雑草も虫も、周りを見渡しても何もそれらしいものが見えなかったんだ。

ただ、赤い染みのようなものがあり、彼女いわく、それが生きていたものの成れの果てということなのだ。

よく分らない事だらけなのだが、それでも魂が残っていて体が融け

て魂が一つになっているらしい。

彼女もなんでそんなになったのか判らないのだが、現実にそうなったということだ。

でもって彼女がニコニコして、舞華に好意を持っているのは、舞華の趣味というか、舞華が小学生の頃に、何時頃だったかは覚えていないけど、理科の授業で習ったことの実験と観察の一つに、家で食べた果物の種を植木鉢に植えて育てるとというのがあり、幼い舞華はそれに嵌って行ったのだった。

最近では、りんごやみかんはもちろん、果ては、最近日本でも売られるようになった、マンゴーなど日本でそれも東京で育てるのはちよつとどうなの？といったものまで育てていたのだ。

当然引越しのときにもそれが問題になり、一軒家な俺の家は有る程度大きくなった樹は庭に植えられているが、まだ小さな鉢のものは舞華が頑固に引越し先に持っていくと駄々を捏ねたのだ。

普段から俺や親の言うことに口答えすることもなく、自己主張の少ない舞華が珍しく涙目で俯いて少し上目使いで親のほうを見ながら粘っていると、親父が萌え死んだ。

予定していたアパートではなく、それなりのベランダ付の部屋に変更したのだった。

俺も舞華と同じアパートへ、予定していた部屋より広く、ネットまですでに着いていた部屋に引っ越せたので、こっそり「舞華GJ」と心の中でサムズアップをしたものだった。

仮住まいの日数から言えばもちろんお金はかかるし、お袋はいい顔しなかったが、舞華が珍しく自己主張したので、最後は仕方がない。つて顔をしていた。

で、彼女の機嫌がいいのは、彼女自身がフラワーマスターという植物を司る妖怪さんなので、最初、この異変を解析するのに集中していたが、この世界に飛ばされ、有る程度解析が終わると、自分が見るべき花が、植物がない。と言う事にショックを受けていたのだ。た。

しかし、舞華の荷物の大部分を占める小さな鉢植えや、飛ばされた範囲のうちの庭に含まれている、舞華の育てていた植物達（果物とか所謂作物？）。それらを見つけるとニコニコしながら俺に「これを育てていいかな？」と尋ねてきたのだ。また舞華の趣味？で、授業の一環として小学校でよくある田植えに触発されどこで手に入れたのか、稲や小麦、大麦なども育てていたのだ。また小学校の授業でよくあるサツマイモやジャガイモなどもである。もちろん育ちはよくなかったし、舞華本人も育つのが楽しくて芽が出たといつては水をやり、花が咲いたといつては、親父にねだつて俺と一緒に写真を撮れとねだつたりしてたのだが。

普通、女の子ならかわいい花や、綺麗な花を育てればいいのに、舞華と来たら食べられる植物を、といつて別に食べるのを目的にしているわけじゃない・・・ここだけは妹の事がいまだにわからない部分だ。

話がそれだが、もちろん普通なら舞華の持ち物なので即座に断るところなのだが、本能的に絶対逆らつてはいけないと理解し、「構わないけどこれは舞華の持ち物だから後で、舞華に一言お願いします」と、何故か逆をお願いしてしまったのだ。

「もちろんよ」返事をしながら、ワゴンの後部から鉢を取り出し、どこから取り出したのか如雨露で水をかけたり、花壇から土を持ってきたりして地面に植え替えたり忙しそうに、でも楽しそうに作業を始めていた。

彼女が自らフラワーマスターを自称しているのを確認出来たのは、TVの教育番組でやっている映像の早回し？ように、見ている間に植物が生長していく様子だった。そして花は満開に咲いた。

本人曰く、本来こういう植物の成長という行為に干渉するのは、普段は絶対にしないのだが、ここでは自分が干渉しないと植物の魂が一つになると。俺には何が何だかさっぱりなことを説明してくれる。ほんと普通なら危ない人なのだが、目の前で起きていることは普通じゃないし、本人曰く妖怪さんなのでこれはこれで問題ないのだろう。うん問題ない。

一通り鉢植えを触っていると（俺には何をやっているのかよくわからなかった、とにかく植物がどんどん成長していたんだ。）、「これでよし、後は・・・」独り言を呟くと建物の中にすっと、歩いていくはずなのに何か滑るように、まるでグライダーが空を滑空しているように入っていくと、5分ほどしてから、「こっちよ」と建物の入り口で手招きをしていた。

そこで誘われるまま、舞華を抱えてついていくと、先ほど説明した医務室のような部屋に入ってしまったというわけだ。

彼女は舞華と並びのベッドを指差すと「そこで貴方達は寝てればいいわ」というと、「私は隣の部屋で寝てるね」というとそのまま部屋を出て行った。

一日で色々な事があった俺は、親父たちのことや自分たちの今後のことを考えながら、そして逆に、何も考えられずになり、そのままベッドに倒れこむように寝てしまっていた。

3・準備 2

「お兄ちゃん」

体を揺さぶられて目が覚めた。

「あ、おはよう」

周りを見渡した。昨日の記憶どおりの病室のような部屋だった。

「朝、なのか？」

「うん」

窓から見える景色は夕方のように赤く染まった景色だった。

「お兄ちゃん、ご飯食べる？」

「何か有るのか？」

「食堂みたいなところ有って、さっき一緒にご飯作ってたの」

「・・・」

我が妹ながら突然こんなわけ判らないところにいるというのに、な
んで、なじめるんだろう？

「？」

関係ないことを考えていると、舞華が首を傾げながら此方を覗き込んできた。

「あ、食べるよ、昨日の今日でよく作れたな」

「ここで作れるって、教えてくれたから」

「でも、簡単なものだよ」

たわいない会話をしながら、俺たちは食堂へ向かった。

「飛んでいく範囲を少し私の方で干渉しておいたからこの樹の輪の中にいれば一緒に飛んでいくわ」

俺たちが飛ばされた場所は、自衛隊基地らしき場所の広場のほぼ中央、範囲約直径10mの範囲だが、彼女は約直径200mの範囲に家の庭にあつた鉢植えや、舞華が車に積んでいた鉢植えの植物を・・・昨日見ていたとはいえ、花が咲いてるし、小さな鉢植えの樹が普通の樹になつてる・・・。しかも増えてるし。なんというか、チート？

りんご、みかん、パイナップル、マンゴー、キウイ・・・いちじく 苺やら枇杷ももが、
って・・・俺にわかるのは結実した果物を見てでしかわからないが、

改めて見ると我が妹の無差別ぶりは。

というかろくに温室もなかったはずの前の部屋で良くこれだけのものが、てか、二人であるの部屋に住んでいたのにどこでどうやって???

おまけに稲やら小麦、大麦、ジャガイモにサツマイモって……

さすがに、女の子らしいのがチューリップ、ヒヤシンス、向日葵^{ひまわり}、朝顔^{あさぎ}、パンジー、紫陽花^{あじさい}、鬼灯^{ほおずき}、アロエ、梅、カトレア、水仙^さ、山茶花^{さんか}、椿^{つばき}、桔梗^{ききょう}、茶の木……そっか舞華が持つてる種やら球根も植えたのね……って季節も何もかも無茶苦茶な……

まてまて、舞華って確か育ててるのって一株ずつとかそのくらいしかなかったよな？なんだこの数は？あの人やったのか？本当に……
・自分のこと妖怪って言うてたけど本当か？神様じゃないの？

とりあえずこの範囲中に置いた物は一緒に飛んで行ってくれるらしい。どうも、俺が寝てる間に昨日の話しを舞華と彼女でしていたらしく、これが俺を狙ったものという事、親父たちのことや俺にかけられた魔法が一方通行ということ、魔法や能力の無い俺たちがこのものを使うにしても手に持てる分だけではすぐ無くなると言う話をしていたらしい。

食事の準備が一区切りつくと、後を舞華に任せて彼女が一人で植物の世話をしていたらしい。(舞華談)

彼女の言うとおり危険なことになるのなら、確かに、彼女みたいな不思議な力が無い俺たちは、準備といっても、武器となれば別に剣が使えたり、武道が出来るわけでもなく、この場所的に準備するものは銃のようなものになるだろう、そうになると練習もしなくてはいけないし、消耗品的なことも考えて行かなければいけないだろう。

最初に始めたのは、そこら辺に落ちている服と一緒になっている小銃や拳銃を集めることだった。集めた武器を近くにあったキーのつきっぱなしのトラックに載せておいたのだが、実は安全装置がかかっているらしく引き金を引く事が出来なかった。無理に使おうとして怪我でもしたら嫌だったので、ほかに何か無いか建物の中をしばらく探検した。

最初に落ちているものを拾い始めたというのは、あちこちに緑色や迷彩の服と一緒にそういったものが落ちていて、それらがある程度片付けないと車やトラックといった物を動かすことができなかつたからだ。最悪踏んづけて車なんかと一緒に爆発、といった事態を避けるために、自分達の飛んできたところの周りや、車の通路になりそうなところ、目に付くところなどを片付けていった。

もう一つの理由はその服の落ちている所は、元人間のいた跡という事で何となく気持ち悪いという気分的な物もあつたからだが、判ったことは、この基地は自衛隊ではなく戦略自衛隊という俺たちの知らない組織で、新兵やさらに上を目指す兵隊さんを教育する部隊で教導隊というのがあつたらしい。

彼女と一緒に基地の中を探索していく。普通なら入れない部屋も彼女の前ではセキュリティの意味が無かつた。

おかげで武器の使用説明書や作戦書類なども見放題だったが、とりあえず武器の使用説明書、それも小銃、拳銃を中心に、あとトラックや車関係を使って何を集めるかという作戦を舞華と相談することが出来た。さすがに舞華は女の子で服や食べ物、寝る場所などをいろいろアイデアを出してくれたので、それも探しに行くこととした。また、機密書類のおかげでここには武器や弾薬類は最小限度しか置いていない、必要な分だけ武器弾薬を置いてある倉庫になっている場所へとりに行く必要が有ることが判った。

これは資料だけ適当にコンテナに詰めした後で、仕分けした時に分かったことだが、この基地は裏の顔があり、表向きは教導部隊+試作武器の実験部隊？の基地だが、裏では非合法的活動の拠点の一つだった。ということだった。この世界の日本は結構ぎすぎすしたところらしい。その為、武器類に関しては、特殊な物や通常では必要のない物もあったということだ。俺達はそれを知らないで目に付くものを適当に集めていただけだったが、コンテナに集めた武器の中にはそういったものもあるのかもしれない。と書類を読んで思った。

一週間近くかかって周辺を片付けて、基地の様子も大体わかり、周囲の地図や武器・弾薬を置いてある倉庫の基地までの道順、幹線道路沿いにある駐車場などトレーラーやトラックなどでこれから必要になるかもしれない資材や物資を集めに行く場所などの予定をたてていった。

幸い何か大量の貨物が届いた後らしく、駐車場？壁で仕切られていたり饅頭のような外観のコンクリートの中に有る駐車場だが、空の貨物コンテナが積み重なっていたり、台車に載っていたり、これから出ようとしていたところなのだろうか？トレーラーに載っている物などがあった。

ほぼ一日がかりでコンテナを台車に載せたり降ろしたり、トレーラーを繋げたり外したり出来るようになり、翌日から倉庫になっている基地へ武器を取りに行くことになった。

もちろんついでに外の様子を確認することも、だが。

「あ？」

舞華がつぶやくように驚いている。舞華のしている方向を見た俺は声も出せなかった。

武器を取りにいくためにトレーラーを俺が運転して（エンジンをかける段階でエンスト5回ほど、走り出そうとしてエンジンが止まること4度、門を出る際に路肩を引っ掛けたり、ガードレールを引っ掛けたりを無数。）やっと何とか走り出して（倉庫までは片側3車線の広い道路ということを確認して、また、戻るときに素人の俺がトレーラーをバックで向きを変えたり出来ないのどぐるぐる一方通行で回れることを確認している。）軽い坂を上って見晴らしのよいところに上ったところで見えた光景だった。

海が真っ赤なのである。また、家屋の密集地帯では道路に赤い染みがついているの見える。太陽の日を受けてその赤が反射して世界が赤く見えているのだった。

横を振り向くと舞華が震えていた。トレーラーを止めて舞華に「大丈夫か、気分が悪くなったのなら一度戻るか？」

舞華は「少し休んでいい？」

「おう、わかった」サイドブレーキをかけ、車止めをして（基地の教本に書いてあった、これをしないと傾斜が無いようでもトレーラーの重さで車が動き出す可能性が有るからということだ。）ドアを開けて外に出る。反対側に回って舞華が降りてくるのを抱えて助けてやる。

舞華のように小柄の女の子にはこういう車は乗り降りでも大変だ。ちなみに彼女は基地で植物の世話をしている。

まあ彼女に助けてもらえると助かるのだが、基本的にこれらの準備は俺達のためだし、彼女には無用の物、おまけに基地では色々お世話になっているのでこれ以上手を煩わせるのはあまり良くないのかな、という気になっている。

「本当に違う世界なのね・・・」

舞華がつぶやく様に声に出す。

「俺たちの世界とは違う歴史の世界なんだな」

「幽香さんが言った、赤い水は全て、生き物だったって。世界中がこんな感じになって一つになってるって、人も動物も植物も・・・」

「幽香さんの世界は妖怪さんや神様や妖精さんが住んでいて、何千年も生きているんだって。で、けんかもするけど何か有ると一緒にお酒飲んで騒いでるって。この世界は仲良く一つになれたように見えるけど、幽香さんはこれは死んでるのと一緒だって。私もそう思

う・・・」

「確かにそうだよな。今まで生きてきたのに何で全部を捨てて一つになりたがるんだろう？この世界は何か絶望することがあったのか？」

・
・
・

「お兄ちゃんもう大丈夫だから、行きましょう」

「おう」

舞華をトレーラに乗せる手助けをして、車止めを外して運転席に乗り込む。

「よし今度は一発だ」

慎重にギアをいれ、クラッチをつなぐ

「さあ行くっ」

倉庫の基地は放置されていた。見たままの印象で言うと車両が出発しようと準備中に人が赤い水になったようだった。

従って、車両には武器弾薬が詰まれたままの状態で放置されていた。走行中であれば、故障車両や事故車両などがあってもよさそうなのに何故かそうだった車両が無くキーが指したままの車両が整然と放

置されていた。

少し考えたがそのまま、そういった車両に乗って帰ることにした。もちろん燃料やバッテリーなどは確認してだが。

幸い赤い水になってからさほど時間がたっていないのか、運悪くキーを回して電源が入りっぱなしのもの以外は、バッテリーがあがっていることもなく、燃料はほとんどすべての車が満タン状態だった。こういうのは今まで親父の手伝いで、何度もやっていたことなので慣れており、俺達の世界の車と同じ構造だったので充電すれば復帰することも可能だった。

おそらくこんな状態になっていくらもたっていないだろう。彼女が言った干渉した力の一つはこの赤い水になったことなんじゃないだろうか？

その日は倉庫の様子を確認するために時間もかかったため、その一往復だけで終わったが明日からは何往復も出来るだろう。しかし、いくつか問題があった。一つはこの日本の季節だ。何しろこの世界の（たぶん）日本は今の季節は夏なのか、俺達は少し肌寒い春先からやってきたので、俺も舞華も蒸し暑い倉庫の中で倒れそうになったのだった。

助かったのは近くにコンビニエンスストアのような店があり、生温いが飲み物を補給できたことだった。正直これがなければ元の基地の方へ戻ることは出来なかったかもしれない。

結局約一週間で大体いいだろう。と、思われるだけの量の武器弾薬を集め終わった。良いだろうと言うのはどれだけ具体的に集めたのか自分たちでも判っていないからだ。それに、俺達は軍人ではな

く戦車や戦闘機を使えるわけじゃない。ここはそういったものの弾薬も置いてあったんだ。

取敢えず俺達に必要なものは個人で扱う小銃や拳銃それ以上のものはないで、そういったスタンスで必要と思われるものを集めた(つもり)。

トラック何台分もの武器弾薬を集めたので、それ以外に保存の利きそうな食料、衣類等を探しにいくための時間が欲しかったからだ。倉庫の基地からはもちろん集めたが、見た目が同じっぽいので他に何かないかな？的なのであったが。

彼女の話からはまだ後、三週間ほど時間的な余裕があると聞いたのだが、飛ぶタイミングは有る程度振れが有るため、きっちり何日かというとわけには行かないということだ。あくまで最短で約三週間ということだ。

最初に倉庫へ持って行ったトレーラーを引取りに(基地に持ってきたトラックに乗って倉庫へ行き、積荷の有るトラックで基地に帰りを繰り返していたわけだ。)舞華と行き、帰りに目安つけた郊外のショッピングモールやホームセンター、ファストファッションのショップをメインにその商品を箱ごとコンテナに押し込みながら色々な物を集めていた。

時々舞華は「幽香さんに」といいながら、リカーショップで色々なお酒を集めたり、自分の趣味に合いそうな音楽CDなんかも集めていた、自分もミニコンポや自分の持っているMP3プレイヤーに合うアクセサリーを集めてたりしたが。

舞華がすごいと思うのは、お金のことだった、簡単に言うと違う世

界でも人がいれば宝石や貴金属のようなもの、交換できる価値の有るものがあれば、何か必要になったときに交換して手に入れられるんじゃないか？ということだった。

確かに今自分たちが持っている紙幣かコインなんかは別の世界で使えるかどうか判らないので、というか使えない可能性の方が高そうだし、それも一つの考えだと思い、街の中心街にある貴金属や宝石、装飾品を扱っている店を中心に集めてみた。舞華に言われたが価格などの判る物は出来るだけ付けておきましょう、と。

（要は値札なんだが、こういう店には、展示されていないものにそういった値札のついていないものも結構あることを知った。）

はつきり言って道端の露店で売っているアクセサリーとこういう店
店で売っているアクセサリーの違いや価値の判らない俺（達をつけられないのが悲しい。）では、値札のようなものや店に置いてあるその手の雑誌等がなければ価値がわからないから、これは人にプレゼントすることも有るかもしれないが、あくまで別の世界に行ったときに、いわゆるお金の代わりに使うものなのだ。使う本人に価値の判断となるものがついていなければ意味が無いかもしれない。

「舞華って俺が思っていたよりすごいな」

「なにそれ？」

まじい、心なしか舞華が膨れているような気がするぞ。

「俺じゃ、武器のことは思いついても、食事や服の着替え、お金のことや、もつという幽香さんのお酒なんか気付きもなかったぞ」

「なあんだ、そんなこと？私も幽香さんと話をしてから気がついた

んだよ」

「幽香さんも時々人里で色々な物を買ってからその時にお金を妖怪さんは持つてない事多いから、代わりになるものを使って物々交換なんだって」

「仲良いんだな」

「やさしいから」

にこにこしながら舞華が返事をした。

そんな会話をしながら、文房具などの雑貨、書籍なども舞華に言われてコンテナに収めるように集めていった。舞華いわく暇が出来たらコンテナの中を利用して図書館みたいにするつもりだそうだ。そんなこんなでアイテム集めに精を出していき、コンテナも順調に増えていった。

4・準備 3(前書き)

タイトルにしても、サブタイトルにしても何か思いつかないですね。
これからもタイトルや内容の変更はあるかもしれませんが。

誤字脱字の訂正です。

4・準備 3

なんだかんだで荷物が増えた、増えたというより溢れているといった状態だった。

二百メートルの樹木の輪の中に貨物コンテナ。いわゆる40フィートコンテナというやつだ。これを扉を開けられるように、とはいっても全開に開ききれないのは仕方ないが、何とか三段積で並べていった。

積み込むときに余裕があった時には、観音開きの扉を右側を開けると人が通れるくらいにして左側に荷物を押し込んで有る。ホームセンターの棚を利用して中仕切りとして左右に荷物を置いてあるものも有るが。ただ基本は適当に奥から詰め込んであるので、時間が出たらら荷物を取りやすいように積み替えが必要になる。

こういったコンテナは10本ほどが食料や衣類その他雑貨類が積み込んで有る。

もちろん俺にはどこに何が有るのかわからないが舞華がノートPCを使ってコンテナごとに大体の仕分けをして有る。

ノートPCは俺が使っているやつと互換のあるOSを使っていた、というか見た目は全く同じだった。それにいわゆる周辺機器に関してもコネクタなどに互換があり、俺のノートPCでも使うことができた。PCショップでいくつかのPCを選び、周辺機器やソフトなども運んでおいた。

戦略自衛隊の武器弾薬も同じように40フィートコンテナに積替

えも行っている、全てではないが。

こっちはパレットや木箱に入ったままのものもあり、取り出すにはフォークリフトなんかを使って取り出さないといけないものが多い。とりあえずの使える武器類（主に服と一緒に落ちてたやつだ。）は73式小型トラックというトラック（というより俺には三菱パジェロといわゆるジープの合いの子に見えなくも無いんだが）4両に、そいつにトレーラーをつけてそこに取り敢えず押し込んであるのだ。

基地の中の武器弾薬で纏まった物は、73式大型トラックへ積み込んで有る。

これが2両、基地の中には戦車なんかもあったがさすがに舞華と2人で使うことを考えると無理があったので置いておいた。

これは後になってあっても良かったかな？とも思ったのだが。

車やコンテナについては、中に赤い液体（跡）のない物を集めた。当然元人だったという事なので気味が悪いといったこともあり結構徹底して調べるようにした。服が残っていれば間違いなく該当物件なので、そういったものは倉庫の基地へ行くときに持っていくようにした。

銃なんかについては高架水槽が生きていたので、結構水洗い（してよかったかどうかは別にして）を一生懸命した。最後に式として正しいかどうか分らなかつたけれども、基地の隅っこの方に簡単な台を設置して、白い布をひいた上に、お酒と塩を小さな皿に盛って俺と舞華は気持ちだけでもと、成仏するように祈っておいた。

拳銃が何種類も、大きさが色々あって形もそっくりなものも有るのだが、小さめのものを舞華が、少し大きめのものを俺が使うことにした。

結果として、俺が9mm拳銃とH&Amp;K UMPという機関銃、舞華がP230JPという拳銃とVz・61という機関銃を使うことにした。

選んだ理由だが、俺達は銃に対して知識がない、他にも色々な拳銃（だけでなくよく映画で見るライフルやショットガンなども）があったが、後いくらかもないうちに飛ばされるのであれば手近に有るもので準備しなくてはいけないだろうと、舞華と相談してきめた。

また、俺達が完全に素人で、銃のことを知らない俺達は沢山落ちていた小銃を重たいという理由と、2種類も弾丸の予備を持たないといけない。という重たい・面倒という理由からだが、これは最終的には大失敗になってしまった。

ほかに何種類もの銃は有るのだが、一度コンテナに収めてしまつとわざわざ出すのが大変なことも有るので、トラックにたくさん積み込んで有り、予備の弾薬の多い物を優先して使うことにした。

先にあげたようにまだたくさん銃や弾薬、未整理のものも有るので教本や街で集めた本なんかも参考に色々試してみるつもりだし、取敢えず銃を撃つのももちろんだが、分解組み立てと一々銃を見なくても安全装置を外して狙いをつけられるように銃に慣れる事を優先にすることにした。（この辺りのことは教本や街から集めてきた本を参考にして、だが。）

集めた銃の中には、ケースや木箱等に入ったままのものも多かったが、中を見ることなく舞華のリストにあわせてコンテナに入れ直したり、トラックなんかに入れておいた。

舞華が言っていたが、銃だけでなく、手榴弾やバズーカ砲のようなものもあるのだが、今の段階では時間の関係で集計できてないようだ。

ただ、早い内に使えたほうが良いだろうからとケース等に入っていない物をトラックの中に仮置きしておくことにした。

トラックの中に並べるときに、やっぱり舞華に言われ、変に引っかけたりしないように乗り込んで蹴飛ばさないように、崩れたりしないように台になる枕木などを利用して軽く固定して並べておいた。

細かいことは舞華にまかせっきりになっている、俺としては舞華がオーダーワークにならないように手伝えればいいのだが、せいぜいがお茶とお菓子を持っていく。くらいしか出来ないのは兄として情けない。

仕方が無いのは、メモは全部舞華があの手忙しい中一人で作っていたのだから、自分では舞華が速記のように自分にだけ判る記号で書きなぐったメモは解読できないのだ。

武器もすごい数が有るのだろうけど、車両もそれなりになってしまった。

樹木の壁の内側に並べて出来るだけ発車し易く並べたつもりだが、まず俺が車の運転が不慣れだ。

大量のコンテナのことも有り、使いやすく並べているわけではないで、後で色々並べなおさないといけないだろう。

取敢えず目立つのはトレーラーに積んで有る戦車のようなキャタピラのついている兵員輸送車という物が二両。

これは二両ともトレーラーに積んで有るので使うときには降ろさなくてはいけない。

これは運転も難しそうなので取敢えず後回しということにしておいた。

トラックが小さいのから大きなものまで、また水や燃料を運ぶものも含めて20両以上・・・集めすぎ？

おまけに後で舞華に聞いたのだが知らないで集めたトラックの中に、手術迄出来るトラックのセットまで有るのだ、ただし有るだけ、冷静に考えれば実質医者がない自分たちでは使いようが無いのだが・・・(これの突っ込みはやっぱり舞華・・・orz)

燃料タンクを積んだトレーラーが5台、中には外のGSで見つけたものもある。一応燃料は満載になっている。街で見かけた車はすべて電気自動車だ。なぜかこの基地と倉庫の基地にある車やバイクはガソリンや軽油で動くようになっていて、大雑把にいうと車の燃料に関して民間と自衛隊で別になっているという不思議な世界だった。

装甲車というのだろうか？タイヤが八輪あるものが二両、大型のジープのようなものが四両、RVを装甲車にしたような感じのちよっ

と色と見た目でいかつい感じのやつが二両、これがこの基地からもって行くことにした車両だった。

他にもトレーラーが十台くらい。一部はコンテナに入れて有る。

トレーラーは大きさが色々有るが舞華によると食事を作るものや洗濯、お風呂、水を浄水にするやつまで有るということだ。

海外輸送なんかを使うコンテナがやつぱり六十台以上有る。それにコンテナを動かすフォークリフトが大型の物と小型の物の二両。

普通の車は、この世界では電気自動車が主流で俺たちには整備とか手が出せないと思ったのだが、オフロードタイプの車にガソリン車があり、何台かあったのだがその中で俺が知っている、こっちの世界でもあったTOYOTAのハイラックスとランドクルーザーがそれぞれ一台ずつ、これが普通の車だった。他にはバイク・・・スクータータイプのものは全て電気モーターだったが、スーパーカブが何台か街で見つけて程度のよさそうなやつを四台基地に持ち込んだ。車は舞華が怖がって運転できなかつたが、カブは足つきが微妙な感じだった。舞華でも運転できたので何かと役に立つかと思ひ、予備込みでそれだけ準備した。あと、これは俺の趣味もあって、バイクのエンジン、特に原付のエンジンは構造が簡単で触りやすいのである。となくモンキーらしき、らしきというのは俺の世界ではオフロードタイプの大型タンクを積んだモンキーというのは知らないの。この世界のモンキーかもしれないと思ひた。それを一台とCB50と。いうかなり古いバイクが一台これも俺は知らないが形から言つて俺の親父の世代のやつかも？そんな雰囲気のあるバイクだった。

後特記すべきは、我が引越し用レンタカー ハイエースというやつ

だ。

ハイエースの中身は俺たちの引越し荷物でそのまま後で説明する
コンテナハウスへ詰め込んだ。

それと自分のバイトでパソコンと一緒に買ったバイク、CB400
Fベースサイドカー。

これは元々サイドカーなんぞつけるつもりはなかったのだが、その
昔TVの特撮を見てるときに、主人公の乗っているサイドカーがか
っこよく、「大きくなったらこれに乗る！」と言い、舞華が「乗せ
てくれるの？」問いかけてきたのに、「当たり前だろう」と言った
ことが始まりだった。

言った本人はすっかり忘れていたのだが、周りで聞いていた親父達
と舞華が覚えていた。

それなりに小学生時代からのお使いのバイトやら小遣いを貯金する
ところから始まって、中学になり、近所でバイトを始め高校入学あ
たりにはそれなりの金額（だからパソコンも買えた。）になっていた。
のだが、サイドカーなんてこの日本ではカスタムするか外国の
ものを輸入するかしかないのだ。

そこで、本体のバイクは新車をあきらめ中古のCBにサイドカーを
取付けてくれるカスタムする店を親父が探してくれ、中古のバイク
は近所で程度のいいものを買って親父の伝で購入した。

カーは当然新品になるので舞華が乗ってもそれなりに荷物を積める
様に大柄のもを選んだ。

それに一応ソロが出来る様にフレームは補強して有るもののフロントサスペンションの変更はしなかった。(後で慣れてきた時に後悔した。でも、一応ステアリングダンパーは付けて有る。)

それにソロの時の事も考えてツアラー用のバッグを着けられるようにしてある。

親父が言っていたのは、サスとタイヤがノーマルなので大丈夫かな？だったが、何言ってるんだか。

どこで探してきたのか、欧州向け650CCのエンジンをショップの親父と一緒に楽しそうに換装してたのはどのどいつだ？しかもしっかりボアアップしてるし・・・

俺はいらなと言ったはずなのに翌日しっかりついていた。

「車検どうするんだよ〜！」ええ、ショップの中で思いっきり吼えましたよ。馬鹿親父め・・・

俺達が住む家なのだが最初はテント暮らしか大型の車の中になるかと思っていたのだが、コンテナベースのコンテナハウスが見つかった(これは街中を走っているときに偶然モデルルームのような展示場を舞華が見つけたのだ)ので、これの組み合わせで大型のモデルルームを解体(これは思ったより簡単だった。)して基地に運び込んで組み立てたのだ。

これがこれからの俺と舞華の家になるわけだ。(多分)

幽香さんには「なんだか家って感じがしないわね」と、ごく当たり前の感想を言われたのだった。

このモデルルームは40フィートコンテナ五台と20フィートコンテナ4台でH型に組み立てるもので、さらに片側の40フィートコンテナと20フィートコンテナを二階建てにして部屋数を増やしているのだった。

ちょっと解り難いが正面から見た時に左側にパワープラントというか給排水、トイレ、発電、蓄電池のユニットになっていて、Hの左縦棒を構成している。Hの横棒を20フィートコンテナが2列2段に重なっており右側の縦棒も2段2列になっている。

これは日本製ではなくこの地球のアメリカ製で内装込みモデルの改装型のようなだ。

どうもこのモデルルームはこの日本での災害対策用の被災者住宅の一つの提案として、高級タイプを日本向けにインフラ込みで組みこんでいるテストタイプのようなだった。

そのため、このコンテナハウスの屋根には太陽光発電システムと温水給湯システムが組み込んであり、適切に整備すれば電力・給湯に関しては約30年間の寿命が有るらしかった(カタログより)。

最も蓄電池のほうが先に駄目になるみたいだけど(カタログにはどうかしたら交換と書いてあった)。

屋根は天井が二重になっていて、外側の天井が傾斜して屋根に水を

ためないのと太陽の光を受けやすくなるように角度を着ける、さらに部屋の天井に二重化することで夏の暑さや冬の寒さを有る程度緩和することを狙っているらしい。

コンテナそのものも、コンテナと名前が付いているが貨物用ではなく、壁の厚みもそれなりにあり、輸送のことを考えてコンテナサイズに収めているため、コンテナの名前が付いているようだった。また居住用のコンテナが2列になっているのは壁厚がそれなりに有るため単体では狭くなるから、ということのようだ、またコンテナは通常より少し背の高いハイコンテナのサイズになっているということだった。

この世界でもアメリカはやっぱりDIYの精神が有るのか、このコンテナハウスは素人でも何とか組み立てられるようになっていた。ついでに、モデルハウスはオプションで倉庫がパワープラントの上に取り付けられる様になっておりそれも組み立てて有る。ただしそこへ行くには一度コンテナハウスを出なければいけないのだが。

配置が問題になった、簡単に言えば飛んでいく範囲が円形なのでコンテナハウスをどこへ置くか？ということだった。また、でんと居座っているヘリコプターと飛行機・・・後で名前がオスプレイという名前と知ったが、こいつは動かせないのどこいつはこのままの位置にいることになる。（魔法で吹き飛ばそうか？とも、言われただけども、すでに火薬満載のコンテナが近くにあるので、さすがにやばそうだったので丁寧にお断りした）

そこで基地の中でコンテナや車両の配置を考え円を描いている樹の並びの中で約5メートルほどアルファベットのCの字の形に切れて

いる部分に車両の移動が出来るスペースを空けてH型のコンテナハウスを配置しその裏側にコンテナを配置した。またコンテナハウスの正面に見えるところには植樹してもらって外から丸見えになるのは防ぐようにした。

コンテナハウスの正面にはヘリコプターと折り畳んだ飛行機が4機ずつ並んでいるというシチュールさ爆発の景観になったが、よく考えたらこっつてヘリコプターの発着所？ただの広場になっているの？

幸いというか、どういう理屈かわからないが、幽香さんお話によると本来の世界に飛ばされるまで、外部から破壊されない限りこれらのコンテナや中のものや外に放置してある車両や飛行機は錆びたり痛んだりしないそうだ。

無茶せず、燃料さえあれば車両も取敢えず大丈夫ということだった。

コンテナハウスを解体して基地に持ち込んで、取敢えず住める程度に組み立てるのに4日ほどかかってしまい、気がつけばもうじき飛ばされる時が近付いて来てるようだった。

このコンテナハウスの完成をもって外へ物資の調達はやめて、これからここでの生活を中心に武器やら車の運転やら、舞華と一緒に勉強も始めたのだった。

召喚された世界へ飛んでいく範囲の目印にもなっている樹の内側にそつて、この基地の中にあつた野外アスレチック設備を幽香さんをお願いして移してもらつた。

俺達は普通の学生で特に体力もない。授業で中学から剣道や柔道をやつていたとはいえ所詮授業だし授業中の態度はまじめに見えても半分息抜きだつたことは確かなので、今後体力をつけなければいけないだろうと舞華と意見は一致し、その方法として、基地内を見て回つた時に見つけたこの施設をその為の一つに考えたのだつた。

これは元々、自衛軍の軍人さんの訓練設備で色々な装備をしたままこのアスレチック設備をクリアしていくらしい。

また訓練ビデオがありこれを舞華と見ていたがTシャツに迷彩ズボンといういでたちで約五分超えたぐらいで一周するもの様だつたが二人でやってみると俺は余裕で二十分超えて、舞華は途中でというより早々にギブアップして幽香さんに笑われたのだつた。

その後、食事のときに幽香さんが「舞華ちゃんは魔法の素質が有るから魔法覚えたら？」と、のたまつた。

「魔法ですか？」

「そう魔法、どんな魔法が使えるようになるかはこれからの練習で判ると思うから、取敢えずやってみる？」

「舞華が魔法使えるんですか？」

「必ずというわけじゃない、けど、舞華ちゃんは、私が知っている人間に比べたら素質は無い方だけど、あそこに住んでる、つまり私

と同じところにいる人間は基本的に人間超えちゃってるからね。比べることは無意味だわ」

「幽香さんのところの人間ってどんなんだよ・・・」

「だって普通じゃ一緒に遊べないじゃない」

「そっぴゃ、ここに飛ばされる前に一緒に遊んでたって、どんな遊びなんだ？」

「ただの弾幕ごっこよ」

ニコニコしながら答える幽香さんだが、何か聞いてはいけないことを聞いてしまったような気がした。

結局、別の世界に飛ばまでの間に俺たちがやっていたことは、銃の訓練と体力をつける事だった。

そして、舞華はそれに加えて魔法の勉強だった。

基本的に運動神経は普通、運動部などに入っていない俺は、基礎体力に問題が有るため走り込みや例のアスレチック設備で体を鍛えることにした。舞華は走りこみは一緒にやるがアスレチックは半分ほどにして幽香さんについて魔法を教えてもらうことにした。

もちろんこんなのを毎日やれば体を壊すので、一日おきにトレーニングをして、やらない日は走り込みと簡単な体操、ストレッチ、後は武器の使い方を覚えることに時間を費やした。

映画なんかで有るように、やっぱり目をつぶっていても銃の分解組み立てが出来ないとまずいのかな？

舞華にはさらに幽香さんとの魔法の練習も有るので結構ハードスケジュールだったりする。

なのに炊事洗濯をちゃんとやってくれる妹におにちゃん感謝なんです。

感謝だけではあれなんで手伝ったり代わりに食事を作ったりしてますよ。

（さすがに洗濯は・・・特に妹とはいえ女の子の下着なんぞ手を出そうものなら色んな意味で心が折れるかもしれないのでそっちは見てない振りをしてる。）

体力は全然ついてる感じはしなかったが、銃の扱いは舞華も俺もそれなりに、でも本職の人から見れば全然だろうけど、連続射撃や単発射撃、それに銃に弾丸が詰まっても安全に詰まりを解消できる様にはなってると思いたい。

初めて銃に弾丸が詰まったときには焦って手順を間違えかけて、舞華が声をかけてくれなければ暴発させていたかもしれないからだからだ。

飛ぶのが最初の話より約一週間近く延びたのだが、おかげでそれなりに練習が出来、銃も弾丸も予備を含めて追加で用意出来たのは大きかった。

幽香さんから「明日の朝に飛ぶわね」といわれ、少し興奮して眠れなかつたけどそれなりに準備して待っていた。

そして・・・

5・準備 4（前書き）

本編始まるまでが長いですね。もっと簡潔に書けないか思考中。思
いだけで文章は成立しないですね、もっと精進しないとだめです。

5・準備 4

タタタ・・・

TVや映画で聞くのとは違って妙に乾いた軽い音を立てて俺と舞華は銃を乱射している。

飛んだ先は、昔映画であった核戦争後の砂漠化した荒野に核の影響で巨大化した生き物がすむ世界。そんな感じのところだった。

俺たちが相手しているのは・・・蟻だった。そう、あの日本全国はおろか世界中で見られるあの小さな小さな生き物だった。

それがこの世界では、背の高さは俺の顔位、長さは有に三メートル以上はあり、素手じゃとてもじゃないけどやり合えない。そんな生き物だった。

「舞華、頭を狙って！」俺は叫ぶ。

こいつ足の一本や二本吹き飛ばしたぐらいじゃ止まらない。大顎も厄介だ、弾丸は弾くし噛まれたらただじゃ済みそうも無い。

狙うのは目と目の間そこから触角の上にかけての三角形の部分、そこに2-3発当てれば貫通してひっくり返り、震えながら藻掻くだけになる。ただし目の外側や触覚の上の方を狙いすぎれば硬い表面に弾をはじかれてしまう。

もちろん大顎もパクパクしているのでそんなところへ足を突っ込んだりすればえらいことになるのだが。

大蟻たちは何故か樹を切り倒しては入ってこないため、律儀に樹の切れ目になっている、コンテナハウスの正面になる所から進入しようとしてくる。

大蟻たちがここを襲ってきたのは、幽香さんが「少し周りを見てくるわね」といって空を飛んでいってから約五分後のことだった。

入り口の片側はコンテナなんかで塞がれているので大蟻達が侵入してくるのは限定されているのが、何とか二人で守っていられる理由だった。

「あらら、素敵なお客さんね」振り向くと幽香さんが相変わらずニコニコしながら傘を差して立っていた。

「危ない！」舞華が悲鳴を上げる。

幽香さんに気を取られた隙に大蟻が一匹、俺と舞華の間を抜けて幽香さんに噛み付こうとしたのだった。

「おいたは駄目よ」幽香さんはそう言うと、手に持った傘を大蟻に向け・・・傘からビーム兵器？紫ほい光の柱が大蟻達をなぎ倒したのだった。

時間にして一秒も無い、瞬きの時間程度で傘の射線上にいた大蟻たちは消滅したのだった。俺たちが倒した大蟻の死体ごと。

さらに俺たちが飛んだ場所はすり鉢の様に周りから2段くらい下がった場所なのだが、その壁に大穴をあけ、大蟻たちの巣穴を露出させた。

もつとも見えてる部分は穴が開いただけでなく真っ赤に焼けていたのだが。

後で判った事だが、俺たちがどうも巣穴の入り口を飛んできたことで塞いでしまったようだった。そのため、大蟻たちは入り口を探して騒いでいるのだった。

おかげで20匹もない相手であったため俺と舞華で何とか時間稼ぎが出来ていたということだ。

「さあ、害虫駆除に行くわよ、準備できてる？」

「ちょ、ちょっとまって」あわてて俺は舞華と一緒に予備の銃と弾丸を取りに行った。

また予備の弾薬をとりに行ったトラックにたまたま有った、使えるかどうか判らないが手榴弾4発を二人で2発ずつもった。

「暑い・・・」

「ごめんね舞華ちゃん」

俺たちは大蟻の巣に入っていった。穴の開いたところから元々入り口があっただろう方向にいた大蟻たちは幽香さんのビーム兵器？の高熱で死んでいた。

俺たちは下へ向かって降りていった。

大蟻の巣の中は一本道だった。

所々道が分かれているが分かれた先は小部屋になっていて行き止まりになっていた。

基本的な方針はこうだ、幽香さんを先頭に舞華、俺と続き分かれ道があれば、幽香さんに分かれ道を守ってもらいどちらか片方へ俺たちが侵入する。

これまでの状況から俺たちの武器は大蟻に対しても使えるが狙いは頭部が一番有効だ、だから小部屋の入り口で俺たちは先頭から順番に大蟻を撃ち殺して行く。

大蟻は迂回が出来ないので正面から突っ込んでくるだけなのでそこでがんばっていれば時期に大蟻たちは全滅する。という寸法だ。

行った先が本通りであれば、そのまま後退して幽香さんにお任せする。そして俺たちは別の小部屋を目指す。

これを繰り返し奥まで侵入していった。

ただ途中弾薬が足りなくなり、幽香さんが休憩している間に、俺と舞華が上上がり食事の準備や弾薬や場合によっては銃を取替えて戻ってくることを繰り返した。

ちなみに幽香さんが一番お気に入りだった休憩の飲み物が日本酒だったのがなんだか・・・

「幽香さん」

「なにかしら？」

「初めての経験で目が冴えているってのも有るんだけど、体はそれなりに疲れてくるんだけど眠くならないってどうしてだろう？」

「あら？気がついてなかったの？舞華ちゃんは気がついていただけね」

「え？」

「お兄ちゃん、こづいづこづいって気にしないから・・・」

なんか取りようによってはひどい事言われてる気が・・・

「前に言ってるけど、ここは時間の流れが有る意味止まっているのよ」

「おかげで、眠らなくても平気なのよ。純粋に精神や心、体が疲れるときだけ眠くなると思えば良いわ」

「俺、夜になつたら眠くなつたぞ？」

「それは条件反射的なものよ。舞華ちゃんは3日目位からおかしいことに気がついてたわよ？」

「才人は今まで本当に気がつかなかったの？」

「いや、気がつかなかった」

「才人って抜けてる？」

「orz」

「お兄ちゃん、どうしたの？」

なんだか気の抜ける会話をしながら徐々に奥へ進んでいった。

途中卵の有る部屋に着いたが、やっぱり小さくても大蟻の子供だった。

生まれたばかりでも俺たちが敵だとわかっているのだろう、噛み付いて攻撃してきたのだった。

こいつらは拳銃で一発ずつ頭に当てれば丸くなってすぐ動きが止まりおとなしくさせるのは簡単だった。

問題は小さな幼虫や卵を殺していくという行為に舞華が罪悪感を持ち始めていることだった。

こればかりは本人の気持ち次第なので俺にはどうしようもなかったように思えた。

幼虫はともかく卵の破壊は俺がやった。

こいつらを残すと後からこいつらに襲われることは確定だったからだ。また、巣が復活するのも都合が悪いから、舞華については普段から十分すぎるほどがんばっているので、余計なことで負担をかけたくなかったからだ。

しかし、卵を破壊するのは意外と手間がかかった。

最初は手榴弾ですぐ終わるかと思ったのだが、映画の様には行かず割と狭い範囲しか破壊できないのだ。

手持ちの4発はすぐに使い切り、機関銃を単発モードにして一発ずつ卵に撃ち込むことにした。

時間はかかるがよほどでない限り疲れるので（弾丸をとりに行くことが特に。）休憩するつもりでそこは時間がかかってもいいかと思っていた。

順調におくに進んで行き大蟻たちも羽根付やら大顎のデカイやつ、毒を吐くやつまで出てきたが幽香さんのおかげで何とか凌いでこれた。

左右の部屋（この辺りまでに来ると小部屋というより大部屋だが）を掃討して終わると幽香さんが、

「銃の予備とか大丈夫？さっきのでだいぶ使ったみたいけど？」

「確かに、後十匹も相手にすると完全にアウトだな」

振り向くと舞華も頷いている。

「なら、ここで待っているわ。この奥には団体さんがいそうよ？」

俺たちは、もと来た道を引き返し何度目かになる補給に戻った。

「お兄ちゃん、これ使えると思うっ？」

戻った先でトラックの奥から何やらごそごそしていた舞華が振り向きながら何か筒状のものを持ち上げてこちらに示した。

「バズーカ砲？だっけ？」

「だと思う。使える？」

「一応教本は目に通したから使えるけど当たるかどうかは判らないぞ？」

「さつきから数が増えて、硬くなってるからこんなのが役に立つかも？」

「うう〜ん、確かにそうなんだよなあ。頭以外は当たっても、まるで平気なやつらが増えてきたから、先に纏まった所にこれが当たると良いかもな」

「使う前に幽香さんに話をしよう」

「じゃ、私が話しておくね」

「お、重い・・・」

簡単に返事をしたものの、TVや映画では兵隊さんが軽々と持って戦車をやっつけていたが実物は重かった。

バズーカ砲（後で84mm無反動砲という名前と知った。）と砲弾4発（後でこれには種類が色々あることを知った。このとき何を使

ったのかは最後までわからなかった。()を持って降りていった。

俺たちが到着するや否や「しばらく休憩ね」

幽香さんはこちらを向くことなく奥の方を相変わらず、にこにことしながら呟いていた。

「この奥にラスボスがいるわね」

何故かゲーム用語を使い説明を始める幽香さん。

「周りをかなりの数の兵隊さんで守られているわね」

「面倒なのはナースさんがいるのよ」

「「ナース？」」

「そう、怪我したら治してくれるナースさん」

「最初にその看護婦さんを叩いて置かないと長引くから不利ね」

「最初に回りに弾幕を張るから、どれがナースさんか見極めてね」

「才人がそれに止めを刺すの」

「舞華は才人に向かってくる兵隊さんを牽制してくれたらいいのよ。無理して倒すより近づけなければいいから」

「私は適当に引き付けながら数を減らしていくわ。本気出しちゃうところが崩れるから適当に兵隊さんとラスボスを引き付けて戦うね」

「わかった、幽香さん、面倒なのお願いしてごめんよ」

「幽香さんも気をつけてください」舞華も幽香さんに返事する。

「では、いきましようか？」

「よし!」「はい」

幽香さんを先頭に最後の大広間に3人で飛び込んだ。

目の前にはこれまで戦ってきた大蟻の数より多いんじゃないか?と思えるほどの大蟻の群れだった。

幽香さんは開いた傘を肩にかけたまま空を飛び、相変わらずニコニコしながら何か呟くように手を前に差し出した。

その瞬間幽香さんを中心に小さな光の弾が無数に、幽香さんを中心に花が開花するように広がり、流星の様に大蟻のほうへ向かって飛んでいった。

一瞬のことだった、その場にいた大蟻たちの大半が動けなくなり、飛んでいた大蟻もいなくなった。

運悪く頭で受けたやつはそのまま動けなくなるだろう。

足ならまだ良いが、胴体で受けたやつは受けたところで体がちぎれている。

そんな中、同じようにダメージを受けている集団の中に光の輪を発

しているやつがいる。そいつが輪を発した後、奥にいる超大型の蟻、多分やつがラスボスなんだろう。やつに光の柱が立っている。

「舞華、光ってるやつがナースさんだ。これから狙うから頼むぞ」

多分このバズーカ砲で集団に打ち込んでそれから個別に叩いたほうがいいか。

そう判断すると狙いをつけやすいように幽香さんと反対方向へ移動しナースを狙い始める。

「はい、わかった」

教本を読んで理解した中では、そんなに近づかなくても既に射程内らしいが実際使ったことがないので、なんとなく、ここまでくればいくらなんでも当たるだろう。というところまで近づいていった。

「舞華、真後ろに立つなよ」

「はい」

一発目は集団の中へ撃ち込んだ。予想よりずれて集団の手前側、つまり俺たちのほうに、手前気味に着弾した。元々幽香さんの魔法を受けて弱っていたのだらうあっさりと残っていた集団の半数が動かなくなった。と、同時に驚いたのだらうか？ナースたちが光るのを辞めた。

「こっちに向かって来る」

何匹かのナースと向うにいた兵隊蟻が何匹かがこっちに向かってき

た。

舞華が焦った声で射撃を開始する。

幽香さんは自分たちと反対側で弾幕を撃ち込んでいる。

でも、大蟻たちも学習したんだろうか？地面を細かく移動して避けられているようだ。

ラスボスも地形を利用して当たりにくくしている。（でもでかいから結構当たってる。）

幽香さんが引き付けてくれたおかげでこっちに向かってくる兵隊さんは3匹くらいで舞華が全滅してくれた。

こっちに向かってきた、ナースもその前に舞華の射撃であっさり倒れてくれた。

2発目を時間がかかりながらも装填すると残ったナースさんへ撃ち込んだ。

元々装填してあったのと含めて2発消費したものの、後2発残っている。

機関銃で生き残っていたナースさんを全滅させて。

後ろからラスボスへ近づき舞華にはこっちへ兵隊さんが来たら射撃で牽制しつつ幽香さんのほうへ合流するように指示をした。

狙ってみるとラスボスの頭は小さくとも当たるように思えなかつ

だが、何度目かの幽香さんの弾幕を避けるタイミングに合わせてバズーカ砲を発射した。

バズーカの砲弾は首の付け根に命中した。

ラスボスは首を落として動くのをやめた。

同時に周りにいた大蟻達が動かなくなってしまった。

「へえ、なかなかやるわね」

「でも、弾幕ごっこは無理ね」

（あんな弾幕が遊びつて、どんな友達だよ・・・）

一気に疲れた俺はその場に座り込んだ。

6・準備 5

その日は一度コンテナハウスへ戻りそのまま休むことにした。

「お休みなさい」

幽香さんはそう言って舞華が部屋へ入っていくのを見届けると自分の部屋のほうへ向かっていった。

「おやすみなさい」

「幽香さんも今日はありがとう。おやすみなさい」

俺もそういつて、自分の部屋に入るとそのまま眠りに入った。

外の明かりで目が覚めた。

なんか汗で気持ち悪い。

着替えを持ってシャワーを浴びに浴室に向かった。

少し寝足りないが、取敢えず汗を流して気分が良くなったので二人はどうしているか舞華の部屋へ向かった。

途中キッチンで二人が食事を作っているのを見た。

「あ、はやいな」

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはよう」

「おはよう」「俺も返事をする。」

「幽香さんはともかく舞華は平気か？」

「大丈夫だよ」

「この世界は、貴方達のいた世界と違って魔法力が満ちているからなの」

「？」

「舞華ちゃんは、魔法が使えるようになってきているから、魔法力を体の中で消耗した体力や精神力に変換しているのよ」

「だから、才人より体力の回復は早いわよ」

「何そのチート」

「才人もここでもう少し暮らしていると体の中にその器官が出来るわよ」

「器官といっても精神力の流れと魔法力の流れの一種の回路だから内蔵が変化したりするわけじゃないわよ？」

何でこの人は頭の中で考えていることがわかるんだ？

「気にしないことよ」

って、舞華が俺達の会話を聞いて笑ってるし。

食事が終わってから、幽香さんが話を始めた。

「この世界に来てから、この世界の因果律に囚われたわ」

「因果律？」

「なんでも・・・、そう、今走ったりして体力つけたりしてるでしょ？銃の練習とか」

「この世界はね、それだけでなく、魂の欠片で力を得られるのよ」

「今回は倒した蟻さんね」

「だから、この世界でこの世界の力を得られるというわけよ」

「いや、何で、てか魂の欠片って何だよ？」

「判りやすく例えたつもりなんだけど、倒した敵の魂の一部を吸収するみたいなの」

「で、吸収した魂の欠片が吸収した人の力になるの」

「その魂の欠片でこの世界の力が手に入るみたいね」

「あと、ここで大事なことなんだけど、ここでは魂の中心が体と縁が切れてなければ復活できるの」

「ここの魔法には体の欠損部分までを復活する方法が有るのよ」

「だから、細くてもつながっていれば、見た目がばらばら、例え頭が取れているような状態でも復活できるの」

「ここの魔法は貴方の世界の銃みたいなものよ、だからこの世界で力をつければ重たい思いして銃を持たなくてもいいかも？」

「それに将来弾幕ごっ「ちよつとまった！」・・・」

「なんか不穏な発言があつたぞ」

「あらら、そうかしら？」

「ナニヲカンガエテイマスカ・・・」

「結局ここの技術を学べば自分達の力になるんだよな」

「そうよ、だから舞華ちゃんはここの魔法を」

「才人はここの武術、多分剣術見たいなものになると思っけど、それを覚えれば生き延びていく役に立つはずよ」

「うん、わかった。取敢えず今日は、昨日の大蟻の巣に生残りとかいないか調べて、あと水とか必要なものを補給できるかどうかも一緒に調べて、明日から周りを調べるようにするよ」

「取敢えず、何週間かは基地から持ってきた水とかでも足りるだろうけど、ここには数年いなきゃ駄目なんだろう？」

「下手すると十年以上ね」

「げっ」

「赤い海の世界での力がすごくて暴走の加速がついたのよね。困ったことに」

「さすがにこんなに加速がついてるなんて思わなかったわ」

67

「あら？」

「少し待って」

「「？」」

幽香さんは、急に立ち上がると傘を手に外に出るために玄関へ向かった。

幽香さんが扉を開けると・・・

「久しぶりね」

声がすると同時に声がする方向へ傘を向けると、いきなりあの紫っぽいレーザーを撃ち込んだ。

「あらら、ご挨拶ね」

「思ったより早かったのね？」

幽香さんがニコニコ返事をしながら、でもいつもより赤い目が赤く輝いているような、それに目が少し細い気がする。

「せっかく迎えに来たのに」

「あらそうなの？巫女と違って私がいなくてもあそこは何も変わらないわ」

「あら、ルールを決めた人が居なくなるとそれなりに締りがなくなね」

「私がいなくても貴方がいる、魅魔もいるし・・・」

「まあ、いいじゃない。それじゃ「まっつて」・・・なに？」

「別に異変が起きてるわけじゃないよね？明日になってもいいんでしょ？」

「まあ、幽香がいなくなったのが異変だから・・・何かあるの？」

「この子達をこのまま置いていくわけには行かないわ。それなりに責任が有るのよ。」

・・・紫、手伝いなさい。この周囲に結界を張るくらい直ぐよね？」

「はいはい」

「で、どうするの？・・・」

「・・・」「・・・」

二人はそのまま飛んでちょうど中心付近に高さは10mくらいだろうか？並んで手を合わせる様にだけど細かく動かしながら・・・

突然樹木の周囲に緑と紫の光のカーテンが、地面から緑と紫のオーロラが周りを囲むように、そして地面に何か光の線が走って行く。きれいで、それでもかわいい声で、お経のような、神主の祝詞のような、歌のような、祈りのような、なんだかシンプルだけど複雑な声が、低いような、高いような、大きくも小さくも聞こえる声で。二人は何かをしていた。それは一瞬のようで、何時間もしているような、でもいつの間にか終わっていて気が付いてみると、そんなには時間はたっていないようだ。

舞華もはっとした様に幽香さんを見ている。

幽香さんが降りてくる。

「昨日のお客さんみたいなのが来ると困るから、結界を張ったの」

「ここを知っている人が、貴方達が会いたいと思えば入ってこれる

わ。知っていても貴方達が合いたくないと思えば中に入れないうち、もちろん貴方達は無条件で入ったり出たり出来るから」

「入り口も貴方達と一緒に、貴方達が会いたいと思えば見えるわ」

「幽香にしてはずいぶん優しいのね」

「煩いわよ」

「はいはい」

「幽香さんのお友達ですね。初めまして私は平賀 舞華といいます。向うにいるのがお兄ちゃんです。才人って言います」

「あ、さ、才人です、初めまして」

「外では落ち着かないですから、中へお茶でもどうぞ」

舞華が案内する、俺は扉を開けて、二人を部屋へ誘導した。

「ありがとうございます」

「お菓子も忘れずにね」

「はい」

幽香さんをお願いされると舞華が返事をしてキッチンへ向かう。俺はやることがないので一緒に部屋に入り二人の邪魔にならないように扉の傍で控える。

「この子達が原因なのね？」

「原因と言うか被害者ね」

「相変わらずね、貴女って昔から世話焼きなのよね」

「さあ？」

「幽香さんを迎えにこられたんですね」

舞華がにこにこしながらお茶とお菓子を二人に饗応する。

「貴女は？幽香が弟子を取ったの？文が聞いたら号外が出るわね」

何でこの人たちは誰も答えてないのに勝手に話が進むのだろう？相変わらず益体もないことを考えながら二人を見ていた。

「弟子じゃないわよ？貴方達も一緒に飲みましょうよ」

幽香さんが誘ってきたので、俺達も一緒にお茶を頂くことになった。と言うか俺達の家、だよな？

「ごめんなさいね、貴方達に最後まで付き合えなくなっただわね。明日の朝、紫と一緒に戻るからそれまでに必要なことを教えるわね」

「それと、さっき言ったように結界を張っておいたわ。大体四、五十年は大丈夫だと思うわ」

「あら、二桁少ないんじゃない？私も手伝ったのよ」

「この世界に居るならそんなものね。でも、次の世界に飛ばされたらそこまで自信持てないわよ」

「でも、四、五十年は間違いはないから」

「それって、飛ばされる迄に時間が掛かると言うことですか？」

「そう、それでね実は正確に何時飛ばされるかわからないのよ。やっぱり前の世界で干渉された力って半端なくて、ごめんなさいね」

「い、いえ」

「でも、この世界でもやっぱり貴方達の時間は止まっているの。だからめったなことじゃ死なない。時間が止まっているから魂が簡単には離れないの」

「それでね、時計を作ろうと思うの。いつ飛ぶか目安つけるためにね」

「多分明日の朝に渡せるから、今日は井戸でも掘りましようか？少し離れているけど蟻は土を掘ることは出来ても、岩に穴を開けることは出来ないわ」

「巢の中で水が溜まっていたのは岩のところ。で、入り口から見ると左側に少し深い所に水が流れているところが有るの。ちよっと掘るの大変だけど、紫が手伝ってくれるから大丈夫よね？」

「え、私？」

「まさかただで、お茶とお菓子。頂くつもりじゃないでしょう？」

「・・・まあ、いいわ」

「岩を割ったりすると流れている水がさらに下に落ちるわ、井戸にならないから注意して」

「はいはい、他の人にもそれぐらい気を使ってくれればいいんだけど」

「何か言った？」

「いいえ」

「じゃ、よろしく。私は、作るもの有るから邪魔しないで」

幽香さんはそっぴい残すと自分の部屋へ閉じこもってしまった。

「この砂時計だけど、青いほうは飛ぶ一年以内になれば砂が落ちますわ。もう一つの赤いほうだけどこれは一日前ね」

翌朝、朝食を四人でとっていると食べ終わった幽香さんが唐突に話し出した。

「貴方達二人分用意したわ。はい」

「「ありがとう」」

二人で返事をしてそれぞれもらった砂時計を眺める。逆さにおいても振っても砂が落ちていかない、確かに不思議な砂時計だ。

「じゃ、家に帰るわね」

ごく当たり前のように幽香さんが椅子から立ち上がると、ゆかりさんのほうへ向き直った。

「はいはい、勝手なんだから」

「紫はね、あんまり留守にすると私たちの世界が壊れるから。楽しかったわよ。花の世話をお願いね、舞華」

「あ、はい」

あわてて舞華が返事をする。

「お世話になりました」

俺も挨拶をする。

「何もしてないわよ、仲良くやりなさい」

「ここは私と紫の結界が有るから余程のことでも問題ないから。危なくなればここに逃げ込めばいいわ。がんばりなさい」

「ありがとうございます」

「じゃ、いくわね」

鋭い音がすると空間に切れ目が開きその奥には無数の目がこちらを見ている。

そこへ吸い込まれたのか、裂けた空間が飲み込んだのか二人の姿が空間の中へ入ったと思うと裂け目が閉じた。

「行っちゃったね」

「うん」

急に二人つきりになったことに呆然とし、頼るものの無くなった寂しさから体が震えてきた。

気がつくと舞華が俺の腕にすがって泣いていた。

「よくあの二人食べなかったわね？情でも移った？」

「必要が無かっただけよ」

「へえ、妹には魔法まで教えて。今まで、寄って来る者を一人残さず追い払ってたのに」

「この間は邪魔されたけど、ここで続きやろうかしら？」

「冗談よ、冗談」

7・準備 6

数日は特にやる気も無く無為に過ごしていた。

「さ、舞華一緒に走ろう」

いくらこれから飛ぶまでに、十年近い時間が有るとはいえ、さすがに無為に過ごしすぎだと思い、朝起きたら舞華の部屋に向かい扉越しに声をかけた。

返事が無かったので扉を開けて中に入った。

舞華はベッドの上で上体を起こして正面を見てぼうとしていた。

「舞華、何時までも惚けてても仕方ないだろう」

「俺を呼んだ奴の所まで行って、元の場所に戻してもらわないとなはつとした風に舞華はあわてて、「そ、そうだね」

それから暫くして一緒に走り出し、あの基地でやっていたようにトレーニングを始めた。

「舞華、魔法の勉強はどうするんだ？」

「それだけど、魔法は特に習ってないんだけど」

「ここで、基本からちゃんとやったほうがいいんだって」

「幽香さんは妖怪さんだから自然と不思議な力を持つてたんだって」
「だけど私は、何もない人間だから魔法を使えるようになる器官を
体の中で成長を速めるようなことをしてたんだよ」

「後はここで教えてくれる人を探そうって、そんな話をしてたの」
「いきなり遠くへはいけないだろうから、暫くはお兄ちゃんとトレ
ーニングと銃の使い方方の練習をするよ」

「ああ、判ったから無理すんな」

「はい」

銃は今まで使ったことのないやつも使えるようになるように、ま
ず、種類ごとに整理することも並行して始めた。

前に説明した通り、俺は9mm拳銃/H&K UMPと
いう拳銃/機関銃を舞華がP230JP/VZ.61を使っている。
赤い世界で最初に本や教本を読むとメインの銃と拳銃をサブウエポ
ンとして使うようなことが書かれており、そうすると同じ銃弾を使
用したほうがいいだろうと考えた。手元にある名前のわかってい
る武器で銃弾の同じもの同士でリストを作り実物を見ながら選んだの
だ。しかし、蟻と戦った結果から、この銃では近くで戦うことにな
り、数が多い場合は、こちらが不利になるのがわかった。そこ
で遠距離から数を減らす方法を考えるようになった。また、銃は、
ここのモンスターのことを考えた場合、出来るだけ大きな弾のほう
が威力があるため、その方がいいのだが、舞華は魔法をまだ使えな
いし、第一体力がない。

在庫してある銃等を調べた結果まず始めに、二種類のショットガンがあったのだがこの世界では役に立たないだろうということだった。命中しても致命傷を与えることは無理だろうと想像できた。対人用であればそれなりの使い道は有るのだが相手が固い殻を被った大蟻では全部弾かれてしまう。

また、手榴弾は使う相手を考えなければいけなかった。大蟻の場合、止まってくるときはいいのだが、普通に手榴弾を投げられる距離では俺が慣れていないため、相手がこつちに寄ってくる速度の関係で投げるタイミングが難しいのだ。

数が有り、弾丸も大量に有る銃の中にM4という銃がありこれは通常の銃弾以外に手榴弾のような弾薬を発射するM203というオプションを取付けければ、蟻の場合、離れた場所にいる集団の中へ撃ち込めることからこちらを訓練および実戦で使うことにした。

その結果、拳銃と小銃の弾丸が別のものになってしまったが、まあ、なんやかんやで周囲の大蟻の群れを相手にした実戦で銃の扱いもうまくなつたし、第一敵にダメージが出なければ使う意味がないのだから。

それと、M24という名前の狙撃銃。これは八百メートルの射程があり、実際に使ってみた結果、大蟻相手では八百メートルは無理だがそれでも五百メートル以上の距離から倒せることが分かった。この距離なら極端な話、体を隠さなくても蟻はこちらが攻撃していることに気が付かない。どういう仕組みか不明だがある距離以上だと見えてないのかもしれない、攻撃を仕掛けても相手はこちらに反撃をしてこない。その為、狙撃銃と観測用の双眼鏡は、俺達がこの周囲を偵察する際、必ず携行するものの一つになった。そして舞華

には観測手として、俺に狙いの指示を出す訓練をするようになった。さすがに対物狙撃銃や重機関銃はまだまだ扱えるようなものではないのでこの時点では中身を確認するようなことはしても、撃つことはなかった。（銃を撃ちすぎると反動で手首や肩が痛くなる。この世界で、体調が良くない状態で外に出ると簡単に死ぬ。というのがはっきりわかるからだ。）

結局の所、俺は武器をM4とM24の両方を持って、拳銃は9mm拳銃、舞華は今まで通りとなった。

舞華は今まで溜まっていたメモをもとに、同じ銃弾を使う武器は同じコンテナにうまく収めるように舞華がパソコンを前にああでもない、こうでもないという悩むのだった。そしてその指示通りに俺がコンテナの中身や、場合によってはコンテナの移動を行うようになった。

また、あの基地の周りで集めた武器以外のもの日用品などもついでに整理して行き工夫を凝らすことで、当初コンテナに積みきらずトラックに放置していた物品などもハウスのほうへも含めて整理されていった。

周囲の状況もよくわかってきた。この辺り一帯は砂漠というかサバンナのようになっており、大蟻、ゴーレム、緑色の化け物、骨・
・そう映画などでスケルトンといわれてるやつだ、最初見たときにはさすがに唾然とした。

ファンタジー過ぎるから。しかもこいつらの大半は俺達を見つけると問答無用で襲ってきやがる。厄介なのがゴーレムと骨だった。骨は胴体を銃で狙った場合まず当たらないというか、ダメージが通らない。頭を狙って壊すしかなかった。また骨は弓を使うやつもいる。ゴーレムだが確実なのはバズーカ砲を使うことだが、最初遭遇したときはそんなものがなかったたので足が遅いのを利用して距離をとってグレネードを数発当てることで対処した。

しかしこいつらを相手にしていると弾薬がいくら有っても足りなくなる予想できたので、いきずまりを感じてきた。

そうした中、転機が訪れた。

女の子3人が追われていた。追いかけていたのは大蟻だった。

数は30匹ほど、舞華に女の子達をこちらへ誘導するように指示をし、自分は横合いから大蟻の集団へ、最初は狙撃銃で飛んでるやつを落とし、そして地面を走っているやつを減らして行き、近づいてくれば、M4のグレネードと乱射で片を付けるつもりだった。

もちろん自分一人で30匹は手に余るので誘導が終われば舞華に援護してもらおうのだが。

作戦はうまくいった、遠くから舞華が手を振り女の子達を誘導する。大蟻たちの探知外から狙撃銃で、ただしこちらは、最近使えるようになったばかりで命中率は、これからがんばれ。というレベルだが

飛んでるやつは一応落とした。

狙撃銃をその場に放置し、銃をM4に交換しグレネードを都合三発撃ち込み、足にダメージを負ったやつなんかも出てきたため、隊列も延びて中段以降は目に見えて速度が落ちてきた。

舞華も射程に入るところで射撃を開始した。もちろん女の子達に当たらないようになるので、射撃速度は遅いが。

こつちも先頭から狙っていき、舞華が隠れているところに女の子達がたどり着いた頃には大蟻もばらばらになってきているので二人で個別に狙いほどなく全滅させた。

助けた女性は、遠目では背の低い女性と俺と同じくらいの女性が二人の三人だった。

「大丈夫ですか？」

舞華が水筒に入っているスポーツドリンクを飲ませながら声をかけていた。

「ありがとうございます」

色の白い女性がお礼を言った。

「エルフ？」

俺は思わず口に出した。

「はい、私はエルフのメイジでナンヌ・ディーサ・フォシエーンと

いいいます。オラクルになりました」

「私は、ダークエルフのメイジでダークウィザードだ。名をデルフイナ・ファハルド・ンゲマという」

「私はドワーフのアルティザンでイングヒルト・ドロテア・イエンチュっていうんだよ」

「俺は平賀 才人、日本人といっても判らないかも、ここに異世界から飛ばされてきたんだ」

「で、妹の舞華」

「平賀 舞華です。よろしくお願いします」

「日本人って？聞いたことないけど。それに飛ばされてきたって、どういうこと？」

イングヒルトというドワーフが尋ねてきた。隠し立てしても返って不信任を作っても仕方ないので、俺達はここに飛ばされてきた経緯を説明した。

「それは貴方達の世界でも、私達の世界でもない誰かが召還したという事かな？」

「多分そういうことだと思います」

舞華が答えた。

「三人ともどうしてここに？」

「パーティーでアデナ稼ぎと経験値を上げるためにね」

今度はナンヌが答えた。

要約すると、ナンヌたちは自分達のレベルを上げるため、これは幽香さんが言っていた魂の欠片を集めること？とお金稼ぎ、それに自分達の故郷を出ての修行ということもあり見聞を広めるためにも色々な所へ狩をして世界を探検しているそうだ。

パーティーというのは冒険をする最小単位のグループという事らしい。ナンヌさん達は魔法を使うナンヌさん、デルフィナさんの他にもう一人回復術を使うグレンダさんとナンヌさんと同じエルフで同じ年に生まれたこれもやっぱり魔法使いのグレイスさん、もう一人カマエルという羽をもった有翼人のシーリさんそれにイングヒルトさんとでグルーディンという町で知り合いパーティーを組んだそうだ。そしてあちらこちらを旅して歩き、再びグルーディンへ戻り、そこで二人のナイトと一緒に荒地で依頼を受けてそれをこなしながら修行していたらしい。なんかRPGみたいだなと思った。

今回は、荒地と呼ばれている所、要するに範囲は広いが此処で狩をしていたのだが、その時狩場ではいくつかのパーティーがお互い見える範囲で狩をしていたらしい。

その中の一つのパーティーが例の大蟻を集めすぎたらしい。パーティーのレベルを上げるのに限界ぎりぎりまで敵を集めるのは常套手

段らしいのだが、今回はそれが限界を超えたらしい。

この辺の大蟻達も一匹から五・六匹の集団で居るのだが、この時は30匹を超えたらしい、そのパーティーは瓦解して、慣れていたパーティーや数の少ない敵を相手にしていたパーティーは良かったのだが、彼女達のパーティーは運悪く巣から出てきた新手を相手にしていたらしくパーティーが瓦解するのはすぐだった。

ただこの時周囲のパーティーがお互い集合してこの大蟻の群れに対応しようとしていたので一時的には何とかなったらしいがそれも新手と元々居た敵がパーティーの集団の裏手に回ったことで裏側から崩れてきたということだった。

結果その時の人達は個々に逃げ出し彼女達のパーティーは大蟻の最大グループが殺到したということだった。

「結局うちのナイトがさっさと帰還したのよね」

「周りのパーティーが集まったときに、ナイトが先に逃げたんじゃかつこが付かないわよ」

「おかげで彼等、これからパーティーが組難いわよね。誰も来てくれないかもね、後衛を見捨てる前衛なんてね」

「でも、貴方達のおかげで助かったわ、さあ、二人とも休めた？まだ日が明るいから今ならまだ間に合うわ」

説明してくれていたナンヌさんが言い終わると、「この水元気が出るわね」といいつつ水筒を舞華に返して立ち上がった。

「そうだね」「いいよ」

二人も立ち上がった。

「どこへ行くんですか？」

舞華が問いかける。

「いや、残された仲間がまだ居るからね。死体だけど、うまくいけばリザーバーが利くから」

「甦らせるんですか？」

舞華が問いかける。

「そうそう、逃げたやつは大丈夫だろうけど、残ったやつは昔なじみでね、初めて村を出てから出会ったやつなんだ」

デルフィナがナンヌの変わりに言った。

「少なくとも盾・打撃・癒しが揃ってるからね」

イングヒルトが自分・デルフィナ・ナンヌの順に指差した。

俺は舞華に目で図を送り、舞華も同じく目で返してきた。

「手伝おうか？」

俺は三人に言った。

「どうして？君達は強いけど、あそこはどうなってるか判らないから危険だよ」

イングヒルトが返事をして、二人は複雑そうな顔をして、ナンヌが言った。

「パーティーの全滅した後というのは、特に今回の”祭り”の後では敵が多く残っているのではなおさら危ないのです」

「パーティーメンバーを見捨てないというのは有る意味、パーティーを組むときのマナーみたいなもんだ。街に逃げられれば救助パーティーを組むんだけど、今回は町や村から離れているからね。だけど今回は祭りの後だから危険なんだ。助けてもらえるのはありがたいけど他の世界の人を巻き込むことは・・・ね」

「そうそう、だから君達には迷惑をかけられないよ。」

「いや、こつちの都合も有るんだ、俺達はそれなりの期間をこの世界で過さなきゃいけないんだ。それでこの世界の術を習ったりして生きていかなきゃいけないんだ。さっき使った武器は弾に限りがあるからね」

「お願いしたいのは、これでうまくいったら俺達を術を教えてくださいるところを紹介して欲しいんだ」

「・・・なるほど。見た目はヒューマンだから話せる島が。いいよ、一度行って見たかったんだ」

イングヒルトが答えてくれた。

舞華が微笑んでいる。

ナンヌとデルフィナの二人も少し考えてから、「うまくいったらだぞ、死んでも文句言（うな。）わないでくださいね」「

「じゃ、準備するから少し待っていてくれ」

俺達二人は新しい銃と予備の拳銃、それにさっき回収した狙撃銃を俺がもち、舞華はスポーツドリンクを余分に背囊に詰め込んでいた。

「お待たせ」

「どこへ行ってたんだ？」

そっか、俺達のコンテナなんかは幽香さんの結界で彼女達に見えないのか。

見えないところから出てきたのが、俺達がほかの世界から来た証拠みたいなものなんだ。うまくは説明できないけれど。

とりあえず俺は三人に結界があることを簡単に説明し、詳しくは後で説明するといった。

「そっか」

急いでいる為それ以上は誰も追及しなかった、彼女達はそんなことよりも仲間を助けることが急務なのだから。

俺が狙撃銃で大蟻や初めて見る八本脚の怪獣（バジリスクというら

しい。)を倒しながら全滅したパーティーの周りを駆逐していく。最大射程に近い射撃によって周りにいる、骨、目玉、大蟻は一撃で倒れていく。

舞華が双眼鏡で周囲を警戒しつつ、大体の距離から狙う敵を指示してくれる。二人のコンビでかなりの数の敵が減ったと同時に、

「狙撃銃の弾丸、もっと持って来れば良かった。後五発で打ち止めた」

俺が言うと、舞華が

「もう浮いているのも、いないから死体を漁っている大蟻を、えっとさっきの目玉の右・・・っ」

舞華は最初死体を漁っている敵の姿を双眼鏡で直視し吐いた、仕方がないだろう、つい最近まで俺達は普通に死体なんて見ることもなく過してきたのだから。俺はとつくに吐く物がなくなってしまう、気分が悪いだけだ。

五発を撃ち尽くすと俺は狙撃銃をその場に放置した。

「これいらなの?」

ドワーフのイングヒルトが聞いてきたので、これは今もっていると邪魔になるので、後で回収する事を説明した。

「じゃ、代わりに持ってあげるね、後で返すよ」

そう言いながらイングヒルトがさも銃をめずらしそうに見ながらポシエットにしか見えない小さな鞆へ収めた。ここがファンタジーの世界なのを改めて理解した。

「ありがとう」

返事をして、イングヒルトを先頭に俺と舞華、続いてエルフのナン又とダークエルフのデルフィナがお互い少し距離を置いて、残ったモンスターを片付けながら全滅したパーティーの下へ駆けつけた。

少し時間は掛かったがその場にいた他のパーティーの死体も含めて、ナン又達で復活させて、今はナン又たちのパーティーだけで俺達のコンテナへ戻ってきた。

舞華にシャワーや着替えについては任せて俺は敵（こっちではモンスターと呼んでいる）からアイテムやらなんやらをイングヒルトに教えてもらいながら剥いでいた。

「こっちのお金になるものがこんなに有るなんてね」

俺はあきれていった、幽香さんがいなくなっただけからの練習で倒したモンスターからのアイテムだけでも膨大な数になっているからだっ

た。
「知らないって罪だね」

けらけら笑いながらイングヒルトがいった。

実はみんなを救助したときのモンスターの死体も助けられた人たちが、ナン又達へお礼も含めて、所有権を放棄したため自分達で分けることになり、その時、舞華が、アイテムを剥いで回収するのを見て、やり方を尋ねたのだった。

そんなことも知らないのかと教えてくれたのだが、実は今まで自分達で倒したモンスターからアイテムを剥いでないと、いったらイングヒルトは大慌てでそれはマールブルに対する罪だとか、冒涇で許されないとか言い出し、結局俺が付き合うことになったのだった。

「アイテムがこれだけになるなら、直ぐに私達のレベルになるね」

イングヒルトがそういいながら、みんなが待っているコンテナハウスへ俺と帰っていった。

後である蟻の巣の中も調べておくべきかな？と俺は思った。

「ありがとうございます」

シャワー室からナン又が出てきた。

俺達が帰ってきたのとほぼ同じくらいの時間だった。

一人ずつ順番に使い方を舞華が教えながらシャワーを浴びていたので時間が掛かっていた。

「イングヒルトさんとお兄ちゃんがまだだよ」

そういいながら舞華がイングヒルトをシャワールームへ押し込めようとしていた。

「ちょ、ちょっとまって、まって」

慌てたイングヒルトと舞華が大騒ぎしながらシャワールームへ向かう。

「気分は良くなりました？」

俺が声を掛けるとカマエルとエルフ、それに外人さんにしか見えな
いヒューマンの三人の女性に声をかけた。

「おかげで助かった、感謝している」

「大丈夫ですよ」

「あの状況じゃ助けに来なくても仕方がないですからね。感謝しています」

口々にお礼を言われた。

カマエルでウォーダーのシーリ、ナンヌと同じエルフでエルブンウ
イザードのグレイス、ヒューマンでクレリックのグレンダの三人だ。

リザーバーの呪文というか魔法はすごかった。

体をモンスターに食い散らかされていたのに、金色の光の柱が死体

から立ち上がると綺麗な体になった元死体がゆっくり動き出した。

さすがに服はぼろぼろで目のやり場に困ったが。

二十人近くにリザーバーをかけていたが、さすがに全員復活したわけではなく幾人かは、そのまま体は綺麗に戻ったが二度と目を開けることはなかった。

死んだものは二度目のモンスターの餌にするのは忍びないため、また場合によってはゾンビやスケルトンといったモンスターになる可能性が有ることから一度街に運びそこで改めて埋葬するということがあった。

「へえ、ゾンビや骨のモンスターや死体そのものを操れるんだ？」

俺がグレンダに尋ねると。

「そうそう、ネクロマンサーとかダークエルフの一派にもそんなのいなかったっけ？」

グレンダはデルフィナに話を振る。

「ファントムサマナーやスペクトラル マスターか？それはグランカイン様やシーレーン様の力を借りて呼ぶ召喚の精霊がエヴァアやアインハザードのものと違うだけだろう」

「第一そんなアンデッドを死体から作るのってハーディンが勝手に始めたことで我々は知らんぞ。ネクロマンサーと一緒にしないでくれ」

呆れたようにデルフィナはぶっくらぼつに返事をよこした。

「そんなことより皆で、話せる島にいかない？」

ナンヌがお茶を飲みながら皆に提案をする。

「何でいまさら話せる島に？」

グレンダが不思議そうに聞き返す。

「才人と舞華のことよ、二人とも此処で生きていくためには此処でスキルを覚えて、少なくともこの場所にやってくるモンスターを排除できなきゃいけない」

「異世界からやってきた二人にとって、一番入門出来る可能性が有るのは、話せる島のアインホバント魔法学校とセドリックの道場よ」

「二人がいなければこうしてられなかったしね、どう？」

「それなら私が二人の船代をだそう」

グレイスがそういうと皆が同意の意を示した。

8・準備 7（前書き）

これで才人達の準備は終わりです。

これだけいろいろ持っていれば簡単には死んだりしないでしょう。

（多分）

本編に入れば更新速度は落ちます。

荒地を出て船に乗り、話せる島まで道中色々あったが、結果として二人とも魔法学校と道場への入門を無事に果たした。

そこからのスキルアップに励む二人であった。その時二人に驚くべき秘密が出来た。最初にグレンダが二人のスキル習得に違和感を覚え、特に舞華に異常性を感じたのだった。

通常スキル・・・魔法や剣などの戦闘技術が多いのだが、例えば魔法であれば魔法のスペルなどが書かれた魔法書を使用して魔法書の魔力を利用し詠唱者へ直接魔法を使う感覚や魔力の流れを覚えさせる。だが、舞華の場合、魔法書の魔力をそのままなぞるような感じで魔法を覚えているように見えたのだった。例えて言えば字を覚えるのに子供が手を持ってもらって先生や親の動きのまま字を書いていき、それを繰り返していくのが通常だとすると、舞華は字を魔法書に書いて有るものをそのまま自分からなぞっている。そういう違いに見えたのだった。

違和感というのは、魔法の効果にブレが大きすぎたのだった。例えば同レベルであれば、全般的に舞華の攻撃魔法の威力が全体的に弱く、補助や回復系の魔法の効果が大きいのだった。ブレは魔法を使う物にはみんな癖があるのだが、普通は手取りで字をなぞるようなものなので癖と言えども補助だからとか攻撃系だからということはないのだ。

才人はなぜか、ヒューマン以外の魔道書が読めるということに気が付いた。魔道書は本来該当する種族以外読むことが出来ない。もつと言えば該当する職という制限も存在する。が才人はなぜか魔道書を他の種族の物も読めたのだった。そしてそれは舞華も同じだっ

た。そして二人とも魔法の魔道書も技の魔道書も読めたのだった。

グレンダは思い出したのだった。彼らはこの世界のヒューマンではなく別の世界から来訪してきた異邦人であると。つまりこの世界の魔法書は、この世界のヒューマンやエルフ等もともこの世界にいる者にのみ魔法を教えることができ、彼等には教えることができないのではないかと。魔法書の発動を舞華はなぞって行きそれにより魔法を覚えていると。

グレンダはその仮定を調べ、そして舞華が間違いなく現象として魔法書から直接魔法を覚えていないことを理解した。この結果、舞華が多重職に成れることの可能性に行き当たり実践した。

結果グレンダの仮定は正しかった。舞華はヒューマンの覚えられる魔法以外にエルフ専用の魔法を覚えたのだった。さらに同じ理屈で本来ヒューマンであつてもいわゆる職種が違えば覚えることができない魔法を舞華が習得できることも確認したのだった。

これはこの世界の因果律に完全には縛られていないことを表していたが、同時にスキルを覚えるために倒したモンスターから魂の欠片を得るという因果律に縛られていることと矛盾していた。

さすがに同族意識が強いオークやドワーフは無理だったが、エルフとダークエルフは興味本位で協力してくれる教官がいたのだった。

さすがにエルフのナンヌは呆れ返った、どこるか笑い出す始末だし、ナンヌより頭の固いグレイスは初め郷里の神官宛に告訴状を出そうとする始末だった。

グレイスの方は何とかナンヌのとりなしで収まったが、いくらハイネスだからといってエルフの神官としてどうなの？と他の神官たちにはれたらどうするの？とか心配になったメンバーが今後は来ませんとか寄付しますので口外しないようにとかお願いに言ったのだが、

当の神官から

「エヴァの加護はエヴァに認められた方にのみ起きるのです。貴方達兄妹にスキルが発現したのはエヴァの加護のお陰です。心配することはありません」

と言い切ったのだった。実際エルフがヒューマンへ魔法技術を伝えた際もそのままでは伝わらずアインハザードの加護として発現させた為、エヴァの加護がそのまま発現するのは兄妹へのエヴァの加護が発現、つまりエヴァが才人たち兄妹を認めため問題はない。との彼等神官たちの考えだった。

有る意味彼が育ったハイネスという土地柄もあつたのだろう。

ダークエルフも同じ考えで、ネクロマンサーはグランカインやシーレーンの加護がそのまま発現しているわけではなく、ハーディンが何か法則を捻じ曲げているのだろうといい、そのまま発現している才人達のことは素晴らしい事だと言い切り、この中（神殿）の神官たちは誰も本国へは伝えないよ。と言い切ったのだった。

ハイネスのダークエルフとエルフの神殿にて彼ら兄妹は両種族のスキルを覚えいったのであつた。

ヒューマンということでは有る意味過激な宗派であるアインハザード派の目を誤魔化すため職によるスキルを覚えるのは、職により覚える街や村を変えろという方法を使い。パーティーでも偽名（これはこの時代よく有ることだった。）を使い誤魔化し続けた。

才人は基本ナイト職となりダークアヴェンジャーへと目指し鍛えた。理由は街で見かけた『猫』を連れだしたダークアヴェンジャーがかつこ

よかつただけなんだが。

舞華はグレンダと同じくクレリックを目指していたが、二重職になれることを知ったグレンダ自身がビショップを目指していたこともあり、舞華をプロファイットへ転職と同時にウイザードからソーサラーへの方向も進ませ、パーティーの狩場やクエストの条件で偽名を使い分けることとなった。

結果、才人達は十年間過したこのエルモア・アデンの世界で、ヒューマン・エルフ・ダークエルフの三種族のスキルをマスターしてしまつたのだつた。

実はそのことに一番喜んでいたのがエルフとダークエルフの神官達だつた。才人達のパーティーは才人達のスキルアップに引かれ全員がマスタークラス以上、つまり最高位の職位を取得したのだつた。

これはナンヌの場合、過去のダークエルフとの戦争で高位のエルダーが七人命を落としたためその補充も必要であり、エルフ本拠地で弱くなつてきた世界樹を蘇らせるのに高位のエルダーが必要だろうという事情もあつたため、高位エルダーの補充が何としても必要だつた、ところが、高位のエルダーどころか先輩エルダーを超えて『エヴァス セイント』となつたためである。

さらにグレイスは『ミステイック ミューズ』となり、ダークエルフのデルフィナは『ストーム スクリーマー』となり二人とも年齢からいって、若い二人は種族的に老いが見えてきた両種族にとって明るい話題でもあつたのである。

また、血盟に参加していないフリーの冒険者と一緒にパーティーを組むこともあつたが、結構一緒に長く冒険を続けたこともありナンヌ達に比べればまだまだだが、かなりの高レベルになつていた為、

そういつた相乗効果もあり俺達のパーティーは知らない間に厄介ごとを含む難易度の高い依頼をこなすようになっていった。

初めにそういつたことを始めた時にグレンダに対して、

「破戒僧だねグレンダは」

呆れたようにダークエルフのデルフィナが言う。

「ダークエルフに言われたくないわよ」

グレンダが言い返す。

グレンダは皆に諫められた後、今度はグレイスが、

「二人ともよく考えればこの世界のヒューマンじゃないのよね。見かけに騙されたわ」

と、やけ酒を飲んで、グレイスは同族のナンヌに絡まずにシーリーに絡んでいたそうなの。

しかし、才人は魔法が、舞華はスキルがうまく使えなかった。才人の場合は使えるには使えるのだが燃費というか効果というかほとんどないのと同じ程度であった。この辺りは元々の『才能がない』ということなのだろうか？どちらかというと舞華の方は戦闘で使う事でトリッキーな戦術が使えるくらいに有効であったのだが。（魔法使い潰しは近接戦に持ち込むのは定番の戦術だが、それゆえ守る方の舞華は攻め手を逆にはめ手に誘い近接の攻撃スキルで奇襲をかけることが出来た）

才人はこの世界消えることが確定していた為、それほど積極的ではなかったが、ダークエルフのデルフィナ、エルフのナンヌ、カマエルのシーリとはそれぞれお互い知った上で才人に対して大人の関係を結んでいた。これは両親の死、冒険中の舞華の死や復活、別世界での生活のストレスなどいろいろな要因がまだ十六歳の才人に対して絡み、さらに冒険中の吊り橋効果で彼女たちに影響したのだからなぜかこのパーティーは円満だった。

そんな中、幽香が二人に残した砂時計が時を刻み始めたのだった。

二人は、というよりパーティーは活動を一時停止し荒地へ戻った。

それまで二人は年に何度かは帰っていたが、これでもうエルモア・アデンを駆け巡ることもなくなるため今回の帰宅は少し変わったものになった。

一度帰宅した二人はそれまで集めたアイテムのうち不要なものを売りに出した。

武器、防具などの装備は、これから飛ぶ世界がどんなところかわからないため、メインの職種以外でも自分のスキルが生かせるという

のであれば躊躇なく追加で購入した。

消耗品、特に回復薬など戦闘に役立ちそうなものを中心に購入したのだった。

この辺りはドワーフのイングヒルトに一任した。彼女はエルモア・アデンの経済を動かすドワーフネットワークを最大限に利用してうまく立ち回ったらしい。

何しろ二人の投じた資金や素材などは複数の街の相場を動かすことになるため、うまくやらないと大損することが考えられたからである。

その結果、二人はエルモア・アデン中の相場を混乱させるほどの商いを行ったのである。

一瞬だが都市間の緊張が高まったのは事実だった、何故ならその投入された金額と商いで動いた物量は数都市間の戦争を遂行するのに等しい物量だったからだ。

彼ら兄妹が冒険者として主に活動していたギランやアデン、ハイネス、ゴダードの各城主は表には出てこないが、各城主の有利になる活動をしてきている冒険者のパーティーは常に注目しており、それとなく接触し、詳しくはないものの事情をある程度知り得たためそれぞれの城主とも城下の動揺を収めるのは早かった。

そして、市場に一時的にはあるが物が無くなり、金が溢れるというインフレーション状態になったのである。

これは一時的なものながらドワーフを中心として、工業と商業に関

する活性化を招き、後に言う予兆の時代を経て豊饒の時代を迎える下地を作ったのだった。

もちろんドワーフで有るイングヒルトはそうなる事を予感をしており、それに向けての準備を秘かに行っていたのだった。

サイトと舞華の二人は魔法を帯びた武器や防具といった物がこのエルモアーアデンに住む人たちもそうだが、自分達の世界ではとんでもない性能を持つということに気がついていた。

装備するだけ（それなりの重さは有るが）で、自分の生命力ヒットポイント、体力バイタル、魔力マジックポイントが上がるだけでもスーパーマンになれる、極端に例えれば片腕を切り落とされるような状態になっても戦闘を続けられるといったことである。

それに加えて、他にも自分の能力が上がるというものもあり、これだけでもとんでもないことであり、エルモアーアデンのノービス向けの装備ですら実際の戦闘行為においては戦略自衛隊のボディーマー以上ではないかと二人は思っていたりするのである。

さらに過去に作った精霊石や購入したものでさらに上乘せの付加能力まで付けているものまであったからである。

あと、付加能力は付かない上、武器として経年劣化していく幻影武器、これはどんなに整備しても持っているだけで劣化していく魔法力により存在する武器だが、これも購入した。

武器としてはそういった低レベルであっても自分達の世界の刀や武器といった物より優れていることを見越して、一般にDからBクラスといった手に比較的是りやすい物を主に購入した。

そうやって準備を進める間、才人は特に三人との別れを惜しんだ。

才人はこれまで協力してくれた皆のことを考え、正式に血盟を結成した。それ以前からも緩く繋がった血盟を作っていたのだが、パーティーⅡ血盟であったため、血盟より個人の名前が有名になっていたのである。これまでパーティーⅠと一緒に組んできた者で血盟に入っていない者などを集めての、血盟という名前から考えればかなり緩やかな繋がりでは有るが、それでも20名ほどの集まりになった。

今回、パーティーⅠ内で調整役であったナンヌを盟主として、そして種族は違っていたがナンヌを常に支えてきたシーリとデルフィナを副盟主として、そして、いくつかの街にアジトを購入、才人から才人と舞華の残していく資産管理をお願いされたイングヒルトが血盟の資産としてそれらを管理していくこととなった。

彼らはどこの城主にも与せず、どこの種族にも偏った支持もせず、当時としては珍しい独立系の血盟として結成され、当時はエルモア・アデン中の話題をさらった。

彼らの性格から表の話題から消えるのは早かったが、隠然とした勢力を保ちながらエルモア・アデンに存在することとなる。

そしてついにもう一つの砂時計が動き始めた。

「お別れですね、才人、舞華。これまでお世話になりました。また再び会えることをエヴァに祈っています」

ナンヌが言う。

「もし戻ってこれるようなら戻ってきてくれ。私は待っているから」

デルフィナもお別れを言う。

シーリも名残惜しそうに別れを口にする。

グレイスとイングヒルトが口々にお別れの言葉を言う。

最後にデルフィナが、笑いながら。

「向うの世界で嫁さん見つけたら紹介してくれよ」

「おいおい、なんだ浮気勧める嫁なんて知らねえぞ」

「才人は無自覚なのよ」

ナンヌに言われる。周りが頷く、って舞華まで・・・

そして時間が来て、六人の見ている前でコンテナを囲んだ樹木に覆い被さるように銀色の円盤が上空に現れ、樹木を光の中へ埋めて、そして・・・

8・準備 7（後書き）

才人君は取敢えず主人公補正で、まあここで細かいこと書いても仕方ないので、もっと短く書けないとだめですね。

それができるようになれば準備編はバツサリ切ってますっきりさせたいです。

舞華さんの魔法習得は完全に後付ですね。異界の人間がその世界の魔法を覚えるのは考えたんですけど思いつかなかったです。まあ、先生の力でということ。

才人君も以下同文というか、才人君は先生が冷たくあしらってますがこっさり色々やってくれてたのでしょう。きっと。

9・召喚 - 1 (前書き)

ようやくと原作へ召喚されました。
最初は原作の流れ通りになります。
よろしくおねがいします。

呪文を唱え終えたその瞬間、彼女の目前から強大な爆発音がし、爆風が巻き起こる。

爆風が終わった後には何も変わらない木々を背景とした草原が変わらず存在した。

後から考えると不思議なことに、かなり巨大な爆風が起きたと、その場にいた全員は感じていたのだが、圧力を肌には感じたが服や髪は一切乱れていなかったのである。

魔法を唱えた彼女の目前には、自分達と似たような年齢の男の子が仰向けに倒れていた。

「あんだ誰？」

抜けるような青空をバックに、才人の顔をまじまじと覗き込んでいる女の子が言った。

自分と見た目はあまり変わらない。黒いマントの下に、白いブラウス、グレーのプリーツスカートを着た体をかがめ、呆れたように覗き込んでいる。

顔は……可愛い。けど舞華もなかなかだよな、と余計なことを一瞬考える。

桃色がかったブロンドの髪と透き通るような白い肌を舞台に、くり

くりと鳶色の目が踊っている。

桃色のブロンドってストロベリーブロンドって言うんだっけ？舞華に一度、アデンだかギランだかの商店で人形を見ていたときにそんな話をしてたっけ？だけど前に見たそれより本当にピンクだね、こんな髪の毛の色も有るんだねえ。

などとやっと気がついたというのみ、無駄な思いにふけていた。どんな世界に、と思って構えていたところへいきなりの衝撃で結界の外へ出てしまった。しかし、そういえば結界の真ん中にいたよな？などと思いついてきた。

気構えていたのに回りは中高生くらいの子供ばかり、しかし、自分も見た目はそうだとすることに思い当たらないところが才人らしいが、思いつき緊張感がなくなったようだ。

やっと頭がはっきりしてきた、あれ、そういえば舞華は無事かな？やっぱり俺と一緒に気を失っているのかな？などと考える。しかし、体が重いし、痺れる。首がやっと動かせるか？首を少し回し、無線機の電源ランプが付いているのを確認して、赤い世界から持ってきた無線が生きていることを確認する。これで舞華が気がつけば音声が届くのでむやみと飛び出してこないだろう。

これも、飛ぶ前に二人で決めておいたことだ。それぞれ無線機を持ち、お互いの状況を確認することを最優先にして、周りの様子がかがう。才人が結界から出てしまったことは誤算だったが。

二人にしてみれば幽香さんの結界は完璧だと思っているので、それを利用して状況を確認しよう、と。最初からうまくいかないよな。などと緊張感のかけらもない。

「あんだ誰って言ってるでしょ！」

「もう、どこの平民よ、貴族を無視して」

「ルイズ、『サモン・サーヴァント』で平民呼び出してどうするの？」

誰かがそういうと、才人の顔をじっと覗き込んでいる少女以外の全員が笑った。

「ちよ、ちよっと間違っただけよ！」

才人の目の前の少女が、鈴のようによく通る上品な声で怒鳴った。

「間違いつて、ルイズはいつもそうじゃん」

「さすがはゼロのルイズだ！」

誰かがそう言うと、人垣がどつと爆笑する。

才人の顔をじっと覗き込んでいる女の子は、どうやらルイズというらしい。

その騒ぎの間の短い時間に舞華から通信があった、どうやら無事らしい。

どうやら見たところ危険がなさそうなので、武器は見えないようにして来たらどうかかな？なんか学生さんみたいだから舞華も学生服なんかどう？向うじゃ、着る事無かったんだし。などと緊張感のまったく無い通信で、舞華を盛大にずっこけさせ、それならと、舞華

はコンテナハウスに向かうのだった。

舞華は普段はスカートをはいていたが、冒険者の生活が長くなるに従い、ハウスの外ではエルモア・アデンの魔法使いの定番装備であるローブ、今の舞華はマジエスティックローブと言われている詠唱速度が速くなり魔法力を増やすものを着ている。スカートが短いのでスカートの中にスパッツを穿き右手に魔法剣、左手に盾を持っている。後、拳銃と機関銃も隠し持っている。才人は召喚されたら先に外に出る予定で、出来るだけ大人しい方がいいというアドバイスで見た目は武器の類は見えないように気を付けていた。舞華は結界の中から才人の周りを警戒してなにかあれば全力で援護する予定だった。

そういえば俺もみんなに喧嘩する訳じゃなければ最初は武器や鎧みたいに、いきなり相手を警戒させるような物は持たない方がよくないか？とアドバイスを受けていて用心で鞆の中に機関銃が入っているものの服装はTシャツにGパン、拳銃と赤い世界で手に入れたごく普通のナイフを体の脇に吊っているため目立たなくするため青いブルゾンを羽織っている。腰のポシェットだけが妙に違和感を放っていたが。

鞆は周りにないことから結界の中かな？後で舞華に合わせて学生服にでも着替えようかな？そんなことをちらつと考えながら、

「えっと、お嬢さん、俺は平賀才人。君の名は？それと聞きたいことが有るんだけど？」

その声が聞こえなかったのか、無視してルイズと呼ばれる女の子は、「ミスタ・コルベール！」

彼女が怒鳴ると、人垣が割れて中年の男性が現れた。

才人はつい可笑しくて笑いを堪えるのに大変だった。彼の格好があまりにも昔見たTVや映画で出てくる魔法使いそのままだったからである。

魔法使いとはいえ、エルモア・アデンの魔法使いとはあまりにも違っていたからである。

エルモア・アデンにて魔法を現に見ていた自分にとって、あの魔法使いの格好はやっぱりファンタジーなんだなと思わせていたからだった。

どんな会話がなされるのか才人は舞華の準備が出来るまで興味を持って聞いていた。実は体が痺れて動かないということもあったのだが、

「なんだね。ミス・ヴァリエール」

「あの！もう一回召喚させてください！」

「それはダメだ。ミスヴァリエール」

「どうしてですか！」

「決まりだよ。二年生に進級する際、君たちは『使い間』を召喚する。今、やっているとおりだ」

なんとまあ、想像だにしなかった。まさかこんな大げさなことが只の進級試験だと！

泣くことも、笑うことも、怒ることも出来ずただ、呆然と彼らの会話を聞いているだけだった。ただ、なぜか目から涙が出てきたのだが。

しかも使い魔ときたもんだ、学生で使い魔、まあ、魔法が進んでいるのかもしれないが人間まで召喚して色々問題にならないのか？この世界では。そういえば俺の事を見て『平民』と言ってたが、身分制度でも有るのか？

「それによつて現れた『使い魔』で、今後の属性を固定し、それにより専門課程へと進むんだ。一度呼び出した『使い魔』は変更することはできない。何故なら春の使い魔召喚は神聖な儀式だからだ。好むと好まざるにかかわらず、彼を使い魔にするしかない」

「でも！平民を使い魔にするなんて聞いたことがありません！」

ルイズがそう言うと、再び周りがどつと笑う。ルイズは、その人垣を睨みつける。それでも笑いは止まらない。

なんとまあ、この魔法は、なぜか彼女に一番ふさわしい『俺』拉致する魔法じゃないのか？『俺』を狙ったと聞いていらから人間をあちらこちらから誘拐する魔法だと思っていたのだけど・・・？それにしてもルイズという少女が笑われているが想像するにあまり出来が良くないのかな？舞華に言わせると魔法なんて想像力や気持ちで威力が変わってくるものなので少々の才能差は想像力で逆転出来るかと、舞華は、ナンヌやデルフィナより素質は相当下らしいが実際の威力は二人とほぼ同じだけ出せると言ってたし、二人もそんな事言ってたっけ。

もう一つ大事なことは、『平民を使い真にするなんて聞いたことがありません!』ということとは、通常、人は呼ばれない。俺の場合は事故なのか?それでも決まりだから俺を使い魔にしろと、頭の硬いことだな。またつまらない思考に入っている才人であった。

それに俺、これでも一応貴族じゃないけど貴族並みに処遇してもらってたけどな、・・・エルモア・アデン限定だけど。あまり平成日本にいた才人には、貴族というものがいまいち分かっていないのだが、思うことだけは自由にできるので口に出さずに思っていた。

「これは伝統なんだ。ミス・ヴァリエール。例外は認められない。彼は・・・・・・・・」

ミスタ・コルベールと呼ばれた魔法使いは、才人を指差し。

「ただの平民かもしれないが、呼び出された以上、君の『使い魔』にしなければならぬ。古今東西、人を使い魔にした例は無いが、春の使い魔召喚の儀式のルールはあらゆるルールに優先する。彼には君の使い魔になつてもらわなくてはな」

「そんな・・・・・・・・」

ルイズはがつくりと肩を落とした。

「さて、では、儀式を続けなさい」

「えー、彼と?」

「そうだ。早く。次の授業が始まってしまつじゃないか。君は召喚にどれだけ時間をかけたと思ってるんだね?何回も何回も失敗して、

やっと呼び出せたんだ。いいから早く契約したまえ」

そうだそうだと野次が飛ぶ。

ルイズは才人の顔を、困ったように見つめた。

なんだなんだ、一体、何をされるんだ。

「ねえ」

「あんた、感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生無いんだから」

いや、貴族にでもないだろう、無理やり異世界を何度も冒険させられるのって。

ルイズは諦めたように目をつむる。

手に持った、小さな杖を才人の目の前で振った。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、私の使い魔となせ」

朗々と、呪文らしき言葉を唱え始めた。

すっと、杖をサイトの額に置いた。

そして、ゆっくりと唇を近づけてくる。

「え？」

「いいからじっとしてなさい」

「怒ったような声で、ルイズが言った」

「ちょっとまで、俺は使い魔になるとは言っていないぞ！」

「ああもう！じっとしてなさいって言ったじゃない！」

ルイズは才人の頭を左手でがっと思んだ。

ルイズの唇が、才人の唇に重ねられる。

これが契約？普通なら振り払うことも簡単に出来るのだが、いまだに衝撃のせいか体が動かない。少しでも力が入ればこんな女の子くらい抑え込むなり何なりとできるのだが、結局契約（口づけ）をってしまった。

また舞華にお兄ちゃん抜けてるから。って、怒られるなあ。と、また現実逃避に入ったサイトを置いて。

「終わりました」

顔を真っ赤にしている。生意気に照れているらしい。属性はツンデレしか？と無駄に想像してみる。

「『サモン・サーヴァント』は何回も失敗したが、『コントラクト・サーヴァント』はきちんとできたね」

コルベールが嬉しそうに言った。

「相手方だの平民だから、『契約』出来たんだよ」

「そいつが高位の幻獣だったら、『契約』なんかできないって」

何人かの生徒が、笑いながら言った。

ルイズが睨みつける。

「バカにしないで！わたしだってたまにはうまくいくわよ！」

「ほんとうにたまによね。ゼロのルイズ」

見事な巻き髪とそばかすを持った女の子が、ルイズをあざ笑った。

「ミスタ・コルベール！洪水のモンモランシーがわたしを侮辱しました！」

「誰が『洪水』ですって！わたしは『香水』のモンモランシーよ！」

「あんた小さい頃、洪水みたいなおねしょしてたって話じゃない。

『洪水』のほうがお似合いよ！」

「よくもいつてくれたわね！ゼロのルイズ！ゼロのくせになによ！」

「こらこら。貴族はお互いを尊重しあう物だ」

中年の魔法使いが、二人を宥める。

まったくこいつら、本当に子供だ。この中年の人は先生なのか、子供のお守りは大変だ、そんなことを思っていたときに突然、才人の体が妙に熱くなった。

「ぐあ！ぐああああああ！」

才人は思わず仰向けになっていた体をひねって膝立ちに近い姿になった。

「熱い！」

ルイズが、苛立たしそうな声で言った。

「すぐ終わるわよ。待つてなさいよ。『使い魔のルーン』が刻まれているだけよ」

「人の体に勝手にそんなもん刻むんじゃねえ！」

無線から舞華の焦った声がしていたが、聞こえていなかった。

「あのね」

「なんだよ！」

「平民が貴族にそんな口利いていいと思ってるの？」

しかし、熱いのは一瞬だった。すぐに体は平静さを取り戻した。

「ふう」

何とか体が動くようになって膝をつく才人にコルベールと呼ばれている魔法使いが近寄ってきて、サイトの左手を確かめようと手を取った瞬間、コルベールとルイズは弾き飛ばされた。

「きゃあああああ！」

「うおおお！」

見上げると、舞華が心配そうにこっちを見つめている。どうも舞華が体当たりをして二人を弾き飛ばしたみたいだった。向こうで訓練した成果が出てるのかな？何か見かけは以前のままだけど強くなっただけかな。

「舞華、心配してくれるのか？こっちは大丈夫だぞ、左手になんか変な文字落書きされたけどな」

舞華は中学のときのセーラー服の制服を着て学生鞆を手に提げている。この中には教科書はもちろん入ってなくて銃と色々ガジェットを入れて持っているはずだ。

「な、なによ、あんた達！ど、どこから出てきたのよ！き、貴族に手を上げてただで済むと思ってるの！」

ルイズが怒鳴りたてる、コルベールと呼ばれる魔法使いは油断なく杖をとりだして、様子を伺うようにこちらを見ている。

まったく気配がなかった、だが、現実私とした事が生徒と一緒に吹き飛ばされてしまった。彼女は誰なんだ、彼の知り合いらしいが？

「えっと、この子は舞華、俺の妹なんだ、俺が大声を出したんで驚いてきたんだと思う」

「ミス、すまないが貴方もミス・ヴァリエールのサモン・サーヴァントで呼び出されたのかね？」

「呼び出されたの俺だけだよ。舞華は巻き込まれたんだ」

「ふむ、どうした物が・・・」

「コルベール先生でいいのかな？俺は平賀才人といいます。一つ質問していいですか？」

痛みが引いたらやっと体が動くようになった。

「なんだね、え、と、ひらがさいと君」

なんか発音が変だけどまあいいか。考えていた質問を試してみよう、相手の様子を見てみたいし。

「俺達どうもそのルイズさんに召喚されたようなんだけど、家に帰してくれないかな？俺や舞華にも学校が有るし・・・」

「む、このサモン・サーバントはこのハルケギニアからサモンサー

バントを唱えた者にふさわしい使い魔を召喚する魔法なんだ」

「そのため送り返す魔法という物は、残念ながら私は聞いたことがないのだよ」

「えっと、それって一方通行の不完全魔法？」

「むう、一方通行には間違いはないな・・・しかし、不完全とは・・・」

「えっと、俺たち二人こつちの世界に呼び込まれて待遇はどうなるんです。元の世界に戻るのは・・・ここは魔法学校というからには調べれば何か出てきそうな気がするけど、明日からの生活があるからな」

「ちょ、ちょっと待ってください！何で平民が勝手に貴族を殴ったり、好き勝手いえるのよ！」

「ルイズさん、申し訳ないけど、俺達の世界には貴族というのはほぼいなくなっていたんだ。だから、貴族を勝手に殴ることはないけど、貴族だからって平民を勝手に誘拐したりすると罰せられるはずだよ。最もそんなことする恥知らずの貴族なんていないと思うけど」

「ど、どということよ。あんたのいる世界にはいないってどういうことよー！」

「そんなことより俺達の処遇ってどうなるんです？主に食事とか住居とかの生活関係ですけどね」

「君達の様子と話を聞くとまだ学生なのかね？」

「ええ、元々は向うの子達と同じように制服着て学校に通う年齢でしたから」

「むう、ではこうしましょう。ここはトリスティン魔法学院といいます、貴方達の処遇に関しては学院の院長に相談できるように計らしましょう。まずは、お互いのことを知らなければいけませんね」

学生を召還したということは、場合によっては国際問題になるやもしれず、さっきの彼女の気配を消しての体当たり、だが、ただの体当たりでミス・ヴァリエールならいざ知らず、私をも吹き飛ばすとは、、、、しかもあの落ち着きよう、彼らのことをもう少し調べる必要があるかもしれませんね。

大きな声で、コルベール先生は生徒へ話しかけた。

「さてと、じゃあ皆教室へ戻るぞ」

「ミス・ヴァリエールは院長と面談できるようになれば使いをやるので、それまで彼らにここのことを説明しておきなさい」

そういうと、宙に浮き、城のような石造りの建物へ向かっていった。

「なんなのよ、もう!」

なんかルイズは涙目になってるな。

「じゃあ、私の部屋に行くわよ!こっちよ来なさい!」

「少し待ってもらえるかな?この荷物だけだと問題ありそうだし着

替えもつてくるわ」

「あと、舞華、着替えとか準備しとけ。今日はあそこで泊まるみたいだしな」

「に、逃げるんじゃないでしょうね？」

「逃げねえよ。めんどくさいなあ。舞華、先に準備して。俺がここに残るから、・・・そうだな、荷物有るからパジェロがいいかな？」

「トレーラーの付いてたやつがコンテナ前にあつたよね？そっちへ荷物いれて、重たかつたら玄関のところ置いててくれていいから、終わったらまた此処へ来てくれ」

「お兄ちゃん、ここで使い魔するつもりなの？」

「行く当てがなければここでしばらく暮らすしかないだろう？それに魔法学院って言うんだから元の場所に戻る魔法が有るかもしれないし。調べれば判るかもしれないし、舞華、魔法のことは、当てにしてるから」

「うん」

舞華がコンテナハウスの方へ駆け足で向かっていった。俺は後ろから「急がなくていいよ」と声をかけておいた。

き、消えた？ど、どうなっているのよ！ルイズは残った才人の方を向いてキツと睨みつけた。

「見えなくなつたこと？俺たちを信用してくれるようになればどこ

へ行つたのか見えるようになるよ」

「ど、どういふことよ。訳わかないわよ」

「親切な人が作ってくれたんだ。そのうち話を聞いてくれるようになれば話すよ。まだ、人の話を聞く気無いみたいだから」

しばらくして舞華が戻ってきた。トレーラーにはトランク一つか、女の子の荷物って多いもんだって昔は聞いてたけど、舞華はそんなに荷物持ってこないんだよな、エルモア・アデンでの生活でそうなった訳じゃなく昔からだよな。あとは、鞆とポツケか。

「ふう」

取敢えずの準備は出来た。武器は剣と盾、鎧は小物込みで道具袋に入れて、着替えをなんかをトランクに押し込んで、今の姿は懐かしい学生服、ただ、鞆の中には筆記具と一緒にナイフと拳銃が入っている。

話せる島の『セドリックの道場』に入門したときに冒険者の装備として渡された道具袋、重さはなくならないが嵩張ることなくちよつとしたポーチくらいサイズの鞆にアイテムを入れたり出したりできる便利な道具だ。舞華は同じものを『アインホバント魔法学校』でもらっている。

俺と舞華は『ドラえもんのポケット』と言い合い、そのうち略して『ポツケ』と称してる。これが有るからエルモア・アデンの冒険者は通常、剣の鞘を持たない。剣を出しているときは常に実戦。その代り街中などではポツケの中、慣れればそれなりの速さで剣を出せる。ただ、通常帯剣している城使えの騎士や兵士は腰や背中に鞘を下げたり背負ったりしているが。

抜き打ちには確かにそのほうが早い場合もあるが、冒険者には冒険者の流儀が有るのだ。

横道にそれだが、そのポツケに銃と予備の弾薬も入れて有る。もちろん舞華は魔法の威力を嵩上する魔法剣と着替えになるローブ、俺は片手剣に盾、それにいわゆる西洋鎧といわれるものだ。それに加えて弓も持っている。ちなみに舞華はスカートの中に、太ももに拳銃を隠している。まあ、エルモア・アデンでは見つかったもそれが

武器には見えないのでそれほど問題はなかったのだが。

ただ俺のはぎりぎりまで詰込んで有るのでかなり重い。他人がいるところでは使うことはなかったのだが、舞華と二人きりの時にモンスターや盗賊、辻斬りに会ったときは容赦なく使わせてもらった。大体数で負けていることが多いので確実に生き延びるためにだ。

で、今回はこれに通常の旅行用のトランク、これは赤い世界で荷物の整理用も兼ねてかなりの数をもらってきた。そのうちの二つに着替えやらノートパソコンなどを入れておいた。

あとハードケースに入っている銃を弾丸と一緒にトレーラーに載せる。二人がいつも持ち歩いているものとは別にM24と対物狙撃銃といわれるものだ。

これらは、エルモア・アデンの世界では問答無用の戦闘中心の生活だったが、ここではそれなりに文明が、俺達の世界に近いところも有るだろうと思えるので、百科事典やそういったもののソフトや、ガジェット類、デジカメやなんかも入れている。そのため、荷造りに時間もかかったし使うための電源なんかも考えてそれだけでトランク一つが一杯になった。まあ、忘れ物はすぐにとりにこれるので多少のことは大丈夫だろうけど。

銃は念のために持ってきた。使わずに越したことはないけれど、幽香さんの言葉がなければ、こんなもの持っては来やしない。ただあの人の言葉は無視してはいけないと思う。

トランク二つにリュックというより背嚢 はいのう といったほうがしっくり来る鞆を背負って、おまけに太陽光発電ユニットにキヤパシタ（大容量蓄電池）、それに銃のケースが二個に銃弾の入っている箱、それを簡易台車に乗せて車のところまで持ってきて、パ

ジエロに、倉庫の車は俺達の世界にあったパジエロに似ていたの
そう呼んでいる。正式な名前は七三式小型トラックだっけ？ジープ
には見えるけどトラックには見えないのでこう呼んでいる。なぜな
らTVに映るラリーカーかっこいい。なんていいながら親父とみて
いたが、それとなんか面影があるような気がしていたから。その
後ろに牽引トレーラーが付いているので、そこに荷物を積込んだ。
そして、空きスペースにちよつとした食料などを入れた。

トレーラーのあたりを閉じて、運転席に乗りエンジンをかける。さ
て、どんな世界なんだろう？正直言つて平成日本人ベースの俺には
ファンタジーはもうお腹一杯です！

無免許だし、運転回数も少ない（何しろほとんどゲート魔法によ
る移動が徒歩で移動していたのだ。）が、俺もそれなりに運転でき
るようになってきたと思う。本当はランクルの方が良いのだからうけ
ど、そこそこの荷物ならトレーラー付きの方がいいかな？と安易に
考えた結果だ。やっぱり運転のしやすさから、やっぱりランクルに
しとけばよかつたかな？と考えながら運転を始める。

後、何故かこの車のことについて頭の中にぼんやりと性能や使い方
が判ってしまう・・・ぼうつと頭の中に浮かぶのは何か、さっきの
コントラクトサーヴァントの影響かな？後で舞華に相談してみよう。

「何時まで貴族を待たせるのよ！」

「ルイズさんこれでも飲んで待ちましょう」

ルイズさんに冷えたイチゴオレの紙パックを渡して、コンテナのほ

うを見る。もうイチゴオレもこれで終わりだな。と場違いな思いもお頭をよぎりながら、これからどうなるんだろ？お兄ちゃん早く来ないかな？と舞華は結界の中に、木々の間から見える才人の方を見ていた。

お兄ちゃんが樹の隙間から荷物を苦労して積込んでるのが見えるけど、ルイズさんには幽香さんの結界が有るから見えないんだ。

そういえばお兄ちゃんは、ノートパソコンやデジカメも準備してこの世界のことを、魔法を調べようって言った。けど、これは荷物が多すぎないかな？自分の着替えとかちゃんと積んでるのかな？此処に取りに着たらいいって思って忘れてそうだな。後でこっそりトランクを覗いてみよう。

そうこうする内にトレーラーのあたりを閉じて運転席に乗り込んだようだった。

「もうすぐ出てきますよ」

そう言うとルイズさんは、どうしてわかるのよ！とか言いながら立ち上がってきよるきよる辺りを見回している。

「あんたたち準備ってどこでやってるのよ。見えなくなったら急に・・・わっ！」

音を立ててパジェロが出てきたのでルイズさんがびっくりしている。

「な、何、馬もないのに馬車が動いてる！」

ルイズさんって美人だし、なんかいいとこのお嬢様って感じだけど、

一々大げさに驚くのね。などとずれたことを考えているところへ車が停車する。

ルイズさんが何か言ってるけど、お兄ちゃんが相手しているのだから後ろに乗ってしまう。お兄ちゃんはなんだかうんざりした顔をしている。

なんとかルイズさんを助手席側に押し込んで、出発する。さっきドラゴンもいたしワイバーン（騎乗型飛行龍）やストライダー（騎乗型歩行龍）に乗っても問題ないような気がするんだけど、ひよっとしてお兄ちゃんあれだけ苦労して育てたストライダーのこと忘れちゃったのかな？

「なんかうるさいわね」

「軍用だからな、あんまり乗り心地とかそんなこと考えてないから、でもこの車クーラー付いてんだぜ」

「クーラー？なにそれ？」

お兄ちゃんがダッシュボードのスイッチを動かす。車内が少しうるさくなり、暫くして送風口から冷風が吹き出してきた。

「な、なにこれ！何の系統の魔法で動いてるの？」

「魔法じゃないよ、しいて言えば科学かな？」

お兄ちゃんがこっちを軽く振り向いてまた前を向いた。

「電気の力を使って、自然の力というか、理屈を利用しているの」

「自然の力？エルフの精霊魔法！？」

「こつちのエルフも精霊魔法を使うのか。どんなのだろう？だけど魔法じゃないよ。川の水が上流から下流に流れるのを利用して水車を回すみたいに、自然の力を利用するんだよ」

「でも、進んだ科学は魔法に見えるって、未開の人から見たら、科学技術はそうみえるってなんかの本に出てたな」

「なによ！私達が未開だというの！」

「未開っていったのは謝るよ、だけど、少なくとも科学技術についてはルイズは知らないんだろ？」

ルイズさんは、お兄ちゃんを睨んで、ついでに私を睨んでいた、けどお兄ちゃんは気付いていないのか、周りの景色を楽しみながら運転している様に見える。

しかし、壁が高くて門も大きいけど、こういう所って守衛さんがいるんじゃないのかな？今日は休みなのかな？

などと、気の抜けたことを舞華が周りを見渡している中、才人の運転によるパジェロ？は進んでいく。

今日は召喚の儀式があるため、召喚した生き物によっては生徒や先生が出たり入ったりすることが多く、場合によっては大型の生き物を世話をする施設・・・馬小屋やらそうだったものだが、それらの対応に学院で雇っている平民の使用人が駆り出されることも多く、

その使用人に衛士も含まれており、今日もそうだった日だった。そのため、夜の門限まで、ここに人が来ることはなかったのだ。衛士たちというかそれらを管理する学院の事務部門の貴族達は学生達はともかく、トライアングルやスクエアといった上級メイジがごろごろしている学院に対して、不貞をたくらむ者がいるという考えは、この頃は想像すら出来なかったのだ。

「どこへ向かったらいい？」

「馬小屋へ」荷物を先に下ろさないと駄目だろう？荷下ろしの場所だよ？」……」

「先に荷物を下ろして、その後で車は元に戻ってくるからな」

「じゃ、じゃあ、そこに見えてる建物よ」

「判ったよ」

ルイズさんが寮と行った建物の入り口につけると荷物を車とトレラーから降ろし、お兄ちゃんがルイズさんに場所を聞いて荷物を持ち込んだ。私は自分の荷物をルイズさんの部屋に入れただけ、お兄ちゃんは何度も往復して荷物を部屋に置いていった。

ルイズさんの部屋は、私の常識からするとかなり広いのだが、私達の荷物を入れたのでなんか手狭に感じてしまう。

「じゃ、車は置いてくるな」

疲れたそぶりも見せずにお兄ちゃんが部屋を出て行き下に降りて行

った。

私達を乗せた時に比べると少し乱暴な感じで車が発進した音を聞きながら部屋を見回した。

「広いお部屋ですね？これは一人部屋なんですか？」

私はルイズさんに質問した。

「そうよ、でも荷物が増えたから少し手狭になったわね」

「ごめんなさい」

私は謝り、続けて部屋の隅に置いてある藁束をみながら尋ねた。

「今日から私たちもここに住むのですか？」

ルイズもつられて藁束を見ながら、

「へ、平民が出てくるなんて思わなかったもんね。それもふ、二人だし」

いったきり黙りこんで考え込み始めたルイズに舞華が「まあ、考えても始まらないですから、お茶でも飲んでお兄ちゃんが来るのを待ちましょうか？」

「そ、そうね」

私は、お兄ちゃんが運んできた荷物の中からお茶を入れる道具を出し始めた。

キャンプ道具を使って水筒に入っていた水でお湯を沸かし、ディオンで作り方を覚えたお菓子と一緒に、ティーポットにお茶を淹れて4人分のお茶を作ってルイズさんと私の分を出した。

「どうぞ」

お菓子はディオンのエメリーさんから教えてもらったもので、結構皆に評判のいいパイだ。

「あら、美味しいじゃないの、舞華だっけ？お店でもやってたの？」

「ギルドに所属していた冒険者ですよ、皆で旅をしながら、色々な依頼を受けたり傭兵みたいな事をやってみました」

「舞華みたいななのでも傭兵できるの？」

「あはは、見えないですよね。（汗）」

「・・・二人は違う世界の人間なの？」

ルイズさんが問いかける。

「さっきからいつてるとおり、さっきみたドラゴンに乗ってもたどり着けない遠い世界に住んでたんです」

「遠い世界って『東方』の『ロバ・アル・カリイエ』じゃないの？」

「う、うーん、そんなところは知らないですね。それに東に向かうとすべて東方ですし」

「な、なによその言い方、貴族を馬鹿にしてるの！」

「あ、いえそういつつもりじゃないんです。私たちの住んでいたところは1000年くらい前に西の方の人から東の端、極東といわれてましたから」

「じゃ、やっぱり東方じゃない」

なんか勝ち誇ったようにルイズさんが言う。

・
・
・
・

「おまたせ。お、良い匂いだ、エメリーさんに教えてもらったパイ？残ってる？」

お兄ちゃんがそういった話をしているところで戻ってきました。

「お兄ちゃんの方は別に取り分けて有るわ。お茶をもう一度入れるから、少し待ってね」

「ありがとう」

そついいながら壁際に体を持たせながら返事をする。

「あ、お兄ちゃんここに座って、疲れてるでしょ？」

「そんなに疲れてないよ。舞華が座ってればいいよ」

「さて、今後のことだけど取敢えず魔法の授業だっけ？出られるようにしてってくれよ、それと文字も教えてもらわないとな」

「「授業？」」

お兄ちゃんがいきなり言い出す。授業に出ることは決定事項のようだ。

「そうそう、この魔法のことがわからないと帰ることも出来ないだろうからな」

「さっき戻る時に見かけたんだけど、文字が俺達が知っている、日本語やエルモア・アデンの文字でもないんだ」

「だから覚えるの？」

「そうそう」

「何であんたたち、今から帰る話してるのよ！」

「なんでって、黙ってつれてこられたし、な？」

私は黙って頷いた。

そうなのだ、彼らは私と同じくらいの年齢に見える。平民なのに

学校に通っているという話は信じられないが、そういえば人出のいる仕事だと仕事に就く人を集めて、集中的に仕事のことを教えるところがある。と聞いて学校みたいだと思った事があったのを思い出した。そういう学校なんだろうと思ひ、質問した。

「どんなことを習っていたの？」

どうだ、これで彼らの素性がわかる。たぶん商人ではないかと思つた。商人達も子弟達に教育を施すことを思い出してきたからだ。

「えつと、国語に数学、化学、物理、社会、歴史に英語？」

「それに家庭科もあと音楽、美術に保健体育かな？」

「そういえばそういうのあつたよな」

お兄ちゃんが忘れてた、という顔をして相づちをうつ。

歴史、美術に音楽だと？わからない言葉もあつたけどそれって、貴族が受けるべき教育の一つであるし、彼らの国は平民に貴族教育をするの？そういえば商人の中にも金持ちは貴族的な教育を・・・ゲルマニアの平民が貴族の地位を金で買う話があつたけど・・・。

「歴史とか美術とか音楽を習うの？」

「ああ、普通は受験に関係ないから美術とか音楽は、俺は寝てたけどな」

「お兄ちゃん！」

サボりの話はさすがに舞華は恥ずかしかったらしい。

「舞華は楽器の演奏も出来るんだぜ。ギターとかヴァイオリンだけどな」

お兄ちゃんが話を逸らし始めた。もう。

「えっ、演奏も出来るの？」

「ピアノも弾けるよ。今度、機会があればやってみますね。でもあまり上手くないから」

「後、化学、物理って何？」

「どういえばいいのかな？化学は物がどういう風にできているのか、こんな性質のものを作るにはどうすればいいのか？というようなことを勉強するんだ」

「簡単に言っと練金ね。じゃ物理は？」

「簡単に言っと力を調べる学問かな？」

「力？なにそれ？」

「例えば空を飛ぶのにどうすればいいのか？海に浮かんだ船はどういう形が効率がいいか？とかさっきの車だと乗っている人が振動を受けると痛いからどうすれば痛くならないか？とかそういうことを調べる学問だよ」

「それに橋とか建物を壊れないように建てるとかもありますよ」

舞華のフォローが入る。

「そんな魔法で固定化とか強化をすればいいじゃない」

「えつと、だから俺たちのところでは魔法がないんだ。舞華はここと多分違うだろうけど魔法を使えるようになったけどな」

「えつ、舞華は魔法が使えるの？」

「使えるようにしてもらったんだ。ここに来る前に。俺は出来ないけどな」

「どついうことよ？」

「元々俺たちは魔法がなかった世界で生活していたんだ。そこからルイズの魔法でこっちに召喚されたときに、・・・ルイズ、お前の魔法、いろいろ迷惑かけているんだぞ」

「な、何よ、どついうことなのよ」

「俺たちだけでなくほかの世界の人を巻き込んだんだよ、で、その人は魔法が使えたんだ。それで、舞華が使えそうだって、教えてくれたんだ。ここに来る前に別の世界に飛ばされてな」

「じゃ、あんたは？」

「俺は素質無いみたいだな。教えてもらえなかったよ」

「あんた、魔法が使えないって、悔しくないの？」

「だって俺たち元々使えなかったし、死にたくなかったから舞華は覚えたんだし、俺は別の、剣を使う方法を覚えたからな。問題ないよ」

「そ、そういう問題なの？」

なんかルイズががっくりきている。

「使えても元の世界に戻ったら意味ないから、舞華も魔法を別に自慢するつもりないし、というか、元の世界だと魔法は使わないと思うよ」

「な、なんでよ？」

「これみてくれる？」

俺は持ってきたノートパソコンを見せた。

「なにこれ、きれいな絵が描いてあるのね」

「絵じゃないんだけどね、でこれで」

「二人とももつと寄ってみて」

俺はデジカメでルイズと舞華を写すとデータカードをパソコンに差し込んだ。

「なになに？え、これって私？今の箱みたいなのやつで何をしたの？」

ルイズが驚いている。

「これは俺のところの科学技術で出来たものなんだ。デジカメ、デジタルカメラっていうんだけどわざわざ絵で描かなくても、俺のところはちよつとしたお金があれば誰でもこんなことができるんだ」

「でね、ここ三階にあるだろう？建物自体はもつと高いよね。普通、俺たちのところではエレベーターという機械があつて、それに乗れば好きな階まであがつてきてくれるんだ。もちろん降りることも出来るよ」

「それで、こういつた機械は電気というもので動くんだけど、電気さえあれば誰でも使えるんだ。さつき乗ってきた車、馬車じゃなくて、あれは電気じゃなくて、油の一種で動くんだけど、好きなのところに移動できるんだ。あれで大体300キロメートルくらい移動できるんだ」

「俺たちのところは魔法がないから誰でもちよつと努力すれば誰でもあいつたものを使うことが出来るし、仕事で作る人、原理を研究してもつと便利にしたりする人がいるんだ」

「俺たちは学校でそういつた仕事に就くための基礎を教えてもらつてるんだよ。だから舞華が魔法を使えるということはそれを必要としないということだけど、だけど、魔法を使う事はみんなと一緒に仕事が出来ないということになるんだ」

「なんか纏まらないし、突っ込みどころが満載なんだけど、ルイズの言う平民ばかりの世界だから逆に魔法なんかあつても使うことは殆どないだろうし、使わなくても誰も困らないからね」

「で、でも戦争とかあったらどうするのよ、平民は貴族に絶対勝てないわよ」

「さつきもいったように、ここに来る前に、別の世界にいたんだ、ルイズの魔法で召還されたんだけど、その魔法が暴走したのかな？　そういうわけで別の世界の力で二つの世界にも召還されたんだ」

「その時に舞華は魔法を覚えて、俺は剣による戦いを覚えたんだけど、もう一つの戦い方を覚えたんだ。使うのは俺達の世界の武器だけどな」

「なによ、もう一つの戦い方って」

「銃なんだ」

「銃？　そりゃ当たればだけど、一回撃つと次撃てないでしょ？　その間に魔法撃たれて終わりよ」

「やっぱりルイズの世界はそうなんだよな。今日はこの後、学園長にも会うんだらう？　なら、明日その証拠を見せるよ」

「それと使い魔の契約魔法がかかっているみたいだから、ルイズが卒業するまでは使い魔ってやつをやっつけてやるよ。でもそれが終わったら俺達は元の世界に戻る方法を探すよ」

「何勝手に決めてるのよー！」

「だって俺たちは別の世界で育ってきたんだ、今からそんな扱いをされるこの世界で生活する気はないぞ」

「うっうっうっ……」

なんかお兄ちゃんとルイズさんの雰囲気微妙になってきたところで、扉をノックする音がして、二人の話が中断しました。

「ミス・ヴァリエール、学園長がお呼びです」

緑色の髪の毛の、キャリアウーマンみたいなイメージの人だ。後であの人は学園長の秘書をしていると聞きました。そういえばお腹すいたなあ、結構いい時間がたってるし。そう思いながら、女の人の案内でお兄ちゃんとルイズさんと私の四人で学園長室へ向かっていききました。

10・召喚・2（後書き）

召喚されてのゴタゴタ編二話目です。

うまく話がまとまらない。

頭の中で考えていることを文字として書きだすのは本当に難しく思います。

誤字脱字など有りましたらご指摘お願いします。

11・召喚・3(前書き)

才人と舞華の冒険が始まりますがしばらくは原作準拠です。

誤字脱字の訂正です

11・召喚 - 3

「失礼します」

ルイズが扉の前で中へ声をかけ三人で学院長室へ入って行くところだが、

「お待ちください、呼ばれたのはミス・ヴァリエールだけです。貴族でもないあなた方を学院長室へ入れるわけには参りません」

先ほどルイズを呼びにきた女性、秘書か何かのようだが。

「合わせて貰える様にお願ひしたのは俺等の方なただけど？」

「何をおっしゃいますか？貴族でもない貴方達に・・・」

「ミス・ロングビル、構わんよ、中へ入れてあげなさい」

「え、しかし・・・」

「許可が出てるようなので・・・」

そついいながら俺と舞華は中へ、女性を押し退けるように入っていた。

女性は俺達に啞然とした風に見やりながら体を避けて見やっていた。

「ミス・ロングビル暫くは誰もいれんようにな」

「はい、オールド・オスマン」

彼女の名前はロングビルというようだ、ロングビルさんが出て行く
とオールド・オスマンと呼ばれた学院長は俺達を見ながら杖を振り
ながらなにか呟いたようだった。

「これでよし、さて、わしの名はオスマンという。人はオールド・
オスマンというがな」

「俺は平賀才人といいます。こつちが舞華、俺の妹です」

「話はミスタ・コルベールから聞いとるよ」

「なんか、呼び出されて使い魔とかいきなり奴隷扱いなんです
が、周りを見ると動物が使い魔で、俺達は人間なんで同じように扱
われるのは困るんですが」

「人が使い魔として呼び出されるなんぞ初めてでな、ミスタ・コル
ベールから聞いたときも驚いたぞ」

なんか淡々と驚いてもいないような、ごく当たり前のことを確認し
ているような言い方でオスマンと呼ばれる院長は語った。

「困ったことに召喚の呪文は一方通行みたいで戻れそうも無い様
なんですが、であれば責任を持って俺達のことに対応して欲しい」

「ちよつとあんた、何平民が勝手なこと言ってるのよ」

「魔法が使えるのが貴族で使えないのが平民なのかな？ルイズの話
を聞いているとそういう風に受け取れるんだけど？」

「当たり前じゃない」

「まあまあ、ミス・ヴァリエール。まあ必ずしもそうとは言いきれないんじゃないかな」

「なら、魔法が使えるれば俺達の待遇は改善してもらえますか？」

俺はルイズのことは無視してオールド・オスマンに向かって話を続けた。

「魔法を使えるのか？」

「いえ、俺は使えないんですけど、舞華は色々あって使えるんですよ」

「君は魔法が使えるのかな？」

「え、えっと、少しだけですけど・・・」

なんかオールド・オスマンとルイズに注目されてきよどってるよ。

「何か使ってみなさい」

「えっと、舞華の魔法は皆みたいに空を飛んだり出来ないんだけど」

「それはコモンでしょ、系統魔法は？」

なんかルイズが必死っぽく見えるな？

「えつと、系統魔法って・・・？」

「ほっほっほっ、系統魔法とは水・火・土・風に連なる魔法じゃ、お前さん所は違っているのなの？」

「『水』なら『アイスボルト』は？」

俺は舞華に言った。

「えつと、どこに？」

「俺に向けて使えばいいよ。」俺はポツケから盾を取り出し少し離れて『プロテクション・オブ・ルーン』を唱えた。舞華のアイスボルトは結構地味に利くからな。

何もないところから盾を出したように見え、オールド・オスマンとルイズの二人は驚いていたようだったが気にせず構えた。

「む？」

そして、オールド・オスマンは俺のスキルに反応したようだった。

「いきます」

舞華は二人が俺に気を取られている隙に取出した『ダイナスティ・ファントム』を構えて呪文を唱え、俺に向かって『アイスボルト』を放った。

「ヤッ！」

「ウインディアイシクル！」

ルイズが驚いた風に叫んだ。

俺は舞華の魔法を盾で受け止めた。しかし、魔法は俺の体を包み、体全体を氷で囲んだ。それを気合で盾を振ることで吹飛ばす。

「ふう、相変わらず舞華の魔法はすごいな」

俺がそう言つと舞華は照れたように首をすくめた。

「これは俺達のところでは初歩の水属性の攻撃魔法です。舞華はどちらかというと治療とか補助系の魔法のほうが得意だったんですよ」

「ほう、治療に補助かろう？治療は想像付くが補助とはどういったものかろう？」

「治療は・・・」

俺は舞華から『ダイナスティ・ファントム』を借りると左手のひらに刃で傷をつけた。剣が手のひらを貫通する。かなり痛い但我慢する。

『ダイナスティ・ファントム』を握った時に『ダイナスティ・ファントム』のことが改めて頭の中に浮かんできた。

サイトは気づかなかったが左手の甲の紋章がうつすらと光っていた。オールド・オスマンはそのことに気がついていていた。

「ひい・・・」

ルイズが怯えたようにこっちを見ている。

舞華に『ダイナスティ・ファントム』を返すと舞華はヒールを唱えた。

俺の周りに光の柱が立つ。光が消えた頃には手のひらの傷がなくなっていた。

そして流した血痕だけが残った。

「ほう……」

オールド・オスマンが珍しい物を見たように感嘆の声をあげ、目を見開いて見ていた。

「その剣を見せてもらえんかのう？」

「どっぞ」

丁寧にナイフの柄をオールド・オスマンのほうへ向け舞華は手渡した。

「ほう、これは……!」

おそらくは『ダイナスティ・ファントム』の持つ、魔力と攻撃力上昇効果に驚いているようだった。

「ところで補助魔法とはどんなものじゃな？」

『ダイナスティ・ファントム』を返しながらオールド・オスマンは

舞華に尋ねた。

舞華はオールド・オスマンへ『ブレス・ザ ソウル』（魔力増幅）
『ウインド・ウォーク』（移動速度向上）を唱えた。同じようにル
イズに対しても唱えた。

「ほう！」

「ええ〜！」

二人とも効果に驚いているようだった。

「効果はしばらくしか持ちませんが」

舞華はそういつて『ダイナスティ・ファントム』を片付けた。

俺達は二人がどういった事になったのか、爆発により親父たちが死んだだろうという事。コンテナのことや幽香さんの結界のことなどは話さずに、エルモア・アデンで舞華が魔法を俺が主に剣で戦うスキル《技》を覚えたことを話した。

「ふむ、ミスタ・ヒラガは魔法は使えんのじゃな？」

「俺はスキルを覚えたけど、これはエルモア・アデンでは魔法ではないと」

「なるほどのう」

「確かにミス・ヒラガは魔法を、それも平民のメイジではまずいな
いであるうトライアングルクラスの魔法じゃったしのう」

「あのう、トライアングルってなんですか？」

「こっちの魔法のランクのことじゃ。ドット、ライン、トライア
ングル、スクウエアと四段階で魔法の強さを表しておるんじゃ」

「先ほど言った『系統』の足せる数の事でもあるんじゃ。例えば風
の系統であれば『風』一つで『ドット』、それに『風』でも『水』
でもいいがもう一つの系統を足して『ライン』そういう風に足して
いって『トライアングル』、『スクウエア』となるんじゃ」

「なるほど、それで舞華はこちらではトライアングルクラスなんで
すね」

「ミス・ヒラガが使った『アイスボルト』は我々が使う『ウィンデ
イアイシクル』に、よく似ているのじゃよ」

「それでじゃ、『ウィンデイアイシクル』は『水・風・風』を足し
たトライアングルスペルなのじゃよ。もちろんその上のスクウエア
になればその上の威力の上がった『ウィンデイアイシクル』を使え
るようになるがの」

「へえ」

舞華が驚いたようにオスマン院長の話の聞いている。

「さて、ミス・ヒラガはメイジだがミスタ・ヒラガはどうすのじゃ？」

多分魔法使いのふりをするかということなんだろうな、なら答えは・

・

「俺は魔法が使えませんから、平民でいいですよ」

「構わんのか？マジックアイテムも有るようだしスキルでごまかすことも出来ると思うのじゃが？」

「嘘はすぐばれますよ。それより俺達の待遇を決めて欲しいのですが」

「そうじゃのう・・・少し待ってくれるかのう？」

「はい、構いませんが？」

オスマン院長がミス・ロングビルを呼ぶと、ミスタ・コルベール、俺達を召喚した時の引率の先生だ、を呼ぶように命じた。

暫くして、ミスタ・コルベールがやってきた。

「お呼びですか？オールド・オスマン」

ミスタ・コルベールは院長へ挨拶を済ますと俺達のほうへ向き直った。

「ふむ、ミス・ヴァリエールにミスタ・ヒラガ、ミス・ヒラガがいるという事は使い魔のことですか？」

「そういうことじゃ、実はミス・ヒラガはメイジじゃ」

「な、なんですと!?!」

「!」

コルベール先生とロングビルさんが驚いている。

「で、系統は水と風のトライアングルクラスじゃ、ただ二人のいた所はわし等とは魔法と系統に少し違いがあつてな厳密にトライアングルとは言えんのじゃ」

「なるほど、それでどういうことになるんでしょう?」

「うむ、呼び出したのはミス・ヒラガだそうじゃ、ミス・ヒラガは巻き込まれたらしい。同時に彼らのご両親なのじゃが、その際に死亡しているらしい、らしいというのは、ここにいるもんで確認が出来ないということじゃ」

「なんと!では、どうするのですか?」

「規則とはいえ彼らを召喚したのはミス・ヴァリエールで、そうさせたのはわしらじゃ。彼らの生活に責任が有る。しかも違う国のメイジじゃ。一歩間違えれば国同士の政治的な問題に、下手をすると戦争になりかねん。幸い彼らはここに残ってミス・ヴァリエールの使い魔をするということじゃ。その間の生活の面倒はわしらで責任もたんとな」

「彼らの生活費はミス・ヴァリエールとわしの給金からだそう。ミ

ス・ヴァリエールは公爵家とはいえ学生の身分で二人の面倒を見るわけにはいかんからのう。実家へ事情を説明した手紙を出してもら
う」

「二人はミス・ヴァリエールの隣の部屋が空いているのでそこで暮
らしてもらおう。ただ、ミスタ・ヒラガは剣士なのじゃ」

「それはどういう？」

「彼らの世界ではメイジと剣士は同一の地位に有ることじゃ、
彼はトライアングルのミス・ヒラガのウィンディアイシクルを無傷
で受けたよ」

「それは・・・」

「そう、彼の国ではトライアングルであっても絶対に強者というわ
けではないということじゃ。ハルケギニアではメイジ殺しであろう
とも平民は平民じゃが、彼の国では実力があれば貴族にも王にも
なれるそうじゃ」

「なんと！」

「じゃがここはハルケギニア、かの国のようにはいかんと説明はし
たが彼は剣士だと、な」

「なるほど」

「そして、彼らはかの国では学生じゃった、ということでもミス・ロ
ングビル」

「はい？」

「彼らを明日から学生として、外国からの留学生と同じ扱いということにするからの」

「はい、解りました」

「では、ミス・ロングビルは手続きや部屋の準備をお願いする。これが書類じゃな」

いつの間にか手紙のような物を書いていた院長はそれをロングビルさんへ渡すとロングビルさんはそれを手に部屋を出て行った。

「ミスタ・ヒラガ、左手を見せてもらえますか？ミス・ヴァリエールの属性と専門を調べなければならんです」

「こんなもんで解るんですか？」

俺はそういいながら左手の甲を見せる。

「これは珍しい紋章ですね」

コルベール先生はそう言いながらメモを取っていく。

後で自分達に当てられた部屋に戻った時、舞華がその紋章から出ている魔法は、補助魔法に似ているといったがその効果は不明だった。

暫くしてロングビルさんが戻ってきて部屋の準備が出来たことを伝えてきた。色々不足しているが取敢えずベッドと机だけは二人分有るそうだ。

それと部屋は扉でルイズの部屋につながっている。これは一応俺がルイズの使い魔ということであらう風にして有るということだ。

俺達三人は院長室を後にした。

「それにしても学生でトライアングルですか」

「いや、ミス・ヒラガはスクウェアクラスの力がありそうじゃな」

「まさか？」

「いや、彼女は兄に魔法を撃つのでどうも手加減した節が有るんじゃない」

「本当ですか？」

「気になるのはコモンマジックが使えないということじゃ」

「コモンマジックは四系統魔法でも精霊魔法でもどちらの使い手でも使える魔法じゃからの」

「と、いうことは・・・」

「本当に別の世界から来たんじゃない？」

「コルベール君、ミス・ロングビル、この事はわしら以外には口外せぬようにな。他国と下手に政治的な問題が発生すれば、事は学院や公爵家だけの問題にとどまらんの。」

「わかりました。オールドオスマン。」

「しかし、なぜミス・ヴァリエールが彼等を召還したんでしょうか？」

「さあな、それこそ始祖のみぞ知る。というやつじゃろう。」

「はあ……。」

部屋に戻ったルイズは終始不機嫌だった。

どうもルイズはサモンサーヴァントで自分の使い魔が出来たと思っただけで、俺達は自分の部屋を出てルイズの部屋で使い魔が何をするのか聞きに来ているのだから、なんだか取りつくしまもない。

「ルイズさんどうかしました？」

舞華がたずねる。

「うううう」

なんだか変な・・・なんかあったのか？

「どうしたんだ？俺は一応お前の使い魔やるんだが何していいのかわからんのだが？」

「実家に手紙送らなきゃいけなくなったからよ！なんて書けばいいのかわからないし、それに・・・」

「それに？」

「もう、いい！」

「？」

ルイズは学院長室でのやり取りで、才人たちの親を死なすきつけを作ったことを初めて知り、さすがに使い魔の親を殺すことになったかもしれないとは、手紙に書きずらく悩んでいたのだが、才人たちはそこらへんについては事情がわかるに従い、エルモア・アデソンの出来事から人の死についてある程度理性で抑える（見た目だけ）ことが出来るようになっていたため若干ギャップがあったようだった。

おまけに兄はメイジ殺しで、トライアングルクラスの魔法を受けても平気で、妹はトライアングルクラスのメイジで、ってエリートじゃないの！オールドオスマンが言ったように国際問題になったらどうしよう・・・

「つ、使い魔の役目ね」

「まず、使い魔は主人の目となり、耳となる能力を与えられるわ」

「つまり、使い魔の見た物は、主人も見ることが出来るのよ」

「できるの？」

「無理みたいね。私、何も見えないもん！」

「ついてないなあ」

「それから、使い魔は主人の望む物を見つけてくるのよ。例えば秘薬とかね」

「秘薬って何？」

「特定の魔法を使う時に使用する触媒よ。硫黄とか、コケとか……」

「あんだじゃ無理みたいね」

「あ、でも私なら解るかも？」

「……そう」

「そして、これが一番なんだけど……、使い魔は、主人を守る存在であるのよ！その能力で主人を敵から守るのが一番の役目！」

「まあ、それは出来ると思うけど、学生に敵ねえ？」

「まあ、確かにそうね・・・」

「部屋の掃除とか洗濯なら手伝えますよ」

舞華が助け船を出すように横から言った。

「そうだな、養ってもらってもんな」

「つ、つ、使い魔に掃除と洗濯・・・」

ルイズがあらかじめかさまにがつくり来ている。まあ、確かにこの世界ならそれっぽいやつの方が箔が付くだろっしな。

「お兄ちゃん、お腹すいたね」

舞華がそういって自分の腕時計を見た。

「そうだな、簡単な物しか持って来てないけど、いいか？」

「うん」

舞華が頷いて準備しようと立ち上がった。

「座ってていいよ、俺がやる。ルイズも食べる？俺の国の簡単な食事だけどまあまあ味だと思うよ」

「う、うん。食べるって言うなら食べてやるわよ」

「少し待っててな」

俺は隣の自分達の部屋からボイルするだけで食べられるハンバーグと缶詰のパン、それにデザート用のフルーツケーキ、紅茶を準備して、水筒とお湯を沸かすためのキャンプ用コンロと鍋、コレールの皿とコップを持ってルイズの部屋にはいった。

「何、その荷物」

「仕方ないだろう、食事するのにお湯もいるし、ここ電子レンジもオーブンもないだろうし」

お湯を沸かし、皿を並べて、暫くしてハンバーグを湯煎にかけ元々ルイズの部屋にあったポットを使って紅茶を作る。缶のプルトップを引張り中からパンを取出し皿にあける。

フルーツケーキを別の皿に取分ける。ルイズはそれを興味深そうに見ている。暫くして腕時計を見ていい時間だと思ったので、ハンバーグを取出し皿によそっていく。食器をそれぞれに並べていった。

「できたぞ、ハンバーグにつけあわせがないけどな」

「いただきます」

舞華が手を合わせて食べ始める。

「あんとんとはこうやって食事を作ってるの？」

「いや、これはどちらかというと非常用に近いかな？」

「ちゃんとマナーも知っているのね」

「これはここに来る前に、王様やらなんやらと一緒にやったこともあったからな、それなりに覚えた。個人的には箸で食べるほうが好きなんだけど」

「はし？」

「俺の国のナイフやフォークの代わりにするものだよ。俺の国は食事のマナーも違うからな。国によっても色々な流儀があったから」

「そうなの？」

「ここもそうだろう？宗教で食べる物が決められてたり、場所によっては食料そのものが手に入る物と入らない物もあるし、水が簡単に手に入るところもあれば、貴重などころもあるだろうし」

「そんなところないわよ！あんたんとはどれだけ国が有るのよ！」

「130だっけ？」

「地域を入れると160近くになったかも？」

「そっか」

「130とか160って何よー！」

「国の数だよ、それに国ではないけど国連やなんかで保護や管理してるところとかもあったし」

「国連つて?」

「国際連盟の略称。国の代表が集まって国同士の利害を調整したりするところ」

「そ、そうなんだ」

本当に私達のハルケギニアとは違うところみたい、東方つてそんなに沢山国が有るんだ、知らなかった。

その時私はまだ彼らがどういう存在かわかっていなかった。

「あんたの生まれた国つてどんなところ?」

「どつて、人口が一億二千万人ほどいて、資源がなくて、工業国?」

「経済規模は大体世界二位くらいだっけ?」

舞華が補足してくれる。

「一億二千万人?一国だけで?」

「俺達の世界には四十八億人ほどいたんだよ」

「それと・・・」

「それと?」

舞華とルイズが不思議そうに聞き返す。

それを俺は窓を指差し、

「月は一つだな」

「え、ええ」

舞華が驚いた声を出した。

「俺もさっき気がついたよ」

「ここって月が二つ有るんだな」

「あ、あ、当たり前じゃない。あんたんところは違っつて言うの？」

「人の話を聞かないんだな、さっき言ったら、月は一つだって」

「なによ!」

「少し部屋を片付けたいんだけど、もう戻っていいかな?それと水を汲めるところはあるのか?」

「そ、そんなのメイドに言えばいいじゃない。片付けてくれるわよ」

「俺達はこの貴族じゃないからな。明日にでも聞いてみるよ」

「じゃ、おやすみ」

「おやすみなさい」

そっぴいなながら俺達は食べ終わった皿などを持って自分の部屋に戻った。

「さてと、ベッドはこっちを使うな」

「明日パーティーション出来るようにカーテンか何か持って来ようか？」

「そうだね、でね、お兄ちゃん、ルイズさんの使い魔をするの？」

「やらないと生活できないからね。これからのこと考えると、元の世界に戻るためんどくさい事になりそうだし、暫くはここで生活するのもいいかな？」

「舞華はどうする？戻るように魔法を探すか？」

「戻るつもり無いの？」

「戻ったとして家は魔法やらなんやらで壊れて、親父たちは死んで、おまけにその中心にいたはずの俺達が生きていて、それも昔のままで年をとってないって、なんかめんどくさいことになりそうでな」

「だよね・・・」

舞華が泣きそうな顔をしている。

「巻き込んでごめんな」

俺は舞華の頭をなでて舞華をベッドに座らせ隣に座った。

暫くして二人はそれぞれのベッドで眠りについた。

「おはよう」

「あ、お兄ちゃん、おはよう」

まだ時間は早いが二人は起きだしそれぞれ身支度を始める。

才人はGパンにTシャツそれに青いパーカーを羽織っている。舞華は中学の制服上はセーラー服にひざ上丈のスカート。元々のセーラー服は前後にラウンドした裾を長く出しているのだが、中世に近い感覚を持っていそうなここでは、ファッショ的に駄目だろうからと、以前エルモア・アデンにいるときに仕立て直した裾を短くした上着を着ている。

「さて食事とかどうするんだろう?」

「そつえば聞いていなかったね」

「もう少ししたらルイズに聞いてみようか」

「そつだね」

「そついえば洗濯とかどうするんだろう?」

と、舞華が言い出した。

「さあ？自分達のはいざとなればハウスに行けばいいけど、やっぱりここに来るだけいるほうがいよね？」

「うん。後でルイズさんに聞いてみようか？」

「それより顔を洗いたいし、昨日の食器も片付けたいしな、少し外を見てみようか？」

「はい」

二人で部屋を出て建物の外に出てみた。外に出てみると季節は春らしく少し肌寒く感じた。

建物は五つの塔を中心として周りをそれなりに高い塀に囲まれたそれこそファンタジーに出てくるような構造をしていることがわかった。

「「「きゃっ」「

舞華が建物の角で誰かにぶつかったようだった。

「だいじょうぶか？」

「「「ごめんなさい」「

「何やってんだ、二人とも」

服装からぶつかったのはメイドさんのようだった。

「「うう、ごめんなさい」「」

俺はつい笑い出した。

「二人して同じ事を揃って言わなくても」

「もう・・・」

舞華が膨れている。

「えっと、あなたたちは・・・」

「俺は平賀才人、こっちは舞華。俺の妹なんだ」

「では、ミス・ヴァリエールの使い魔に召喚したという・・・」

「そうなるのかな？君は？」

「あ、え、ごめんなさい、ここのメイドでシエスタといいます」

シエスタと名乗った女性は洗濯籠らしき物を地面に落としていた。それを拾いながら

「えっと、よければ水場とか教えてもらえないかな？ルイズの使い魔をするのに洗濯とかしなきゃいけないみたいでここ初めてだからどこも知らないんだ」

「あ、はい、私でよければ。水場というか洗濯するところはこちら

です」

「籠は持つよ、そんなにあわてなくてもいいよ」

「もうしわけありません」

「そんな同じ平民だし、かしこまらなくていいよ」

「え、でもメイジだって」

「俺は魔法は使えないし、舞華は魔法が使えるけど、貴族でもないし、二人とも魔法の使えない、ただの学生だったんだよね」

「え、そんなことって有るんですか？」

「実際そうだし」

そのやり取りを見ながら舞華がおかしそうに笑っている。

「ここです」

確かに水場というか井戸があり、何人かのメイドさんが洗濯をしている。

「井戸ポンプをつけると楽そうかも？」

舞華が井戸の底を見て言う。

「後で水を汲みに来よう、てかルイズの洗濯物持ってこようか」

「じゃ、私とつて来るね」

「俺が行くよ」

「女の子の下着だよ？」

「そ、そっか、まかせた」

さすがにそこまで思い至らなかった、これでは一歩間違つたと変態さんになるところだった。

舞華が来るまでに水を汲んでおこうと井戸から水を汲んでおいた。力仕事くらいはやっておかないと精神的に舞華に申し訳ないから。ついでにシエスタたちの分も水を汲んであげた。まあ、一応男だし、他人に感謝されるのは悪くないし、などとやっていると思われれば舞華が洗濯籠と食器を入れた籠を持ってやって来た。しまった、食器だけでも持てばよかったかも。

あれこれシエスタ達とおしゃべりしながら自分達の分を含め洗濯を終わらせると干したり畳んだりして部屋へ運ぶところまでシエスタたちがやってくれるというので、ルイズの分をお願いして食器だけを持って部屋へ戻ることにした。しかし、春先とはいえあの冷たい水で洗濯つてメイドさん達つて大変だな、と別のことも思っていた。

部屋に自分達の洗濯物を干して結構いい時間になったので、ルイズを起こしに舞華が向かっていった。

なんか俺が起こさなかったことでぶつぶつ文句を言っていたようだった。貴族つて男が寝ている女の部屋に入って平気なのだろうか？不思議な考え方してると思ったが胸にしまっておいた。

ルイズの部屋から三人が出ると、三つ並んでいた部屋のドアの一つが開いて、中から燃えるような赤い髪の女の子が現れた。舞華やルイズより背が高く、才人と大して変わらない身長だ。年齢の割には色気が有るがデルフィナやシーリの方が大人の色気だよな、清楚さならナンヌだよな、などと自分の嫁のことを考えている。彫りが深い顔に、突き出たバスとはメロンのようであるがデルフィナやシーリの方はスイカだよななどとそれこそ聞かれたらとんでもないことになりそうなことを思いながら彼女のほうを見ていた。

彼女はルイズのほうを見ると、にやつと笑った。

「おはようルイズ」

ルイズは顔をしかめると、いやそうに挨拶を返した。

「おはよう。キュルケ」

「あなたの使い魔って、それ？」

才人たちを指差して、バカにした口調で言った。

やっぱりこの世界では平民と呼ばれる物はそんな物なんだな、と二人して思っていた。

「そうよ」

「あつはっは！ほんとに人間なのね！すごいじゃない！」

才人は、悪かったな！と心の中で毒づくも、あれ？よく考えたら

舞華はメイジ扱いだったよな？そうすると俺はどういう扱いになるんだろ？よく考えたら俺が平民で舞華がメイジだとなんか不都合有るかな？などと別のことを重い、考え始めた。

「『サモン・サーヴァント』で、平民よんじゃうなんて、あなたらしいわ。さすがはゼロのルイズ」

ルイズの白い頬に、さっと朱がさした。

「うるさいわね」

「あたしも昨日、使い魔を召喚したのよ。誰かさんと違って、一発で呪文成功よ」

「あっそ」

「どうせ使い魔にするなら、こつこつのがいいわよねえ。フレイム」

キュルケは勝ち誇った声で使い魔を呼んだ。キュルケの部屋からのつそりと、真つ赤な人より一回りほど大きなトカゲが現れた。むんとした熱気が、サイトを襲う。

「へえ、大きなサラマンダーだ」

「大きいね」

「おっほっほ！もしかしてあなた達、この大きさの火トカゲを見るのは初めて？」

「小さいのは何度もな」

舞華も頷く。

「使い魔だと人は襲わないのか？」

「あたしが命令しない限り、襲ったりしないから」

「『フレイム・サラマンダー』と同じで熱気はあるけど、それほど熱くないな」

「これってサラマンダー？」

舞華が首をかしげながら聞いてきた。

「そうよー。火トカゲよー。見て。この尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ？ブランド物よー。好事家に見せたら値段なんかつかないわよ？」

「そりゃよかつたわね」

「素敵でしょ。あたしの属性にぴったり」

「あんた『火』属性だもんね」

「ええ。微熱のキュルケですもの。ささやかに燃える情熱は微熱。でも、男の子はそれでイチコロなのですわ。あなたと違ってね？」

キュルケは得意げに胸を張った。ルイズも負けじと胸を張り返すが、悲しいかな、ポリウムが違いすぎる。

舞華がそれを見て首を折り曲げて自分の胸をじっと見ている。

ルイズはそれでもぐつとキュルケを睨みつけた。かなりの負けず嫌いのようだ。

キュルケはにつこりと笑った。余裕の態度だった。それから才人たちを見つめる。

「あなた、お名前は？」

「俺は平賀才人、こっちは舞華。俺の妹だ」

「ヒラガサイトにマイカ？変な名前。それに平民なのに家名が有るのね」

「でも、肉は癖があつて美味しくないって、ステーキよりは香辛料を沢山使つてシチューとかの方が美味しいって」

舞華がフレイムと呼ばれたサラマンダーへ向かつてそう言つと、

「そつえば、ジョナスさんはステーキにするなら、フローティング アイが美味しいっていつてたな」

俺も昔手伝つた料理の材料集めのことを思い出して舞華に相槌を打つた。

「ちよ、ちよつと、あなた達、火トカゲ食べたこと有るの？」

「昔、食う物がなかったときに『サラマンダー・ラキン』や『ローウィン』をちよつとね」

「あれよりは美味しそうね」

舞華が付け加える。

「ちよ、ちよつと、フレイムは食べ物じゃないわよ」

「行きましょう、フレイム」

そういうと気持ち早足にキュルケは去っていった。ちよちよこと、大柄な体に似合わないかわいい動きで、サラマンダーがその後を追う。

「なんなの？あんだ達のところだとサラマンダーは食べる者なの？」

「いや、仲間を助けに神殿に入ったらちよつとモンスターの大量と鉢合わせして、暫く出られなかったんだ。その時に食べる物がなくてね」

「だけどこのサラマンダーには精霊の力は少ないわ」

「だな、素手で何とかなりそう」

「ちよ、ちよつとあれを素手で？出来るわけないでしょ！」

「まあ、あいつだけだったらってことだよ。神殿の時は50はいた

よね？」

「サラマンダーの時は、骨とビホルダーと魔族があと三十位ずついたわ」

「舞華の範囲魔法なければ生きてなかったな。あの時は助かったよ」

「お兄ちゃんが盾になって詠唱時間を作ってくれたからだよ？」

「まあ、食事に行こうか」

「何で、あんたが仕切るのよ！」

この人たちは何なのだろう？ハンイ魔法ってなんだろう？百五十近いモンスターをやっつけたの？お母様でもないのに出来るのかしら？魔法は昨日見たけどまだライアングルクラスってオールド・オスマンが言ってたわ、トライアングルじゃ十匹もいたらあんなの相手には無理。あれより強いって、見てないから嘘ついている？嘘ならもつとつまくつくと思っし。ああ、もう！わからないわ！

「ところであんた達その鞆は何？」

「昨日の話して授業出られるからその道具。筆記具とノートやらパソコンだよ」

舞華が答える。こっそり拳銃と機関銃を持ってきているのは内緒だ。

「本気で受ける気？あんたはまだしも、こっちは魔法を使えないんでしょ？」

「守るのも使い魔の仕事なんだろう？こっちの魔法は知らないからな」

「勝手になさい」

「ところで、彼女の『微熱』は『火属性』の二つ名ってわかったけど、ルイズの『ゼロ』ってなんだ？」

「知らなくていいことよ」

舞華が自分とルイズの胸を見て一言。

「胸？」

「何でそつちななのよ」

「昔、召喚前に言われたこと有るから。お兄ちゃんは胸が大きいほうが好きだからね」

「何で、そんな昔のこと覚えてるんだ！」

いきなりそんな昔の黒歴史をいきなり暴露しなくても、舞華が親父とおふくろの前でどうやってたら胸が大きくなるの？って聞いて二人からえらい目に合わされたんだ。

言ってる間に食堂についた。

「……」

ちなみに食堂は、学園の敷地内の中央に有る一番高い塔に有る。

三列の長机が並んでいて食堂の正面から見て左が最上級生の三年生、ルイズたち二年生は真ん中の列、右の列が一年生でそれぞれマントの色も違うようだった。

食堂の一番奥のロフトの中階部分が先生の食事を取るところのようだ。

ここの学園のメイジたちはこの食堂で食事を取るようだ。

なんか昔あったRPGのイメージイラストのように平成ベースのサイトたちからすると無駄に豪華に見えた。まあ、エルモア・アデンの貴族達も負けていなかったが。

半場、呆れてみている才人達に、ルイズは得意げに指を立て、ルイズが言った。

「トリステイン魔法学院で教えるのは、魔法だけじゃないのよ」

「……」

「メイジはほぼ全員が貴族なの。『貴族は魔法を持ってしてその精神となす』のモットーのもと。貴族足るべき教育を、存分に受けるのよ。だから食堂も、貴族の食卓にふさわしい物でなければならぬのよ」

「無駄をする、ということ?」

「そういう教育を受けていない貴族を集めて促成栽培？」

二人してひどいことを言う。

「な、なんてことというのよ！」

「貴族なら普通、自分の領地や屋敷でやってるんじゃないのか？少なくとも俺の知っている貴族はそうだったな」

「たしか、グレイスさんは集団教育を受けるまでに基本的なことや社交界のことはやっておかなければいけないと言っていました」

「だよな？そういうマナーや立ち振る舞いは、一朝一夕の一夜漬けじゃ恥をかくだけだといって、厳しかったからな」

「あんだ貴族だったの？」

「まさか、生まれは一市民こっちで言う平民だよ」

「ただ、戦場での付き合いに貴族が結構いたからな、やつら律儀だから生死にかかわる義理はきっちり果たさないといけない、って考えだったからそれなりの付き合いがあっただ」

「どづいうこと？」

「前にも言ったとおり、俺と舞華は傭兵をやっていたんだけど、基本どこにも属さない独立系の傭兵なんだ。向うじゃそういうの少ない、普通は血盟や城主の絡みで有る程度どこかの勢力に入っているのが普通なんだ」

「で、俺達はそういった事情で簡単に言うとは盾代わりに使われるんだな。信用無いから」

「当たり前じゃないの、傭兵なんだし」

「だけど、俺達は契約を必ず守った。敗戦のしんがりだって一度や二度じゃない」

「そうやって戦場で信用を作ったんだ。色々な勢力に誘われもしたけど、全て断って独立した勢力としてやっていったんだ」

「すると不思議な物で、どこにも属していないことから逆にもっと大事なことを頼まれたりするようになった。例えば、国を失った王子や皇女を預かるといったな」

「お陰で俺達みたいな生まれも育ちのはっきりしないが、それゆえなのか信用と信頼が国や城主の間で上がっていったんだ、ルイズに昨日見せた魔法剣なんかはその証なんだ」

「金だけじゃ買えない魔法道具も信用だけで手に入れられる。向うでの貴族のマナーやきまりごとみたいなのはそうういつき合いから覚えたんだ。郷に入れば郷に従えってな」

「ふ、ふん、あんたんとこじゃそうかもしれないけどここはトリスタンだからね。ゲルマニアみたいに平民が金で貴族になんかならないんだから」

「別に貴族と付き合いが有るといっただけで貴族じゃないぞ？」

「お兄ちゃん」

「なんだ？」

「この周りにいる人形、魔力で動くみたい。護衛のガーゴイルかな？」

「うーん、そんな力とか有るようには見えないなあ。どこかのメイジが暇つぶしに作った勝手に動く人形って感じだけど？」

「あ、あんたたちね」

ルイズががつくり来ている。

「学院長の話が有るからこの『アルヴィーズの食堂』に入れるんだけど、本来なら一生は入れないんだから、感謝しなさいよ」

「いや、俺はまともな食事が取ればいいんだ、無駄に豪華な食事はないからな。朝は二人で一人分を頂くよ。そう伝えてくれなにか？これじゃ無駄すぎるな」

「なによ、貴族なら当たり前じゃない」

「食事とか無駄にする癖ついていると、いざって時に困るぞ、人間は贅沢にはすぐなれるけど、貧乏には慣れないからな」

「もういいわ、椅子を引いて頂戴、気の利かない使い魔ね」

「ああ、すまん」

「偉大なる始祖プリミルと女王陛下よ。今朝もささやかな糧を我に与えたもう事を感謝します」

周りが祈りの唱和をあげている中で二人は

「「頂きます」」

簡単ないつもの唱和をし食事を始めた。

さすがに言うとおり二人のマナーは貴族の中でも劣ることはなかった。

その二人の様子を興味深く見ているオールド・オスマンとミスタ・コルベール二人は、二人が貴族としての教養が並以上であることに驚いていた。

「あれが平民かね、あの年で覚えるとなると半端ない努力が必要なんだが」

「そうですね、あの年で魔法はトライアングル超級、兄のほうはその魔法を受けて耐えられて、それにあの落ち着いた態度。それに傭兵をやっていたのでしょうか？」

「わしの『ディティクドマジック』でも反応がなかったのう。魔法やなんかで姿や歳をごまかしているということはないと思うが、謎じゃな」

「注意して観察しておくこと」になります。

「そつじやな、よろしくたのむぞ」

12・召喚・4（後書き）

なかなか原作準拠とはいえ話が進みません。予定ではギーシュさんとそろそろ決闘だったのですが。

仕事の関係で更新がそろそろ遅くなりそうです。

感想など有ればよろしくお願いします。

13・学院・1（前書き）

図らずも休暇が取れたので外へ出ようとしたらあいにくの雨、おかげさまで13話目と14話目を投稿できました。
よろしくお願いします。

魔法学院の教室は、まるで石で出来た大学の講義堂のようだった。講義を行う魔法使いの先生が、一番下の段に位置し。階段のように席が続いている。才人達が中に入っていくと。先に教室にやってきた生徒達が一斉に振り向いた。

そしてくすくすと笑い始める。先ほどのキュルケもいた。周りを男子が取り囲んでいた。なるほど、男の子がイチコロというのはホントだったようだ。女王のように祭り上げられている。まああの胸では仕方がない。巨乳はどの世界でも共通言語のようだ。

皆、さまざまな使い魔を連れていた。

サラマンダーにフクロウ、窓の外には巨大な蛇、それにカラスに猫

また一般に架空の生き物だった生き物もいる。

「バシリスクにビホルダー？ 違うなバグベアーか、スキュアまで、初めて見るな」

「ねえ、お兄ちゃん、向うに王蟲^{オム}だ」

「あれは、ナウシカなら大王ヤンマだ、多分メガセンチビートっていう巨大ムカデだね」

「あれ、後で見に行きたいね」

「ナウシカ好きだったもんな」

無駄な会話をしながらルイズが席の一つに座り、その隣に舞華、その隣の通路側に俺が座った。

舞華はまだ周りを珍しそうに見ている。

「先生が来たようだよ」

舞華が教壇の有るほうの入口を見ると中年の女の人が入ってくる
ところだった。

紫色のローブに身を包み、帽子を被っている。ふくよかな頬が、優しい雰囲気を漂わせている。

「映画で見た魔法使いみたい」舞華が呟く。

彼女は教室を見回すと、満足そうに微笑んで言った。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシユブルズ、こうやって春の新学期に、さまざまな使い魔を見るのがとても楽しみなのですよ」

ルイズは俯いた。

「おやおや。変わった使い魔を召喚したんですね。ミス・ヴァリエール」

シユブルズが、サイト達を見てとぼけた声で言つと、教室中がどつと笑いに包まれた。

「ゼロのルイズ！召喚できないからって、その辺歩いていた平民を

連れてくるなよ！」

ルイズは立ち上がった。長い、ブロンドの髪を揺らして、可愛らしく澄んだ声で怒鳴る。

「違うわ！きちんと召喚したもの！こいつらが来ちゃっただけよ！」

「嘘つくな！『サモン・サーヴァント』ができなかったんだらう？」

ゲラゲラと教室中の生徒が笑う。

「ミセス・シユブルーズ！侮辱されました！かぜっぴきのマリコル又がわたしを侮辱したわ！」

握り締めたこぶしで、ルイズは机を叩いた。

「かぜっぴきだと？俺は風上のマリコル又だ！風邪なんか引いてないぞ！」

「あんたのガラガラ声は、まるで風邪も引いているみたいなのよ！」

マリコル又と呼ばれた男子生徒が立ち上がり、ルイズを睨みつける。シユブルーズ先生が手に持った小ぶりの杖を振った。立ち上がった二人は糸の切れた操り人形のように、すくと席に落ちた。

「魔法？」小さな声で舞華に訊ねる。

「うん、どんなのか解らなかったけど」小さな声で舞華が答える。

「お友達をゼロだのかぜっぴきだの呼んではいけません。わかりま

した？」

「ミセス・シュブルーズ。僕のかぜっぴきはただの中傷ですが……」

シュブルーズは厳しい顔をして杖を振った。

「ミスタ・マリコルヌ人の話は聞くものです。その格好で授業を受けなさい」

口に赤い土の様なものを詰められたマリコルヌと呼ばれた生徒は口をふがふがしながら席に座った。

「では、授業を始めますよ」

シュブルーズは杖を振り小石をいくつか教壇の上に置いた。

「私の二つ名は『赤土』。赤土のシュブルーズです。『土』系統の魔法を、これから一年皆さんに講義します。魔法の四大系統はご存知ですね？ミス・ヴァリエール」

「は、はい。ミセス・シュブルーズ。『火』『水』『土』『風』の四つです」

シュブルーズは頷いた。

「今は失われた系統魔法である『虚無』を合わせて……」

シュブルーズの講義が続く、二年生の初めての授業なのだろうに、周りを見るとまじめに受けているようで気の抜けたやつが何人もい

る。だけど、俺達にとって系統立てた魔法の説明は初めて聞くので講義に集中している。舞華はノートにさらさらとペンを走らせている。俺は要点だけを簡単にメモをとる感じで講義を聴くことに集中している。

『土』は金属を作ったり加工したりすることに使うらしい。という事は冶金や窯業に相当する事は魔法で補っているということになる。加工ということは形状を作って、公差や精度のほうはどうやって処理しているんだろうか？聞く事に集中しながらも、メモにはそういった疑問も書き込んでいく。

「今から皆さんには『土』系統の魔法の基本である、『錬金』の魔法を覚えてもらいます。一年生の時に出来るようになった人もいるでしょうが、基本は大事です。もう一度おさらいすることに致します」

シユブルズは、石ころに向かって、手に持った小ぶりの杖を振り上げた。

そして短くルーンを呟くと、石ころが光りだした。

光が収まり、ただの石ころだったそれはピカピカ光る金属に変わっていた。

「ゴゴ、ゴールドですか？ミセス・シユブルズ！」

キュルケが身を乗り出した。

「違います。ただの真鍮です。ゴールドを錬金できるのは『スクエア』クラスのメイジだけです。私はただの・・・」

こほんと、もったいぶった咳をして、シユブルースは言った。

「『トライアングル』ですから・・・」

学院長との話では、ランクに関する『スクエア』や『トライアングル』といった言葉には軽くそんなものと思っていたが、シユブルース先生の話ぶりからするとそこには、それぞれのレベルの間に壁のようにはつきりした区切りが有るんだ。と思った。そして、ただの真鍮、という言葉に疑問を感じた。

親がバイクやら車やらいじくり倒すのが好き（パーツを知合いの金属加工工場で作ってたりもしてた）というのも有ったが、中学の技術家庭の授業で金属の基本的な性質を勉強した。細かいことは忘れたが、銅の合金には青銅、真鍮（黄銅）と呼ばれる物は色々有るが『ただの』真鍮や青銅というのはなかったはずだ。合金である真鍮は用途ごとに材料の割合が色々有り、それによって用途も違っていたはずだった。才人はメモを取ると手を上げた。

「あら、ミス・ヴァリエールの使い魔でしたか？」

「はい、平賀才人と言います。先生に質問がありますがよろしいでしょうか？」

「あんた何勝手に質問なんかしてるのよ！」

「でも、オールド・オスマンからは授業に出ていいといわれているからな」

「あら？なんででしょう？」

「それは何に使うのでしょうか？」

周りがいつせいに笑い出した。真鍮も知らないのかというように。

「静かにしなさい！さて、質問の意味がわかりませんか？」

「えっと、俺のところでは真鍮は色々な物に使われています。例えば……」

そついいながら鞆を探る。鞆には小さなお守り袋くらいの布袋が携帯のストラップのように取り付けてあった。中には五円玉と十円玉が入っている。そこから五円玉を何枚か取出し前に出てシユブルーズに渡しながら

「これは俺のところの貨幣です。割と一般的に有るものだったのですが、これと色が違うので気になったんです」

シユブルーズは五円玉を手に取りじつと見つめっていると、手に持った杖を五円玉にかざすようにして、暫くそのままの姿勢でいた。

「これは、あなたの所の貨幣だと言いましたね。確かに真鍮ですが私のものとは確かに色が違いますね」

「これが鍊金ならスクエアクラスの鍊金だと思っただけですが……確かかミスタ・コルベールによるとあなたの国にはメイジはいないとか、どうやってこれを作ったのでしょうか？」

「少なくともトリステインでは真鍮を貨幣にすることはありません。貨幣として流通するには、作れる人が少なすぎるのです。更に価値

が金に比べると低いですから」

なんか歯切れが悪いな・・・取敢えずここでは真鍮を貨幣なんかには使っていないということか、だけど何に困惑してるのだろう？

この真鍮の貨幣は全部同じ出来あがりになっている。こんな小さい物でも普通の錬金では同じ出来あがりにするのは難しいのに・・・平民がこれだけの物を作れるのでしょうか？相当レベルの高いメイジがいるとしか思えませんね。それに、この表面の彫刻こんなに微細に、しかも刻印にぶれが無い。しかし、魔法で調べた限りでは金属の精製や加工に魔法が使われた跡がない、ということはプレス加工？真鍮とはいえこれだけ精確にプレスするには型も丈夫な物やプレスそのものも速度と力の有るものが必要に。オールド・オスマンとミスタ・コルベールが東方より更に遠い国の出身とおっしゃっていましたがメイジ無しにこれだけの物を作る国が有るのでしょうか？色々聞いてみたいことがあります、取敢えずは授業後にも

- ・
- ・

「珍しい物を見せていただきました、これを作るメイジはトリスティンにはなかなかいないでしょうし、これを貨幣として使うとは、さぞかし金属の加工が優れているのでしょうかね」

答えをもらえないまま俺は席に戻った。

舞華が小さな声で「お兄ちゃん、ひよっとして真鍮は真鍮なのかも？」

「？」

「えっと、真鍮が銅の合金というくりじゃなくて、真鍮という一つの物として有るのかも？」

「混合割合とか無視してること？」

「空気が酸素と窒素の混ざり物じゃなくて『空気』という一つの物としてしか見てないんじゃないかも？」

「メイジ一人一人で真鍮の定義が違う？」

「かも」

「何話してるのよ」ルイズが小さな声で割り込んできた。

「ミス・ヴァリエール！」

「は、はい！」

「授業中の私語は慎みなさい」

「すみません……」

「おしゃべりする暇があるのなら、あなたにやってもらいましょう」

「え？わたし？」

「そうです。ここにある石ころを、望む金属に変えてもらいなさい」
ルイズは困ったようにもじもじして立ち上がらない。

「ミス・ヴァリエール！どうしたのですか？」

シュヴルーズ先生が再び呼びかけると、キュルケが困った声で言った。

「先生」

「なんですか？」

「やめたいほうがいいと思いますが……」

「どうしてですか？」

「危険です」

キュルケは、きっぱりと言った。教室のほとんど全員が頷いた。

「危険？どうしてですか？」

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。でも、彼女が努力家ということは聞いています。さあ、ミス・ヴァリエール。気にしないでやってもらいなさい。失敗を恐れ
ていては、何も出来ませんよ？」

「ルイズ。やめて」

キュルケが蒼白な顔で言った。

しかし、ルイズは立ち上がった。

「やります」

そして、緊張した顔で、つかつかと教壇の前へと歩いていった。

隣に立ったシュヴルーズはにっこりとルイズに笑いかけた。

「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を強く思い浮かべるのです」

こくりと可愛らしく頷いて、ルイズが手に持った杖を振り上げた。

唇をへの字に曲げ、真剣な顔で呪文を唱えようとするルイズはこの世の物とは思えないほどに可愛い。サイトは思わず身を乗り出して見入ってしまう。舞華も同じようだ。

ルイズは目をつむり、短くルーンを唱え、杖を振り下ろす。

その瞬間、机ごと石ころは爆発した。

教室が阿鼻叫喚の大騒ぎになる。

その中で二人は啞然とルイズの様子を見ていた。最も二人が啞然とした理由は別なのだが。

「お兄ちゃん」

才人が振り向くと、舞華が信じられないという顔をしていた。

「ルイズさんの魔法、多分、ルーンの詠唱と魔力の流れが一致していないと思う。先生の魔法と詠唱は一緒なのに、杖に流れる魔力の流れが全然違う」

驚くのはそこなのか？心の中で突っ込みながら舞華の話を聞いていた。

才人は今見た爆発がとんでもない威力があることを知っていた。過去の狩や戦争であいつたものをまともに受けたことが有るからだ。だけど誰も手がちぎれたり大怪我をしていない。運の悪いシユブルーズ先生が気絶しているだけだ。本人はぴんぴんしている。

才人は教壇のほうへ向かいパーカーを脱いで、服がぼろぼろになったルイズに掛ける。拳銃とナイフを吊るしているホルスターが見えるがこの際仕方がない。

シユブルーズ先生が気絶し何人かの生徒がどこかへ連れて行った。その後、どこからかやってきた先生？の指示により授業はシユブルーズ先生が戻るまで自主となり俺たち以外の生徒はいなくなった。ルイズがめちやくちやくにした教室の片付けは、才人と舞華で大方終わらしてしまった。服がぼろぼろになったルイズは先生が何処かへいったあと着替えに行き、ルイズが部屋で着替える間に二人で見合わせて苦笑いすると教室の掃除を始めたからだ。

結局シュヴルーズ先生が目を覚ましてルイズに罰として教室を片付けるように言った時には窓ガラスなど才人たちが備品の置き場を知らないので手を出せない所以外は、終わらせており、働きの使い魔とその妹が後の指示を待っていた。それでも片付けには昼休み後までかかり舞華が疲れた。と一言だけ言った。

食事の時間が過ぎてルイズは空腹のまま昼の授業に向かったが二人は片づけで遅れてしまったうえ、ルイズとはぐれてしまい次の教室がわからないため外の庭をうろろろしていた。

「お兄ちゃん、お腹すいたね」

「だな、コンテナへ行くか？」

「部屋にも有るよ？」

「舞華、昨日帰ってないから花の世話しないと」

「あつ」

完全に忘れてたらしい、さすがはうっかりさん。本人の前で言うともぐれて暫く口を聞いてくれなくなるけど。

「ついでに何か適当に食べようか？」

「マンガかりんごが出来るかも？」

「何その出鱈目な果実の組み合わせ」

「お兄ちゃん、そこに座っててルイズさんにも何か作って持つてくるね」

舞華はたたた、と駆け出しコンテナに向かっていった。途中でスライダーを出して自己エンチャ（ウィンドウォークとソング オブ ウィンド）かけた舞華はちょっと追いつけない。そのまま見送る形になり手近な椅子に座って待つことにした。

「あの、どうかしたんですか？」

暫くして声を掛けられた。見ると今朝のメイドさんがこっちを見ている。

「いや、色々あって昼食に間に合わなくて、舞華が食事を持ってきてくれるって言うから待ってるんだ」

「朝の授業の騒ぎですか？」

「そうそう、驚いたな、あれだけの爆発なのに壊れ物がほとんどなくて、けが人もいないって。掃除と片付けは大変だったけど」

「あらら、才人さんは貴族様ではないのですか？」

「俺も舞華も貴族じゃないよ」

「でも、外国からの留学生だって・・・」

「朝も言ったように、元々魔法が使えなかったんだ、だけど舞華は魔法を覚えてくれる人がいて覚えたんだ。で、俺は元から才能がなく魔法は使えないよ。それにここは魔法が使えたら貴族なの？」

「貴族にはメイジしかないので……」

「国が違えば習慣とかも違うんだな、俺達の元々住んでたところには魔法なんてなかったし貴族もほとんどいなかったしね」

「シエスタはこれから食事？」

「ええ、これから食堂で賄いをいただくのですが？」

向うから舞華がバスケットを持ってかけてくるのが見えた。やたらと早い。

「よかつたら一緒に食事しない？俺達はここのことを全然知らないんだ。召喚されたからな、ここのことを色々聞きたいんだ。」

「え、え、え????」

いきなりの俺の提案にシエスタといったこのメイドさんなぜかパニックてる？

「お兄ちゃんどうしたの？あ、今朝はお世話になりました」

シエスタに気がついた舞華が丁寧にお辞儀をする。

「い、いえ！こちらこそ！」

シエスタがあわてて礼を返す。お互い礼を返しあつて、エンドレス
つて、なんか昔TVでこんなコント見たよな？

「二人ともいい加減しないと日が暮れるぞ？」

「で、では、こちらにいらしてください」

シエスタを先頭に食堂の裏に有る厨房へ向かった。

そこには厨房で働くコックやメイドたちが食事をしていたところ
だった。

二人が現れたことで食事をしていた人たちが固まった。

「お邪魔します」「失礼します」俺と舞華が挨拶して中へ入る。

シエスタがとととて、と恰幅のいいコックさんへ歩み寄ると耳元で
何かを話し出した。

「えっと、お邪魔でしたか？」

かたまつた空気にも才人が来なかった方がよかったかな？と思っ
ていると。

「かまわねえぜ」

シエスタが耳打ちしたコックさんがそういった。

「俺はこの厨房を任されているマルトーという。いきなり使い魔召
喚の魔法で呼び出されて知らない国に兄妹二人つきりなんだろ？」

ええ、と二人は苦笑いしながら頷く。

「俺は平賀才人、こっちは妹の舞華」

「平賀舞華です」

舞華が立ち上って皆に挨拶をし、終わると座った。

「戻する方法がないようなので、暫くここでご厄介になる事になりました」

才人はそう言うと、厨房の人たちは驚いたようだった。

「親は心配しているだろう?」

「もう死んでいますから、そっちは大丈夫ですよ」

「す、すまない、嫌なことを聞いちゃったな」

「気にしないでください、昔のことです」

心なしに舞華が落ち込んでる。やっぱり納得できない部分って有るよな、俺もだけど。

「さあ、料理が冷えます。いただきますしよ」

シエスタが明るい声で雰囲気を変えようと皆に声をかけた。

「いただきます」

二人で声を揃えていつものように唱和すると食事に取り掛かった。

舞華が食事の終わりにマルトーさんへバスケットを差出しながら、この中に果物が入っているので皆さんで食べてくださいといった。

「これは？」

中を見たマルトーさんが困惑している。やっぱりここで見るのは初めての果物か。と思い舞華へ切ってあげたら？と声を掛けるとマンゴーを器用に三枚におろし、賽の目を入れるとそれを皿に盛っていった。

「甘い！」恐る恐る食べたメイドさんの一人がそう言つと見ていた他の人も手をつけて食べ始め、口々に甘い、とか美味しい、とか言い出した。

「これはなんていう果物なんだ？」

マルトーさんに聞かれ、舞華がマンゴーといいますと返事をしていった。

そして厨房の休憩時間一杯までその果物についての話題で盛り上がっていた。

才人達にとって遅い食事が終わると、授業が終わるまで舞華はコンテナハウスへ、才人は部屋を片付けてルイズを待つことにした。

ミスタ・コルベールは魔法学院に奉職して二十年になる中堅の教師である。

彼の系統は『火』であり二つ名は『炎蛇のコルベール』見た目に反してえらく物騒なおどろしい二つ名である。

彼は先日の『春の使い魔召喚』の際に、ルイズが呼び出した二人の兄妹について気になることがあった。もっと厳密に言えば気になるのは兄のほうであり、もっと言えば彼の左手のルーンだった。かなり珍しいルーンで、二十年の教師生活をやっていれば有る程度のルーンは知っているし、見たことがないルーンでも有る程度どういったものか判るのだが、今回ばかりはどうにも判らなかつた。それで、彼は儀式のあつた日の夜から図書館にこもりつきりで調べていた。

トリステイン魔法学院の図書館は、食堂の有る本塔の中に有る。本棚は驚くほどに大きい。おおよそ三十メートルほどの高さの本棚が壁際に並んでいる。ここには始祖プリミルがハルケギニアに新天地を築いて以来の歴史が、詰込まれているのだった。彼がいるのは図書館の中の一区画、教師のみが閲覧を許される『フエニアのライブラリー』の中だった。

そして彼はそれを見つけた。それは始祖プリミルが使役した使い魔に関して書かれていた古書であつた。

そして彼は、才人の左手に現れたルーンがその古書の中に有るのを発見するとその本を抱えて学院長室へ向かつて走るのだった。

学院長室は本塔の最上階に有る。いつものように秘書のミス・ロングビルのお尻をなでては、覗き見に使っていた使い魔と一緒にお仕置きをされていた。

そしてそんな中、コルベールは学院長室へ飛び込んできたのだった。

「オールド・オスマン！」

「なんじゃね？」

いつもの通り、先ほどまでの事はまるで無かったかのようにロングビルは机に座り、お尻を撫でていたオールド・オスマンは手を後ろに組み重々しく闖入者を迎え入れた。

「ただ、大変です！」

「大変なことなど、あるものか。全ては小事じゃ」

「ここ、これを見てください！」

「これは『始祖プリミルの使い魔たち』ではないか。まーたこのよ
うな古臭い文献など漁りおって。そんな暇が有るのなら、たるんだ
貴族たちから学費を徴収するうまい手をもっと考えるんじゃよ。ミ
スタ・・・、なんだっけ？」

オスマン氏は首をかしげた。

「コルベールです！お忘れですか！」

もう昨日の事も忘れたんですか？ 耄碌 もつろく するにしても学
院の院長なんだからしっかりしていたただかないと、などと口には出
さないが心の中で毒づく。

「そうそう。そんな名前だったな。君はどうも早口でいかんよ。で、
コルベール君。この書物がどうかしたのかね？」

「これを見てください！」

コルベールはあの日スケッチしたルーンを写したノートを見せた。

「ミス・ロングビル。席を外しなさい」

ミス・ロングビルは立ち上がり部屋を出て行く。

「詳しく説明するんじゃ。ミスタ・コルベール」

「見ているだけでは、ただの平民にしか見えんのう。」

「そうですね」

学院長室に有る遠見の鏡で才人達の様子を二人は見ていた。

「なににせよ二人は色々謎なことも有る。暫く目を離さないほうがよいじゃろっ」

「王室かアカデミーに連絡して調べてもらいましょうか？」

「無用じゃ。そんなことしてもあの三人のためにならんじゃろ」

「はあ、ではそのように」

その日の授業が終わった時に、二人はやつとルイズに会い、舞華はバスケットに入っていた軽い食事と飲み物、それに冷えたマンゴーを切ってルイズに勧めた。

「あー、おいしかった。お腹すいていたから助かったわ。ところでこの果物はあるところのもの？」

「ですよ。マンゴーで、いいます」

「へー、初めて食べたわ。美味しかったわよ」

「はい」

なんか初めて、ルイズと会話が成り立っているような気がする。

「で、何のようなの？わざわざ食事を運んできただけ？」

「昨日の約束をね」

「昨日の約束？」

「昨日の夜、戦い方を覚えたっていったら。それを見せるって」

「ああ、あの話ね。じゃ、見せて」

「ここじゃ、何だから。初めて召喚されたところへ行こう」

「ええ、あそこまで？なんでわざわざ？」

「まあ、いいから、使い魔になるから、ご主人様に見てもらってお
こうと思つて」

「なによ？」

「俺達が違う世界から、ルイズに呼ばれたつてこと」

「まだ言つてるの？」

なんだかまた、ルイズの機嫌が斜めになつた感じだが、スルーして俺達のコンテナへ向かつて歩いていく。

途中の門の出入りで衛士の人と一悶着あつたけど、ルイズが俺達が召喚の儀式で呼ばれて使い魔をしつこの学院の学生となつたこと、その為一度召喚したところに行かなければいけないと屁理屈・
・にもなつていないが、最後は公爵家の威光を使って強引に押し通したのだった。舞華が心なしか機嫌を悪くしている。舞華はこういう自分の能力以外のところで相手に嵩にかかった物言いは嫌がるから、後で、ルイズに衛士の人に謝るように言っておくべきだろうが、とりあえず今は召喚された草原へ向かうことを優先させた。

しかし、舞華はあの衛士たちをどうやって説得してここを通過したんだろう？

召喚された草原へ向かいながら俺はルイズへ話しかける。

「今朝の授業な、舞華がルイズとシュブリーズ先生では魔力の流れが違っつて言ってたけど、心当たり有る？」

「な、なによ！魔法を失敗したことがなにか可笑しいの？」

「まあ、まてよ、舞華が言ってるのは、魔法が失敗ではなく違う魔法の流れになっっているって事」

「どっついうことよー！」

「舞華、解説よろしく」

「え、ええ・・・えっと、ルイズさんの魔法を見てると、私・・・その、魔力の流れが見えるんですよ」

「魔法が失敗すると、私が知っているのは、通常無効化されるはずなんです。詠唱を間違っつとか、魔力の使い方を間違えろとか、魔法が発現しない。ですよね？」

ルイズが頷く。

「暴走する場合は、魔力の制御に失敗して、詠唱に必要な以上の魔力を流して暴走するんですね」

「この場合、暴走するのは力を貯めるところでダムが決壊するみたいに力を貯めすぎることですね。または、力をコップ一杯必要なところに、バケツで流し込むみたいに溢れさしたり、入れ物を壊すことですね」

「でも、この場合、例えば入れ物が壊れるのは術者が魔力で失神し

たり、精神がおかしくなります、よね？同時に溢れたり暴走する場合でも、錬金の場合は、多分あの魔法なら、自分の思っているものと違うものになったり、やたらと大量に出来たり、となって爆発するのは爆発物を作ってしまったてそれに火がつくとかですよ？」

ルイズが俯いて黙って聞いている。心なしか歩く早さが遅くなっている。

「でも、ルイズさんの場合、あの爆発はそんなじゃないですね、それなら、さっきのでもつとけが人が出てますし、教室もつと壊れてますよね」

「じゃあ、なんだっていうのよー！」

ルイズが我慢できなくなったように叫びだす。

「別の魔法だと思います」

「どついつことよ？」

「ルイズさんの魔法は、多分別の系統魔法だと思います。『土』でなく『火』に関係するとか、または、爆発で『火』の系統と違うと言つなら、まだ知られていない魔法ですね」

「なんでそういきれるのよー！」

「魔法をうまく使えないから、かな？」

舞華が俺の方を向く、俺に振るなよ。

「どういふことよ！人をバカにしているの！」

「舞華が魔法をうまく使えないってのは有る意味その通りだぜ」

「!？」

今度はルイズがこっちを向く。

「舞華は元々魔法を使えなかったんだ。そのお陰で、魔力の流れを自分なりにコントロールして、見た魔法を魔力の流れだけで再現したり、自分で再構築というか、アレンジして使えるんだ。」

「それがどうしてうまく使えないのよ？」

「それだけ喚いてのど痛くならないか？ほれ」

おれは、ルイズが煩いので、学生服のポケットに入っていた飴をルイズの口に押し込む。昨日の食事の時に一緒に入っていたやつだ。緊急用の食事なので甘いものが色々入っていたりする。

「ん、ん」

ルイズが驚いているが、取敢えず静かになった。

「舞華は人の魔法を見ないと魔力の流れを自分で動かせないんだ。というか、どう動かすか判らないんだ、だから、この世界の人たちみたいに杖を持ってルーンを唱えると魔法が発現するわけじゃないんだ」

「ん、ん、じゃ、舞華は他人の魔力の流れを見て、それをなぞって

るだけってこと?」

「簡単に言うとそうですね、自分で動かそうと思ったんですが、魔力の流れと流れた結果がわからないので、結局動かせなかったんです」

「でも、使えるってことでしょ?」

「でも、それはこの世界の法則で使っているわけじゃないですから舞華は足元にあった石を左手に持つと右手に今度は『マナ・ダガー』を持ち、軽く目を閉じ何かを呟く。すると石は光だし、光の中から真鍮の塊が出てきた。

「す、すごい、これはミセス・シュブリーズの魔力の流れをなぞったの?」

「そうです、で、これが今朝、シュブリーズ先生の錬金した真鍮です」

舞華はあの騒ぎでちゃっかりシュブリーズ先生の錬金でできた真鍮を確保していたらしい、先生のと自分のものと両方をルイズに渡す。ルイズは両方を見ると才人に向かって、

「授業でミセス・シュブリーズに見せたコインを見せて」

「はいはい」

ルイズにコインを渡す。

ルイズはその三つを見比べる。そして口を開く

「ひょっとして、舞華はこのコインと同じ物を作ろうとしたの？でも、出来あがったのはミセス・シュブリーズと同じ物。ということなの？」

「そうです。別の物を作ろうとすると別の物を錬金している魔力の流れを見て、その違いから大体見当をつけて、錬金することになると思います。だから、ルイズさんを見た時に根本的に魔力の流れが違うことに気付いたんです」

そういうと舞華は少しはなれたところに作った真鍮の塊を投げて、マナ・ダガーを構えて、

真鍮は爆発した。結構な爆風が三人を襲ったが、不思議なことに爆発の影響で巻きあつがた埃は被った物の、かなり強い爆発にもかかわらず三人とも服や髪が乱れていなかった。

「いきなりなによ！もう！」

「ごめんなさい。でも、教室の時と違って服とか破れてないでしょ？」

「あ、本当だ、どうして？」

「ルイズさんの爆発って、魔力の流れだけなぞるところいった結果になるんです。ルーンを使わずに・・・ルイズさんは無意識に爆発で、人に怪我をさせないようにしてるから」

「え？」

「ルイズさん優しいから、本当はこういう魔法なんです。錬金のルーンがあつたから服が破れたり、机や教室の窓が割れたり、真っ黒になつたりしたんですね」

「私の魔法……」

「今のところ、系統とかわからないけど。舞華に言わせるとルイズのオンリーワンの魔法だそうだけ」

「オンリーワン……？」

「俺達のところの言葉で、『ただ一つだけの』見たいな意味なんだ。この場合は『ルイズ一人だけの』かな？」

「そうだったの？なんだか実感わかないわ」

ルイズが何故か涙を浮かべている。

「そろそろここら辺でいいかな？」

いつの間にか召喚された野原のつまりはコンテナの有る所までやってきた。

舞華は鞆を下ろし、マナ・ダガーをポケットにいれ、鞆の中から機関銃を取り出した。

「舞華。何それ？、銃なの？……」

ルイズが舞華に機関銃のことを質問する。そして舞華は黙って機関

銃を肩から背中にかけて、スカートをたくし上げる。

「舞華！なにをしたくないことを・・・」

ルイズは叫ぶように言うが、スカートの中から拳銃を取り出したのを見ると、なに？という顔をして拳銃を見ている。

舞華は少し顔を赤くして、これをすぐ取出せるように足に付けてるの。といって、太ももにつけているホルスターが見えるようにスカート裾をもう一度少しあげて見せる。

舞華、お兄ちゃんが男って事少しは意識してくれ！

「ま、ま、舞華！」

またルイズが叫ぶ。

俺も脇のホルスターから拳銃とUMP機関銃を鞆から取出した。鞆を置いたところから百メートルほど離れたところに的代わりに土を盛り上げその上に木の枝を何本か差して戻ってきた。

「じゃ、俺からやるな」

「なに？」

ルイズが不思議そうに見ている。舞華がルイズの腕を引張って俺から少しはなれた所へ連れて行った。

「いいよ、お兄ちゃん」

俺は黙って頷くと、まず単発モードUMPの射撃を開始する。四発

打つと今度はセミオートマで同じ目標に撃ち込んでいく、四回繰り返し返すと最後に弾がなくなるまでフルオートで撃ち込んだ。打ち終わると今度は拳銃を一発ずつ発射して全弾打ちつくすと拳銃は新しい弾倉に入れ替えると安全装置を掛けてホルスターへ戻した。機関銃はそのまま弾倉を抜いて鞆の中へ入れた。

「どっ？」

ルイズは目を丸くしている。

「いい、い、今は、銃なの？どうして連続で打てるの？メイジの魔法より遠くから、なんで平民の武器が撃てるのよ！」

「火薬使ってるからな」

「だ、だけど・・・」

舞華が準備をしている。目で俺が合図すると舞華が

「いきますね」

そして同じように機関銃を撃ち始めた。舞華はフルオートでの射撃は体力もあつてあまりやらなかった。今でも、セミオートでのみ射撃を行った。機関銃の射撃が終わってから、俺と同じように拳銃による射撃を行った。

「・・・」

ルイズが呆けている。

「一応これが俺の世界での、本当の武器なんだ。どうだった？」

「どうって・・・これ見せてどうしようって言うの？」

「ルイズが東方だの何だの言うから違うのを証明するのに戦い方っていうのかな？これなら魔法が要らない理由がわかるだろ？魔法を使われる前に銃で撃つちあいいからな」

「こんなの・・・貴族の誇りとか名誉はどうなるの？」

「戦争だからな、そんなの関係ないよ？俺の世界での戦争は貴族とか平民とか関係ないんだ。貴族なんかいないから平民、俺たちは市民って呼ぶんだけど、市民か軍人か位しか別けないんじゃないか？戦争は貴族だけの物じゃないだろう？畑とか荒されるし、平民でも兵隊にとられるんじゃないか？」

「そ、それはそうだけど」

「戦争はその国同士が名誉とか誇りじゃなくて最後は相手の土地とかお金とか資源が欲しくてやってるんじゃないの？」

「貴族が本当に誇りとか名誉のためなら戦争で平民を連れて行かなくても自分たちだけでやればいいよな？」

「でも自分達の領主が・・・」

「だって、領主や国王が代わっても平民は年貢や税金を取られるだけだろう？貴族と同じように平民に名誉とか誇りとか有るの？貴族はそれを賞賛してくれるの？」

「そんな」

「少なくとも俺達の世界には貴族という人たちはごく少数になって、貴族だから軍人とか政治家とかになれるわけじゃないからね、銃の前では貴族も平民も平等に死ぬから、意味ないし」

「意味がなければ存在する理由がないから貴族は減っていったんだよ」

ルイズは黙ってしまった。まあ、俺達と基本的に生活スタイルが違うのでなんだかんだ言ってもルイズの言うことが俺に理解できないように、俺の言うことがルイズに理解できなくてもいいけど、違う考え方をしているということを知ってもらえたらいいか。位で話をしている。

「さて、銃のことは見てもらったし、俺たちの家に招待するよ。」

「家？」

「そう、召喚されてから俺たちが住んでた家だよ。ルイズの家とはずいぶん違うだろうけど」

そういうと、俺と舞華は銃を片付けて結界に近づいて行った。ルイズがあわてて俺たちについてくる。

「ルイズは？」

「結界の中」

「結界？」

「そうそう、この中は外から簡単には入れないように結界を張っているんだ。ちなみに結界を張ったのは舞華の魔法の先生ね」

「舞華の先生？」

「そう、舞華に魔法を使えるようにしてくれた人だよ」

ルイズは珍しそうに周りを見渡している。車両関係は迷彩模様の網やシートで覆われておりその中に昨日乗った車なんかが置いてあるのには気が付いていないようだが、それなりに不審なのか気にしているようだ。

そして、その奥に見えるコンテナの山に驚いているようだった。

「あれって？」

ルイズは何か見つけたのか外周を囲っている樹の一部に何か見つけたのか駆けていった。

「ルイズどうした？」

「この樹って、さっき食べたマンゴーってやつ？」

俺はルイズの指した樹を見た。

「そうだな、マンゴーだ。ここの植物は全部舞華が管理しているんだ」

「へえ、そうなの」

「お兄ちゃん、ルイズさんこちらへどうぞ」

舞華がコンテナハウスのほうへ手招きしていた。

「とりあえず中でお茶でも飲もう」

「ええ、分かったわ」

俺たちはコンテナハウスへ向かって歩いて行った。

「いらっしやい、どうぞ」

舞華がそう言っただけでルイズのためにスリッパを用意する。ルイズは戸惑いながら靴を脱いでスリッパに履き替えている。何かの本で読んだみたいにヨーロッパの習慣と同じで玄関で靴を履きかえる習慣はないみたいだった。

「ここへどうぞ」

舞華が椅子を引いてルイズを促す。

「ありがとう」

ルイズはそう言いながらあたりを見渡す。たぶん魔法学院の部屋から察するに、かなり狭いんだろうなここ。

舞華はルイズを座らせるとお菓子を準備しにキッチンのほうへ行っ
たようだ。俺はその間手を洗ってお茶を準備していた。カップに人
数分そそぐと、机の上に置いて行った。

「今、お湯を沸かしていたのよね？」

電気ケトルでお湯を沸かしていたのを見てのことらしい。

「そっだよ、何？」

「火を使ってなかったわ」

「電気ケトルだから火にかける必要ないからね」

「電気ケトル？」

「電気でお湯を沸かすんだ」

「電気って、あの雷の？」

「雷が電気って知ってるんだ？」

「馬鹿にしないでよ！それぐらいわかるよ！」

「うん、なら電気でお湯沸かしてもいいよね？」

「なんでそうなるの！？」

「？」

「ねえ、お兄ちゃん、雷が電気って知ってるけど、電気がどういう現象か知らないんじゃない？」

「現象？」

「そっか、魔法で電気作れるの？」

「風の魔法に『ライトニング』とか『ライトニング・クラウド』という魔法があつて、雷を出せるのよ」

「すごいな、今度先生に見せてもらえば、舞華も覚えられるな」

「いっぺんには無理だよ」

舞華が笑って返事をする。

そついいながら俺は懐中電灯、本来、小銃に取付けるもととして銃と一緒に置いてあつたものだが、それを持ってきてルイズに見せた。

「それは何？」

「懐中電灯」

そついいながらスイッチを入れる。

「わっ、光った。ランプなのこれ？」

ルイズにそれを渡しながら説明する。

「これは電気力で光るんだ」

ルイズにスイッチのオン・オフをさせてから電池を取り出す。

「この丸い筒に電気を貯めておくんだ。それで、このスイッチを動かせば電気が流れて光るんだ」

懐中電灯を解体して電池とLEDの基盤の部分を取り出すとクリップに電線を取付けたものを見せて。繋ぐと光るところを見せる。舞華も興味深そうに見ている。

「この筒に風石でも入ってるの？」

「風石てなに？」

初めて聞く言葉に質問する。

「知らないの？風の魔法の力が込められた石のことよ。これで船を浮かしたりするのよ」

「こっちの船は風の魔法で空に浮かぶのか。すごいな」

「じゃ、これは風の力は使ってないの？」

「使っていないよ。少し時間くれるかな？実験するから」

「「？」」

ルイズと舞華が何か話している間に俺は外の倉庫になっているコンテナから電球式の懐中電灯と自分の部屋から小銭、もっと言うと

俺の財布に入っていた一円玉と十円玉を持って、途中でティッシュペーパーを持って。二人のいるところに戻った。

「お待たせ。舞華、塩とコップに水入れて持ってきてくれない？」

「？、はい」

舞華が不思議そうな顔をして言われたものを準備する。

「これで準備完了。まずはこれを・・・」

持ってきた懐中電灯から電球を外すとさっきと同じように電球を光らせる。

「さっきと同じこととして、どういうこと？」

「これで形は違うけどこれも電池で光ることが分かっただろう？」

「そ、それはわかるわよ、でもなに？」

「さて、これ塩だね、で、このコインも銅とアルミでできてるんだけどわかる？」

「しょっぱい！塩ね。銅貨とアルミ・・・って何？」

「アルミは知らないのか、まあそういう金属があると思ってくれ。で」

ティッシュペーパーを一円玉に合わせて切っていく、コップに水を入れ塩を入れて塩水を作る。十円玉の上に塩水に浸したティッシュを

適当に水を切り載せるとその上に一円玉を載せる。これを11個作った。これ以上はコインがなかったからだけど。そして、磨いた鉄板の上に順番に載せていく。作った十一個載せ終わったところで、クリップを鉄板と一番上に載ってる一円玉につけると電球が光り始めた。

「光った！なに、これ。どうなってるの」

「俺たちの世界で初めてできた電池と同じ原理で作ってみたんだ。」

「最初からやってみる？」

俺はルイズに言ってみた。

「私にも出来るの？」

「科学は同じことをやれば同じ結果が得られるからね。失敗した場合は同じことをやってないから、それを見極めれば、失敗の原因を直せば必ずだれでも同じことができるんだ」

「私やってみる！」

一度コインをバラバラにして丁寧に塩水を拭取り黒ずんでいる十円玉はクリームクレンザーで少し磨いて準備をした。

一度塩水が多すぎたためショートして電圧が足りなかったのだろう、電球が光らなかったが、そのことを指摘した後、注意深く組み立てなおした電池で電球を光らせたルイズは歓声を上げた。

「じゃ、ルイズ。今度は別の物で光らせてみようか？」

「？、出来るの？」

「もちろん、科学は一度成功すると今度は別のもので繰り返し試して一番効率のいいものを探すんだ。それと何故そうなるかを考える。科学には理論の裏付けがなければ皆で安心して使えないからな」

家の裏から炭を持ってきた。備長炭に比べるとこういうことには向いてないけど数で何とかごまかせるかな？などと思いつながら、アルミホイルなんてあったかな？と、肝心なことを思い出して戻ってきた。

「舞華、アルミホイルあったかな？」

「あるよ、まってる」

そついいながら、玄関を出て行った。たぶん外の倉庫にあるのだから？気が付かなかった。

「不思議なことを知ってるのね」

待ってる間にルイズが聞いてきた。

「これは科学の初歩を覚えるための実験で結構やるんだ。もっとも昔のことで忘れかけてたけどな。最初は不思議に思えるかもしれないけど、誰がやっても出来る事だからこの世の中の基本的な決まりごとの一つなんだよ」

「初めて知ったわ」

「魔法はそこらへんすつ飛ばすからな」

「お待たせ」

舞華が戻ってきた。

「じゃ、準備しようか？俺は指示だけ出すからルイズが一人でやってごらん」

「分かったわ、じゃあどうするの？」

素直に話を聞くルイズを、なんか可愛いなあ、などと思いながら、舞華も一生懸命聴いているのを見て、あれ、こいつ小学校の時に実験やらなかったのか？そう思って聞いてみた。

「舞華、こんなのやったことない？」

「私の時は、インフルエンザがすごくて授業日数が足りなかったからTVの実験見るだけとか教科書読むだけとか多くて、こっぴつこのやったことないよ」

「なら二人で一緒にやってみたら？」

「いいの？」

舞華はルイズに向かっていう。

「いいわよ」

ルイズの了解を取り付けて、二人は炭で手と顔を黒く汚しながら

実験をワイワイ、キャキャ言いながら進めていった。

何のかんのいいながら二人は仲良く実験を成功させ、今は風呂と一緒に入ってる。このコンテナハウスは非常用かつ、赤い世界のアメリカ製ということで元々シャワーしかなかったのだが日本向けにアレンジされておりそれが少し家族向けとしては狭いかもしれないが湯船がついているのだった。

俺は実験道具を片付けると、二人のためにサイダーを冷凍庫で冷やしておいた。少なくとも二人が出てきたら冷たいものを飲めるだろう。

そして、違う世界ということと赤い世界のものと、俺と舞華の引越し荷物に入っていたビデオを準備してルイズに見せる用意をした。

これまでは、普通の生活をしている所からいきなり召喚されて・
・と言いがかりをつけてきたが、まあ、多少問題もあるだろうが、ルイズと学院長は、まあ腹の探り合的なことはあっても、まま信用してもいいだろうと、舞華と話をしていた。

最初のルイズの発言のように奴隷扱いはなさそうなので、精々貴族と平民・・ルイズの両親なんかにあんまりひどい扱いを受けるようなら考えるが、今のところ学院にいる間は問題ないと思っている。

これから一緒に生活するうえで俺たちがこちらの世界の常識を知らない。別の世界から呼び出された存在。これをきっちりわかってもらうためだ。俺たちはこの世界の平民ではない。そのことから俺たちの権利と使い魔になる義務で、受け入れられるものと受け入れられないものをはっきりさせようということだ。この世界とある程度軋轢を生むだろうし、問題が生じるかもしれないが、それが表ざたにならないようにしてもらおうのも召喚者の義務として果たしても

らう。逆にそれが果たしてもらえらなら、俺は使い魔としてこの世界に生きていこうと思った。元の世界に戻ったところで自分のいる場所がなくなっているだろうからだ。

ビデオの内容に関して、ルイズは驚いていた。そして、最初の印象と違ってルイズは頭がいい。ビデオにあった例えば俺たちの世界の自衛隊の艦船の説明でおおよそのことを理解したようだ。こんな軍隊が同じハルケギニアであれば今頃お互いの国家がどこかで会っているということに。

ところがお互いに知らない存在ということは、この世界に俺たちの世界がないということ。

「やっと信じてくれたみたいだね」

サイダーを飲みながら舞華が肩の荷が下りたという風に話した。

「あたりまえじゃない、これだけのもの見せられて信じないほうがどうかしてるわよ」

「ここはハルケギニアでこの流儀にはできる限りは従うが、こっちも無理やり召喚させられたんだ。ある程度は好きにさせてもらわないと困る」

「衣食住は保障するわ」

「してもらわないと困る」

「文字も教えるわね」

「おう、頼むな」

「あとは？」

「とりあえずはそこまで、このことがよくわからないからな、お願いのしようがない」

「じゃ、こっちもお願いがあるの」

「なに？聴けることは、やぶさかじゃないから」

「科学を教えて」

「それは俺たちが習ったことを教えればいいのか？」

「そそ、貴方達が覚えてることを教えてくれたらいいのよ」

「まあ、大したことを覚えてるわけじゃないけどそれでよければ、舞華は構わないか？」

「はい。大丈夫です」

「なら、そういうことで、とりあえず戻るか？」

「あんた達ここに住まないの？」

「ルイズの使い魔とその妹の住む場所はルイズの部屋の隣だよ、ここは休日とか、時間があるときに来ればいいからな」

「そうなの・・・」

それから暫くして俺たち三人は歩きながら他愛もない話をしながら学園の寮へ歩いて戻っていった。

14・学院・2（後書き）

誤字脱字等ありましたらご指摘お願いします。
感想などありましたらよろしくお願いします。

15・学院・3（前書き）

やっとVSギーシュまで来ましたが・・・

取って付けたとはこのことをいうのでしょっね。

もう少し文才がほしい。

ギーシュとの戦闘場面は改訂候補です。

感想ありがとうございます。

さすがに翌日は何事もなく朝の一連の作業などを済ませ、ルイズをおこす。

その後、昨日と同じく扉を開けるとキュルケが使い魔のサラマンダーと一緒におり、一緒に食堂に行くが、その間、ルイズが何かと騒がしかったが、何気にみんなしてスルーしていた。

朝食を食べた後、授業に出た。水の授業だったが、今日は特に何事もなく昼食の時間になった。

昼食は時間をずらして厨房へお邪魔することにした。朝洗濯のため水場に下りた時、シエスタに会い、シエスタと舞華が何かの話で盛り上がり、今日も昼に厨房にお邪魔することになったのである。

二人とも前の世界で貴族同様の教育を受けてきた振る舞いに加えて、場所に合わせた振る舞いも出来、丁寧で真摯な対応、明るい性格等から厨房での人気もわずか二度目の訪問にもかかわらず上昇しており、さらに転移に伴う際の実践してきた知識、そこから平民にも使えるものを色々な物を自作する・・・舞華の作る石鹼と（ハンド）クリームはこの世界で、メイジが独占していることからも人気になり、その後に厨房にあるもので作ろうとする雰囲気が出てきたりしていた。

「ほう、お前のところはそうやって秘薬を・・・え、石鹼とクリームか、作っているのかい？」

「元々の私の世界では、自分で作るのはまれなんです。普通は店で買うものだったんですよ。でも、色々あって自分で作るようになってたんです。材料がある時だけですけどね」

「ふむ、此処にあるもので作れるなら俺が何とかするぞ。相談してくれ」

「マルトーさんありがとう。材料が足りないときとか相談させてください」

「でも、こんな方法で作れるなんて驚きです。」

「俺たちの世界では、材料を集めて作るより纏めて作ってあるやつを買ったほうが安いからな」

「纏めて、てどのくらい作るんだ？」

「さあ？石鹼で毎日数万個になるんじゃないか？」

「毎日数万個！そんなに作ってどうするんだ？」

「俺の国は一億二千万人ほど国民がいたんだ。一家四人として・・・石鹼一個で三千万個、・・・えっと、一月持つとして一年で三億六千万個必要？これを一年で割ると大体九十八万個を一日に作らないと足りなくなるよ。」

「なんか想像できないな・・・」

「俺も今、計算苦手だから、自信なくなってきたかも・・・（汗）」

「まあ、だから俺たちは普段こんなものを作る必要はなかったんだけどね。でも、俺は男だけど舞華は女の子だしな」

「私たちはこんなクリームは高価だし、メイジしか作れないと思っ

てましたから薬草をすりつぶしたものとかが使っていました」

「多分その薬草がこのクリームに入っていたりするんだよ、きっと」

「そうなんですか？」

「えっと、これには入ってませんが傷薬とかだと使ってる物も有るかもしれないね。今度調べておきます」

「文字を知ってたり本を読めるってのは便利だな」

「あれ？マルトーさんはレシピとかどうしてるんですか？」

「それは俺の頭の中だよ」

「さすがですね、私はメモを取っておかないと覚えられないんです」

「いや、俺は仕事のことだけだから、舞華ちゃんは色々なことを知ってて偉いと思うぞ、今度メモをとれるように文字を覚えようかな？」

「マルトーさん字を知らないの？」

「名前を書けたり、立札の布告くらいは読めるさ、でも自由に書けるところまでは無理だな、料理の修行じゃそこまでの文字を覚える必要がなかったからな」

「そうなんだ、じゃ、私がこのクリームと石鹸を作るレシピをメモつくりまますからそうやって覚えていきませんか？」

「お？、教えてくれるのか？こういうのは門外不出の秘密のレシピじゃないのか？」

「私の世界ではだれでもちよつと調べる気になれば調べられることですよ。こういう製品を買う時にどうやって作られていなければいけないのか知らないと間違ったものを買ってしまうかもしれないですよね」

「なるほどな、俺たちはそういう物とと思っているから何も思わなかったな。ま、飯が冷めちまうから早いとこ食べちまいな」

「そうですね。いただきます」「いただきます」

「そうそう、その『いただきます』と食べ終わった後に言ってる『ごちそうさま』てなんだ？」

舞華が今まで話をしていたマルトーさんから俺の方に振り向いた。

「『いただきます』は一種の宗教的なお祈りとお礼の言葉が一つになったものですよ。『ごちそうさま』は純粹に作ってくれた人に対するお礼です」

「お兄ちゃんそうなの？」

「あれ、舞華知らなかったの？『いただきます』というのは、『貴方の命をいただきます』という意味なんだ。」

「どうして『貴方の命をいただきます』なの？」

「だって食べ物にはスパイスを含めてほとんど生き物だろう？例外で

俺がすぐ思いつくものは水と塩だけだぞ」

「あっ」

「だろ？牛、豚、鶏に魚、ほかの動物に草や木の実や葉っぱ茎に根っこ、全部生きてる物だけ」

「そっだね」

「（ちえ、親父の奴、俺のことは頭殴っておせつきよ言いながら、舞華には甘いんだよね）」

口に出せない代わりに心の中で（多分天国にいる）自分の親に向かって毒ついてみる。

「で、『ごちそうさま』は昔の日本語・・・俺の国の言葉で、食事を出す準備に魚を釣りに行ったり、狩りに行ったり、畑から野菜を取りに行ったり、それに煮炊きするのに山に薪を取りに行ったり、店を走りまわって材料を集めたりして走り回っている様子から、『ご』と『さま』は丁寧な言い方、『ちそう』は走り回っていることとで、元は、『走り回って食事の準備をしてくれてありがとう』と言う意味らしいよ。仏教という俺の国の宗教の一つが始まりとか言っただけど」

「お前の国は本当に平民だけでそんなすごい国だったのか」

「すごいのか？」

「ああ、ここじゃ知ってると思うが、神や国王に祈る言葉があるが、食事の材料と食事を準備する俺たち料理人やその言葉を聞いている

と漁師や猟師、それに農民にまでお礼を言ってることだよな、それはすごいことだと俺は思う」

結構ワイワイガヤガヤ話題に事欠かない食事を二人はしていた。もちろんこんな時間に食べているのは才人と舞華の二人で厨房のほかの料理人やメイドたちは料理を作ったり運んだり、皿を回収してきたりと相変わらずのてんてこまいである。というかそういった会話を器用にしながら、一切手を抜かず、乱れず、遅れずの料理を作るマルトーさん達コックさんや給仕のメイドさんたちがすごすぎるともいえるが。

二人が食べ終わる頃には食堂のほうでもデザート番になるようだった。シエスタたちが準備をしていた。

「運ぶの手伝うよ」

「この皿洗っておきますね」

二人で出来る事を手伝おうとしていた。

「二人とも気にしなくていいですよ。」

「でも、たまには体動かさないと最近運動不足だしな」

「です、です」

二人はそれぞれシエスタから銀のトレーを取り、皿を集め洗い場にそれぞれの行動を開始していた。

「じゃ、せっかくですからお願いしますね」

なぜか上気させた顔でシエスタが言った。

食堂でシエスタがそれぞれの皿にケーキを置いていく。才人はそれの邪魔にならないように注意深くついて行き、かつ、シエスタがケーキを取りやすくなるように考えながら立ち位置をかえていく。

シエスタの担当分のケーキを配り終え、下がるうとしたところ、シエスタが何か落ちているのに気が付いた。

「あら？」

シエスタがそれを手に取るとそれはガラス壺で出来た香水の入れのようにであった。

「御歓談中失礼します。これが落ちていましたけれど、ご存じ無いでしょうか？」

シエスタが手にしたものを、すぐそばの椅子に座っていた生徒へ見えるように、テーブルの上に置いて話しかける。

先ほどから何かと騒がしい集団のところだった。

「おおその香水は、もしや、モンモランシーの香水じゃないのか？」

「そうだ！その鮮やかな紫色は。モンモランシーが自分のためだけに調合している香水だぞ！」

「そいつが、ギーシュ、お前のポケットから落ちたつてことは、つまりはお前今、モンモランシーとつきあっている。そうだな？」

「違う。いいかい？彼女の名誉のために言っておくが・・・」

ギーシュが何か言いかけた時、後ろのテーブルに座っていた茶色のマントの少女が立ち上がり、ギーシュの席に向かって、コツコツ歩いてきた。

くいくい、唐突に始まった出来事に呆然としているシエスタの袖を誰かが引く張る。見ると才人だった。

「こつこつ場は当人同士に任せておこつ。」

そういつてその場を立ち去る二人。後ろでは派手な音が始まった。ケーキを配り終え厨房に戻った二人はトレイやトングを片付け、食堂の片付けのため再び食堂に入っていた。

「そのメイド、待ちたまえ」

「？」

二人がほかのメイドと一緒に片付け始めると先ほどのギーシュと呼ばれた少年が椅子に座って呼びかけてきた。しかも、椅子に座ったまま体を回し、足を組んで。である。

しかし、きざつたらしい動作と裏腹に、顔には赤く手形が付き、服にはワインをかけられた跡がくつきり残っており、才人はこのコメディアンだ。と思っていた。

「君が軽率に、香水の壘なんかを拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷付いた。どうしてくれるんだね？」

「も、申し訳ありませんでした」

シエスタがあわてて頭を下げる。才人はそれを見てぽかんと一言つぶやいた。

「二股かけなきゃ問題なかったんじゃないの？」

以外に大きな声だったため、シエスタが驚いてサイトを見つめて固まってしまい、ギーシュの友人たちが、どつと笑った。

「その通りだ。ギーシュ！お前が悪い」

ギーシュはシエスタとサイトを交互に見、そして、

「僕は最初知らんふりをしたんだ。それに合わせる機転があってもいいだろう？」

「さすがにそれは言いがかりだろう？君に同席している方々に一発で見抜かれてたじゃないか？」

「どちらにしても、二股なんてすぐばれるだろう？それに立場の弱い女性にあたるのは紳士ではない行為だよ。」

過去の自分の行いも照らし合わせて諭すように言った。確かに、なぜあの三人は三つ股でもいいと思ってたんだろう？などと今更な疑問を蒸し返して意識をどこか飛ばしてしまふ才人だった。

「……ふん……。ああ、君は……」

ギーシュはバカにしたように鼻を鳴らした。

「確か、あのゼロのルイズが呼び出した、平民だったな。平民に貴族の機転を期待した僕が間違っていた。行きたまえ」

「ええつと、素晴らしいき貴族様は、ただ落とし物を拾っただけの平民に、自分のうっかりで落としてしまった香水から、二股がばれて、それを同じ貴族のご友人から指摘されると、その原因は拾った平民にある。と。素晴らしい筋立てですね。一部の隙もない」

なんとなく腹が立ったので突っかかってみたが、慣れないことはするものじゃないな、顔には出ないけど自分もあの貴族並みに痛い人になってるのがわかる。内心穴があつたら入りたい気分だ。

「なんだと！さすがはゼロのルイズの使い魔だ。貴族に喧嘩を売るうというのかね！」

「別に事実を言っただけだと思ってますが？」

まあ、ここまで来たら喧嘩買ってやってもいいけどね。あんまりゼロゼロいうのを聞くのも面白くないし。

「あ、あ、さ、才人さん！謝ってください！貴族様にそんなこと言ったら殺されますよ。」

シエスタが真っ青になって俺に必死に訴えかける。

「大丈夫だよ、喧嘩だから殺されるわけでもないし」

エルモア・アデンでの喧嘩では殺し合いに何度もなったんだが、さすがに学園で、いくら階級差があっても殺すことはないだろうし、第一、学院長の部屋での会話から、此処の魔法が、俺や舞華が少なくともまともな方法で殺されるような、そんな魔法はないと思っ
ている。

「喧嘩なんか貴族ができるわけないだろう。貴族ができるのは決闘だよ、決闘」

「同じでやるのか？」

「貴族の食卓を平民の血で汚せるか。ヴェストリの広場で待っている。片付け終わったら来たまえ」

ギーシュの友人たちが、わくわくした顔で立ち上がり、ギーシュの後を追った。一人は、テーブルに残った。才人を逃がさないために、見張るつもりようだ。

「お兄ちゃん！」「才人！」

舞華が困ったような、怒ったような顔でやってきた。後ろからルイズも、こっちは怒った顔で一緒にやってきている。

「どうした？」

才人の疑問にシエスタが横から心配そうに窺めてくる。

「どうしたじゃないです！貴族を本気で怒らせたら殺されてしまいますよ！」

「多分それはないと思う」

舞華が冷静にシエスタに諭すように言う。

「え？」

シエスタが驚いたように舞華に向かってないかを言いたそうに、口をパクパクさせている。

ルイズが才人に向かってルイズなりのギーシュに対してフォローを入れる。

「ギーシュをあんまり痛めつけるな。って言ってるのよ。あそこの家はあれでも軍の名門であいつのお父様は、軍の元帥なのよ」

「じゃ、恥かかせないように適当に負けろって？」

「そうじゃないわよ！あんまり痛めつけたり、殺したりしないでって、言ってるのよ。貴族同士のもめごとが子供同士ならまだしも、親が出てくるようなことになったら大事よ」

「大体あんたは、あの武器使えなかったらどうするの？使ったら殺しちゃうだろうし・・・」

「ああ、そういうことか。で、ここの決闘はどうやって決着つけるんだ？」

「たいてい武器を、貴族同士なら杖を相手の手から落ちしたら勝ちよ、平民の傭兵なんかは剣を叩き落としたりしたら勝ちって聞いた

ことがあるわ」

「そっか、まあ、何とかしてみるよ」

「で、ヴェストリの広場ってどこだ？」

「こっちよ」

ルイズを先頭に、俺、シエスタを庇うように舞華が並んで、その後ろから一人残ったギーシュの友人がついてきていた。

ギーシュの友人は俺たちの会話を不思議そうに聞いていたが、理解できてないようだった。ましてやシエスタは震えっぱなしだった。

やっぱりルイズは今の言動からも我慢していたんだな。子供の喧嘩に親が万が一でも出てきたらただじゃすまない。親の躰で常識ってちゃんとわかってたんだ。キャンキャン子供同士が言い合っている分には何も問題ないから、そこで収まる程度に、分別付けてたんだね。

才人のルイズを見る目が優しくなった。舞華を見ると同じようにルイズをほほ笑んでみている。

普段はあまり日の差さないであろう広場はこういうことになってつけないのだろうか、今は、噂を聞きつけた生徒たちで溢れかえっている。

「諸君！決闘だ！」

ギーシュがバラの造花を掲げた。うおーッ！と歓声が巻き起る。

「ギーシュが決闘するぞ！相手はルイズの平民だ！」

使い魔すら付かないわけね・・・才人は呆れていた。と同時にルイズが貴族にこだわるわけだ。本来なら公爵家であればそれなりの地位だ。階級でいえばその上は王家や大公家、場合によっては辺境伯あたりしかない希少な高位の地位にある家系なのに、魔法が使えなければ関係なく下に見ても問題ない。つてわけだ。公爵家の三女とはいえ直系の家柄の人間にこんなことを言っていれば、学院を出た後、どういう扱いを受けたところで仕方ないだろうに、ここまですて表立って教師まで止めようとしていない現状からではルイズの立場が押し量れる。色々言いたいことのある才人ではあるが、使い魔としてここで生活することを決め、ルイズのいい所も見え始めかわいいい妹が一人増えたかも？と思っている現状では、結構理不尽に思えているのである。

「とりあえず、逃げずに来たことは、誉めてやるうじゃないか」

「お前ほど恥知らずじゃないからな」

「く、く、さて、始めるか」

ギーシュが言った

才人は、ここの魔法は錬金を除いて、直接魔力を何かに変換してぶつけてくるものしか見たことがなかった。だから舞華のためにも少しだけ魔法を使わせて見ようと思っていた。その考えは、舞華にとって良いほうに裏切られた。

「なに？」

ギーシュはバラの花を振った。

花弁が一枚、宙に舞ったかと思うと・・・

甲冑を着た女戦士の形をした、人形になった。

あんな小さな花びらからあれだけの物を錬金？召喚じゃないよな？身長は人間と同じくらいだが、表面は緑青？銅合金なの？ブロンズ？関節が一体物だけどどうやって曲がってるのだろう？

いわゆるブロンズ像と同じ色であり、姿かたちは出来の悪いフィギュアのようなだ。

才人の驚いた声に対してギーシュは勝ち誇ったように

「僕はメイジだ。だから魔法で戦う。よもや文句はあるまい」

こいつ絶対ナルだ、死ぬまでやってる。本物の二枚目はくさいセリフでもとってつけたような、お前みたいなきざな雰囲気はないぞ。顔がイマイチでも本物はそんな薄っぺらくないぞ。これまでのエルモア・アデンでの冒険で、エルフやダークエルフ、ヒューマンやオークにドワーフ、本物の王族や騎士、領民のために戦争で苦悩する貴族たちを見てきた才人からすると自意識過剰なギーシュは薄っぺらく見える。

「言い忘れたな。僕の二つ名は『青銅』。青銅のギーシュだ。したがって、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ」

「なるほど『青銅』ね」

女戦士の形をしたゴーレムが、才人に向かって突進してきた。

その右の拳が、才人の腹にめり込んだように見えた時、才人は一瞬でゴーレムの左側に回り込むと同時に姿勢を下げ、その右腕を掴み殴ってきた勢いを利用して投げた。

ゴーレムはひっくり返り、倒れ方が悪かったのだろう、右腕が途中から折れ、その折れた断面からは緑青のきれいな色が見えた。

「ぶ、ははは・・・」

思わず才人は笑い出した。舞華の言ったとおりだったから。青銅は青銅だけこの青銅はすべて緑青になっているらしい。こいつにとってこれが青銅なんだ。この程度の知識で、それが親が軍の元帥？こんな強度のない物を。多分、魔力で無理やり青銅と同じレベルに硬化しているのだろう。

ここの貴族ときたら、まったく。舞華に聞いていなかったら少し慌てたかもしれない。

さて、どうしようか？

「どうした？ワルキューレは壊れたようだが？」

「くっ、まだまだ」

ギーシュは杖を振ると新たに六体のゴーレムが現れる。さらに倒れていたゴーレムが立ち上がってきた。

「結構こいつ硬いんだよな」

そういうと才人はポッケから短剣を取出した。拳銃と一緒に装備しているナイフや銃は使えない（ギーシュを死亡させるかもしれない。復活は、舞華がするだろうけど必ず成功するものでもないし、無理はしないほうがいいだろう）ためポッケに隠し持っていた短剣を使うことにした。今、才人が手にしているのは『ダイナスティ・ナイフ』といわれるものだ。作るのにドワーフの技術・・・一種の

魔力が込められており、おまけにエンチャントもされており、通常のダメージでも大幅に増えるうえ魔法の追加効果もあり、まともに使えばオーバーキルしてしまうが、銃と違い狙い場所や使い方でダメージ量を調節できる。

まずは最初に投げ飛ばしたワルキューレにとどめを刺す。刃が欠けるかと思っただが、まるで豆腐を切るように切れてしまった。拍子抜けした才人は、それでも、油断しないように細かく位置を変えながら、そうしているとまた、左手のルーンが光りだした。左手の補助魔法が効きだしたのだらう、移動速度が上がりがり体が軽くなってくる。舞華の補助魔法より極端な効果が出ている。

そのまま、勢いに乗り一体ずつ倒していく。短剣とはいえ一般にイメージするより長い刃渡りがあるため細くなっている胴を薙ぎ払い倒していくと、倒れた直後にワルキューレは薔薇の花びらに戻っていく。

最後の一体を倒すと才人はギーシュに向かっていく。短剣を左手に持ち替え右手で拳を作りギーシュを殴りつける。そのまま倒れる前に左手で短剣ごと胸ぐらをつかみ右手で再び殴り続ける。ギーシュが倒れマウンティングの体勢になりながらも殴り続ける。残念ながらギーシュは失神しているが才人が計算しているように右手からバラの造花を取落さなかった。杖を手放さなければ負けではない。仕方ないのでそのまま殴り続けることにしたが、再び才人は計算違いをした。

だれか止めてくれると思ったのだが、残念ながら貴族の友人を含め学生から止めに入るものはいなかった。

「お兄ちゃん、もうその人は気を失ってるからお兄ちゃんの勝ちだよ」

「才人、もうやめなさい」

舞華とルイズがそう言うことに対して才人は、

「奴は決闘といったんだ。決闘の決着を決めるの条件は？」

「杖か武器を手放すこと……」

二人ともギーシュがこの状態でも杖を手放していないことに気が付いた。

「才人、ギーシュの杖を奪ってもいいのよ！早く奪いなさい！」

ルイズが才人の勘違いに気が付く。

「あ、その手があつたか」

才人が間抜けな声を出す。

「ばか……」

才人は短剣を右手に持ち替え左手で杖をつかみ、そのまま引き抜く。杖は抵抗なくギーシュの手から抜け落ちた。どうもバラの花びらと葉の部分が引っ掛かっていたようだ。

やっと、惨劇が終わると、先ほどギーシュに詰め寄っていた女生徒二人がギーシュに向かって走ってきた。一人は魔法治療をしようとしているのだろうがどうもうまくいかないようだった。

「秘薬がいるわ、水の魔法だけではだめだわ」

ヒステリックに叫びだし、周りが水の先生を呼んで来いだの騒がしくなってきた。

「やりすぎた？」

「ひょっとして頭にダメージが来てるのかも？」

「パンチドランカーかな？」

「ボクシングの人がなるやつ？」

「そそ」

「あんた達何のんびりしているのよ！ギーシュなんてあんたの敵じゃないんだから手加減しなさいって言ったでしょ！」

俺と舞華が話をしているとルイズが切れて会話に割込んできた。

俺がギーシュの周りにいる人垣を強引に引き剥がしにかかる、みんなおびえて最初の二人の女生徒以外離れていった。二人はおびえながらもギーシュを守るようにギーシュの脇で座り込んでこちらを見ている。

「こんなのすぐ治せるから見えていな」

俺がそう言うと、舞華がギーシュに向かってヒールの魔法をかける。この世界では多分舞華の治癒魔法はチートなんだろうなと思いがら見ていた。

ギーシュの周りに光の輪が広がると同時に光の柱が立ち上がった。光が収まるとそこには傷一つなく、穏やかな呼吸をして寝ているギーシュがいた。

「まあ、殴られたのは多少痛かっただろうし、気絶してたからね。そのうち起きてくるよ」

俺はそういうと、ギーシュに造花のバラでできた杖を置くと舞華と一緒にルイズの元へ戻る。シエスタはなんだか呆けていた。

「シエスタ？大丈夫か？」

「あ、え、ミスタ・ヒラガ、ミス・ヒラガ失礼しました。こ、これ、これまでの暴言お許しください」

突然シエスタが謝り出した。

「シエスタ、何謝っているの？」

突然のことに、俺はそれだけ聞くのが精いっぱいだし、舞華は逆にシエスタが移ったかのように呆然としている。

「いえ、そんな他国の貴族様とは知らずに・・・」

「いや、それ違うから、前にも言ったとおり俺は魔法が使えないし、舞華は使えるけど貴族じゃないから」

「そ、そうです。わたしとお兄ちゃんは平民なんですよ」

「で、でも学園の生徒の方でも治せない怪我を簡単に直しました。」

「ああ、それは召喚される前に教えてもらったんだ。舞華は素質があるからって、魔法の先生にね。俺は素質無いから生きるために剣を覚えたんだ。俺達はもともと魔法も剣も使えないこっちでいう平民だったんだ。だからシエスタと同じ」

シエスタにはそうだったが、なにかシエスタは申し訳なさそうにしていた。

「もうそろそろお昼の授業ですね」

舞華がそう言うと、ルイズを促し俺たちは教室へ向かい、シエスタは厨房へ戻っていった。

「あの少年は勝ちましたね」

「うむ、そうじゃの・・・しかし?」

「どうかしましたか? オールド・オスマン」

「あの妹の魔法じゃよ。彼女の魔法は我々の知っているものとは全然違う。短剣を杖のように使っていたが、系統魔法とも違うようじゃ、エルフの精霊魔法でもない。あの時見た魔法は詠唱が違うだけで同じものに見えたんじゃないかなあ? それに兄の少年もそうだ。ガンダールヴのルーンを持っているとはいえ、そのルーンに頼らんでもグラモンの息子は敗れていたじゃろうて。さて、どうしたもんじゃ・

・・」

「オールド・オスマン。やはり城には知らせないのですね？」

「当然じゃ、あのぼんくら共に、玩具を与えるわけにはいかん。戦争の火種を作るだけじゃ」

「院長の深慮には頭が下がります」

「うむ、しばらくは様子を見るだけじゃな」

「分かりました」

「ダーリン！素敵！」

キュルケが興奮して叫んでいる横で、唯一と聞いていいこの学院の友達が決闘を見て興奮している横で、本を読んでいるだけに見える少女は珍しく本を見ているようでありながらそっちのけで決闘の様子を見ていた。

ギーシュとの戦いをキュルケと一緒に見ていた青い髪の少女・・・タバサは普段から感情を表に出すことはないが、この決闘では傍からはわかりにくいのが驚くことばかりだった。特に最後に舞華がギーシュに対する治癒魔法を見たときはほんの一瞬であつたが目が大きく開き見入っていた。

ハルケギニアの治癒魔法とは違う系統の魔法、秘薬がなければ魔法の効果も薄く、魔法の効果もなければ秘薬の効果も薄いのだが、あの舞華の魔法は秘薬の存在の關係なくあれだけの顔の腫れや出血を一瞬で元通りのギーシュの顔に戻した。

それにあの兄の強さ、魔法など關係なくゴーレムを投げ飛ばし、剣で切り裂いた。

自分は母様の病を治したい。

父様と母様の仇を討ちたい。

彼等の力を借りることができればそれは・・・

巻毛の少女は考えていた。彼の傷はただ殴られていただけのものだった。ギーシュはただ殴られていただけだった。

だけど、自分の水の魔法ではギーシュの傷を和らげることは出来ても完全に直すことは出来なかった。それをあのルイズの使い魔の妹という少女はいとも簡単に直してしまった。

東方の魔法と剣技はハルケギニアの魔法より優れている、だから彼らはあれだけ冷静にいられたのだろう。

ゼロゼロいつていたがそのゼロの召喚した使い魔は、平民なのにメイジを恐れるどころか見たところ手加減したようだ。そういえば誰かが下手すると国際問題になるって噂を・・・

ハルケギニアでも人口だけなら平民が圧倒的多い。彼等のいた平民の国が彼らを取り返しに着たらどうなるのだろうか？そういえば、学院長とミスタ・コルベールは彼らにかなり便宜を図っている！

彼等の事は成行きに任せるしかないのかもしれない。

それより私にも彼女の治癒魔法を覚えられるのかしら？うまくいけば実家の苦しい家計を助けることもできるかも？

「オールド・オスマン」

「なんじゃね？」

「彼らのことに関してどうしましょうか？」

「どつとは？わしらに出来る事は見守るだけじゃろ？」

「いえ、彼等の魔法やスキル？でしたか、それに対するの説明です」
「なるほどのう」

「彼女の魔法は四系統でないのは明らかです。また精霊魔法でもありません」

「それはきまつとる。東方の我々の知らない魔法じゃ。あとは食事の時にでも、わしのほうから説明しよう」

「ありがとうございます。オールド・オスマン。生徒たちに動揺が走っていますし、ここでつまらない騒動が起きると困りますので」

「じゃのう」

結局その日の夕食時に、学院長オスマンとして彼等の正体として、東方より召喚された学生であり、兄はメイジ殺しとしての腕を持つ剣士、妹はハルケギニアの四系統でも精霊魔法でもない東方独自の魔法を使うメイジとして紹介された。

ギーシュの決闘を見たものはそのメイジ殺しとしての才人の腕と東方のメイジとしての舞華の治癒魔法について納得し、見ていない者はゼロが変わったものを召還したと認識したのであった。

ただこの説明はハルケギニアの常識と合わないところがあり、つまり舞華がメイジなのに才人が魔法を使えないということであった。

ハルケギニアでは魔法は血統に従って発現する。つまり親がメイジなら子は必ずメイジになる。平民は絶対にメイジになれない。この常識に反していたのであった。また召喚したのが『ゼロのルイズ』であったことからもう一つの噂が学院に秘かに広まっていった。

物腰が貴族然としている二人は実は舞華が東方のとある国のやんごとなき血筋を引くものであり、才人はそれを護衛するメイジ殺しの剣士であり、何か事情があり、やむ得ずルイズの召喚に従った。ということであった。

かなり強引な話だが、ゼロが召喚したにしては能力が釣合わない二人であり、嫉みやつかみもありません。少なくとも貴族の生徒の中では半端真実として流布していった。

「えっ、明日休みなの？」

「明日は虚無の曜日。だから学校の授業は休みなのよ」

「そうか、じゃ、明日は部屋の片づけかな？」

「ち、ちち、ちょっと、ま、待ちなさいよ！」

「なに？」

「明日はトリスタニアに行くわよ！」

「トリスタニア？」

「王城があるの。トリスタンの首都よ。そこで買い物しながら街を色々説明するわ」

「いいね」

「お金ないですよ」

「そんなもん、私が出すわよ。ついでにトリスタニアにあるヴァリエールの館に行くわよ。お母様が来られるって、手紙に返事が来たの。あんた達を紹介しておかないといけないからね」

ルイズはついでの用事を逆にして、才人たちへ無意識に説明していた。彼女にとって母親は別次元の苦手な存在だったのだ。

「そうか、じゃ、いつ出かけるんだ？」

「馬で三時間くらいかかるから朝、食事をしたらすぐよ」

「分かった、ああ、それと・・・」

「なに？」

「シエスタも連れて行っていいか？」

「シエスタ・・・？ああ、あのメイドね。どうして？」

「休みが出来たら、舞華のクリームやら石鹸やらの材料を買っ約束してたんだ。城下町ならそういった店もあるだろう?」

「そういえばメイドたちが言ってたわね。舞華の作るクリームのおかげで手荒れがよくなったって」

「評判いいみたいだからね。舞華が種類を増やすって言ってたからな」

「そうなの?」

「ええ、人それぞれ肌質も違うので・・・専門じゃないから、言っほど種類を増やすわけじゃないですよ」

「じゃ、そろそろトレーニングに行くよ」

「ねえ、体鍛えると魔法もうまくなるの?」

「舞華も一緒にトレーニングしてるってこと?..?どのなの?」

「え、やらないよりやったほうが調子いいですよ。私の場合は」

「そっか・・・じゃ、私もやる!」

「それじゃ、いきなりやると体痛めるから、最初はストレッチとゆっくり走るといいよ」

「わかったわ。ストレッチって何かわかんないけど優しく教えてよ」

「なんだか疲れた・・・」

「初めてなのに飛ばしすぎるから・・・」

「ミス・ヴァリエールは頑張りすぎだと思えますよ」

三人が休んでおしゃべり中の横で俺は一人で腕立て伏せをやっていく。

さすがに舞華も毎日やっているとはいえ女の子だし、偶然会ってからルイズと一緒にトレーニングをしていたシエスタは、のんびりとした感じで感想を言っている。

三人は舞華がこちらの世界に持ち込んだスウェットスーツを着ている。

腹筋や腕立て伏せのような筋力トレーニングを終えた俺は、日課の素振りをするため木刀をとった。

「あれ、あんた剣持ってたんじゃないの？なんで木の剣を使うの？」

「木刀と言って練習用の『刀』という俺の国の独特の剣だよ」

「じゃ、さ、ちゃんとしたやつもあるんだ？」

「これだよ」

俺は赤い世界で偶然手に入れた日本刀をルイズに見せた。

「変わった剣ね」

「俺の国は鉄を溶かして鋼を作れなかったからな」

「鉄？鋼？これは鋼なの？鉄じゃないの？」

「あはは、ここは魔法でなんでも作っちゃうからごちゃごちゃなんだよな」

「????」

「鉄というのは鋼を含めての総称と思えばいいよ。で、鋼だけこれもあるいろいろな種類があるけど簡単に言えば目的に合わせて鉄に混ぜ物をした金属、合金といえいいかな？」

「合金？」

「まあ、話が長くなるから合金のことはまた今度話すよ。」

「本当は鉄に少し炭素・・・簡単に言えば炭だね。これをほんの少し、一キロ当たり二から三グラム含ませれば出来るんだけど。俺の国では昔、石炭が手に入らなかつたんだ」

「石炭からコークスという物を作れると鉄を溶かして鋼を作るのも簡単なんだけど、ないから炭で鉄を柔らかく熱してハンマーで叩いて伸ばして、折り畳んでまた伸ばして、それを繰り返して刃物にす

るのに一番いい鋼になるまで繰り返したんだ」

「で、時間がかかるから刃の部分全部を鋼にするともったいないので切る部分とそれ以外で違う材質というか、刀の本体に刃になる鋼を巻きつけてあるんだ。で、それを焼き入れ。金属を硬くする工程で刃の部分が反り返るんだ」

「はあ、あなたの説明は知らない言葉が多くて長いから理解するのが大変よ！」

「あはは、でも端折ると余計にわからなくなると思っよ」

「あによー！」

「それでね、その炭素・・・炭の量なんだけど、量によって鋼の強さや特徴が変わるんだ。刃物にするのに適してるのがそれだけということ。加工しやすくするならもっと増やしたり他のものを足したりしないといけないんだ」

「じゃ、あなたは作れるの？」

「無理」

「何で知ってるのに無理なの？」

「俺達の元々いた国はメイジがいなかったんだ。それはわかるな？」

「う、うん」

「そうするとメイジ以外で何か作ろうとすると、それに関わるみんな

ながそれについて基本的なことを知っていないといけないんだ。でない……例えばこの刀だけど、鉄と炭の割合を適当にすると、刃が折れたり曲がったりするし、切るとすぐ切れなくなるとか」

「だからいい加減なことをしないように、みんなが基本的なことはわかっていないといけないんだ」

「科学はみんなが同じように基本的なことを理解してるから使えるんだ。逆に言うと、前にルイズがやったみたいに誰がやっても同じ結果が出るんだ。出ない場合は何かが違っているんだ。その違っていることを解き明かしていくのが科学なんだ」

「そ、そう……」

「じゃ、じゃああんたから見て魔法はどうなの？前に言ってたけど未開人の使う術なの？」

「……未開人って、まだそんなこと思ってたのか？魔法は魔法だよ。同じことをやっても人によって結果が変わってくる。科学的でないのは確かだな」

「でも、魔法の力を……流れとか色とか大きさが見えるようになると同じ結果が出来るようになれば、そうしたら魔法も科学だね」
舞華が補足するように付け加えた。

「そっか、舞華は魔法が『見える』のね」

「うん」

「舞華には魔法も科学なの？」

「真似ることは出来るよ。自分で考えて組合せるのはまだ無理だけど、アレンジは出来るよ」

舞華はそういつて立上ると、今度は杖・・・いつの間にか持ってきたんだ？

舞華は真つ赤に光っているネイチャークラブを手にすると、地面に向かつて杖を振る。

そこから立上ったのはギーシュが作ったワルキューレだった。

「これがオリジナルですね。お兄ちゃん切ってみて」

「ええ、いきなりなんだよ」

仕方なしにダイナスティ・ナイフを取出しワルキューレの左腕を切断する。

「切口を見てもらえます？」

「ギーシュと同じだな」「よね」

「はい。じゃ、今度は・・・」

ギーシュレプリカのワルキューレが崩れていく。

舞華が再び杖を振る。今度はもっとはつきりとした造形のワルキュー

「ーレだ。これってどこかのゲームで見たことあったような？グラマ
ーだしズボンはいてるけど上着の裾がミニスカート風になっている。
なんだっけ？」

「お兄ちゃん、また切ってみて」

馬鹿なことを考えていると舞華に急かされ、ごまかしながら同じよ
うに左腕を切断する。

切断面がきれいな赤銅色だ。

「ガンメタル？」

「お兄ちゃん、ガンメタルって何？」

「青銅の一種だよ、銅に対して錫が一割くらいだけ？昔の大砲の
材料に使われたからそういう風に言うんだ」

「へえ、せっかく調べて驚かそうと思ったのに、知ってたんだ」

「う、うん、でもよく作れたな」

「こっそり練習したんだよ」

「そっか」

「ねえねえ、どういふことよ。わかるように説明して」

「えっと、ルイズは青銅ってどういふ物か説明できる？」

「どづいう物って、青銅は青銅でしょ？」

「青銅っていうのは、銅と錫や亜鉛という金属の混ぜたものなんだ。で、ガンメタルっていうのも青銅の一種で銅と錫の混ぜたものなんだ」

「じゃ、ギーシュのワルキューレと舞華が作ったワルキューレの違いは？切れた腕が青銅の色かピカピカに光ってるかだけど・・・」

「そう、それでいいよ。電気を作る実験をしたときに、白いコインが白い粉ぼくなって、銅貨が黒ずんだろ？あれは錆びてきてるんだ。同じように青銅の青緑っぱい色は錆びの色なんだ」

「錆たときの色なの？」

「そうそう、青銅は表面がさびるとあんな色になるんだ。それで、ギーシュのワルキューレは芯までわざわざ錆びているから。簡単言うと、錬金で青銅を作る。全体を、中身まで青銅色にきれいに錆びさせる。そういう二度手間をかけているようなんだ。もちろん魔法だから一度にやっているんだろうけど」

「で、錆びだから元々の強度が弱いはずだから、魔法をさらに使って強度を上げてるんだと思う。投げた時の感じでそう思ったよ。舞華のワルキューレは表面だけ錆びさせているから中は本来の青銅の強度なんだ。同じ魔法力を使ったら、つまり、外側の強度を上げるのにも魔法力を同じだけ使ったらギーシュのほうが弱くなるだろう？後、舞華の青銅は元々大砲に使うのに適した物だから強さも折り紙つきなんだ」

「じゃ、科学を知っていたほうが同じ魔法を使うにしても強くなる

「？」

「全てじゃないだろうけど、基本はそうなると思うよ」

「才人！改めて使い魔の主人として言うわ。私に科学を教えなさい！」

「わかってるよ、だけど、学院の授業と並行してだから大変だぞ」

「わかってるわよ、だけど私も魔法を使えるようになりたいの、その為には何でもするわ」

「あの、ミスタ・ヒラガ・・・」

「シエスタ？何あらたまつて？」

「えっと、私にも科学って覚えられます？」

「大丈夫だよ、科学はもともと魔法を使えない俺達のご先祖様が長い間かけて積み上げてきたものだから。覚える気があるかどうかだけだから」

「じゃ、よろしく願います。ミスタ・ヒ・・・」
「ちょっと待って、ミスタはいらない。俺もそんなに偉くないし、勉強できなかったしな。今まで通り才人でいいよ」

「で、でも呼び捨ては・・・じゃ、才人さんでいいですか？」

「ああ、それでいい」

「えっ、えっと、それと、言おうと思って今まで言い出せなかったんですが……」

「なに？」

「『刀』とか『日本刀』っていうのを、うちの曾祖父ひいおじいちゃんが持っていました」

「なんだって!？」

「うちのひいおじいちゃん、ある日、ふらりとわたしの村に、ひいおじいちゃんはあらわれたそうです。その時の持っていたものが『刀』とか『日本刀』といわれる剣だったそうです」

「へえ、侍だったのかな？」

「さむらいってなんですか？」

「俺の国の国を守る騎士だな」

「でも、うちのひいおじいちゃんは、頭がちよっとおかしいって言われてました」

「なんで？」

「『竜の羽衣』で東から空を飛んできたって……」

「空を？」

「そうですね。村の人もその竜の羽衣で飛んでみろって言ったん

ですけど、ひいおじいちゃんは何のかんのと言い訳して、だから皆が信じなくて、おまけにもう『飛べない』って、そういつて村に住みついちゃって。一生懸命働いてお金を作って、そのお金で貴族にお願いして『竜の羽衣』に『固定化』の呪文までかけてもらって、大事に大事にしてました」

「舞華どう思う？」

「『竜の羽衣』って、羽衣だから・・・空を飛べるの？・・・オリンピックで出たロケット人間のこと？」

「空飛べるからパラセーリングとかスカイダイバー？カイトに載って空飛ぶやつ？でもそれじゃもう飛べないっておかしいよな？」

「一度行ってみたいですね。ひよっとして日本人かもしれないですね。シエスタさんのひいおじいちゃん」

「だな、機会があれば行ってみよう。前に出身はタルブと言ってたっけ？」

「そうです。ラ・ローシエルの向こうにある、広い草原があって、いいブドウがとれて、ワインで有名なんです。それに変なひいおじいちゃんだけど、ひいおじいちゃんの教えてくれた料理で、今では村の名物になっている『ヨシエナヴェ』もおいしいですよ」

「ルイズ、面白そうだし今度行ってみよう」

「そ、そうね、まあ、いいわね」

なんだかおもしろくなさそうにルイズが返事をする。才人は勝手

に話を進めるのが気に食わなかったのかな？と思ったがいつもの事なので気にしなかった。

「なんか話ばかりして結構いい時間になったな。仕方がない、今日はここまでにしよう」

才人がそう言うと舞華も杖を仕舞い、才人も剣を仕舞った。

シエスタのほうを才人が向くと、じつとシエスタのほうを見つめて

「シエスタってひいおじいちゃんに髪の毛や瞳が似てるって言われるだろう？」

「え、ええ、何でわかるんですか？」

急に才人に見つめられて、顔を近づけてきたため、少し赤くなってシエスタが返事をする。

「俺や舞華も髪の毛が黒くて瞳も黒いだろう？これって日本人の特徴でもあるんだ。もっともみんながみんなこうじゃないけどな」

「汗かいたしシャワーでも浴びていこう。俺は上のやつ使うな」

「はい」

どうも調子がおかしい、悪いわけではない。どうも舞華がいつていたルーンの影響なのだろう。実力以上に武器が使えてしまう。武器の詳細までわかってくる。というか頭の中に浮かんでくる。

木刀を持ってきたのは武器とルーンの影響を調べるため。どうも、魔法力のついている武器はルーンの効果を自分の意志では押さえる

のは難しいようだった。木刀と日本刀はルーンの影響を意志の力、
というかルーンを使わないように、と考えていると影響が減ってき
ていた。完全ではないが、何とかかなりそうだ。自分の意志という
か思ったようにコントロールできない武器は危険な感じがしている
ので魔法力のついた武具はしばらく使わないようにして、日本刀と
木刀を使って訓練をして、完全にコントロールできるようになれば
また、エルモア・アデンの武器を使うようにしようと思っていた。
それまではこっちの武器も必要かな？
そういつつ、ポッケにはダイナスティ・ナイフを入れているのだが。
またルーンについては舞華にも見てもらって色々相談に乗ってもら
おうと思っていた。

「少し遅いし車使うか？」

「たまには『ストライダー』か『ワイバーン』使ってもいいんじゃない？」

「『ストライダー』はシエスタが酔うとだめだから『ワイバーン』
を出すよ。そういえばしばらく呼んでなかったな」

舞華と俺がポッケから角笛を出し、吹くと魔法陣が地面に浮かびあ
がり光とともにワイバーンが現れた。

「「きゃ、きゃー！」」

ルイズとシエスタが驚いて叫んでいる。舞華はそれを無視して自分
の召喚したワイバーンに乗り込むとシエスタを呼んだ。

「シエスタさん、平気ですよ。こちらへどうぞ」

「さあ、ルイズ、乗った乗った」

ルイズの手を引いてワイバーンに乗せる。

「これってあんた達の使い魔？」

「使い魔っていうよりペット？かな」

見ると舞華のワイバーンが先に飛び上がっている。

「さあ、行こう」

そういうと、ワイバーンは飛び上がり舞華に続いた。

「ここに呼ばれる前に、ドレイクのエクサリオンから卵を取り返してくるようをお願いされてね。ドレイクというのはドラゴンの一種で人語を話すんだ。で、その時に俺と舞華が一つずつ卵をもらったんだ。」

「実はドレイクの卵は色々なモンスターが食べたりするために、ドレイクが奪われることが多くてモンスター討伐の時にまれに見つけることがあるんだ。持ち主が分かれば返しに行くんだけど、稀に分からないのがあってね。親のドレイクが討たれることもあるから。」

「それでそういうのは舞華が卵を孵すんだ。舞華は割と知性のある生き物に好かれることが多くて野蛮なオークなんかと交渉すること

もできるんだよ」

「無駄に戦うより交渉したほうがお互い良いからね」

「それで舞華はワイバーンやストライダーといったドラゴンの仲間だけでなく色々なペットを持っているんだ」

「普段はマジックアイテムの中で寝ているから必要な時だけさつきみたいに呼ぶんだ」

「へえ、便利ねえ」

「そうかな？いつも一緒じゃないし、アイテムの魔法が干渉して、一人一匹ずつしか出せないんだ」

ワイバーンの上で話をしているといつの間にか寮の塔にいた。舞華は使用人の建物のある塔と塔を繋いでいる外壁へ向かっているようだった。

16 学院 - 4 (後書き)

色々才人や舞華がルイズたちに説明している場面もありますが、正確じゃないところ思い違いをしているところも多々あります。

彼らなりに勉強した事、調べた事なんかを言っていますが、

勉強していたのは10年以上昔になります。必要最小限のことだけ覚えていたという感じです。

中にはエルモア・アデンで必要なこともありましたから。

その時覚え直した事、改めて勉強して覚えた事なんかもあります。

感想などあればよろしくお願いします。

17・王都・1（前書き）

ルイズの発案に従って王都へいきます。原作より一週間早いですが彼と出会います。

才人自身がハルケギニアへ来るまでに経験を積んでいる関係上、原作と違いかなり影は薄くなります。

どうぞよろしく願います。

普段より少し早起きをした才人は、その物音で目覚めた舞華と一緒に早めの洗濯とトレーニングをした後、コンテナハウスへ向かい着替えをした。

といっても学生服なのだが、俺も舞華も元の世界の学生服、冬服だ、季節的には少し暑くなるかもしれないが、こっちのほうが夏服より少しは良く見えると思うので二人で相談して決めた。もちろん今から着ているは暑いので上着は二人とも脱いでいるが。

一応鞆を持って、二人とも手提げかばんで背負うタイプではない。さすがにルイズの母さんに会うのに不味いだろうということ、あと鞆の中に機関銃を、小さな物のほうがいいだろうから相変わらず、俺はUMPと9ミリ拳銃、舞華がVz・61とP230をそれぞれ予備の弾薬と一緒に持ち歩くことにした。

ポッケの方には才人は剣と盾と重鎧、舞華は杖と魔法剣それに盾とローブを入れてある。舞華が杖と魔法剣を持っているのは、杖の方が絶対的な威力が上だが、剣の方が振り回しやすく舞華の好みに合っているからである。使い分けだ。

あと舞華はバスケットを持ってきた。そういえば保冷剤がどうのといっていたっけ？ケーキでも入っているのだろうか？いつの間に・・・わが妹ながら相変わらず侮れない・・・。

部屋に戻り、ルイズを起こすと、シエスタを呼んで部屋で一緒に朝食を食べていると、

「今日は昨日のワイバーンで王都へ行くからね」

「早く着くから街で買い物でもしましょう」

「なんか張り切っているな」

「舞華、お母様は風のスクエアなの。色々な魔法を見せてもらいましょう」

「はい」

新しい魔法を見られるからか、王都という初めて行く場所に興奮しているのか舞華の機嫌もいいようだ。

「シエスタも来たようだし、それじゃトリスタニアへ行きましょう」
ルイズの掛け声でそれぞれ自分の荷物を持って部屋を出る。寮の部屋を出て馬小屋の辺りに出たところで、ルイズが言う。

「じゃ、ワイバーンを出して」

「何でこんなところで？」

「他の人に見つかって騒がれても嫌じゃない」

「……じゃ」

俺と舞華がそれぞれワイバーンを呼び出す。

昨日と同じように二手に分かれて乗込む。

キュルケは珍しく朝早く起きた。昨日は才人を待ち受けていたが、才人も舞華も隣の部屋のルイズも部屋に戻ってきていなかった。と思いきやいつの間にか部屋で寝ていたのである。

理由はキュルケは廊下に使い魔のフレームに待ち伏せさせていたのだが、才人たちは面倒だったので窓から直接部屋へ戻ったからである。階下の寮の部屋にいる学生や五階にいる親友の留学生などは、普段からそうやっているが、魔法でフライもレビテーションも使えないルイズや妹はメイジであるものの、本人は魔法の使えない才人が窓から部屋に戻るとは考えもしなかったのである。

そういつたわけで昨日は空振りをしたキュルケであったが懲りもせず、せっかく早起きしたのだから朝の食事でもいっしょにと思い、両手をあげてのびをした後、ふと窓を見ると二頭の翼竜が、よく見ると乗っているのはルイズと才人、もう一頭には先頭に乗っているのは舞華に見えるが後ろにいるのは服装は学院のメイド服の様であり見かけない者である。驚いて着替えると即、部屋を出て、五階にいる親友の部屋へ向かった。

タバサは朝早くから部屋で本を読んでいた。虚無の日はタバサが自分の好きな本の世界に浸れる貴重な日であり、誰にも邪魔にされずに過ごしたい日だった。

その平穩を破るようにドアがどんと叩かれ始めた。初めは無視していたのだがだんだん激しく叩かれ始めた。

手にした杖を振り自分の属性魔法であるサイレントをかける。

再び静けさが部屋によみがえり自分の世界に浸り始めた。

しかし今度はドアが勢いよく開かれた。タバサは無視していたが侵入者はタバサに向かって何か言っているのだがサイレントの魔法が効いていて何も聞こえない。

侵入者はタバサの本を取り上げると肩をつかんで無理やり侵入者のほうを向かせる。

仕方なくタバサはサイレントの魔法を解いた。

彼女、タバサが部屋にいないはずがない。彼女が時々学院からいなくなることもあるが、彼女の国の用事ならおそらく使い魔も一緒に行動するはず。仕方ないのでアンロックを使って強引に部屋に入り込む。想像通りタバサは本に集中している。それでも私の微熱のためにはタバサの使い魔が必要、絶対にタバサに協力してもらおう！

「タバサ。今から出かけるわよ！早く支度をしてちょうだい！」

「虚無の曜日」

「わかってる。あなたにとって虚無の曜日がどんな日だが、あたしは痛いほどよく知っているわよ。でも、今はね、そんなこと言ってもらえないの。恋なのよ！恋！」

「そうね、あなたは説明しないと動かないのよね。ああもう！あたしね、恋したの！でね？その人が今日、あのにつくいヴァリエールと出かけたの！あたしはそれを追って、二人がどこに行くのか突き止めなくちゃいけないの！わかった？」

タバサは静かに首を振る。

「出かけたのよ！竜に乗って！あなたの使い魔じゃないと追いつけ

ない。」

竜？おかしい。ミス・ヴァリエールは騎竜を持っていなかったはずだ。実家に呼び出されたのだろうか？あの謎の兄妹が絡んでいる？調べておいてもいいかもしれない。

タバサは頷くと立上り、窓を開け、口笛を吹いた。

そして窓枠によじ登るとそのまま窓から飛び降りた。

続いてキュルケも、こちらはレビテーションを利用して優雅に窓を潜り抜けた。

落下する二人を青い影が受け止めた。青い影は二人を受け止めると力強く羽ばたき、虚無の日の陽光を受けとめてその姿を現した。

「いつみても貴女のシルフィードは惚れ惚れするわね」

キュルケが突き出た背びれにつかまり、感嘆の声を上げた。

タバサの使い魔、ウィンドドラゴンの幼生、シルフィードは気持ちよさそうに高く飛び上がっていった。

「どつち？」

「わかんない・・・慌ててたから。でも、ルイズが四人でドラゴン二頭に乗っていったからトリスタニアの方だと思う。実家に帰るにはまだ早いしね」

「・・・二人乗りのドラゴン二頭、わかる？」

ウィンドドラゴンは短く鳴いてさらに翼をはためかせていった。さつき学園の方から飛び立ったドラゴン・・・ワイバーンに似ていた、を見ていたウィンドドラゴンは飛び去ったほうを見つめるとその視力で後を追い始めた。

才人たちは急ぐわけでもなかったので、ワイバーンの速度としてはかなりゆっくりとした速度でトリスタニアを目指していた。

「わあ、舞華さん気持ちいいですね」

昨日、シエスタが竜に乗るときは恐ろしさで涙目であったのだが、今日、朝日の中で初めて乗ったワイバーンが思いのほか気持ちのよいものであることに「ご機嫌になっていた。」

「ええ、空を飛ぶって気持ちいいですよね」

戦闘状態で飛ぶときには、たとえ魔法生物のワイバーンであっても、高度を取れば高空ゆえの寒さと酸素が少なくなることによる息苦しさ、そして気圧変化による高山病、さらに戦闘機動をした際の高Gによる体への疲労、すべてを経験している舞華は、だからこそ、そういうことに縁のないシエスタに対してただ、空を飛ぶ楽しさを今は一緒に感じていた。

「思ったよりゆっくり飛ぶのね、これなら実家の竜籠のほうが早いわね」

シエスタがいる事と戦闘でもないのに魔法生物とはいえ無理して消

耗することも無いと思えば低速でそれほど春の空でも寒くならないように高度も適当に下げ気味のコースを取っている才人の気遣いは主様には通じていないようだった。もっともそれなりに魔法と籠といふ入れ物で守られているのは違い、少し本気を出せばこの主はたちまちご機嫌斜めになるであろうことは想像に難くないので才人は無視しているのだが。

「まあ、急ぐわけじゃないのだろうか？ならんのんびり行こうよ」

そういいながら才人は舞華と一緒にそれぞれのワイバーンを利用して空からの写真撮影とビデオ撮影を行っている。これは戦略自衛隊のコンピュータソフトと赤い世界のパソコンソフトを使って簡易式の地図作製システムを利用して地図を作るためである。

才人と舞華はそれぞれ忙しかった。これからこの世界で生きていくのに生活様式は中世から近世といったところなのに、魔法が進みすぎて、地図は手書きの域を出ておらず測量とかそういったものはまだまだまともな物はないようだった。それどころか、六千年、ルイズはハルケギニアを何かと六千年の歴史と言っているが、魔法以外は実質六千年前のままだろうと内心で毒付くようなこともしばしばであった。

そこで、自分達の持ち込んだものと知識で使えるものは使って自分たちの居場所を作ろうと、今回の王都への旅もその一環として考えていたのであった。

ビデオや写真の撮影はワイバーンに固定して半自動で撮影を行い。あと自分達で思いつくままに撮影していた。ついでに言うと、四人は戦略自衛隊の通信システムを利用して相互に無線で通話ができるようにしてある。また、カメラの望遠機能はルイズとシエスタが

珍しがっていたので、カメラではないが双眼鏡を二人に渡してある。これは二人がそれぞれ使うつもりで持ってきたものであったが仕方がないと割り切って二人に貸しておいたのだった。もっともそれらのことに関して相変わらず一悶着あったのだが、ルイズの、まったくこの二人は。で勘弁してもらった。

「・・・あれは、ツエルブスター？」

ルイズが呟く。三人がルイズの方を見、そしてルイズが見ている方へ眼を向けそれぞれが望遠レンズ付きカメラや双眼鏡を覗くと後方から青い竜がこちらに向かって飛んできたのが見えた。

「お兄ちゃん、大体二千五百・・・」

舞華が観測手用の望遠鏡を使って距離を教えてくれる。

俺と舞華はワイバーンをさらに速度を落として青い竜を待つ、向こうは急いでいるようだが、挨拶するくらいの余裕は有るだろうからと思ったらルイズが何か言っている。いきなりイヤフォンから大声で何か言ってきたので聞き取れないが耳がキーンとする。横を見ると舞華とシエスタも耳を押さえている。

「ダーリン？何やってるの？」

「おはよう、ちょっとね。それにしても朝から忙しそうだな？」

「ダーリンを探してたのよ！これからトリスタニアで朝食なんてどうっ？」

「朝は食べてきたけど・・・まあ、お茶飲みながら付き合っよ」

「何勝手なこと言ってるのよ！昼からお母様に会うのに」

「でも午前中は散策するだけだろ？え・・・と、トリスタニア？をさ」

「ツエルブストーとな」少しは静かにしろ。舞華たちが耳押さえるぞ、貴族の子女は慎みを持つんじゃないのか？」・・・」

「わかったわよ・・・」

「だそうだ、着いたらどこかで、軽いやつでいいよな？その前にお金を作らないとな」

最後は舞華の方を向いて言うと舞華も肯いた。

「お金なんて私が出すわよ！」

「ダーリンの分は私が出すわよ、気にしないでいいわよ」

「ここで暮らすから、多少でもお金はあったほうがいいだろう？俺達の持ち物でお金に換えられそうなのやつを持ってきてあるんだ。先に食事してその時に見てくれる？」

「「わかったわ（よ）」」

無線のレンジを変えて、こっそり舞華に「出来ればこっちの武器も見繕った方がいいしな？」

舞華はかすかに肯いた。

俺達がワイバーンを消すところでお約束の騒動が起きたが、あまり騒ぎ立てたくないので無視して強引に街へ向かった。

「狭いな。早く表通りへ行こう」

「せ、狭いって・・・ここがトリスタニアの大通りよ」

「ブルドンネ街。トリステインで一番大きな通りよ。この先にトリステインの宮殿があるわ」

「そこにルイズの母さんがいるのか？」

「違うわよ、別邸があるのよ。このトリスタニアの郊外に」

「なるほど・・・じゃ、取敢えずキュルケさん達のために食事に行こう」

「・・・こっちね」

聞けば平民と貴族では食事をする店が違う・・・格式というやつのような。が平民貴族両方が一緒に食事できる店も一応ある。という事でそっちへ六人が入っていった。

「良い食べっぷりだ」

タバサと叫びたか、最初席に着いたときお互い挨拶をしたのだが、時々変わる目つきが気になるのだが、大人しそうな子だ、だが、貴族らしい優雅な食べ方なのにもすごい勢いで食事を平らげている。おそらくルイズの三倍は早いと思う。

「なに？」

「あ、気に障ったならごめんよ。気持ちの良い食べ方だから見ていて楽しくなる。そう思ったんだ。でも、朝からいきなり沢山食べると内臓に負担がかかると思うぞ」

「大丈夫」

俺達四人はお茶を飲んでいる。最初シエスタは座ろうともせず立っただけで座っていたのだが、舞華が宥めて俺の隣に座らせている。席順は向い合せの席で、シエスタ・俺・キュルケ対面に舞華・ルイズ・タバサの順になっている。

「で、売ってお金に換えるって何をお金に換えるの？」

「これです」

舞華が懐から小さな箱を出した。赤い世界から、持ち出した宝石箱。これが二個。あまりたくさん持つてくるのも怪しいし、取敢えず二個だけ相場を見るために持つてきてあったのだ。

物は少し大人目のデザインだが、作りは丁寧な銀の指輪とネックレス。宝石はブラック・オパールがついている。・・・舞華に言わ

せるとオパールのサイズもさることながら縦横比も大事らしい。ちなみに舞華も青いブラック・オパールのネックレスを持っていたりする。誕生日に俺と親父・お袋でお金を出し合って買ったものだった。いまだに何故これを買ったのかよくわからないのだが、お袋曰くいつも通る宝石店でほつとくとこればかり見ていたというのだ。俺と舞華でお使い等でその店の前を通ることも何度も有ったのだが、そんなそぶりをついぞ見せたことはなかった。中学に上がった年の誕生日にお袋が言い出して買うことになったのだった。

もちろん今日の前にあるものはその舞華の持っている物より大きく、恐らくかなり高価な物だろう。おまけに銀の指輪の台座やネックレスの鎖がどう鼻屑目に見ても舞華のものより数段高価に見える。

それはさておき、舞華が出したものは珍しい物だったのか？そういえばブラック・オパールの産地で有名な物はオーストラリアとか言ってたかな？ハルケギニアではオーストラリアは地図から言っても遙か向こうの、地図に載っていないところ？だからかな？反応が面白い。

「舞華、これは何？見たことない宝石だけど？」

「東方経由でこんなのが来てるって言ってたけど。見た事はあるわ。確か選皇帝家で、誰だっけ？パーティーで着けていたのをね」

「初めて見る。なんていう名前の宝石？」

「ブラック・オパールというんです。オパール的一种です」

「あまりハルケギニアでは見ない種類の宝石ね・・・宝石のほとんどは東方から少量があるだけなの。ハルケギニアでの宝石はゲルマニアの北部で少しとれるのと真珠かしら」

「そうね、舞華。まだあるの?」

「えっと、ハウスの方にまだ少し」

「これは今日はおさないほうがいいわね。下手に出して変なやつに目をつけられると面倒だし」

「変なやつ?」

「ロマリアの腐れ神官よ。あいつらの中には平民が少し金を持っていると寄付を強請するのよ。あと、嫌なことだけど、トリステンの徴税官よ、あいつらも平民から金を巻き上げる事しか考えていないからね」

「あらま、まあ、文化は近世に近いけど、見える範囲だと中世初期に近い感じだしな」

「何、近世とか中世って」

「俺の世界での歴史の世代区分だよ。新しい方から現代、近代、近世、中世、古代、大体こんな感じで分けるんだ。」

「何でハルケギニアが近世や中世なのよ!そんなに古いつていうの!?!」

「こら、落ち着けこれは俺の世界での時代区分だといつたる?ハルケギニアはまた別に分けられるんだろ」

「・・・時代が分かれる理由は?」

今まで黙っていたタバサが急に質問してきた。

「思想と科学技術が主に分ける目安かな？ごめん俺も舞華もまだ学生でそこまで詳しくはないんだ」

「思想と科学技術とは何？」

「簡単に言うと、昔の人間は記録することができなかった。文字もなかったし、紙・・・ここだと羊皮紙かな、「紙もあるわよ」・・・ごめん、で、それらもなくしてせいぜい石や木に傷をつけることで記録することがせいぜいだった時代。技術的にも基本的な道具の一部はあったけど車はあるけど、まだ丸太を使ってコロで重たい物を動かしていた時代。そういった時代を古代といってたのかな？農業もかろうじて始まっていたけど、基本は狩猟や採集に頼っていた時代。人の行き来は歩く事だけだから移動範囲は限られていた時代。ただ中には粗末な船や、歩いて遠い距離を移動した人々もいた時代。そういう時代だったと思うよ」

「人が集まって粗末ながら、木の実なんかの採取から小麦やなんかを育てて、畑を作って、狩猟の代わりに動物を集めて育てて。そして人が集まって家を建てて町ができて、沢山の人が集まるから決まり毎が出来てそれが法律になっていく時代だね。それが中世。技術は基本的なものがそろいだして人の行き来に歩く以外に馬や船を使って遠方に行き出した時代。今のルイズたちが生きている時代の前の時代ともいえるかな？」

才人が説明しているが、歴史それもヨーロッパともなると結構怪しいのだが、日本の歴史とごちゃごちゃになりながら、TV等でみた印象などとませこぜの説明をしている。後で舞華になんか変だよ

？と言われ教科書を読み直す羽目になるのだが・・・、

「それは私のお父様やお爺様の時代の事？」

「違うよ、技術が変わっていないしね。技術が変われば人の考え方が変わるから。俺達から見ればプリミル教だっけ？その宗教の時代の後、科学技術の進化があつて、人々の考え方が変わったんだ。だから俺達から見れば、宗教と魔法技術の時代が中世、そう見えるんだ」

「じゃあ、科学技術が変わつたつて何が変わったのよ。宗教の代わりつて何よ」

「宗教の代わりつてないぞ？俺達の時代でもプリミル教みたいに教皇だっけ？いるし、協会もあるし、虚無の日の代わりに日曜日というんだけど休日には教会に行く人もいたぞ」

「じゃあ、なんなのよ」

「分権だよ」

「ぶんけん？」

「簡単に言うと、ハルケギニアでは王様がこうだ。といえば皆が従うんだらう？俺の国やそのほかの多くの国では法律を作るところである立法、法律に沿って国を動かす行政、法律に沿ってそれが守られているかを監視する裁判この三つはお互いが分かれて相互に監視していたんだ。」

「どういうことよ。それに王族や教会はどうなっているのよ？」

「関係ない。俺の世界には王様や貴族はいるんだが、基本的に一般人の生活にあまり関係ないところにいるんだ。国民生活の規範として存在しているのかな？ 国の象徴でもあるし。例えば国と国が仲良くするときには王様が直接相手の国に出向いて相手の国民に仲良くしましよつて演説することとかあるよ。場合によっては自分の国の国民に対してもね。でも、法律にのつとて国を動かすのは議会だし、その長である議長や首相、大統領といわれる役職の人だね。やめたら一般人。ハルケギニアでいう平民だね」

「なにそれ？ 教会はどうなのよ？」

「教会はというより宗教は俗世とは別に存在するんじゃないのか？ 少なくともハルケギニアではそうだろう？」

「そ、そうよ。それがどうかしたの？」

「俗世に関係ないなら、平民の生活に関係ないだろう？ ただ心に迷いを持った平民がいれば話を聞いてあげて。困っていれば助けがなければいいだけだろう」

「そういえばあったかな？ 俺は持ってきたPDAをだして、壊れたお寺の前で簡単なテントを張り沢山のひとと食事を作っているお寺の記事を出した。俺達が召喚される前に有った大きな災害。その時のネット新聞の記事だ。たまたま残ってた俺達の生きていた世界の記録。今パソコンに入っているデータやプログラムはなぜか互換があるけど赤い世界の物がほとんどだ。だからこれは貴重な記録なんだ。」

「これ」

「！、なにこれ？」

「俺の国では結構自然災害が多いんだ。台風、洪水、地震、火事、津波・・・色々ね」

「洪水と火事は分かるけど他のは何？」

「台風というのはものすごい風と雨が一緒にやってくるんだ、長いと十日ぐらいね。地震は地面が揺れて建物が壊れる。この写真は・・・いま目になっている『絵』ね。それでお寺・・・教会の建物と思ってもらつていいよ。それがある地域で台風の雨と風でその地域の建物が崩壊したんだ、それで助け出された地域の人が集まって食事をしているところ。この服を着ている人がお寺で修行している僧侶・・・こつちだと神官かな？」

「みんな、神官と違って粗末な服を着ているのね」

「災害で着替えもないからな、みんな一緒だよ。建物は崩壊したけど、お寺は広い庭があつて、そこは周りを長い年月を経た木々が囲んであるから意外としっかりしているんだ。避難するときにはそこに集まるんだ。お寺によっては地域の人が食べられるだけの食糧を貯めてるところもあるからね」

「うらやましい」

タバサがぼつりと言った。

「そうなのか？宗教の人ってそういう物だと思っていたから、それにこうなるようになったのは中世から近世現代と時代が変わるたびに宗教の役目が変わってきたからだと思う」

「普段は人々の平安を祈って、困ったことが起きたら助けるようになってきたのは、昔は薬もなくしてお祈りで病気が良くなることを願うだけだったのが、医療技術が進歩して、そう言うことをしなくても良くなったからだと思う」

「貴方は医療技術を知っているのか？」

「さつきから言うように専門家じゃなくて学生なんだ。基本的なこととは知っているかもしれないけど、知っている知識がどれほど役に立つかどうかは分からないんだ。それを知るにはこっちの技術レベルを知らないといけない。特に魔法は技術レベルだけは近世に近いように思えるから」

「知るのに何が必要？」

「文字を覚える事と本を読むことかな？色々な種類の本が必要だね。幸い学院には図書館くらい有るだろうから、取敢えずは文字かな？これは前にルイズにも言ったよね」

「分かっているわよ。そういうこともあって今日お母様に会うんじゃない」

「なあ、そろそろ街を見に行かないか？」

「だけどお金はどうしよう？」

舞華が心細そうに言った。

「その宝石はツェルブストー家で買うわよ。夏休みには実家に帰る

からその時に一緒に行きましょう。歓迎するわよ。出入りの宝石商を呼ぶから、損はさせないわよ」

「う、う、五月蠅い。今日お母様に会うからその時にお願いするからね。才人、舞華、分かったわね？」

「強引だな」

「私が決めたのよ！使い魔は主人の言うことに従いなさい！」

「はいはい」

「それにさっき言ったみたいに平民がそんなの持ってたんじゃ絶対揉めるから、うちが手に入れたっていえば、公爵家だもの周りはそのんなもある。って思ってくれるから」

「なるほど」

18・王都・2（前書き）

王都では、色々なことがあります。

治安維持上、貴族の動きというのは、色々監視もされているのではないかと、思っています。

そういったことを織り交ぜながらグダグダ話が進んでいきます。

誤字脱字の訂正です

「どういうところが見たいの？」

「服と武器と魔法の品を扱っている所かな？」

「どういこと？」

「服は俺達の服を買わなきゃいけないだろう？それとここの武器、俺達の武器も何時かは壊れるからな、それと同じで舞華のために魔法の道具やら薬草やらを、な」

「わ、分かったわよ」

「まずは服を見に行きましょう」

服は平民の着る様なやつで、簡素なものを三着ずつ選んだ。下着もこっちのに慣れなきゃいけないので舞華共々洗濯することも頭にに入れても、それなりの数を購入した。

まあ、服は普段、学生服になるから魔法学院のものと元の世界のもの、それに赤い世界で集めたものもあるので今は困らないのだが、学院を卒業すれば、俺達も成長するだろうし、そうすればここの服も着ていかなければいけないので、今から慣れる意味でも必要だと考えたのだった。

後で学院宛に送ってもらおうようにお願いをして、金額は三分の一を渡し、残りは学院についた時点で支払うことになった。貴族が平民の服を選んでいたので店の人間には不思議がられたのだが。

そして魔法の品を置いてある店と秘薬屋・・・所謂魔法に使用する薬品類、舞華が言うには通常の薬草もあるそうだ。中には麻薬の類の怪しいやつや、鉛やなんかの鉱物の毒類もあったらしい。これは日本でも鉛からとれる鉛白粉という化粧品等も有り割と有名だが、同じように使う物かわからないがそういった物も普通に置いてあったということだった。

最後に武器屋へ向かっていった。場所は秘薬屋から割と近くにあり、通りは表通りよりさらに狭く不衛生な場所にあった。

足元にはごみや泥、犬の糞かな？落ちていたりもするし、道の真ん中を歩いて行かないとやたらと汚れそうだ。

俺とシエスタ以外は宙に浮いていた。汚れないためだ。シエスタは俺が抱きかかえて、ルイズは舞華と一緒に浮かせていたというか、浮かせて手を引いていた。三人とも浮いているとはいえ直接地面に足をつけない程度の高さなのだが。

「あの、すみません」

シエスタが顔を赤くして俺の腕の中で小さくなっている。

「それはこっちのセリフだよ。俺の我儘でここまで付き合ってくれているんだから。気にしなくていいよ」

「ごめんなさい」

そんなこんなしているうちに目的の店に到着したようだ。

「ここか」

確かに看板が剣の形をしている。

シエスタをゆっくり下しながら店の方を見やるとルイズたちは先に店に入っていた。

「さあ俺達も行くぞうか」

「はい！」

「そうですね、カリーヌ殿がトリスタニアへ来られている理由がルイズに会うことですか」

「はっ、魔法学院へそれとなく探りを入れたのですが、無理に聞き出すわけにもいかず、日数をかければ可能でしょうが現時点では詳細は不明です。判明しているのは、ルイズ殿の召喚した使い魔に関して実家へ相談が必要とのこと。ルイズ殿が学院のご友人たちとトリスタニアへ来ていることは確認し、念のため追跡しております。」

「内緒でヴァリエール家の奥方がトリスタニアへ来るということで、何事かと思いましたが、娘に会いに来ただけですか、あそこの家は子煩悩ですから」

「ルイズが来ているのならヴァリエールの別邸、行ってみようかしら？」

「姫様、無理を言わんでください。そんな急に……」

「あら、私のお友達に会うことがいけないのですか？今日は虚無の日、国事もなく朝の祈りは済みましたし、何か問題でも？」

「姫様がそんな思い付きで……」

「やはり私は籠の鳥なのでしょうか……」

「マザリーニ、護衛をつければよいでしょう。丁度平民の衛士が何人か、女性でしたが魔法が使えない以外は魔法衛士隊と遜色ないと聞いています。彼女達を護衛につければいいでしょう」

「しかし……」

「そう言って何時かのように勝手に城を抜け出されると、仕方ないとはいえ衛士隊から、それも上位の者から罰を与えなければいけませんからね」

「はぁ……」

「貴方の考えていることを実行に移せば、アンリエッタが好きに振舞う時間はもうないのでしょうから、好きにさせてあげなさい」

「お母様……」

「アンリエッタ、自分が好きに振舞うことがどれだけの人に影響を与えるのか、考えることも必要ですよ」

「はい」

「準備は……そうですね、テムリ卿お願いしてよろしいでしょうか？」

「はっ」

「では、よろしく」

「旦那、貴族の旦那。うちはまっとうな商売をしてみさあ。お上に目をつけられるようなことなんか、これっぽちもありませんや」

「客よ」

「こりやおったまげた。貴族様が剣を！おったまげた」

「どうして？」

「いえ、若奥様。坊主は聖具をふる、兵隊は剣をふる、貴族は杖をふる、そして陛下はバルコニーからお手をおふりになる、と相場は決まっておりますんで」

「使うのは私じゃないわ。使い魔よ」

「忘れておりました。昨今は貴族の使い魔も剣をふるようです」

「で、剣をお使いになるのはこの方で」

「そうよ、私は剣のことはわからないから。適当に選んでちょうだい」

主人はいそいそと奥の倉庫に消えた。彼は聞こえないように、小声で呟いた。

「……こりゃ、鴨がネギをしょってやってきたわい。せいぜい高く売りつけるとしよう」

彼は一メートルほどの長さの、細身の剣を持って現れた。レイピアの様な剣だった。おそらくこの世界でも貴族に近い者が使うのだろう。

「そっぴゃ、昨今は宮廷の貴族の方々の間で下僕に剣を持たすのはやっておりましてね。その際にお選びになるのが、このようなレイピアだよ」

「貴族の間で、下僕に剣を持たすのがはやってる？」

「へえ、何でも、最近このトリステインの城下町を、盗賊が荒らしております……」

「盗賊？」

「そうです。何でも『土くれ』のフーケとかいう、メイジの盗賊が、貴族のお宝を散々盗みまくるって噂で。貴族の方々は恐れて、下僕にまで剣を持たせる始末で。へえ」

「もつと大きくて太いのがいいわ」

ルイズは店主と話をしながらでも、才人がギーシュと戦った時のことを思い出した。確かあの時使った剣は短剣といったが、メール近くあったはず。それに才人は盾と剣を持つ、クアヴェンジャーという騎士のような名前の職種だといってたはず。その時見せてくれた剣は、かなり長くて重かったのを思い出した。あれが才人が本来使う剣。なら、目の前のこれは違う。

「お言葉ですが、剣と人には相性つてもんがございます。男と女のように。見たところ、若奥様の使い魔とやらには、この程度が無難なようで」

「大きくて太いのがいいと、言ったのよ」

ルイズが言うと、店主はぺこりと頭を下げ店の奥に消えていった。

「素人が！」

その時、ルイズは店主が小さく呟いているのに気が付かなかった。

「これなんかいかがです？」

「これが店一番の業物でさ。貴族のお供をさせるなら、このぐらいは腰から下げてほしいものですな。といっても、こいつを腰から下げるのは、よほどの大男でないとむりでさあ。やっこさんなら、背中にしよわんといかんですな」

「才人、どう？」

「だめだ。使えない」

「言わんこつぢゃない。若奥様、相性があるんですさあ」

「いや、そうじゃなくてこれ裝飾剣だから、舞華分かる？」

「えっと、この剣の材質は鉄だから使えないです。曲がるか、折れるか。たぶん折れると思います」

「なんだと！店の物にケチ付けるのかい」

「じゃ、これで切れたらわかってくれる？」

先ほど出していたレイピアを持ちながら才人が言う。

「どうやってレイピアでその剣を切るうってんですか。冗談はほどほどにして下せえ」

「いや、もし出来なければ両方とも言い値で買つよ。でも切れたら知らないからね」

「ああ、やって見せて下さい！」

「それじゃ」

才人は軽く腕を上げそして腕が消えたように見えた。

「えっ！」

消えた手が上げた位置に再び見えた時、カウンターのの上に置いてい

た剣が三つに切られていた。

「な、なん、なんなんだ！」

「レイピアで切れる剣だよね？」

「そ、そんな馬鹿な」

才人は周りが呆然とする中、舞華と店の中で飾ってある武器を見て回った。見て回ったとはいえそれほど広い店でもなく。武器自体が場所を取るためどんなに数があるわけでもないのだが。

学生？・・・有得ない。ギーシュと遣り合った時もだが、今の剣の動きも見えなかった。しかもレイピアで・・・装飾剣とはいえ両手剣を切断するなんて。それに彼はかなりの経験があるようだ。彼とは何とか遣り合えるかも思っていたが、おそらく無理であろう。よほどこちらが考えていかなければ、正面から遣り合ったのでは魔法は隙がありすぎる。もし勝とうとすればこちらが隙を見て・・・暗殺？ふとそんな気持ちを持った。確かに彼にはそれぐらいの気持ちでなければ勝てないかもしれない・・・。

ぼん、頭に誰か手を置いたようだった。驚いて、だが、周りから見ると読書中にちよっかいを出されて迷惑そうに相手を見ているようにも見えるのが、彼女らしいのかもしれない。

「そんなに顔をしかめて、真剣に本を読むのもいいけど、せつかくだから笑った顔の方がいいと思うよ」

それだけ言うと、反応を待たずに彼の妹の方に向けて何か話していた。

「お兄ちゃんどうしたの？」

「うん？タバサさん、なんか怖い顔して本読んでるから。笑った顔の方がいいと思うよ。と言ってみた」

「もう……」

「なに？」

「ルイズさんに武器買ってもらったから、もっとちゃんと選ばないと……」

「はいはい。とはいえ、なんだかなあ。まともな武器がないよなあ」

「……そうだよな、まともな鋼の武器が少ないし、熱処理が適当なものも多いし。これなら青銅の武器の方が強いかも」

「とはいえ、さすがに投げナイフはそれなりの物があるね、あとレイピアも貴族が使うからかな？意外とまともだったよ」

「レイピアはお兄ちゃん相性悪いでしょ？」

「まあね」

「なんだ、うるせいな！せっかく寝てたのに！その体で剣について

あれこれ言えるのか！自分の腕と比べてみるってんだ！」

「「「？」」」

見ると店主ががっくりと肩を落としている。

「おじさん、誰なんですか？」

舞華が店主に尋ねる。

「ああ、あいつは……」

「舞華、インテリジエンスウエポンだ！こっち来てみな！」

俺がしゃべる剣を持って舞華に見せるように振り上げる。

「お兄ちゃん本当？」

「ああ、珍しい物見れたな」

「おでれーた！おめえ使い手か！てめえ俺を買え」

「???」

「お兄ちゃん、この左手の紋章の事も」

舞華がまわりに聞こえないくらいの小さく呟くように囁く。

「え？……なるほど」

「おじさん、この剣いくらになるの？」

「え〜。そんなのにするの？もっと綺麗でしゃべらないのになさいよ」

「だけど、まともな武器がないんだけど。ないならまだ珍しい方がいいかな？って思ったから」

店の親父さんはそれこそ手を床につけんばかりにがっくりきている。

「おめえ使い手なのにひどくないか？俺はこう見えても・・・見えても・・・何だっけか？」

「結構ぼけてる？」

「ねえ、やっぱりやめましょうよ、こんなぼろ剣」

「いくらですか？」

今度は舞華が重ねて言う。

「あ、ああ、あれなら、百で結構でさあ」

「安いのか？」

「こつちにしてみりゃ、厄介払いみたいなもんでさ」

才人が預かっていた財布から金貨を百枚置いた。

店主は慎重に枚数を確かめると、頷いた。

「毎度」

「どうしても煩いと思ったら、こつやっつて鞘に入れれば大人しくな
りませあ」

「そついえば、この剣に名前はあるんですか？」

「えつ……と、デルフリンガーでさあ」

「何で考えるの？」

「いやあ、普段は『デル公』と言ってたんでさあ。すぐには名前を
ちゃんと思ひ出せませんでさあ」

「あはは、デルフリンガーさんよろしくね」

舞華はそついつて剣に挨拶をしたが、剣は店主が鞘にきちんと入れ
てあるので無言だった。

「あとこの辺りの短剣と……」

才人はデルフリンガーと呼ばれるインテリジェンスソードをポツ
ケに仕舞つとさらに消耗品となるであろうナイフの類を見ることに
した。

才人は店主に言つて、消耗品代わりに使う事になるであろうナイフ
の類を数種類出してきて、さらに店主と話し始めた。店主との話で
少しわかつたことは、メイジでも軍人はレイピアのような軍刀を杖
の代わりに使用しており、剣として使う時にはブレイドという魔法

で、剣に魔法をまわりつかせ威力を嵩上しているということだった。もちろん剣自身には固定化・強化で平民の武器とは比べられないくらいに強度を上げているということだった。そして、平民でもそういった武器は手に入れられるが大体そういった物は金貨数千枚と同じ価値ということだった。

なんだかんだで金貨千枚分くらいの武器を購入した才人と舞華は六人で店を出るとヴァリエール家の別邸へ向かうことにした。

もちろん購入した武器はポツケに仕舞いこんである。おかげでかなり重い。しかも一部は舞華に持ってもらった上に『デイグリーズ・ウエイト』を掛けてもらい重量軽減までしてもらった始末だった。

「あのう、ミス・ヴァリエール。私が同行するとお邪魔になりませんか？」

「何言ってるのよ。一人二人、貴族や平民が増えたところでどうってことないわよ」

「何で、そんなに緊張しているんだ？」

「そうですね？ 私たちのお金のことです話にくいのなら、学院からいただくお金で何とか遣り繰りしますし、どの道ルイズさんから永久に養っていただくわけにはいかないのですから」

「そ、そういう事じゃないわよ……。お母様に会「ルイズ！」。・お姉さま！」

真横に馬車が止まりルイズに呼びかけた。

「何をやっているの？」

「え、えっと、これから別邸の方・・・「お乗りなさい！」っひ

「あ、あの、使い魔と友人がいるので一緒に・・・」

「・・・そう、まあ歩いていらっしやい。でも、貴族が口を大きくあけてしゃべりながら歩くのはどうかと思うわね」

それだけ言い残すと馬車は走り去った。

「今のは？お姉さま。って、ルイズのお姉さん？さすが姉妹だ似てるね」

「なんか気に障る言い方ね。今のがエレオノール姉さま。長女で、もう一人実家の方にカトレア姉さまがいるわ」

「三人姉妹か、じゃ、お姉さんのお婿さんが家を継ぐのか？」

「悪いことは言わないから、お姉さまの前でそういう話はしないことよ」

キュルケはそれを聞いて何故か肩を震わせていた。

別邸に着くとルイズとタバサを除いた四人は屋敷の中をきよろきよろ見回していた。

統一感のある古いアンティークな感じの調度品や屋敷の内装に感心していたのだった。

「すごいお屋敷だね。舞華ほらこれとこれ。多分制作時期は違うと思うけど様式が同じだ。こういうのは伝統工芸品ていうのかな？」

「本当だ。素材が違うのに作風が同じなんです。弟子とお師匠さんの関係なのかな？」

まるで美術館を見るように二人が会話しているのを解説代わりにキルケとシエスタは関心して聞いていた。

「あの二人がただの学生って、東方の学生は平民でも貴族と同じか下手するともっと上の教養があるわね」

「本当にすごいですね。私なんかただ高そう。としか見えないんですけど」

「ここ（ハルケギニア）の美術品は学院にあるものといっても食堂を除くと大した物は無い筈だし、ほとんど初めて見てこれだけ批評できるのは下地があつてなんですよ。ますますダーリンに惚れるわ」

「あの二人だけ特別という可能性もある」

タバサが二人の会話を聞いて呟く。

「確かにそうかもしれないわね。もっと二人の事知りたいわ」

「そうですね、特に才人さんのことが」

シエスタが顔を赤く染めて言う。

「お待たせしました。ルイズお嬢様、皆様こちらへ」

「行くわよ」

ルイズが立ち上がり出ようとするとシエスタだけが立ち上がった。

「なに？皆どうしたの？」

「俺、貴族じゃないし」

「私も魔法が使えるだけの平民です」

「ヴァリエールの敵だしね」

「・・・」

・
・
・

「シエスタ。どういう事？」

「あの、実はヴァリエール家は・・・」

シエスタが話したのは以下の事である。

簡単に言えば、ヴァリエール家は由緒正しいトリスティンの名家

でありその流れの源流は王家につながっている。おそらく食事は平民である才人たちや詳細不明なタバサは別室でとることになるだろうと。唯一同行できそうなのがキュルケだが、家が家なので、おそらく居心地が悪いだろうと想像するに難しくなく、ならみんなと一緒にいいかわ。と、ルイズの侍女代わりにシエスタがついていけばそれで問題はないはず。じゃ、お食事中は私が付いていますね。そんなやり取りがルイズの知らぬ間に交わされたのだった。

特に学院での貴族の態度から才人と舞華が面倒が起きるのはいや。と思っっていることがそれに拍車をかけているのだった。

「……あなた達ねえ……私をあんな所に一人にする気なの！」

「いや、シエスタいるし、貴族の食事はめんどくさいし」

「学院の食堂みたいにお喋りできないのはね」

「……めんどう」

「……舞華」

「え、なんですか？」

「第一、自分で親との食事にあんな所って……」

「うっ……」

「気にしなくていいわよ。聞いたでしょ？皆さまって。みんな一緒よー！」

「それって、シエスタも一緒ってことでもいいのか」

「え、才人さんそれは駄目です。嬉しいけど駄目です。貴族様の食事にメイドが一緒じゃ駄目です」

「いつも言ってるけど俺は平民だけど」

「お兄ちゃんの言うこともわかるけどシエスタさんも困ってますよ」

「・・・仕方ない。舞華。タバサさんの相手してやれ。俺がルイズ。シエスタがキュルケでいいよな？」

「はい」

「え、ダーリンの相手は私がうるさい！もう決まったんだから文句言わない」

19・主都・3（前書き）

ヴァリエール邸での話が進んでいきます。

ちよつと会話文が多くなっています。

書いている本人には書いているときは区別がついていますが、見直しているとあれ？と思うことがしばしば。修行せねば。

「お久しぶりです。お母様」

「ルイズも元気そうで何よりです。後ろの方々は学友なの？」

「はい、紹介します。まずはじめに、ヴァリエール家の仇敵でありますが、ゲルマニアの留学生、キュルケ」

「お初お目にかかります。『キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー』といます。」

「これは異な縁ですね。よろしく娘をお願いします」

一緒にいる、ルイズの姉の顔が強張って睨みつけるように見ているが、ルイズの母はさすがに落ち着いて顔色も変えずに対応する。

「彼女はガリアからの留学生、タバサ。です」

ルイズもタバサのことはよく知らないのでそんな紹介になってしま
う。

「タバサ。よろしくお願いします」

言葉はあれだが、態度はちゃんとした、優雅な動作で挨拶をする。

エレオノールはあまりのことに目を白黒している。

「後ろに控えているのは、私の使い魔の才人。こちらに控えている

のが才人の妹の舞華。タバサの後ろに控えているのが、学院のメイドで、使い魔の面倒も見ているシエスタです」

それぞれが無言で挨拶をする。使い魔が人間と聞いて、別邸にいる執事やメイドに動揺が走ったようだが、さすがに声などは起きない。

「ちびルイズ。後ろの二人が使い魔って本当なの？証拠は？」

「使い魔は才人だけです。舞華は巻き込まれたんです。証拠はこの使い魔のルーンです」

「珍しいわね読み方は・・・ガ・ン・・・えっ？」

「エレ姉さまお静かに・・・」

小声でルイズは姉に対して注意をする。

「・・・本当に・・・？」

「だからこうしてお母様にお越しになっただいたのですわ」

「何をこそこそ話をしているのですか？」

ルイズの母が怒ったように二人をたしなめる。そうするとルイズの姉がこわこわといった感じで小声でルイズの母に何かを説明する。

「ルイズ。この事はオスマン学院長はご存じなのですわ」

「はい、オールド・オスマンは才人のルーンを見ていますから知っていると思います」

「・・・解りました。それとこのことを知っているのは当事者の三人を除くと学院長とその三人なんですね？」

「え、はい」

「では、・・・給仕はその三人に任せて・・・すまぬが皆出ていくように」

急に小声で親子で話をする、部屋を出るようになされた使用人たちは戸惑いつつも言われた通りにした。

皆が出ていくとルイズの母は、杖を取出すと一振りした。

「サイレント？」

舞華が呟くと、

「そうです。他人に聞かれると拙いでしょうから」

「オスマンさんより効果範囲が広くて強いですね」

舞華は感心したように周りを見渡している。

「難しい？」

「何度か練習すれば何とかかなると思います。でも、同じじゃなくて簡単なものなら今でも出来ますよ」

「「「「？」」」」」

「おかあさま、エレ姉さま、キュルケ、タバサ、言っただけ
ど舞華は魔法の力の流れが見えるのよ。それで練習次第でその魔法
を使えるようになるのよ」

俺達の会話を聞いてルイズは慌ててフォローするように言う。

「なんですって！」

叫んだのはエレオノールだった。

ハルケギニアの常識では、魔力があるかないか、どの系統かという
ことまでは『ディテクト・マジック』を使って分かってても、魔力そ
のものを解析して違いを分析、コピーするということは不可能とさ
れていたからだった。もちろんそれまでもそういった研究はされた
ことはあったが。

才人たちにとって魔力を分析トレースすることは当たり前だった
し、練習でコピーして使うというのは生きていくうえでも必要だっ
た。もっともコピーすること自体は自分で言い触らしたりはしなか
ったが。

もっともそれができるからこそ、エルフやダークエルフの魔法を使
えるようになったのだが。

「エレオノール。静かにしなさい」

「は、はい。お母様」

「変わったことが出来るのですね。東方では当たり前なのですか？」

「俺達がいたのは東方の更に奥地ですから、東方がどういった物か知りません」

「ほお・・・」

「ただ、人が出来る事は一生懸命にやれば同じことが出来る。これが俺がいた世界での常識です。科学といますが」

「かがく？」

「はい、以前にルイズに説明しましたが、科学とは自然に起きている事を分析してなぜそれが起きるのかを調べる学問です。ですから、同じことをすれば必ず同じ結果になります。もし、違った結果が出ればなぜそれが起きたのかを調べてその原因を見つける事です」

「ほお、必ず同じ結果になるというのか」

「はい、自然の現象は魔法と違って必ず同じ結果になります」

「魔法は違うというのかな？」

「はい、これについては舞華が詳しいので舞華に説明させます。舞華、説明してあげて」

「は、はい」

「魔法は魔力の流れを杖に伝えて発現させます。魔力を流す時にルーンを唱えます。これは、どの魔法を使うか決定することです。これは間違いないですね？」

皆が頷く。

「ルーンで発現する内容は決まっていますから、威力はあとは個人の魔力で決まります。ここまでは間違ったことはないですか？」

「その通りだけどそれがどうしたの？」

ルイズの長姉のエレオノールさんが答える。

「ですが、魔法は結果が個人で変わってきます。単に魔力が違うからと言ってそれだけで済ますには差が大きすぎます」

「例えばどうということなのよ？」

エレオノールの方を向いて舞華が続けてゆく。

「例えば錬金です。この間、学院で青銅の錬金を見ました。その時、青銅が内部まで緑青であった錬金がありました」

「偶にそういうのっているわね。話ばかりとか本だけ読んで魔法を使うから見た目に騙されるのよ。魔力の無駄使いだわ」

「はい、そう思います。ですがルーンに従っている以上同じ結果が出なければいけないですよね？」

「言われてみればそうよね。ファイヤーボールでも魔力に関係なく色が違うし」

今まで黙っていたキュルケが疑問があったのだらう、自らの火の系

統について疑問を呈した。

「火の色ってというのはオレンジとか真っ赤とかですか？」

「そうそう。私の火は情熱の赤だけだね」

カリーヌさんが、

「他人の魔法を見て何故そんなことを思ったのだ？」

「ルイズさんの魔法を見たからです」

エレオノールさんがルイズを見ながら、

「まだ魔法が使えないの？」

「えっと、まず最初にルイズさんの魔法ですが、失敗じゃないです。」

「

「「なんですって！」」

キュルケとエレオノールさんの二人が驚いて大きな声を出すと、

「静かにしなさい。それで？」

「はい、ルイズさんは色々な魔法を使いますが、ルーンですか？私たちが詠唱と言っているものですが、それと、ルイズさんの魔力の流れがあっていません。たとえば言うと、水の魔法を使うルーンを唱えているのに、魔力の流れが火の発火の魔法になっているようなものです。ですから、これは教えている人の責任だと思えます。ルイズさんの魔法の流れを理解せずに無理やり型にはめているから、

コモンですか？そういった物の流れまでおかしくしていると思います。ルイズさんはまず最初に今のルイズさんの魔力の流れを調べてそれに合ったルーンを使う事で、まず今のルイズさんの魔力の流れをコントロールできるようになると思います。ルーンが分かれば系統が分かるので順に覚えていけばいいので、そのうちコモンも覚えていけると思います。そうすればドット・ライン・トライアングル・おそらくスクウェアがルイズさんの魔力だと思います」

「な、・・・」

エレオノールが叫びかけて、カリィヌの方を向き押し黙った。

「本当なのですか？嘘ではないでしょうね？」

才人が舞華の代わりに答える。

「すみません、まだルイズさんの系統が分かっていないのでスクウェア云々はまだ不明ですが、舞華の魔力を見ることは本当です。そして、舞華が魔力を見てそう判断しているのでそれは間違いじゃないです」

「それで、証拠をお見せしようと思います。学院には魔法でトップクラスの人材が教師として教鞭をとっていると思うのですが？」

「それは確かです。オールド・オスマンを筆頭にトライアングル以上、トライアングルでも魔法の研究や実践ではスクウェアに引けを取らない物ばかりです」

「でも学生はそうじゃないですよね？」

「そうですね、普通はドット、学年に数人ラインがいればいい方ですね。トライアングルで一人か二人、スクエアはまず望めませんね」

「実はキュルケとタバサは学院でもその数少ないトライアングルです。キュルケが火の、タバサが風風水のです」

「ほお、それは素晴らしい学友を得ましたね。ルイズ」

「あ、ありがとうございます。お母様」

「そこで、ルイズのお姉さんとお母さんはスクウエアクラスに見えると舞華が言ってますがそうですね？」

「なるほど、妹に私とエレオノールの魔法を見せてその話が本当か証明をしようというのだな？」

「そうですね。ただ、スクウエアクラスの魔法はさっきのサイレントでも見たように簡単にまねできません「当たり前よ!」・・・」

「それで、舞華が今出来る魔法を見てもらって、それから真似た魔法とで判断してもらおうと思ってます。確か普通はスクエアまでしか出来ない、それ以上は合体魔法とか特別な物だけですよね？」

「そうですね。召喚の儀式からそれほど日がたっていないのにここまですごい魔法を調べたのですか？大したものです」

才人は学院長の前でやったように盾を取出す。舞華は今度は杖を出した。初めて杖を使う舞華に驚いて見ているキュルケたち。

「『キュルスタル スタッフ』です。行きますね」

「おう」

俺が構える。そこへ舞華が『フレイム・ボール』、『ウィンディ・アイシクル』を撃ち込んでくる。その間才人は盾で耐えていた。

カリー又達は驚いていた。確かに魔法を火と風と水で合計すると合わない。それぞれ威力も半端なく強い。それにルーンの詠唱が極端に早い。確かに、戦闘用に高速詠唱というのもあるがそれは、簡単に言えば、ずるしているわけで舞華が今やったような速度で行くと威力が落ちたり失敗が増える。が、舞華は何度も二つのルーンを詠唱し才人に向けて放った。

それに才人はそれを軽く受けていたが、自分が同じように受けると同じく軽く受け止められるであろうか？まず無理、どちらかの属性だけなら防具を工夫したりして受けきれないかもしれないが逆の属性であれば確実に無理といえる。

「青白い色のフレイム・ボール？」

キュルケがその色に驚いている。

「ルイズ。その使い魔と妹アカデミーに貸しなさい！」

エレオノールが突然言い出した。

「お姉さま、それは……」

「調べるんじゃないの。魔法をどうやってみるのか。解体し……」

突然しゃべり出していたエレオノールが眠ってしまった。

「すまぬ。わが娘ながら珍しい物や現象があると、周りが見えなくなるので、こうした」

「では、続きを」

「いや、今ので十分信用します。これだけのものを見て解らない様な、ぼんくらではありませんから。ただ、娘はこの通り魔法の研究となると見境がなくなるので」

「いえ、もしよければこちらの魔法。それもスクエアクラスの魔法を見せていただければ嬉しいのですが、舞華の魔法の流れを調べる助けにもなると思いますから。もし人に向ける魔法であれば俺に向かって使ってください。多少の物は耐えられますから」

「そうか、では風のスクウェア・スペルを・・・ユビキタス・デル・ウィンデ」

立上り杖を取出すとルーンを唱えるとともに分身した。

「おお、すげえ！さすがルイズの母ちゃん。すごすぎる」

「・・・ユビキタス・デル・ウィンデ・・・」

突然舞華が同じようにルーンを唱えると。同じように分身をした。ただし、カーリーヌが五分身なのが舞華は二分身だが。

「舞華・・・すごい！」

ルイズが驚いて叫ぶ。キュルケが、もうこの二人は何やっても驚か

ないわよ。と投げやりに呟いた。

「では、行きますよ」

「あ、はい。どうぞ」

カリリーヌが声をかけると舞華と才人を見渡してルーンを唱えた。

「では、初めに『拘束』、そして『ウインド』」

同時に別の分身が「『ストーム』」「『ウインド・ブレイク』」「
『エア・ハンマー』」「『エア・カッター』」

「さすがですね、平民ならどれ一つでも死に足るといふのに立っているのですから。ではこれではどうです？」

「『『『ライトニング』』『』『』『カッター・トルネード』』『」

五人の分身が同時に才人に向かって魔法を唱える。

才人は身の危険を感じ『ディフレクト マジック』（魔法抵抗力増加）『ソング・オブ・ウォーディング』（魔法抵抗力増加）『ソング・オブ・エレメンタル』（属性攻撃抵抗力増加）『ソング・オブ・ストーム・ガード』（風属性抵抗値増加）を唱える。

ちなみにこれらは、エルフのスキルとしてエルモア・アデンで覚えたものだ。

そして才人は魔法を盾で防ぐ、場合によっては盾を振りぬき魔法を四散させる。

「すごいですね、手抜きでまだ立っていられるとは……」

「手抜きつて・・・どこがですか？」

顔が真つ青な才人の本気の抗議にカリー又は、貴方は武器を持たないじゃないですか。と軽く受け流した。

才人と舞華はがつくり肩を落として顔を見合わせた。

それほど狭くはない部屋とはいえスクウェアレベルの魔法をかけるには狭い場所だったがカリー又は気が付いていた。舞華が部屋にシールドらしい魔法をかけているのを。恐らく気が付いているのは兄である才人とあのタバサという、おそらく王家につながる人間だろう。大人しそうに、本を片手にしていながら周りの気配を読んでいるのがよくわかる。

「では、ルイズが魔法を使えるようにするには、こちらの魔法を調べるわけですね。それもありとあらゆるものを」

「そうです。それで、ルイズの魔力と同じ流れをしている魔法を調べてそのルーンを唱えるようにします。それがうまくいけばほかの属している別の魔法を使えるようになると思います。魔法を理詰めで覚えていくなら、俺達がルイズに出来るのはこの方法しかありませんから」

「では、信じますから。必要な物は言ってください」

「ありがとうございます、まあルイズの事は舞華に任せれば何とかなると思います。ただ時間がかかるでしょう。」

「それは間違いないでしょうね」

「はい」

この返事は舞華だ。

「それと貴方たちの生活費は月に百エキュール出しましょう」

「ありがとうございます」

「もちろん、オールドオスマンとルイズが出す学院での費用は別です。これぐらいであれば私が儉約すればいいだけですから」

「お母様、年間千二百エキュールですよ。下級貴族の年間の支給額の倍「ルイズ」……はい、お母様」

「彼らは許してくれていますが、貴方の『サモン・サーバント』で彼等のご両親が死んでいる可能性があるのであれば、こちらに呼んだ責任があります。もちろんルイズが狙ってやったわけではないのでしょうが、子供の責任は親の責任です。これに関しては私の責任でこの二人の面倒を見ます」

「お母様……」

「もちろんお父様にも事情をお話します。いいですね」

「は、はい。お母様」

「何で、そんなによくしてくれるんですか？」

舞華が不思議そうにカーリーヌを見ていう。

「一つは先ほど言った通り、ルイズがしたことに対する責任です。もう一つはルイズを助けてくれる可能性があるということですよ。あの子は魔法が使えないことで、これまでつらい人生を送ってきた。」

「使い魔の召喚で貴方たち兄妹を呼んだのは、貴方たちにとっては不幸なことですが、この世界に生きる私には・・・申し訳ないのですが、よかった、と言えることなのです。ルイズが魔法が使える。そうならば、この子のこれまでの努力も少しは報われるかと。」

「それに学院に行つてからの手紙にはカトレア・・・ルイズのもう一人の姉ですが、カトレアに言わせると、文字の間から無理をしているのが見えると・・・カトレアはね、昔から体が弱いのですが、感のいい子で物事の本質が見えるのでしょね。魔法を使えないことがルイズに無理を強いているのだとすれば、それも、親の責任ですからね。貴方達の説明からおそらくルイズは魔法を使えるようになるのでしょ。十六年、ここまで使えなかったのですからまだ何年か、かかるうとも構いません。その間の面倒は・・・いえ、私が生きている間は、貴方達には不本意かもしれませんが生活面では出来るだけのことをします。これは私からの約束です。始祖に誓つて」

「それにしても若いっていいわね。こないだ友達をつくれて、年を取ると利害や名誉やら余計な物が邪魔をして簡単には出来ないのだけれども」

そういうと、キュルケやタバサ、シエスタを見まわして笑いかけた。
気のせいかに目に涙をためているようにも思えた。

20・王都・4（前書き）

登場人物が増えるとしても影の薄い人が出てきます。

今回はキユルケさんとタバサさん、それにデルフです。

会話での登場人物の書分けと、会話に加わらなくてもそこにいる。

というという描写方法、自分なりに何とかしていきたいと思っています。

話が終わると、使用人たちを部屋に入れ食事の終わったまま置いておかれた食器類を片付けて、お茶をすることになった。使用人たちは再び部屋を出て行ったが、ざっくばらんな話なので特に魔法をかける事もなくどこかのんびりした雰囲気でお茶会が始まった。

ここで舞華が持ってきたケーキなどのお菓子がカリーヌやエレオノールにも評判が良かった。

「でも、はっきり言ってルイズの魔法のこと除くと俺達はここでやれることってあまりないよな？」

「？」

「少ししか聞いていないけど、ここではプリミル教だっけ？それが権力を持っているんだろう？そんなところでほかの世界の魔法を使って、何かするわけにはいかないだろうし」

「そ、そんなことないですよ。魔法や剣を使わなくても才人さんや舞華さんは私たち平民の力になります！」

シエスタが叫ぶように言ったのでみんながシエスタを見つめる。シエスタはしまった。というように小さくなっている。

「構いませんよ、ここでは、貴方はルイズのお友達の一人として見えていますから。ただの平民で学院のメイドなんて思っていないません」

カリーヌさんがそういうとエレオノールの方をちらりと見やる。

エレオノールはびくつと首をすくめた。

「あ、あの、さ、才人さんたちが持ってきた植物とかありますよね？」

「ああ、ハウスのやつか」

「は、はい、それですけど、私、タルブのブドウ農家の娘です。ブドウ以外にも自分達で食べる麦なんかも育てているんですけど・・・」

「貴族様の直轄の畑以外では貴族様の錬金の肥料や土地のお改良なんて簡単には出来ませんし、お金がかかります。そうでなければ、税金が高くなります」

「へえ、畑仕事に魔法使うんだ」

「はい、そうなんです。それでその肥料や土地の改良も貴族様によつてかなり違います」

カリーヌが頷く。

「えっと、普通魔法を使わなければ、小麦一粒が三粒の収穫がやっとなんです。高いお金を払えば貴族様の力で収穫量を増やせますがそれでも十粒行きません。普通なら六・七粒くらいです」

才人と舞華が驚いた顔をしている。それに気が付いたカリーヌがシエスタと見比べる。

ハルケギニアの農業では当たり前のことだ、だから貴族が力を持つ。

食料の生産を押さえているからだ。

「才人さんたちがこちらに来られた次の日から縁があつて才人さんたちのお世話もさせていたのですが、その中に才人さんの畑のお世話もあります。」

そんなの有つたの？とキュルケが首をかしげる。タバサは先ほどから様子も変わらず本を見ているがよく見るとページが進んでいない。そしてルイズは、ああ、あそこの事か。と一人納得している。

「そこにある小麦は・・・舞華さんから聞きましたけど一粒の小麦から四十粒ほど収穫できるそうです」

「なに！？」

思わずカリィヌが声を出す。

「まことか？」

「はい、これでもここに奉公に上がる前は家で農業の手伝いをしていましたから見間違える事はありません。舞華さんに聞けばあれを育てるのに魔法を使っていないと。あれが沢山あれば私たち平民は、暮らしが楽になります！」

「まだあります。才人さんが住んでいたところにある食べ物、『米』ですけど才人さんの国では十マイル四方で大人一人一年分の収穫だそうです。才人さんの小麦の倍の収穫がある事になるんです。残念ながら舞華さんのお話だと水が合わないと言目だそうです。魔法学院の水は合わないようです」

「それに肥料を作る技術ですが、舞華さんに見せていただいたのですが貴族様の作っている肥料とそれほど違っているように見えませんでした。それに植物を育てるのに必要な知識が本になっています。才人さんの国の文字ですがハルケギニアの文字に翻訳すればきつと私たちの生きていく力になります」

後半は涙目になりながら、訴えるように話すシエスタにみんな気を飲まれたようになっていた。

「面白い話をしていますのね。ラ・ヴァリエール公爵夫人それにルイズ」

「ひ、姫様」「姫殿下、どうしてこのようなところに？」

ルイズとカリーヌ、エレオノールがあわてて起立すると優雅に貴族のあいさつをする。

それを見てあわてて、キュルケとタバサ、シエスタが立ち上がり二人は貴族の挨拶を、シエスタは跪いて顔を上げようとしめない。才人と舞華は立上り、舞華はルイズと同じ、才人はぎこちなくエルモア・アデンで覚えた挨拶をした。才人は内心、ここの王族はこんな気ままに出歩いてても平気なのか？とエルモア・アデンとの違いを感じていた。

「公爵夫人がルイズをトリスタニアの屋敷に呼んでいると聞いたのでルイズに会いたくなってきたのですよ」

カリーヌは使用人を部屋の外へだし再びサイレントの魔法を部屋

にかけた。舞華も同時にカリィヌのサイレントを真似て二重にかけてみた。

「ああ、ルイズ、ルイズ、懐かしいルイズ！」

「姫殿下、いけません。こんな下賤な場所へ。お越しになられるなんて……」

「ああ！ルイズ！ルイズ・フランソワーズ！そんな堅苦しい行儀はやめてちょうだい！あなたとわたくしはおともだち！おともだちじゃないの！」

「もったいないお言葉でございます。姫さま」

「姫殿下、他人の目もありますから、なにとぞ……」

「ああ、わかりました。ルイズ。元気そうね、今日はどうしてトリスタニアに来たのかしら。いつでも城に来てくれればいいのに」

「はい、姫さま。使い魔のことで少し」

「使い魔？そういえばあなたの使い魔というのはどこにいるの？」

「姫さまの目の前に……」

「目の前？……どこ？」

「あの、その変な服を着ている者です」

「……？人にしか見えませんが？」

「人です。姫さま」

「そうよね。はあ、ルイズ・フランソワーズ、あなたって昔からどこか変わっていたけれど、相変わらずね」

「……はい……」

「姫さま今日はどうしてこちらへ」

「ルイズに会いたくてですわ。そうしたら面白い話をしているのでつい、ね」

おかしそうに笑いながら話をする姫さまに才人と舞華は顔を見合わせて何とも言えない顔をしていた。

「先ほどのメイドさんのお話を聞いていましたよ。もしそうならトリストインにとっても良いことのように思えます」

「この国の貴族はもう少し身分を弁えるべきなんです。平民から税を取れなければ国が成り立ちません。贅沢が出来るのも平民が税を出しているからなんです。今の貴族は国に入ってくる税をかすめ取る事しか考えていません。貴方のように、この国を良くしようとしている貴族は少ないのですよ。ミセス・ヴァリエール」

「もったいのうお言葉でございます」

「わたくしには力がありませんし、お飾りなんですよ、でも、今の話を聞いて少しは良くなるかもしれないと思いました。」

「ルイズの使い魔さん。わたくしはアンリエッタと言います。あなたのお名前は？」

「姫さま！そんな自分から名乗るなんて！」

「いいえ、人に名前を聞くときには自分からトラ・ボルトに叱られたのを忘れたの？」

「才人、平賀才人と言います。アンリエッタ様。こちらが妹の舞華と言います」

「平賀舞華です。よろしくおねがいします」

「まあ、家名が先に来るのですね。わかりました。サイトさん、マイカさん」

「メイドさん。あなたのお名前は？」

「し、シエスタと申します。姫さま」

「シエスタさんのお話の麦ですが王家で購入して、国中に増やしていくことは出来ませんか？」

「数年で出来るかも知れませんが、すぐにやることはやめておいた方がいいと思います」

その返事に、アンリエッタはもとより、シエスタ、カリーヌも注目していた。

「なぜです？」

「一つは先ほどシエスタの話で水のことがありました。この水と合うのか不明です。二つ目は仮に水が麦に会うことがあっても今度は土地が合うかどうかです。三つ目は、これが一番懸念している事なのですが、シエスタが麦と言っているものは、おそらく俺達の小麦・大麦・ライ麦・蕎麦そしてシエスタが米と言っているのは実のことで稲と呼ばれているものです。で、三つ目なんです。同じ品種の麦を育てると、病気や害虫、気候による不作に会った時に被害が大きいのです。俺達の世界でも何度も飢饉が起きました。被害を大きくしたのは、同じ品種を育てていた為です。効率は悪くなりますが、他の品種、麦でも数種類の麦を同時に育てることで被害を少なくすることが出来ます。が、違う品種がありません。俺達はそのリスクを減らすために違う作物も同時に育てるようにしています」

「すごいです。才人さん！どういう作物なんですか？」

シエスタが感動して続きを聞きたがっていた。

「基本的に芋と豆類です。じゃがいもとサツマイモ、それに豆は大豆や落花生ですが、どちらも痩せた土地でも育ちやすいのと、土地を改良するので」

「改良？」

姫さまが首を傾げる。

舞華が後を続けた。

「麦とかを同じ土地で育てると土地にある植物を育てる栄養だとか作物を育てる力が偏るんです。肥料を与えても特定の養分だけを麦

がとつてしまふんです。それで翌年からはバランスの悪い土地で育てますから段々育ちが悪くなるんです。それを防ぐには肥料を減つた分を足してやればいいのですが、それを作物を育てることで補うのです」

「それで、私たちは輪作というんですが、畑をいくつかに分けて順番に育てていくんです。そうすることで栄養のバランスを取るのと、豆類は土地に肥料を与えるのと同じように栄養を土地に与えるんです。他にも色々な物があります」

「ただ、本格的に行うには手持ちの土地では足りないですし、種の数も足りませんから、数年は収穫なしで畑を育てる様な事をしなければいけませんし、こちらの麦やなんかと交配して、お兄ちゃんが言ったようなことが起きてもいいように種類を増やすことが必要です」

「なるほど」「そうだったんですね」

「ミセス・ヴァリエール、エレオノールさん、それにシエスタさんなにか？」

「はい、姫さま。実はヴァリエール領では土地を開墾することができます。その時最初は土メイジの錬金で肥料や土地の改良はそれほど苦労しないのですが、段々魔力を多く使う事になるのです。魔法に頼っているからそうなってしまうのですね。最近では新しく開墾したくても必要な土メイジの数をそろえるのが大変なので止めているのです」

「原因を調べたことがあるのですが大体、そういったことがあるとは分かりましたが対応をどうするかが分からなくて困っていたところ

です」

「私の曾お祖父ちゃんが村に来た頃、村が不作で困っていて、その時に肥料や畑の管理方法を教えてくれたそうです。最初は誰も信じなかったそうですが、今では貴族様の魔法に頼るのは最小限になっています」

「あなたの出身はタルブ？」

「ええ！、どうして姫さま、分かったんですか？」

「ええ、先ほどの話をお母様から聞いたことがあったので、人をやってほかの土地にも広めようとしたのですよ。でも、色々妨害があつてね、畑の管理に貴族の役割が少なくてね、それであそこは代々貴族がほかの土地より軽く見られてね。そうなるのが嫌な貴族が多いのです」

「そうなんですか・・・」

「・・・」

「姫さま。どうかされましたか？」

「ルイズ。少し考えたのよ、それで、デムリ卿ごぞんじですか？ミセス・ヴァリエール」

「ええ、王家の執事として、財務卿をこなしている。あれほど適任の人はいませんわ。そのデムリ卿がどうか？」

「ええ、財務卿として王家の金庫も管理してもらっているのだけど、リッシュモンやチュレンヌの嫌がらせで、お任せしている王家直轄地の代官の仕事に支障がでてるの。それで今、ド・オルニエールの土地が新たに加わってデムリ卿が代官をするのだけでももうデムリ卿の部下も限界で、その、代わりに代官の代官ね、才人さんお願いします」

「え、責任とれない仕事は無理です。それに俺はルイズの使い魔ですよ？主人の勝手には出来ないでしょう？」

何言いだすこの人は？思いつきで関係ない人間を使うんじゃない！

「そうだったわね。ルイズ。私の計画に協力していただけるかしら？」

「は、はい。姫さま。でも、私も才人たちも学生なのですが・・・」

「実際にその土地に赴任するわけじゃないわ、代わりに人を使っただけで、そこで作物の管理に助言を与えてほしいの。トリスティンの作物と貴方が持ち込んだ作物で」

「代替りの人はどこから？」

「ヴァリエール領からでしょうかしら？開墾や土地管理に実績のあるヴァリエール家に王家が泣きついたということで、この事が人の目について、王家から費用が出ていれば誰も表立っては文句が出る事もないだろうし。費用は私が我慢すればいいことよ。お母様や枢

機卿にも文句は言わせないわよ。」

「ミセス・ヴァリエール。どうかこの籠の中の姫のわがママを聞き入れていただけますか？」

「将来的には国の為になりますね。わかりました、私から何も言うことはありません。ですが、それで得た利益は王家の物になると同時に、ヴァリエール家の物でもあるのですが、これも構いませんね？」

「実際に動いたのがどの誰なんて実際に対応するド・オルニエールの領民以外は関係ないわ。それにこういったことは黙っていても外に流れていきますから。実際タルブの周りにゆっくりですが流れているでしょう？書くものはありますか？」

シエスタの返事を聞きながら姫さまは書類の準備を進めようとする。

「はい、ここに」

「これで取敢えず書類上は問題なしね。あと、シエスタさん」

「はい！」

緊張しているシエスタを見ると笑いながら、緊張することないわよと言いなから

「ルイズや才人さん、舞華さんをよろしくお願いしますね」

「い、いえ！、こちらがお世話になっています！」

「才人さんは多分トリスティンの決まりとか疎いから、教えてあげてくださいね」

そういいながら出来上がった書類を、おなじものを三部作ったよ
うだ、を、一部をカリーヌへ残り二部を自分が持ち一部はヴァリエ
ール家との契約書も兼ねているから王家で保管しますね。もう一部
は国に出さないといけませんから。そう言いながら、このケーキお
いしかったわ。とか、あまり遅くなると鳥の骨がうるさいから。と
言いながら退出していった。
書類を見たカリーヌが少し変な顔をしていたのが気になったが。

「才人。姫さまからお達しがありました。明日にでも使いをやりま
すので準備をしておいてください」

「はい。舞華、大丈夫か？」

なんかなし崩し的なことに弱いな俺。舞華にまた負担掛けそうだ。

「取敢えず種籾を出しますから。今作っているのは食べられなくな
るけど、頂けるお金で食費はまかなえそうだから何とかかなると思っ
よ」

そついうと舞華はカリーヌさんの方へ向いて、

「一応文字が分からないので、シエスタさんに助けてもらいながら
ルイズさんに手紙を書いてもらいます。わからない所は私が返事を
出すということで宜しいですか？」

「それで構わぬよ。では任せましたよ」

「「はい」」

ヴァリエール家の別邸を出ると今まで長く話し込んだりした割には、朝早くから動いたせいだろうかまだ日が残っていた。

「お兄ちゃん、なんだか、なし崩し的に決まっちゃったね」

「まあ、自分達の分は置いておくとして、残りは全部出さないといけないな」

「ルイズさんから食事いただけから大丈夫なんじゃないかな？」

「まあ、米があるからまだいいかな」

「だね」

「「「・・・」」」

「どうした？」

「なんかお母様らしくないのよね。いつもはもっときつい感じなのよ」

「十分優しかったじゃないか？」

「お母様っていつも私には厳しかったのよ。ついでにエレ姉さまもね」

「でも、ルイズの親父さんともう一人のお姉さん、カトレアさんだっけ？優しいのだから？」

「そうよ。何でわかるの？」

「両親の両方ともが厳しいことはないよ。たいていどちらかが厳しくて片方が優しいんだ。俺の親がそうだったから」

「お姉さんが二人いるからそう思ったんだと思うよ。大事にされてたんだ。ルイズは」

「そ、そうかしら・・・」

「それより、キュルケとタバサは悪かったな。せつかく来てくれたのにルイズと俺達のことですつと黙ったまま座り続けて」

「でも、面白い話を聞いたわ。ヴァリエールだけじゃなく私のところにも何かハルケギニアで儲かるものはないかしら？なんならその妻という物を分けてくれてもいいかも？」

「あはは、せつかくだけど売れるようになるのはあと何年かしてからだな」

「時間がかかるのね」

「品種改良というか農業林業ってのは、すぐどうこうじゃなくて先を、例えば自分の子供の世代とか孫の世代を見ているものだからな」

「気の長い話ね」

「それに耐えないと新しいことは出来ないよ」

「タバサも悪かったね」

「いい。興味深い話を聞いた。・・・あなたの国の話を聞きたい。いい？」

「ああ、時間が空いているときであれば」

「駄目よお兄ちゃん。これだけ色々な事頼まれたんだから、そんなこと言ってる時間がなくて約束守れないよ。ちゃんと時間を決めてお話ししないと駄目だよ」

「舞華でもいい。貴方達の国の話は興味深い」

「じゃ、タバサさん。この国の文字を教えてくださいませんか？その時に話しできればしますよ」

「何時がいい？」

「昼休みじゃどうですか？」

「いい」

「舞華！それは私の役目よ」

「でも、ルイズさん忙しくなりそうだから」

「？・・・どういふ事？」

「お兄ちゃんに仕事が出来るということは、自動的にご主人様の仕事も増えるはずですよ？領地経営の手伝いでしょ？」

「うっ、そうなの？」

「俺の方を見るなよ。でも間違いないだろうな。シエスタにも助けてもらわないと」

「どうしてメイドに助けてもらおうのよ？」

「ここの畑仕事を知っている人がいないとな」

「事務の補助はルイズさん、畑仕事の實務はシエスタさんが手伝うんですよ」

「任せてください！しっかり手伝います」

シエスタが嬉しそうに返事をした。

「おっと、忘れてた」

才人はそうとうとポッケからデルリンガーを取出した。

「悪かったな、狭いところに押し込めて」

「おめー、わけわからんところに押し込めて。で、ここはどこだ？」

「トリスタニアだよ。これから魔法学院に戻るからな」

「おお、それでこれからどうするんだ？」

「デルフリンガーの事も聞きたいけど、今日は他にやることあるからしばらくは俺の背中についてくれ」

「おお、分かったぜ相棒。この伝説の、伝説の、・・・なんだっけ？」

「久しぶりに外に出たから忘れちゃったのかな？」

可笑しそうに舞華が背中中のデルフリンガーを見て言う。

「まあ、なんでもいいか。俺のことはデルフと呼んでくれ」

「ああ、改めてよろしく。デルフ」

「デルフさんよろしくね」

「なんか変なのが增えたわね」

これはルイズ。他の三人はそれを見て笑っている。

20・王都 - 4 (後書き)

王都編四話分きりがいいのでがんばって書いてみました。

才人も舞華もカリリーヌさんからもらえるお金の価値が全くわかっていません。

わかっていたらもう少し安くするようにいったでしょう。

もっとも二人とも、エルモア・アデンでは、国や城(都市国家レベル?)が戦争出来るレベルのお金を動かせるような人でしたが。

感想などありましたら書き込みお願いします。

21・異世界での科学話 - 1 (前書き)

仕事でしばらく間が空きましたが、投稿させていただきます。

才人達はルイズ達に科学を教え始めますが、自分たちが当然と
っている事でも、実際に教え始めると証明できないことが多く困
惑します。

その反面、魔法の力で納得できることもあるみたいです。ただし感
覚的なことなので色々突っ込みもあるでしょう。

ここには出てきませんが舞華も色々科学(というより数学・幾何
なんかですが)を教えていきます。

うまく話がまとまればそういった場面も出せたらと思います。

21・異世界での科学話 - 1

まだ日は残っていたが皆で学院に戻ってから食事をすることにした。

作物やらなんやらは一応簡単な内容を舞華がシエスタやルイズに伝え、明日の朝、準備することにした。早くから出して夜露や万が一、雨が降り出して濡れると種が駄目になるかもしれないからだ。

帰りは来るときと同じく才人と舞華がワイバーンを出して同じように乗って帰ることにしたのだが違っているのは・・・

「何この服？冬に着る様な服ね」

「本気でワイバーンが飛ぶと冷えるからな。タバサみたいに魔法で守ってやれないから」

「ふ〜ん、そうなの？」

「シエスタはもう着たぞ、早くしろよ」

「ちょっと！命令しないでよ。今着るから待ちなさい」

「早くしないと、空の上で風邪をひくぞ」

二人が着ているのは防寒仕様の合羽である。

才人たちが初めてワイバーンに乗り始めた頃に上空へ上がりすぎ

た二人は高空で寒さに震えることになったのだ。そこで何かいい物はないかと探していたのだが、エルモア・アデンに有るものは革の上下であり、風は防げてでも高空での寒さは防げず、寒さまで防ごうとするならばそれだけでそれなりの荷物になるため、荒れ地に戻った際にコンテナの中から探したのが防寒合羽だった。これだと防寒でかつ、着替えやすいし、革の防寒着の上下に比べると嵩張らない物ということで多少寒いのは我慢することになっている。

エルモア・アデンの人たちはどうしているかというと、ワイバーンの飛行高度を上げずにいるのだ。高高度で飛べば俺達と同じ悩みは有るようなのだが、高高度で空を飛ぶという事にそれほど必要に迫られていないというのもあり、精々見た目で三百メートル程度なので基本防風性能さえあればよかった。

「さ、さぶい・・・」

「だ、大丈夫ですか？ミス・ヴァリエール？」

「あ、あ、えっと、名前なんだっけ？「シエスタです」そ、そうね、シエスタだったわね。あんた、なんで平気なのよ？ワイバーンで飛ぶことがあんな寒いなんて知らなかったわ」

「ミス・ヒラガが魔法で温めてくれましたので・・・」

「う・・・うう。今度から舞華と一緒に乗ることにするわ。そうだなきゃ、もっと低いところをゆつくり飛んでもらわないと・・・」

「まあ、その代わり早く着いたし、な？」

「何であんたは平気なの!？」

「いや、まあ……、これぐらいなら我慢できるし、な？」

「……ホントにあんた達は……」

「あはは、ヴァリエールもさすがに寒さには参ってるようね。それにしても才人の連れてきた魔法生物はすごいわね、風竜よりも高いところを風竜より早く飛ぶんですもの、タバサが呆れてたわよ」

「だけど空を飛ぶとあんなに寒いとわ思わなかったわ」

さすがにルイズもキュルケと遣り合う元気はなかったようだっただ。

「舞華、栽培計画を立てないとな？」

俺達はルイズの部屋で明日来るといふカリー又さんの使者に対して、対応を相談していた。

「今は春の様ですから、最初に向日葵とかでその後に小麦とかトウモロコシかな？もし今小麦を育てるところがあれば、その後に大豆を育てれば良いと思うから」

「輪作するの？」

「ですね。でもいきなり言われても現地の様子もわからないし、困ります」

「小麦と向日葵、それに大豆と芋を、とりあえず数を増やすことが先ですよね」

「向日葵は何で？」

「油がとれるのと土が良くなります。向日葵の後に小麦を育てると育ちがいいから」

「なるほど・・・」

「もし痩せて肥料が沢山必要な土地ならサツマイモと蕎麦があるからそれでもいいですね」

「その芋とソバは土が良くなるの？」

ルイズが聞いてくる。

「いえ、肥料をあまり使わずに育てることが出来るんです。土が良ければかえって肥料を与えるほうが育ちが悪くなるんです」

「へえ」

「だから昔は飢饉のときの食用に畑の隅っこや家の庭の隅で育てられてたそうですよ」

「なるほどね。で、それを育てるわけね」

「でも、俺達はそれをおいしいと思って食べてたけど、ハルケギニアの人にはどうなだろう？」

「・・・サツマイモは美味しですよ。でもお兄ちゃん、蕎麦は微妙だろうな？て思ってたない？」

「ああ、そう思ってた」

「なら、こっちの人でも食べられるそば料理も作りますよ」

「あるの？」

「それは見てのお楽しみですよ」

「確かサツマイモと蕎麦ってハウスにあったよね？それとってこよ
うか？」

「ダーリン。それならこれからみんなで行けばいいじゃない。いつ
もヴァリエールばかりおいしい物食べるってのわね」

「・・・ずるい」

「舞華、どうしよう？」

「多分取り置きのがあったから、蕎麦もサツマイモもあと大豆とか
ジャガイモなんかも食べてもらいましようか？大豆は枝豆に出来る
やつもあつたはずだし・・・」

「わかったよ。少し移動するけどいいかな？」

「こんな時には、車がつかえるといいね。みんなで一緒に移動でき
るよ」

「燃料の事もあるし、ここでも大豆と向日葵を育ててみるか？」

「そんなに数がないよ」

「そっか、まあ、あそことこの間だけなら燃料も知れてるし、持つてこようか？」

「だね」

「何二人で話してるのよ！さあ、行きましょう」

「「はい（はい）」」

シエスタは明日の準備があるからと、残念そうにしながらも、一人で使用人の宿舎へ向かい五人でハウスへ向かっていった。

移動は才人と舞華のワイバーンで向かい、才人の方にルイズ、舞華の方にキュルケとタバサが同乗していた。

飛行時間も高度もとる前にハウス前に到着した。

「さすがに早かったわね」

「タバサ。あなたの風竜と比べてどうだった？」

「・・・背中に掴むところが少ない」

「そうだね。あなたの風竜の方がたくさん人が乗れそうね」

「でも、速さと高度はこっちの方がすごい」

少し悔しそうにそう言う。

ぼん、そんな感じにタバサの頭の上に手が載せられわしわし、という感じで頭をなでられた。才人だ。

「でもタバサの風流は幼竜だろう？まだまだこれからすごい竜になつていくよ」

「・・・わかるの？」

「ここに召喚される前、竜討伐に参加したことあってな。成竜というか古竜は半端ないからなあ。あれは油断してなくても簡単に殺されるから」

「あんだそんなのに参加してたの？」

「五百人ほど集まってな。空飛んだり水にもぐったりするやつじゃないから助かったけどそうだったら全滅してたかもな」

「・・・あんだ、なにやってたのよ」

「だから、古竜討伐」

「・・・もういいわよ」

ルイズが何か疲れたように返事をし、五人は無口になりハウスの結界に向かって歩いて行った。

結界を五人が通過するとそこは見慣れた召喚の儀式を行った草原の中に樹が約二百メートルの範囲で囲まれている奥の方に四角い馬車のような車の付いたものや、金属でできている箱が三段に積まれているものが並んでいるのが見える。

手前には布で囲われた正体不明の物、同じく布で囲われている馬車も見える。

「すごいわね。こんな結界ってはじめで、まったくわからないわ」

デルフは背中でおでれーた。おでれーた。と騒いでいる。

「・・・どうなってる?」

「さあ、舞華の先生と友達と一緒に作ったものだから・・・結界の魔法に干渉する何かがあれば四、五十年。もし何もなければ、その二桁は優にこの結界は持つらしいよ」

「「「!?!?」」」

「あの二人は、俺を召還した魔法に巻き込まれても平気で抜けられるような人だから、多分この始祖と同じか、それ以上の魔法を使えるんだと思う」

彼女達は自分のことを妖怪と言っていたことは伏せて、舞華の先生についてざつと説明する才人。それを啞然として聞く三人。

「舞華の先生はそんなにすごいの？」

「多分、俺が見た中じゃ、舞華なんてまだまだ子供とも呼べないし・・・、とにかく格というか、存在が違いすぎて比較できない」

「そうなんだ」

「でも俺達でよかったぜ、もしその先生たちを呼んでたら今頃学院はなくなっていたかもな」

「な、な、なんで？」

「気難しいんだ。もし進級試験程度のこととわざわざ彼女たちの手を煩わすようなことになっていれば、怒って弾幕張ってたかもしれないしな」

「ダンマクって何よ？」

「わかりやすく言えば魔法の弾かな？」

舞華の方を見ながらルイズに返事をする。舞華が続ける。

「えっと、ファイヤーボールとかウィンディアイシクルとかですよ、ね、それを数百から数千発一度に、場合によっては山を二、三まとめて吹飛ばす魔法とかお互いに撃ち合うのが普通なんです。先生のところは」

「なによそれ？」

「いくつか魔法を直接ではないけれど、教えてもらったので、でも、数百の魔法弾を誘導はさすがに無理ですね」

「それって、舞華の先生は出来るの？」

「見ましたから。最初にここに来る前に、怪物に襲われた時。数百匹いたモンスターが一撃で全滅しましたから」

俺が続ける。

「でも、あれは、、、わざと止めを刺さなかったんだよな。俺達に慣れさせるためにわざと……」

「お兄ちゃん気が付いていたの？」

「さすがに俺でも気が付くぞ。あの人達には何があっても俺じゃ絶対勝てないから。舞華なら条件付きで何とかなるんじゃないのか？」

「無理だよ。お兄ちゃんと二人なら三分ぐらいは持つだろうけど勝つのは絶対に無理だよ？」

「何でそこが疑問形なんだ？まあ、そういう人たちが作った結界だから」

「やっぱりあんた達って……もういいわ、早くあんた達の食べ物食べさせなさいよ！お腹すいたわ」

「……同感」

「もう、あんた達は・・・色気も何もないんだから」

三人を椅子に座らせると舞華が料理を作るっている間、お茶を淹れ、お菓子と一緒に彼女達に出した後は、簡単な科学の話、どちらかという小学生向けの理科の参考書に載っているようなことを簡単な実験を交えながら話をした。

「ここに蝋燭があるだろう。これにコップをかぶせたらどうなる？」

「・・・火が消える？」

「正解。ルイズ、これはハルケギニアの常識なのか？」

「え？、ええ、そうよそれがどうかしたの？」

「じゃ、何で火が消える？」

「空気が新しくないからよ」

「空気が新しい・・・か、古くなると火がつかなくなるのか？」

「えっと、そうなるわね」

「魔法で火をつけられるけど、かなり魔力を必要とするわ。効率が悪いのよ」

キュルケが補足を入れる。

「なるほど、じゃ、今度は水で」

「何してるの？・・・電池？」

「そそ、純水じゃ駄目なんで、ちょっと薬を入れて・・・」

「前にルイズが科学を教えてほしいって言ってたでしょ？それで準備してたんだけ」

「なに？」

ルイズは、わざわざ準備をして待っていてくれたことに嬉しくなり返事の声が弾んでいる。

「水だけでやるところで実験するにはしんどいから、ちょっとやりやすく薬を混ぜてあるけど水ね」

「うんうん」

ルイズは興味津々といった態度で実験の器具を見ている。一方キュルケとタバサは事前の知識もないため不思議そうにそれでも興味を持って見ている。

「これで水に電気を流すんだ。丁度、前にやった実験の逆だね」

「電気を作るんじゃないで、作ってある電気を流すのね」

「そうそう。そうするとね、ここにガラスの筒が二本有るでしょ？」

よく見てガラスの筒の下にある金属の棒に泡が出来てるよね？」

「うんうん、これは？」

「これは片方は酸素と言って火が燃えるのに必要な空気を作っているものの一つだよ。もう片方は水を作っている物の一つなんだ」

「！・・・ちよつと待って、水って空気からできてるの？」

「！！」

ルイズの発言にキュルケとタバサが驚いている。

「惜しいな、少し違う。空気を作っている物の一つと俺達が、俺達の世界で『水素』これは俺達の言葉だから、意味は水の素になる物という意味だよ。もう一方は『酸素』これは酸の素になるって意味かな？だけどこれは昔この物を見つけた時に間違っってつけちゃったんだ。」

「間違えてついた名前？」

「そそ、酸の素になると思われていたんだ。これと組み合わせると酸が出来るって。その後の実験や研究で間違っってわかったけど、この物の名前は、みんなが使っていたから、もう替えられなくなっってたんだ」

「でね、酸素と水素が混じると水が出来るんだ。だから、水に力をかけて、かけるといのは水素と酸素がくっついていてからそれをバラバラにするとどこまで何かの力、エネルギーって言ってね。」

「これを詳しく説明すると時間がかかるから、これはここまでにして、この水素は・・・」

棒の先に蠟燭がありそれに火が付いたもの、これをガラスの筒に近づけ、筒についているゴムの蓋を取ると・・・

キュン

鋭い音がして一瞬で燃えたようだった。

「な、なに？今の？なに？」

ルイズがあわてて水素が燃えた音と光に驚いているのだった。

「水素は燃える速さが早いんだ、だからあんな音がするんだよ」

「これが水素が燃えるときの特徴。で、酸素なんだけど・・・どうした？」

ルイズが逃げているというか三人が固まって机から少し離れたところにいる。

「びつくりするじゃない！」

何で涙目なんだよ、そんなに驚くことか？

「酸素は大丈夫だよ。危ないと思っているなら、そこで見てな」

同じように燃えている棒を近づけ、ガラスの筒の蓋を取ると火が勢いよく燃えだした。

「わあ、なにこれ？火の秘薬使ったみたい。ねえ？」

ルイズはキュルケの方を見て言う。

「でもなんだか違う感じがするわ」

「キュルケは火の系統だっけ？さすがによく見てるよな。酸素は物が燃えるのに必要な物なんだ。空気の大体五分の一が酸素で残り五分の四が『窒素』という物で出来ているんだ。大体な、他にもほんの少しずつ色々な物が混じっているから正確じゃなくて大体な」

「そうなんだ、初めて知ったわ」

「・・・火が燃えるには酸素が必要という事？」

タバサが何か思いついたように質問をしてくる。

「その通り。次の実験な、外でやろう」

「「「？」」」」

「今度は冗談抜きに危ないからだよ」

三人の顔が強張る。もっともタバサの顔はよく知っている者でなければそれと気付かないだろうが。

外に出ると才人が何か色々な物を台車に載せて持ってきた。その中に小さな陶器の入れ物があった。そして、蓋付きの壘、電池に何か板がありそれに何か部品が付いている。ルイズは前にそれを才人が

『キバン』と言っていたのを思い出した。

「これはなに？」

電池の付いた小さなカラクリを指さしてルイズが訊ねる。

「起爆装置。みてる」

才人がスイッチを入れると基盤の先についているリード線、その先端から火花が付いた。

「それと、この中身をこの壘に入れて・・・」

つんとした匂いが辺りに立ち込める。

壘の中に入っている液体を陶器の入れ物に入れてその中へリード線の中へ入れて十分に距離を取る。

「この中身は少ないけど油の一種で満たしてあるんだ。万が一爆発すると危険だからな。離れても火花が飛ぶように細工をしてあるんだ」

「じゃ、あの入れ物に油が入っていて、中に火花が飛ぶようになってるってわけ？」

「そうそう、それでこのスイッチを入れると・・・」

「いきなり何よ・・・って？」

慌てて三人が身を伏せるが何も起きない。

「何も起きないだろう?」

才人は何でもないように容器の方へ近づき中身を元の壇へ戻して陶器の入れ物を開けると、点火装置を元に戻すと、またルイズたちの方に戻ってきた。

「今度は爆発するぞ」

「「「えっ!」」」

身を伏せる三人

「じゃ、いくぞ」

才人がスイッチを入れるのと同時にバン!と一瞬鋭い音がして爆発したようだった。

「さすがに爆発の瞬間は見れないよな。もう終わったから頭を上げても大丈夫だよ」

「大丈夫なの?」

「もう終わったぞ、ほれ」

才人がルイズ、キュルケ、タバサの順で手を掴んで立たせると壊れた陶器の入れ物を見せた。

「・・・どういう事?」

考えるように首を傾げながらタバサが才人に質問してきた。

「ここじゃなんだから、部屋に入って話をしよう」

才人は壊れた入れ物なんかを簡単に片付けると、三人は才人について部屋へ戻った。

「簡単に言つと物が燃えるには、燃えるものが必要なのはわかるな？」

「当然ね」

「そうだな、次に、さつき酸素を作つた時も言つたけど、酸素がなければ物は燃えない。もし、燃えるときは燃えるものに酸素が入っている場合だな、さつきの油から離れたのは実はその可能性があったからなんだ」「そうなの？」うん、酸素は水にも溶けるんだけど、水に溶けないと魚とかは呼吸できなくて死んじゃうんだ。理解できるかな？まあ、その話は今度次の機会ですとして、それで、水と同じように酸素が溶け込んでいたり、燃えるときに酸素が発生すると物が燃える」

「じゃ、水の中の生き物は水から呼吸しているの？」

「そうそう、水の中の酸素は水草とか海だとか海藻といった物から出来るんだ」

「それは実験でわかるようにできないの？」

「残念ながら今の状態では俺は知っているけど、証明が出来ないん

だ。一番の問題が酸素の証明ね。水の中に溶け込んでいる酸素を目に見えるようにできないから」

「そっか、残念だわ」

「まあ、それでもう一つが温度なんだ」

「「温度？」」

「そうそう、タバサは分かるのか？」

「寒いところでは火が付きにくいし、消えやすいのは知っている・・・」

「そうか、まあ、この辺の常識を実験で確かめるのも科学だけど証明方法が今のところないからな」

「じゃ、温度が低いか、酸素がないか、燃えるものがなければ火がつかないわけね」

「まあ、そうなんだけどね。魔法だとそこらへんは魔力で無理やり火をつけられるんだらう？」

キュルケの方へ向かって話をふるとキュルケは頷いて返事をした。

「そうよ、でもすぐ消えるし、目くらましにも使えないわね、たぶん」

「そこが魔法を科学と言えない所なんだ。誰がやっても同じにならないから、こつやれば同じになるっていえないからな」

「で、最後の実験なんだけどさつき説明したように燃えるものがあったても酸素がなければ火がつかないんだ、だから最初は爆発しなかった。次にやったのは空気が入って燃えるものは減ったけど酸素のおかげで火が付いた。ってことなんだ」

「キュルケ向きの話になったかもしれないけど、火の魔法を使う時にそれに気をつけると威力が上がるかもな」

実はその時、才人には別のことを思いついたが、錬金の専門である土の系統のメイジはいないので、あとで舞華に話をしてみようと思う。科学？の話を終わらせて、舞華の料理をお茶を飲みながら待つことにした。

「まあ、整理すると魔法の干渉がない場合、物が燃えるには、燃えるもの、燃えるのに必要な空気というか酸素が必要。あと、燃える温度が必要。ってことだな」

「もう一つは水でも空気でも、この間ルイズには説明したけど、青銅のように色々な物が混ざって物が出来ている。それらを分けると最後に分ける事の出来ない物になる。色々な物はそれを組み合わせるって作ることが出来る。ってことかな？」

「一つのもので出来ているのは銅とか鉄だけど普段は混ざりものの状態で存在するから。錆とかね。これは酸素と鉄とか銅が混ざった状態だよ、残念だけど今の俺達じゃそれを証明できないけどな」

「さあ、冷えたらうから、取り替えるな。少し待っててくれ」

才人はそう言うと皆のコップを集めるとトレーに乗せお茶を入れな

おすために部屋を出て行った。

22・異世界での科学話・2

才人が戻ってきたとき舞華も一緒だった。

「丁度できたところですよ」

にこここしながら舞華がそう言って食べ物に乗っているワゴンを押しながらやってきた。

才人は一緒にトレーを持ち、その上にはお茶のセットではなく何か皿に載った食べ物が見えた。

才人はなんだか首を傾げている。

「ダーリン。どうしたの？」

「いや、舞華の作った『そば』料理が、ちょっと・・・」

「何よ、見せなさいよ」

ルイズが間に割って入ってくる。

「これだよ、才人がみんなの座っている机に並べていく」

「これって・・・」「・・・これは」「これはトリスティンにもあるわね」

「そうなのか？」

「こっちはガレットよ。これはシャットとかいったかな？ロマリ

アの料理よ。ポレンタ、これもロマリアの料理ね」

「さすがルイズさんよくご存知ですね」

「そうなんだ」

「でも、このつくり方は、……これは平民の食べるものよ。貴族が食べるには……」

「それなら、それで構わないよ」

「え、なんで？」

「人の話聞いてないな。これは不作の時に農家の人に食べてもらう物で、肥料が基本的に必要ないから農家で庭とか畑の隅っこで育てもらう物なんだよ」

「え？そうだっけ？」

「そうだよ」

才人は呆れたように言う。

「大体、救荒作物を売り物にして人気出たら本末転倒だけだな」

「……でも、それはそれで悪くないと思うが？」

タバサがやけに深刻そうに聞いてきた。

「売れるとなると、それを売ることが目的に作り出すからね。万が

「飢饉になった時に領主が売れるものを年貢にしてしまうと食べるものがなくなるから」

「・・・そうなるのか？」

「俺達の国や周りの国で俺が生まれる前に、それこそずっと昔からの記録で、何度もそんなことが繰り返してきてたんだ。だから、売れない物を少しずつ作っているのは、いざって時の為に必要なんだ」

「農家ではない街に住んでいる人は？」

「城の蓄えを出せばいいし、その為に年貢や税金を取っているんだろっ？」

「そ、それは、そうだけど・・・」

「まあ、気にするな。おいしい物なら勝手に売れるしな、そんなことは自然に決まってくるものだから。せっかくだから俺の国のソバの料理を食べてくれたらいいよ」

料理に関しては、才人がソバは日本固有だと思いついたため逆にソバを使った料理の存在に驚いていたが、皆にはハルケギニアに存在しない大豆、小豆、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモはおおむね評価が高かった。ただ味付けは舞華が言っていたが、

「味は私たちの国の味付けなので、これからハルケギニアに合った食べ方を見つけないといけませんね」

これがすべてだった。才人自身が感じていたこの濃い味付けは、裏返して、日本の薄い味付けは中世ヨーロッパに近いハルケギニアでは普及の邪魔になりそう気がしていた。これについては、シエスタさんもいるし、マルトーさんという料理名人（ちなみに舞華の評価です。）もいるから問題ないです。と言いつつ舞華を信じることにした。

才人個人としては、小麦、大麦、稲のうち、特に稲に関しては広まってほしいと俺は日本人なんだから。と思っていたが。

取敢えず種と種芋をキュルケとタバサの二人にレビテーションで移動を手伝ってもらい、いくつか倉庫にしていたコンテナから出して手前のトレーラーに載せたコンテナへ移してもらい移動できるようにしておいた。

才人は、これで明日の準備は終わりかな？それにしても最近トレーニングサボってるよな？と思いつつ、皆を学院に帰すために外で車の準備をしていた。

部屋に戻ってきたキュルケとタバサはとりあえず二人がハルケギニアの常識外の人物であることに改めて驚いていたのだが、分からないのは隠しておいた方がいいと思われる情報を平然と見せる二人の思惑であった。

「舞華。どうしてこれを、というか会って間もないのにここまで見

せてくれたの？」

「？、一つは隠していてもすぐばれるだろうし、見せられるものは見せておけばいい。っってお兄ちゃんかね」

「もう、この二人は何言っても仕方ないのよ。まったく勝手なんだから……」

「ルイズ？」

「もう気が付いているでしょ？二人が東方から来たんじゃないってルイズがキュルケに向かって話し出す。

「うん、というか東方がどんなところかも知らないけどね。それでも東方からの交易と一緒に色々な物が入ってきてるし、噂ではあるけど色々な話も入ってきてるからね。それなら、今聞いた話が一緒に流れてきてもいいはずよね」

「交易？」

「表立つてはそれほど活発じゃないけど、知ってるんでしょう？最近東方から色々な物が流れてきているのは？」

「ええ、それは……」

それに続けてタバサがはなしだす。

「……だけど、才人たちが持っているもの、見せてくれるものは似ているものもあるけど違う。言葉でははっきり言えないけど、」

場違いな工芸品』と呼ばば納得できるものばかり」

「!?そ、そうね確かに才人たちが見せてくれるもの、知識、確かにそういわれるとそれで納得できるわね」

キュルケがタバサの後を続けるように話し出す。

「だからなのよ。騒いで目立って、下手すると教会から異教徒判定されると大変よ。なのに二人は学院で目立たないようにしているのに、私たちの前では平気でそういった物を晒しているし。」

「だからですよ。お兄ちゃんが言うには、二人はルイズさんと同じく信用できるから。って」

「あらあら、信用されているのね?」

「お兄ちゃん、ああ見えても血盟。一種のギルドのような集まりですね。説明するのは難しいけど、そのリーダーだったんですよ。こっちに來るときに別の人に次いでもらいましたけど」

「それに、私たちの血盟は騎士団相当の扱いもあつたんですよ。それも複数の城主からお願ひされて。だから、人を見る目はそんなに悪くないですよ?」

「それで竜討伐に参加したの?」

「ええ、竜以外に巨人や亜人や怪物、吸血鬼や幽霊とかもですね。小規模の物はそれぞれの村や街から依頼が出ますけど、大規模な軍隊を派遣するようなものは城主から出ますから、その時に同行するように依頼されて。です。もちろん戦争もありましたけどね」

「そんなのまで？」

「はい、でも一番お兄ちゃんが自慢しているのは、血盟やその時パ
ーティーを組んだ人達を必ず連れ帰ってることなんです」

「そうなんだ」

「だから、二人はお願いしておけば不用意に喋ったりしないよ。っ
て。もちろんタダじゃないですよね？」

「あはは、そうね、これから報酬は考えるわ。決まったらお願いに
上がるわね」

「・・・考えておく」

「・・・勝手にしなさい・・・もう・・・」

キユルケ、タバサ、ルイズの発言を聞いた舞華は、

「お兄ちゃんに伝えておきますね。でも無理な物は無理ですからね」

才人が準備した車はメガクルーザーだった。自衛隊の高機動車の方
がすぐ準備できたのだが乗せるのが貴族だし、前回ルイズがうる
さい。と言ったことを覚えていたので、まだこっちの方がまし。と
考えたのだった。ちなみにほかの車両は乗車人数や舗装という物が

ほぼなされていない学院の周囲を走るということから、考えていない。

ついでに、学院へ追加で持っていく荷物・・・パソコン用の予備電源というか準備した太陽電池が出力ギリギリだったので余力を出すために追加のパーツと本とノートといった物、それに舞華のギターとヴァイオリン、それにキーボード。約束だからと舞華に頼まれたものだ。

後、訓練をするのも含めて予備として、ケースに入れてある銃、M4とその弾薬とオプシヨンパーツ一式。撃つのは左手のルーンが助けてくれる。とはいえ、ルーンを制御してルーンのを無効化できそうなのでそうやって、ルーンなしで訓練しないと地力が上がらない。というのは何かあった時に地力が上がっていないと危険な気がしたからだ。

学院にいる間はそれなりだろうけど、この世界はエルモア・アデオンよりは少しまし、平成日本から見た場合、危険すぎる世界。まだいくらかもない間での情報なので確度は低いが用心しておいた方がいいだろうと思っっている。何しろたった二年でこの学院から出ていかなければいけないのだ。今は召喚主に保護されている状態だが、何時独り立ちしなければいけないかわからない。最悪、明日にでも自立して・・・そういった可能性もある。と考えている。

「そろそろ、学院に戻るぞ」

才人がハウスへ戻り声をかけると、四人は話をやめて立上り、こ

ちそうさま、おいしかった、等と言いなながら寮に戻る準備をする。舞華は片づけを自動食器洗い機に任せてあとは明日やるといって私物を取りに部屋へ急いで戻っていった。

真つ暗な外に出るとハウスの方から照明が光り玄関の周りを照らす。時限式の照明装置。玄関を出てから約十分間は点灯している。

タバサが光の中でそつと眩く。

「これも場違いな工芸品・・・」

その光の中に白い箱型のちょうど馬のない馬車に見えるものが鎮座していた。

高さ二メートル、幅もほぼ二メートル、長さは五メートルほど、四隅に車輪がついている。そして予備の車輪なのだろうか？後ろの扉にも車輪がついている。ガラスを通して椅子の向きから前後が分かる。前方には一段低くなっており、段になっている所には、馬車と違いガラスがはめ込んである。扉は四つあり、それにもそれぞれガラスがはめ込んである。前方の一段低くなっているところの一番前には丸棒で枠になっておりその下には、何に使うのだろうか？金属で編んであるロープを巻きとっているものがついている。天井にはやはり丸い棒のようなものが枠のように設置しており、その上には布を巻いたものだろうか？ロープでくくりつけてある。

才人が三人に向かい

「準備できたぞ。後ろに、少し狭いのは我慢してくれ」

そついいながら、後部のドアを開けて乗車を促す。舞華が助手席に乗り込み最後に才人が後部ドアを閉め運転席に乗り込む。

「これは、このまま動くの？」

タバサが不安そうに尋ねる。

「ああ、まあ、馬のいない馬車だと思えばいいよ」

才人がエンジンをかけゆつくり走りだした。

「これがあなたの世界の馬車？」

「そうだよ、本当は運転の勉強があつて試験に合格しなきゃ運転しちゃダメなんだけどな」

そんな話をしながら俺達は学院に戻ってきた。

ちなみに前にルイズを乗せて学院に来た時には衛視の人と一悶着あつたがルイズが公爵家の威光で無理やり黙らしている。さすがにあの後、あの発言はないだろうと、学院長との話がまとまった後でルイズと一緒に謝りに行った。さすがにルイズは不機嫌だったが、子供が親の威光を振りかざして、我を押し通すのはよくないと、意外にも舞華が熱心にルイズを説得して謝らせた。

まあ、謝った時の言い方もちよつとどうかとも思つたが、公爵家の子女が平民に謝るのは余程の事なんだろう、謝られた衛士の方が恐縮していたが。

その時に顔を覚えられたのか、顔を合わせては挨拶をし、学院長の

許可書も有り（シエスタも込みで作ってもらった）本来は日々許可書をチェックするのだが、顔パスで出入りできている。ちなみに貴族でも本来学生はこんな簡単に出入りできないし門限もある。もっとも大抵の生徒は無視しているようだが。（門以外から魔法使われたらどうしようもない。）

許可書の名目は・・・簡単に言えば結界内の作物の世話。実際には結界の効果で世話をしなくても枯れない。という舞華の説明があったのだが話しかけながら水やりとかすると喜んでくれるので出来るだけ草木には話しかけるといいそうだ。

事の始まりは学院長に俺達が隠れて舞華がクリームや石鹸、果物を厨房の人を中心に配っているのがばれた事。果物とかを取りに行ってるのがばれたから。あれだけ派手にいればそりゃわかるよね。おまけに作り方まで講習してるもんだからなおさら目立ってる。

舞華曰く学院長は魔法で覗き見をしていたそうだ。ところがどうやっても途中で見えなくなってしまう。そこで学院長は舞華が消えたあたりでずっと探していたそうだ。学院長なのに暇なのだろうか？ロングビルさんまで付き合っていたという話だ。もちろん、ロングビルさんは、かなり迷惑そうな感じだったらしいが。

そして、その時に分かったことがあった。幽香さんとゆかりさんが作った結界は実は有効範囲が広いことだった。簡単に言うと、魔法を使った道具、いわゆるマジックアイテムなのだが、それを利用して離れた物を見ることが出来る『遠見の鏡』。これを使って学院

長は俺と舞華を監視していたのだが、大体半径五百メートル（五百メートル）の範囲で不可視状態に出来るということだった。その為結界の外で行っていた銃の射撃訓練や剣や舞華の魔法の訓練はほとんど見る事が出来ない状態だった。

ついでに言うると舞華の作ったクリームや石鹸は、どうも水のメイジの作るものと大して効能が変わらないらしい。秘薬と言ってもそれこそ俺達の知っているハンドクリームみたいなものから、傷なんかを跡形なく消し去るレベル、さらには全てではないが病気を治すものまであるらしい。ただそういう物もあるのだがやはり不治の病といった物もあらしい。もちろん治療効果を上げるために魔法も併用する。

で、結局わずか二日にして結界の畑のことがばれ、結界内に舞華が招待し、クリームや石鹸のレシピを書いた物を学院長とロングビルさんへ見せたという事だ。もちろん日本語で書かれた物を読めるはずもなく、魔法で書物の内容を読むものまで使ったのだが学院長は読むことが出来なかったそうだ。

舞華はいつも面倒を見れないためシエスタさんにも畑や樹の世話をお願いしている。これは厨房の人からのお礼も兼ねているらしい。舞華はルイズの世話（男の才人がやるわけにいかない下着の洗濯や着替えなど）もやっているためだ。

学院長とロングビルさんには結界内で採れる果物なんかを渡して、この植物を世話していること、シエスタさんにも手伝ってもらおう事も含めて半端強引に許可を取ったのだった。

名目としてははなはだいい加減な物だったが。

皆を寮になっっている塔の門へ降ろすと馬小屋に向かった。馬小屋の中にランドクルーザーを止めるスペースがないため馬小屋の傍にランドクルーザーを止めると迷彩シートをかけておく。ネットではない雨露しのぐための物だ。

一応顔なじみ？の厩舎の管理人に声をかけると寮の方へ向かった。なんだかねで平民がさらわれて貴族の使い魔になっている。という事で勝手に同情してくれているのだ。申し訳ないと思うがこのままそれを利用してもらっている。

ルイズに挨拶をして自分達の部屋に戻る。舞華に、おやすみなさい。を言って才人は眠った。

舞華はルイズと一緒になんだかねで明日の準備をやってしまっらしい。要は作物の育て方ノート。その作成という事だった。

22・異世界での科学話・2（後書き）

感想、誤字脱字の指摘など有りましたらよろしくお願いします。

それにしても、投稿している文そのものはかなり前にできているのですが、推敲が推敲になっていないのは・・・
精進が必要です。

23・結界の中での出来事 - 1 (前書き)

この話、実は日数計算を間違えてしまい、入れるべきところに入らなくなり、苦し紛れにここへ入れることになりました。

従いまして、色々時系列に問題が・・・

会話の表現からも、今まで投稿した文とおかしなことに・・・
プロットってなんだっけ？そんな気持ちになってしまいました。

いつか修正したいと思っています。

取敢えずよろしく願います。

23・結界の中での出来事 - 1

召喚の翌日 フェオの月、エオローの週、オセルの曜日の夕方召喚の儀式の行われた草原近くにて。

「急に見えなくなったのはこの辺じゃな」

白い髭をたくわえた老メイジが草原を見渡して言った。

「なにもありませんね？」

タイトなツーピースを着た女性がそれに答える。

「それにしても何時も女の子を覗き見というのは、教育者としてどうなんでしょうか？」

「別に着替えとか入浴中とかまで見とらんぞ」

「見ていらっしやるなら大問題ですわ。いまごろお城へ報告していただきます」

「カッ！。自分の学院の女生徒じゃぞ。そんなことせんわ！」

「では、その話の最中にわたくしのお尻を触るのはやめていただけませんか？それと使い魔に下着をのぞかせることも！」

足元の白いネズミのしっぽを靴のかかとで踏みながら、ミス・ロン

グビルは学院長に向かって冷たい口調で話しをする。

「モートソグニル！」

ロングビルが足をゆるめると足元にいたネズミがオスマンの足元を上って肩まで上がってくるとそこでオスマンの顔に向かって止まった。

ロングビルとモートソグニルと呼ばれた白いネズミはこれまでもこんなことがあったのか何時もの事のように行動しているように見えた。

「おお、モートソグニルや無事だったかい。そうか、これをお食べ」

オスマンはポケットからナッツを取出すとモートソグニルと呼ばれたネズミへ与えていく。

「もっと欲しいか？そうかそうか、ではその前に報告じ・・・」

その時何もない場所に突然人影が現れた。

「オスマン先生？ロングビルさん？こんな所で何をしていますか？」

「！」

「おや？ミス・マイカ？君こそどうしてこんなところで？誰もいないと思っていたのだが？」

さすがにオスマンはオールドと呼ばれるだけの事はあるのか、ただのエロ親父ではないのか、突然の出来事に対しても落ち着いて対応

している。一方のロングビルは声も出せない状態だ。

「いえ、花の世話をしていたら声が聞こえてきたので見に来たんですよ」

「「花の世話？」」

「はい、ここに私たちの花壇や畑がありますから」

にこにこしながら答える舞華に対して、周りを見渡し、不思議そうな顔をしてお互いの顔を見合すオスマンとロングビル。

「ここで立ち話もなんですからお茶でもどうですか？」

「ミスタ・サイトも一緒かね？」

「いえ、この時間はルイズさんと一緒ですよ」

「そっかそっか、よいよい」

オスマンはそれを聞いてにこにこしている。

「しかし、どこでお茶を飲むのかね？わしには草原と林が見えるだけじゃが？」

「そっか、言ってなかったですね。結界があるのでその中です」

「結界だと？」

「はい。ルイズさんに召喚されたときに私たちの土地も一緒に召喚

されたんです。それで私に魔法を教えてくださいました人が結界をそこに張ってくれたんですよ」

「なるほどのう」

「オスマン先生は、ずっと私を探していたんですか？」

「なぜそう思うのかな？」

「誰かが見ているのが分かったから。それで誰かな？と思ってました。普通ならここまで来る人はいませんから」

「気付いておったのか。すまんう。なんせ学院の外へは許可がないと出入り禁止なんじゃ、誰かが無許可で出入りしておるのでな。調べておったのじゃよ。何せその魔法具は個人の生活を覗き見も出来るんで、誰にでも貸せるものではないのじゃ」

「あ、ごめんなさい。知らなかったんです、オスマン先生自らの手を煩わせました」

舞華は慌てて、学院の規則を破ったことを謝った。もちろん、オスマンの説明は昨日から監視しているとも言えず。とっさの言訳だったのだが、それなりに貫録のあるオスマンがゆつくりとした、考えながらしゃべるような振りをすると、あたかも言訳が本当に聞こえてくるからオールドの異名はさすがである。ただ、ロングビルは何言ってるんだい。このスケベ親父は。などと心の中では思っているが、もちろん口にはしない。

「それにしても何時も見られている感じがしてました」

「おほほ、使い魔の召喚で人間が召喚されたのは初めてじゃからのう。わしだけじゃなく教師や学生もおぬしら兄妹には注目しておるぞ。まあ、最初のうちだけじゃな。それまでは、慣れんかもしれんが我慢してもらえんかのう」

「そうですか・・・そうですね仕方ないですね」

「すまんのう」

オスマンがすまなさそうに言うと舞華は、

「仕方ないですよ。それでは、どうぞお茶でもどうですか？」

明るく、二人をお茶に誘う。

「せっかくじゃから、よばれようかのう。ミス・ロングビルもどうじゃ？」

「あ、はい」

舞華はオスマンとロングビルを先導してハウスの方へ歩いて行った。

「ほづ」「！」「・・・」

「これはすごい物じゃな！このような結界は見た事も聞いたこともないのう。エルフでもここまでの物は無理じゃな」

「オールド・オスマン、エルフの精霊魔法もご存じなのですか？」

「まあな、・・・それにしても不思議な空間じゃな。魔力が感知できなかつたぞ？」

「すごい。よくお分かりになりましたね。私もこれは魔法じゃないと思います」

「知らんのか？」

「はい。私の魔法の先生が、ご友人とお作りになられたので、最初は魔法だと思っていたのですが最近になってどうも違うと解りはじめました」

「魔法を使う者が魔法を使わずにこれだけの結界を作ったのかね？」

「はい。そのようです。あ、こちらです」

「不思議な形の家ですね？」

コンテナハウスを見てロングビルが見た目の印象を語る。

「ですね。これは非常時に建てる家をもとにして組み立てたんです」

「あの周りにあるのも使ってたかね？」

オスマンが周りに配置されているコンテナを見て言う。そちらを見ると、一部コンテナに掛けられている迷彩ネットが外してあり、色や窓がついている、いないの違いがあるものの外形が似ているこ

とが見て取れる。

さすがにオスマン先生は学院長しているだけあって、すごい観察力なんだー。と舞華が感心していると、オスマンより質問が飛んできました。

「ミス・マイカ。厨房に届けている果物とはどれなのかのう？もしよければそれをお茶と一緒に頂けないものかな？」

「はい。マンゴーかな？」

元々、兄妹二人では食べきれないため余り物を厨房に持って行っているのでは、ということかー瞬考えたが、一番珍しがられたのがマンゴーだったので、多分それだろうと、結界を囲んでいる樹のならんでいる一角を指さして、首を傾げながらオスマンに返事をする。

「ほう、珍しい木の実じゃな」

「はい、でもこれは未熟なので中にあるものでどうぞ」

木になっている緑色の平べったい卵型の木の実を見ながら話をする。

「そうかそうか、ではいただきに行くとするか」

そう言いながら、舞華を先頭にコンテナハウスの中へ入っていった。

「ここで履き物を脱いでそれを履くのか」

「東方の習慣は変わってますね。そのままの方が楽なのに」

「あはは。そうですね。でも、私たちはずっとこうだったから。そのまま部屋に入ることが信じられないですよ」

「こちらへどうぞ」

椅子を引き、オスマンを促す。

「お、すまんのう」

「少しお待ちください」

そう言い残すと舞華はお茶の準備のため台所へ向かっていった。

「簡素な造りじゃの」

「そうですね。それに結界の中に入ってから、魔法の力がどこにも感じられませんか」

「ほう、ミスもそう感じたのかな」

「は、はい。私も土メイジですから錬金などで作られたものは分か
りますし、ミス・マイカの持っていた剣の魔法力は離れていてもわ
かりましたから。なのにここには魔法の力は何も感じません」

「なるほどのう。彼等の正体は分らず、ますます謎は増えるばかり
じゃな」

「はい。どうしてここを見せる気になったのでしょうか？」

「意外と聞かなかったからかもしれないがのう。あの時にはそんなことは分からなかったからのう。聞いてみるか」

「しかし不思議な建物ですね。外は晴れているとはいえ、窓にはカーテンがありますから外の光は遮られているというのに、部屋の中はこれだけ明るい、なのに魔法道具を使ってない。どうなっているのでしょうか？」

ロングビルはそういうと間接照明になっている天井をみあげた。

「お待ちせしました。どうぞ」

「ほう、これはいい香りじゃな」

「おいしいですわ」

「ありがとうございます。それとこれが、さっきの木の実です。どうぞ」

「ほう、甘いのう」

「本当ですわ」

「ありがとうございます」

にこここしながら舞華はお礼を言う。

「所でミス・マイカ。学院から抜け出しているようじゃが、ここで世話をしておるのかのう？」

「はい。そうですが・・・まずかったですか？」

「うむ。学院の外から出るには、例えば魔法の授業じゃな。授業で教師の引率の元、わしが出す許可書が必要なのじゃ」

「そうだったんですか。申し訳ありません。知らなかったです。学院の規則は何も知らないものですから・・・」

「よいよい。ただ無断で外出するのはやはり問題でのう。メイドもここにきておるのか？」

「はい。シエスタさんをお願いします。どうかシエスタさんに罰は与えないでください。私がお願いしましたので」

「まあ、誰も説明しておらんし、実際、学生で門以外のところから抜け出しておるものもあるしの」

「そうなんですか？」

「うむ。それで君だけをしかる訳にもいかんしな。わしから後で許可書を出しておこう」

「それと聞きたいんじゃが、使用人たちへ秘薬の作り方を教えてい

るそうじゃな？」

「秘薬？・・・石鹼とかクリームですか？」

「それがミス・マイカの秘薬の名前かな？いや、わしも見た事がないので知らないんじゃないよ。それで東方の秘薬を見てみたいと思つてのう」

学院長はロングビルさんも私たちが東方の出身ではないことを知つていても、あくまで東方出身として押し通す気なんだと解つた。

舞華がワゴンを押して戻ってきた。用意しますからお待ちください。と言つて奥に引つ込んでからしばらく時間をおいての事だ。

「これですが解りますか？」

ワゴンの上にはガラス瓶に入つたいくつかの秘薬。それと石鹼。それに同じくガラス瓶に入つた油が十数種類、固形の油、何か不明だが白い秘薬・・・これらは原料じゃな。オスマンは一目見て舞華が材料から製品までを持つてきたことを理解した。

そして、ワゴンの下の段にある本。表紙の材質は革でも布でもない何かで出来ている。中を金属のリングで紙に沢山の穴をあけそれで閉じているように見えた。

「その書物は作成方法が記されているのかね？」

「はい。よくお分かりになりましたね」

驚いた顔で舞華が答える。

そして机の上にガラスの壺を並べはじめる。見ていると製品ごとに材料を並べているようだった。

「このクリームは基本はこの材料で作ります。これが基本的なクリームになります。これに色々な材料を混ぜることで効能や好みの個性を出すんです」

「こちらのクリームは厨房の方にお問い合わせされた分の材料ですが出来上がりはこちらになります。それと石鹼はこの材料で作ります。基本は油とアルカリ原料を混ぜて作りますからこちらがアルカリで油の種類によって種類を増やしているわけです」

「そしてこれが香料です。主に香りをつけますが、一種の油なので効能に影響する場合もあるんです」

「それでこれが私が纏めたレシピです。元々私の国に有った物やほかの世界の物で私が作れるものをこうやってまとめてあるんです。これがこのクリームになっています」

見せてくれたレシピについては字が読めなかった。リーダーを使ったのだがまったくわからなかった。そして、ミス・マイカは別の紙を用意してこれは私の国の名前で・・・と材料から説明を始めていた。

どうも書いてあるものをハルケギニアの言葉に直すようにしようとしているらしい。ミス・ロングビルがミス・マイカから借りた透明な軸の不思議なペンと渡された紙に一生懸命書き写している。

わからない物はオスマンに聞き、それでもわからない物はマイカ

が持ってきた本、植物ズカンという物。これは王家や有力貴族、アカデミーにもない物、そしてその中身を見た時には息をのんだ。まったくそれをそのまま写したとは思えない、そんな魔法はないのだが草でも花でもそれにありとあらゆる植物を、そのまま書物に生きたまま埋めたとしか表現のできない『絵』、そしてそれに関する詳細な説明。

これはこれまでいろいろな学者やメイジが個人組織でやろうとしてやれなかったことを完璧な形でまとめてある。もしこれを見れば価値の分かるものは金貨で何万と出すことは想像に難くない。マイカやサイトのいた世界とは恐ろしいところ、としか思えない。シユブルーズやコルベールならばそれこそ授業など放り出してここへ入り浸るかもしれない。

オスマンはいくつもの考えや想像が頭の中で回り出した。

ロングビルはこの書物にはそこまで思い至らないようだが、それでもこの美しさに吸い込まれるように覗き込んでいる。

「ミス・マイカ。この書物はどうしてあなたが持っているんです？」

ロングビルは平民がそのような物を持っていることに不審を抱いたのだろう。東方とか異世界といえども物としては格が違う。これが魔法学院の中にあるのであれば図書館の中の『フェニアのライブラリー』が相応しい。そう考えていた。

ロングビルの質問に対して舞華は顔を赤くしながら、

「この本はやっぱり恥ずかしいですよ。ちゃんとした図鑑があればよかったです。が仕舞い込んでありますので、その、私のかお兄ちゃんのお下がりなんです。小学生向けで……」最後は小さな声になってしまう。

「？、その小学生とはなんじゃね？」

「あ、私のところでは教育が義務化されています。そして一番最初に受けるところを小学校と言います。大体六歳から十二歳までですね。そして次が中学校。十三歳から十五歳まで。その後は義務ではないのですが、お兄ちゃんが受けていたのが高校、えつと正式には高等学校です。年齢は義務じゃないのですが大体十六歳から十八歳までです。もつと年上の人が勉強をし直すために入ることもあるんです。義務じゃないので他に色々な専門学校なんかもあります。で、勉強をもつとした人には大学というのがありますから、こつちでいうアカデミーみたいなものですよね。え、えと、だから、すぐにある本がこれなので、種類だけわかればいいのかと思つて、え、あの、やっぱり程度低かつたですよね」

二人は啞然としていた。これが初等教育に使う書物、確かに文字は読めないが大きく書かれておりハルケギニアであれば細かい文字がびつしり書かれている事だろう。でもそれはこのような『絵』で表現できない事は明らかでそれを補足するのに文字が必要なのだ。確かに読んでいる文字に小さく補足のような形で別の文字が書かれていたり枠で囲まれた補足説明の様なものがあちらこちらにある。表題なのだろうか？派手に、読めないがおそらく子供が読むのであれば、間違いようのないしっかりとした文字で書かれている。そういえばギーシュとの決闘騒ぎの時、ルイズが使い魔からハルケギニアを未開、とか言われているようなことを聞き及んでいる。確かにこれでは仕方ないのかもしれない。

「ミス・マイカ。それはありえんよ。残念ながらハルケギニアではこの本は全てではないが、かいつまんでミスから聞いた内容であれば、立派にアカデミーやこの学院の図書室にあつても不思議ではない、というよりこの本が欲しいくらいじゃよ」

「あ、そうなんですか？ なんだかお二人の顔が怖い顔をされているので幼稚な本を出して怒っていらっしやるのかと・・・」

「そんなことはないですよ、ミス・マイカ。驚いていたのですよ。私も学院の秘書をやっておりますので図書の購入に立ち会うこともしばしばあるのですが、これほど実用的な解りやすい書物もなかなか目にしたことがありませんから」

「そ、そうなんですか」

ホツとしたように、舞華が緊張を解く。まじめに怖かったのだろうよく見ると目に涙がたまつたように見える。

「それで、ミス・マイカ。もしよければお茶の代わりをいただきましたのですが。少し一休みしたくなりました」

「はい、しばらくお待ちくださいね。それと私の事は『舞華』だけでいいですよ。年上の人にミスと付けられるとなんだか恥ずかしくて緊張します」

「では、マイカ、お願いできますか？」

「はい、おまちください」

「オールド・オスマン。あんまりレディの傍で怖い顔をするからですよ。ミス・マイカの目に涙がたまっていましたわ」

「ああ、気を付けるとしよう」

さすがにそこで、おぬしも同じような顔をしていたらうとは言えなかった。

「しかし、あれが初等教育に使う物とは、まったくすごいことじゃ
て」

「貴族でもあれだけ濃い内容の書物を持つ人はありませんわ。ミス・マイカの話では専門の書物もあるのでしょうかね」

「じゃな。これはミセス・シュブリースやミスタ・コルベールには内緒じゃぞ」

「はい？なぜですか？」

「あの、研究馬鹿にこのことが知られば、授業なぞ放り出してここに入り浸るに決まっておろう」

「・・・確かにそうですね」

そついいながらロングビルは肩の力を抜くと伸びをして、肘を机に載せて楽な姿勢を取り舞華のお茶を待っていた。

「おまたせしました」

そつ言いながら舞華がワゴンを押して入ってきた。

ワゴンの上にはお茶と一緒にいくつかの皿がありその上にはパンに

似た小さな丸いものがいくつか乗っていた。そして小皿にはバターやジャムの様なものが載っておりパンの焼けたいい匂いとバターやジャムの甘い匂いが漂い始めた。

「うまそうじゃの」

「結構時間がたちましたから、軽い物でもと思いましたので、用意いたしました」

「あら」「おお、そうじゃったな。夢中になりすぎたのう」

「どうぞ。好きなものをつけてお食べください」

「これは？」

驚いたような感じでロングビルが舞華に尋ねた。

「クロテッドクリームですよ？どうかされました？」

「何でマイカがこれを知っているのかと思って・・・」

「本に書いてあったんですよ。それでバターなんかと一緒に作っておいたんです。また牛乳とかマルトーさんから頂かないといけませんけど」

「ほう、マイカは料理が得意なんじゃな」

「買うわけにもいけませんから。でも作るのは、本当はお兄ちゃんの方がうまいんです。トレーニングで時間が取れないのであまり作る機会がないんですけどね」

「ほっ」

「一通り秘薬のレシピも教えていただきましたしそろそろお暇しなければ・・・」

ロングビルさんがそう切り出しオスマン先生もそうじゃの。と言い立上った所で舞華が話をし出した。

「あの、ロングビルさん。肩がこってるんですか？」

「え、まあ、ちょっと」

不審そうに舞華に問い返すロングビル。

「オスマン先生先に一人で戻られても大丈夫ですか？」

「なんじゃ？なにかあるのか？」

「いえ、ちょっとロングビルさんのことで少し・・・」

「ふむ・・・まあ、わしは一人で帰っても大丈夫じゃがおぬしらは平気かの？」

「はい、たぶん大丈夫です」

「まあ、その二人ならよほどのことがない限り平気じゃろうな。先に戻っておるからのう」

「はい、すみません。では、今日はありがとうございました」

「いやいや、珍しい物も見られたし。こちらこそ感謝しておるよ」

そう言いながらオスマンは扉を出て行き。舞華の案内で結界の出口まで送られた。

「ふむ、振り返るともう見えぬ。そのまま後ろに下がっても結界に入る事あたわずか・・・さすがに不思議な物じゃな」

そう言いながらオスマンはフライを唱え学院に戻っていった。

「すみません」

「いえ。でもなんですか？」

「あの、その肩が凝っているって、胸が重たいんですよね？」

「ああ、それでオールド・オスマンを先に帰らせたんですか。確かにそうなんですけど何故そう思いました？」

「はい、先ほどお茶を入れなおした時に胸を、その、机の上に載せていましたよね」

思わずロングビルの顔が赤くなる。

「あ、あ、そんなところまで見てたのかい」

「はい、昔知り合いでそういった人がいましたから。鎧とか来ているときはそれで抑えられていたんですが普段着では……」

「そ、そうですか。それでどうしようかと？」

「はい。実はその人に私たちの持ってきている下着で楽になったからと言われて。多分まだあるので。どうかな？と思っただんです」

「そういう物があるか、……あるんですか？」

なんかさつきからロングビルさんの話し方がおかしくなってるような？そんな思いをしながら説明する。

「それで寸法を測るんだね？」

「そうです。材料と魔法で錬金とかできれば、多分同じものが作れると思いますので……」

「見本をもらえるというわけですか。もし具合が良ければいただきますよ」

「はい。では申し訳ありませんが此処じゃちょっと、ひよっとするとお兄ちゃんが帰ってくるかもしれないし、見られるとちょっとあれなので、私の部屋へ来ていただいでいいですか？」

「ええ。構いませんよ」

「では、こちらです」

「では、失礼しますね」

「ごうやって、胸の寸法は測るもんなんだね」

「ええ。私はやったことがありませんけど」

少し舌を出して苦笑いをする。

そういう舞華を見て、あの子と一緒にお人よしだね。もつともこれが必要なのはあの子の方かもしれないけどね。そう思いながら舞華に寸法を取らせていった。

「えつと、少しお待ちくださいね」

舞華は本棚にあるファイルを取り出すとぶつぶつ呟きながら、あそこか。といった後ファイルを元の場所に戻すと、

「では取りに行つてきますからしばらくお待ちください」

「はい」

簡単に挨拶をすると部屋を見回して本を見ているも良いか確認を取り、了解を取ると先ほど見た図鑑に似ている本を見だした。

動物の図鑑だった。よく知っているもの見た事のない生き物。文字は読めないがこれがあれば居ながらにして世の中のことがわかるのか。そう思つて何気に机の上に視線をやると、四角い物が倒れている。よく貴族の部屋にある絵を飾っておく額を小さくしたものに似ている。何気にそれを手に取り見るとロングビルは驚いた。

「ロングビルさん、どうしました？」

部屋から聞こえてきた物音と声に慌てて舞華が部屋に入ってくる。

「マ、マイカこれはなんだい？」

舞華がそれを見るとそこには、才人と舞華、それにエルモア・アデ
ンで一緒に冒険していた皆が写っていた。

24・結界の中での出来事 - 2

「？ それ私とお兄ちゃんと・・・」

「エルフに亜人が一緒に・・・どういうことだい！」

「え、なんか変ですか？」

「へ、変って・・・」

そこでロングビルはやっと落ち着いた。この二人は東方ではなく、別の世界から来たという風にオスマンが考えていたことに。

「あんたのいた世界じゃエルフとか亜人と一緒にいるのは普通のことなのかい？」

「普通というか・・・ハルケギニアでは変なんですか？」

「変というか・・・敵なんだよ。私たちの」

「敵、なんですか？」

「そうだよ。あんたそこは違うのかい？」

「別に個人的に嫌われることなんかありませんでしたから。でも、敵かどうかは、どこに所属しているか。ですね。同じエルフでも敵味方で戦うこともありましたから。もちろん人間も」

「そうかい。こことは違うんだね。ここじゃ、エルフは人間と敵対

しているんだよ」

そう言いながらプリミル教とエルフと人間の歴史を簡単に説明し始めた。

「わかったかい？だからエルフとの関係は誰にも話すんじゃないんだよ」

「・・・バカなんですね。プリミル教って。お兄ちゃんが中世って言うてたけどもつとひどいかも・・・」

「ば、馬鹿って・・・」

「だって、これまで手を出してきたのは噂に過ぎない最初だけで、あとは全部人間からですよ。しかも一方的にやられっぱなしで改善されていないし。それに最初のだって状況だけ見たらプリミルさんでしたっけ？エルフに悪さしようとしてやられたようにしか思えないんですけど？」

「ま、まあ、確かにそうかもしれないね・・・」

「でも、わかりました。お兄ちゃんにはお嫁さんの事は黙っているように言うておきますから」

最後に、にこやかに爆弾を落とす舞華。

「よ、嫁、嫁だって!!」

「はい。この写真。絵じゃないですよ写真って言いますけど。ここに写っている女性の中でこの背の高い白いエルフさんがナンヌさん

でこの青いエルフさん、ダークエルフというエルフとは別の種族ですけどデルフィナさん、こちらの片翼の方がカマエルという神話時代からの戦闘種族って言われてるんですけどシーリーさんです」

「この三人はお兄ちゃんのお嫁さんですよ」

ロングビルは啞然としている。

「ここに写っている残りの人たちですけど、こちらがナンヌさんのお友達と同じエルフのグレイスさん、それでこちらがヒューマンのグレンダさん、最後にドワーフのイングヒルトさんです」

「イングヒルドさんはいちばん幼く見えますけど一番長老なんです。噂では数百歳と言われてました。何しろそれより上はドワーフの里にいる長老八人だけと言われてますから」

「エルフの二人はどちらもメイジですよ。ナンヌさんは回復系の魔法をグレイスさんは水の攻撃魔法を教えてくださいました。デルフィナさんは暗黒系の攻撃魔法ですね。シーリーさんは間接攻撃の方法ですね。遠距離からの攻撃方法です。グレンダさんは学院でお見せした補助魔法です。イングヒルドさんは近接戦闘ですねそれぞれ私たちに教えてくれたんですよ」

「そ、そうなんだ」

「はい」

「……それじゃあ、その人たちがここの結界を作られたのですか？」

急に話し方が変わった？落ち着いてきたのかな？などと考えながら答えた。

「いえ、この結界は私に『魔法を使えるようにしてくれた』人が作ったんです」

「？」

「えっと、分かりにくかったですね。最初私は魔法を使えなかったんです。それを魔法を使えるようにしてくれた人がいました。その人が結界を作ってくれたんです」

「この写真に写っている人達は私に『その世界の魔法』を教えてくださいました人なんです」

「それでは、最初に教えてくれた人がいなければ魔法は使えなかった。そう言うわけですか？」

「はい、その通りです。もともと魔法のなかったところで住んでいましたから」

「そんな所があるんですね」

「私からすれば魔法がある方が驚きですよ」

「そうかもしれませんね」

「それとマイカさん。どうしてもそこまで教えてくれたんですか？初めて会ったときこの結界の事や詳しいいきさつはオールド・オスマンにも教えてないですよね？」

「あれ？聞かれなかった。からですよ。それとエルフが敵と言いな
がら何かホツとしていませんか？」

「・・・人の顔色読むのがうまい子だねえ。・・・みんなには内緒
だけどいいね？」

「お兄ちゃんには話をしますよ？それで構わなければ」

「本当にお兄ちゃん子だねえ。いいよ、実は私の知合いにエルフと
人の間に出来た子がいてね。その子からしたら私は血は繋がってな
いけどね、姉なんだよ。私も妹だと思っっているよ。それであんた達
がエルフと一緒にいる『写真』だっけ？見て驚いたってわけだよ」

「差支えなければ、その妹さんは今どちらにいらっしやるんですか
？離れていたらさびしくないのでですか？」

「ここじゃ、エルフってばれると色々大変だからねアルビオンって
ところで隠れ住んでいるよ。アルビオンは今、荒れててね孤児がた
くさんいてその子が孤児を保護して育てているんだよ」

「じゃ、生活費も大変じゃないですか？子供の世話ならほかに手伝
える人はどうなんですか？」

「・・・かかるね。そうだ、『フーケ』て聞いたことないかい？」

「??? いえ、無いです」

「そうかい。実はフーケって名前のちんけなコソ泥がいてね。それ
が私なんだよ」

「ええー！」

「わあ！、びつくりするじゃないか。いきなりなんだい」

「ごめんなさい。泥棒さんって聞いたので驚きました」

「驚きすぎだよ」

「ごめんなさい」

「いや、別にあんたが悪いわけじゃないからね。気にしないでいいよ」

「でも、そんなことまで話してくれて、構わないのですか？」

「まあ、これはあんたと私の秘密ってことで」

「でも、目の前で泥棒さん、されたら見過ごしませんよ？本気でいきますから」

「怖い怖い。じゃあ、その子たちはどうやって生活したらいい？」

「泥棒しなくてもいいように勉強ですね。ここでは畑や身の回りの事は小さなころからやっているでしょ？それにさつき石鹸や、クリームのリシピー生懸命に書き写していましたけど、二枚ずつ書いていましたよね？それで向こうで作って売ろうと考えていませんでした？」

「あれ？ばれてたんだね。よく見ていたね。あんた、私以上の泥棒

や詐欺師にもなれるよ。それだけ人の行動を見ていければね」

「もう、全然褒められているように思えないですよ。それはそうと、その妹さんは魔法が使えるんですか？」

「全然、元々エルフとの間に出来た子だったので魔法を習っていないだよ。もちろんエルフ特有の精霊魔法もね」

「そうですね・・・もし出来るなら肥料とかの生成もやれば、と思っていたんですけど」

「どうということだい？」

「この結界内には私の世界から持ち込んだ作物があるんです。ほとんどが肥料とかを沢山必要とするんですけど、中にはあまり肥料を使わない物や土地に力を与えるものもあるんです。ですから、それを覚えていけば、魔法で土地を開墾できれば、自分達の食べる分が確保できるかな？そう思ったんです」

「なるほど・・・多少の土地は畑にしているけど肥料が問題だね。その肥料がいららない、肥料になる作物があれば教えてくれるとありがたいねえ」

「教えてもいいですけどロングビルさんが泥棒さんにならないのが条件ですよ」

「・・・そろそろ足を洗おうと思っていたんだ。ここの給料もいいからね。私が少し我慢すればあの子たちに渡せるからね」

舞華がやっと、にこやかに、

「じゃ、それでいいですね？もう今からフーケさんはいなくなりま
すからね」

「・・・わかったわかった。じゃ、今日はもう遅いから明日からで
も作物やら石鹼やクリームの作り方をしっかり教えてもらえるかい
？あれは魔法で作った秘薬と変わらないからね」

「構わないですよ。それよりそろそろこの下着付けてみましょうか
？」

「あっ、忘れてた」

「では、これは・・・」

「へえ、そうなんだ」

「うん、お兄ちゃんも覚えててもらっていい？」

「ああ、でもロングビルさんの妹さんの事。中途半端なことはしな
いようにな。お互い迷惑になるからな」

「うん。わかったよ」

「でも、アルピオンかどんなところだろうね？」

「そういえばどこにあるんだろう？タルブの近くならシエスタさんの家に行くときに寄れるのにな」

「だな。キュルケさんのゲルマニア方面か、そっちの方だと逆だけどルイズの家もそっち方面だよな？それとあんまり北の方だと植物相が変わるからな」

「あ、そうか。そうだね」

「それと品種改良はじめた方がいいな。今までは幽香さんの結界内だったから問題なかったけど。結界の外で育てて害虫や冷害で全滅とかなったら悲惨だからな」

「それもあるね。でも、今の私達じゃ、品種改良なんて本とかはあるけど実際に育ててる量が知れているから無理かも」

「シエスタさんがいるよ。たぶん助けてくれるよ。彼女の実家はタルブで農家だろ？そっち方面から助言ももらえればいいし。それに、ルイズは公爵家で領地持ちなんだから？舞華は自分で全部やらないで、お願いして手伝ってもらえばいいよ」

「そっか、そうだね。今度も一人じゃないからね」

「そうそう」

・
・
・

「お兄ちゃん」

「なに？」

「この世界、お兄ちゃんは中世ヨーロッパだって言ったよね」

「ああ、文化度は19世紀近くまで来ているけど文明の内容は18世紀以前のヨーロッパレベルかな？って思ってる」

「ひよつとすると中世初期かも知れないよ？」

「そんなに？」

「古代からいきなり魔法で生活レベルだけ上がって、それに伴っての宗教とか法律とかがそこで止まっている感じ、かな？」

「見た目はもうじき近世って雰囲気だけど」

「歴史の授業なんてほとんど忘れてて、今教科書を読み直してるけど中世にあったユーラシア大陸東側からの侵攻とか、イスラムの影響とかなくて。あと魔法のおかげで、不衛生なところがあるけど病気が治って。それに宗教が中途半端だから洗礼関係で体を全然洗わないとかで、不衛生にしているおかげで蔓延した、ペストみたいな伝染病があまりないみたいで、西へ行つて新大陸発見とかもないみたいだし、産業も農業もメイジがいないと何もできないから商工業が実際駄目で、どうも商人の強いところもメイジ中心みたいだよ」

「じゃ、なにか、農工商全部メイジが抑えてるのか？」

「そんな感じがするよ。まだちゃんと確かめたわけじゃないけど」

「メイジって貴族のか？」

「じゃなくて、平民メイジっていうのかな？貴族を辞めた人とか家を継げなかった人とかだって」

「誰の情報？」

「ロングビルさん。トリステインは貴族が強いからまだ平民の商人とかもまだまだ頑張れるけど他の国じゃ、貴族じゃない人がそうやってお金を貯めてそれで貴族の名前を買ったり結婚で貴族になりしてるって」

「よく短期間でそこまで聞けたな。舞華ってやっぱりすごいよ」

舞華が顔を少し赤らめてうれしそうに、でも恥ずかしそうにうつむいた。

「でも、そんなにメイジ任せでこの世界って大丈夫か？」

「全然大丈夫じゃない感じがするよ」

「それと、今日ロングビルさんと一緒にいたけど、ここの服装に女性にブラがないんだよ？」

「い、いや、それはキュルケさんとか見た時に気が付いてたけど？」

「えっと、この時代というか中世ならコルセットでは？」

「あれ？」

「それに男の人のシャツだけど、元々下着と同じ扱いで人前で見せないんでしょ？」

「あ、そういえばそうだな」

「そうだったのってごく最近だよな？」

「そうだな、そういえば昔だどこかで見た写真に、野球見るのに背広をびしっと着てたよな」

「でしょ？」

「でね、思うんだけど、中世に入る前に誰かがこっちに呼ばれて色々な技術を魔法で実現させたとか？」

「何、そのタイムスリップSFは」

「だって貴族なのに学生だからってそういった格好していないし、シエスタさんのメイド服なんて産業革命あたりのメイド服って言うてもいいくらいでしょ？」

「はあ、時代考証がむちゃくちゃってことか？」

「そう。でね、魔法で文明がどうか文化が19世紀に近づくのはいいけどそれでも歴史は続かなきゃいけないのに・・・」

「六千年虫食いの文化だけがだらだら続いている？」

「そうそう」

「・・・舞華、何かあった？やたらと噛みついてるんだけど。この歴史に」

「えっとね・・・この世界にもエルフがいるのは知ってるよね？それで・・・」

舞華はロングビルから聞いたハルケギニアのエルフと人間の歴史を話していった。

「そうか、ロングビルさんのおかげで変な目に合わなくて済むようになったのかな？」

「だよね。ばれたらルイズさんにも迷惑かけると思うし」

「うーん、ハウス行ったら、写真は全部隠さないとな。あと、二階の俺達の部屋と倉庫も出入り禁止にして鍵かけ・・・駄目か、確か魔法で開けられるよな？」

「鍵をこつちの人が理解できないやつなら大丈夫かも？今度キュルケさんで試してみようか？」

「舞華。お前その顔した時、ろくな事考えてないから却下」

「ええ？まだ何も言ってないのに」

「キュルケさんの興味を引くようなものを見せびらかしてそれを鍵をこれ見よがしにして箱なり部屋なりにおいて様子見るんだろ？」

「何でわかったの？」

「いや、キュルケさんが話に出たところで、それ以外考えられないから」

「……ひょっとして私って単純なの？」

「……」

「……っ」

「だからなんで泣くの」

「泣いてないよ」

「お、お前、涙目で……っ、まあ、その、なんだ……ところでキュルケさんの興味を引きそうなものって何を餌にするつもりだったの？」

「……ごまかしてるでしょ？」

「いや、だから餌は何かな～と思って……」

「考えてない。何かお金になりそうなもの、それか『微熱』」

「何それ？お金は分かるけど『微熱』って？」

「キュルケさん、お兄ちゃんの事、誘ってるんだよ？」

「いや、それは分かっているけど……」

「で、鍵開けの魔法があって、鍵の掛った部屋にお目当ての人がい

るシチュエーションってどう?」

「それエロゲ。あの時はえらい目にあっただから却下」

「?」

「いやいや、舞華は忘れてるかも知らんけど、俺のもの、何でも取出して親に見せるなって!せっかく借りたやつ、没収されてえらい目にあっただぞ。いや、本当に、あの後、舞華は見えてないけど」

「そつなの?」

「お前、今でこそ、まあ、その、いいけど、当時はいない歴〃年齢の可愛そつな・・・だからジト目で見ると・・・ああ、もういいよ、好きにして」

24・結界の中での出来事 - 2 (後書き)

舞華さんは耳年増です。

お兄ちゃんの興味あるものに興味があつて、自分に必要のない物も使い方を知つてたりします。

魔法のせいか、身体的成長のなかつた分、経験は積んでいます。精神的成長は遅いようです。

感想、誤字脱字などのご指摘、お待ちしております。

25・ハルケギニアで農業を（前書き）

実は話がここに来るまでの間に才人の独り言ぽい舞華との会話が入る予定でした。

そこから話が広がってきたという経緯があります。

が、話が進むにつれ召喚の場面も書いていくうちに入れるところがなくなり

消えてしまいました。

当初の話ではカリーヌさんではなくヴァリエール公。ルイズのお父さんですね

彼との話の後での事です。

”これを奇貨として正式にヴァリエール家の客として迎えることになる。

才人の独り言。「俺って怒り続けることが出来ないのかもしれない。最初は復讐しよう、とか色々思っていたが、いざ実際本人にあつてその思いが薄れていることに自分が驚いている。」

「お兄ちゃん・・・」

書き始めた当時はこの前後の話も頭の中に取りましたが書き進めるに従い

前後はどこかへ、この会話だけがテキストで残っていました。

今となつては、自分でもどういった考えでこの会話の場面が出てきたのか不明です。

でも、ここからこの話が始まり広がってきました。

今のぐだぐだぶりはこの時から始まったのかも・・・

しかし、ルイズが空気です。

誤字脱字なんかも減らさないと・・・orz

25・ハルケギニアで農業を

今日、ヴァリエール領から使いの人がやってくるはずなので、いきなり作り方を教える。とか種籾をよこせ。と言われてもいいように、昨晚のうちに大体のところは無理やり終わらせておいた。おかげで舞華に付き合い、徹夜同然で資料を作る羽目になったルイズの機嫌の悪いこと悪いこと。周りに当たり散らすことはないものもの不機嫌オーラを周りにまきまくっている。

だがさすがにヴァリエール公爵家はまともだった。

ただし、使者としてやってきたのは、カリーヌさん。どうも舞華のことに興味を持ったようだった。

話としては次の虚無の曜日の前日、つまりダエグの曜日にここへやってきて現物を確認し、翌日の虚無の曜日に種籾とかを引き取りド・オルニエールへ運び込み、翌日の曜日に種蒔きという手はずにしたそう。そして今日は舞華と種をまく注意などについて打ち合わせを行うという事だった。またそれに伴い姫さまから出された命令書の内容をオールド・オスマンへ説明する必要があるというのだった。

ルイズの部屋で聞かされた内容は驚いた。ルイズが代官の代理を行う。これはいい。また俺と舞華がそれを補佐する。それも俺が使い魔として姫さまから認められたことになっている。これもいい。問題は次のシエスタを王家の使用人として費用を王家で持つという事だった。日付は昨日。つまりあの時点からシエスタは問答無用で王家の使用人となったという事である。そしてご丁寧に仕事内容の解説まで書いてあり。つまりはルイズの使い魔に対する教育及び補佐を行う事。姫さまがあの場合で言ったことは全て王家公認となったわけである。知らぬは今現在シエスタのみ。何このドツキリ。そんな

印象を持った説明だった。

オールド・オスマンはカリー又さんからの説明を聞き驚いていたそう。そりゃそうだろう。いきなり配下の使用人を引き抜かれて学生の使い魔付きにする。ただどういいう説明をカリー又さんがしたのかは不明だが、すぐにシエスタを呼び、嬉しそうにシエスタへ姫さまの命令書を読み上げたそう。

シエスタは学院にいる間は今まで通りメイドとして働くが、俺達が何かするときは一緒に学院を出てもいいということだった。

その為、今日はルイズは授業に出るが俺と舞華それにシエスタの三人はカリー又さんと一緒に来たヴァリエール領のメイジ、開墾などを担当しているそう。もちろん何かあれば即ヴァリエール領の諸侯軍の一員として従軍するらしい。その為、常に畑を管理できるように、平民のおそらく名主のような立場の人だろう、一緒に来ていた。

カリー又さんから彼らは古くからヴァリエールに仕えており口が堅いためここに呼んだという事だった。彼等を結界の中へ入れるとカリー又さんはもとより一緒に来た二人とも啞然としていた。さすがは幽香さんの結界。

そこで、最初にコンテナの中に移しておいた種籾や種芋を見せて運搬に使う籠籠の数などを計算し始めていた。

次に舞華が面倒を見ている、堆肥を作っている一角へ連れて行き、作り方をルイズが書いたノートを見せながら説明していた。細かい農業のニュアンスは舞華の説明を聞いてシエスタが説明していた。どうもこういった物も錬金を利用しているので自然を利用して作るという発想はなかったようだった。二人は早速これをヴァリエール

領でもやってみると話していたのだが。

舞華は同時に石灰岩を焼いた物や貝殻を焼いたものなんかを同時に集めてほしいということもメモと一緒に伝えた。これは建築材料としても使えるが肥料としても使えるためである。ただ大量に木々を消費するようであればそのままでも構わないと。また、木を切った場合植林することも併せて伝えた。植林の意味は彼等にはわかっていなかったのだが。

メモにある、種の植え方や芋の植え方なども実際に切ったり畑にまいたりで説明していった。

そして最後に、これは最初の物なので採れたものはそのまま次の種粕になることを念押しした。

それらの連絡事項を終えると、ハウス内へ案内をし中でハルケギニアで初めて育てるだるう作物に関して食事のレシピを紹介することにした。これはあらかじめシエスタをお願いして事前に作っておいてもらった物もあり、前にルイズたちへ披露した食事をハルケギニア風に味付けを少し変えたものを作り披露した。さすがに味付けを全面的に変えるには時間がなさ過ぎたのだった。

幸い貴族平民どちらにもこれらの料理は味付けの薄い濃いといった好み以外ではおおむね好評だった。

カリー又さんと一緒に来た人達は今日のところは学院に泊まり、明日の朝ド・オルニエールへ向かうそうだ。

しかし、俺個人として驚いたのは、大豆やジャガイモって元々ヨーロッパの作物じゃなかったんだ。舞華から当時の新大陸のアメリカや中東経由してアジアから渡った物だと聞くまでは知らなかった。舞華はこの事からも中世初期の辺りで、俺達の歴史であったヨーロッパと周辺諸国との交流が途絶えていると予測していた。

舞華の歴史の勉強で思い出した俺は、俺の部屋に置いていた中学・高校の教科書やノート類これを古代中世のヨーロッパに関して見直すことにした。ただ残念というか、当然というかノートに関してはほとんど書き込んでいない。好きじゃなかったからな。特に数字を覚えるのが。先生の『イラスト』の描いてあるノートは仕方ないので棚に戻し教科書と副読本を読むことにした。・・・すぐ寝てしまふのはトレーニングで疲れているからだ。こればかりは仕方がない。

「こうやって考えてみると系統魔法の系統の分け方って微妙ですね」

「ほう？例えば？」

舞華、ルイズとカリー又は三人だけでハウスの中でお茶を飲みながら魔法談義に興じている。

「錬金なんですけど、全ての方法を見たわけじゃないので言い切るわけにはいかないのですが、まず最初に分離。これは物の中から必要な物を取り出すことです。変なたとえですけど、料理で水と小麦の粉を混ぜたものがあるとします。それを粉と水に分ける事ですね」

「ふむ」

「次が合成、これは分離と逆に粉と水を混ぜるものと考えればわかりやすいですね」

「次が変性かな？例えば水と粉の混ぜっっているタネを焼いたり蒸したりしてパンにしまっ事です」

「ここまではハルケギニアで魔法を使えるメイジであれば割と属性に関係なく使える錬金ですね。で、次が変質。これは小麦粉から金属をつくったりして、全然関係ない物に替えてしまっ事ですね。これは土属性独特です」

「それで、ウインディ・アイシクルなんかの魔法ですけど、魔法そのものは、例えば弓で、矢ともいっべき水や氷は空気中にあるわずかな水分を集めて凝縮、凍らせる所まで冷却を行っるわけです」

「それは錬金の分離と同じというわけか？」

「空気から分離して水を集めるところまでですね。」

「『発火』もそうですね。無理やり何もないとところに火種を作るわけですから」

「才人の言っただ、燃えるものと空気と温度の三つを無理やり魔法で錬金してること？」

「そうですね、でないとな燃えるはずがないですから。『発火』は他の物に燃え移りますから」

「ルイズそれはどっいう意味なの？」

「は、はい、お母様。実は……」

ルイズは以前に見た実験の話のカリー又さんに説明した。

「科学とは魔法が干渉しない自然の道理を解き明かすものなのですね」

ルイズの説明を聞いたカリー又があれだけの説明で理解できるのに驚いた。ルイズが賢いのは血統だろう、きっと。

「それで、ハルケギニアの魔法なんですが、ドット未満という区別になるのでしょうかけど四系統の基本の基本に関しては、系統に関係なく使えるのかな？と思いました」

「なるほど・・・スクエアの『火』や『水』、『土』でも『風』の『フライ』や『レビテーション』を使えるからな」

「風のフライやレビテーションは他の系統の方より効率がいいのですか？」

「多少の例外はあるが大体そうだな。面白いことを考える子だな」

「そ、そうですか？」

「うむ、娘がアカデミーに行ったのもわかるような気がする。何かを考えるとというのは楽しい。ということを思いましたよ」

「ありがとうございます」

「本当に、サイトをルイズが召喚したことは、マイカと一緒にこのハルケギニアへ召喚したことは、ヴァリエール家としてはありがたいことだと思っていますよ。もちろん貴方達にとってはさびしい思

いをさせて、責任をとるといつても取れないことですし、本当に申し訳のないことなのですが・・・」

「いえ、それは・・・。話を戻しますが、コモンとドット未満はほぼ同じものとして考えていいと思います。系統に関係なく使えますし、使う事に関して苦手ということはあってもリスクがないです。対してドット以上に関しては、聞いてみたところではまず発現しないですね。フライやレビテーションの得意なスクウェアだとどうなるか見てみたいところですけど」

「どういう事ですか？」

「風以外の系統でフライやレビテーションが得意な方が風のウインドなんかのドット魔法を無理やり使って、使えるのか、使えないのか？使えた場合の疲れ方や問題点は？といったところです」

「なるほど。なら逆でもいいかな？」

「カーリー又はそういうと」「ウルカーノ」そういうと目の前で杖の先に火をつけた。

「カーリー又さん！」

杖を振り火を消すと、

「こうやってラインは無理だがドットであればスクウェアであつても他の系統の魔法は使える事は使える。ただ単発であればよいが、連続で使うと半端なく疲れるのでな」

舞華は驚いた顔をしてカーリー又を見ていた。

「どうした？変な顔をして？」

「いえ、なんでも・・・あの、ちょっと気が付いたことがありました」

「なんだ？」

「魔法なんですけど、私の中には魔法を使うための器官があります。これは先生に作ってもらったのです。これがあるからこれを意識して魔法を流すようにすると魔力が流れて魔法が使えるのです」

「ふむ、それで？」

「今、カリー又さんが魔法を使った時にその器官があつた・・・見えたような気がしたんです。それで、その流れが見えればそのことも理解できるようになるかな？」

「つまり、魔力の流れがその体の器官を通じて流れている様子を？魔力の流れが見えていたのでは？」

「えっと、そのことですが、前にいた世界では魔法を使えるようにするのに魔法書に魔力を込めてその流れを詠唱者が身に着ける・・・魔法書の通りに魔力を流すのです。魔法書は詠唱者の体に取り込まれるのです。それで魔法が発現しました。この方法だと、この様に魔法を使うのに杖は必要ありません。私は魔法書の魔法の流れを真似して魔法を発現させています」

「ほっ」

「ここでは、魔法を使うと体から魔力をルーンに載せて杖に伝えて発現しています。つまりこの魔法はルーンと杖がなければ魔法は発現しません」

「うむ」

「で、その魔力が出てくるところが分からなかったのですが、私はルーンで形作られる魔力が杖で発現されるまでの流れを真似しています。それで魔法を発現させています」

「なるほど」

「魔法を使うのに最初に魔法を覚えていたところでは杖や魔法剣は魔法の威力や詠唱速度を早くしたり魔法力そのものを増やす魔法がかかっているので、簡単に言えば、無くてもいいけどあれば有ったほうが絶対にいいので使っています」

「ハルケギニアでは、この魔法は杖を伝えて発現しているので、何でもいいから杖の様なものであれば真似るのが楽ということでも杖や魔法剣を使っています」

「同じ真似るのでやり方が違うんだね？」

「そうです。それで今、カリィ又さんの魔法器官が見えたような気がしたんです。他の人の魔法を見ても今までそんなもの見えなかったのに・・・」

「不思議なことですね。でも、ルイズの魔法を使えるようにするにはそれを解き明かすことは必要なことかもしれませんね。ですが、残念ですが、ここへ毎日来て今の事を続けければ早いのもかもしれません」

んが、私にも家の事があります。そうですね、あと五週間もすれば
ニューイの月、学院は夏休みに入ります。そうすればルイズも帰省
するでしょうからその時に一緒に来なさい。いろいろ忙しいでしょ
うが、必ずいらっしやい。お父様も貴方達を歓迎するでしょう」

「ありがとうございます」

「もうそろそろ帰らなければいけません。今日は有意義でした。ま
た、お会いしましょう」

「はい、「こちらこそありがとうございます」

「では・・・」

「少しお待ちいただけますか？」

「なになな？」

「えっと、カリィ又さんにお土産というか、もう一人のルイズのお
姉さん、カトレアさんでしたよね？」

「ええ、そうです」

「学院にカリィ又さんが来られると思っていたので向こうの部屋に
置いてきたのですが、カトレアさんはルイズさんからお聞きしたと
ころお体が悪いとか、あまり激しい運動が出来ないと聞きました」

「ええ、あの子はかわいそうな子です」

「でも、動物とか植物が好きでよく育てていらっしやるとか？」

「ええ、ルイズはそんなことまで話したのですね」

それを聞いたルイズは、小さくちじこまっている。

「はい、それでちょうどお花がありますのでそれをお渡しいただければと思いました」

「そうですか、それでは一緒に学院まで行きましょう。あそこに籠籠を待たせていますから」

「はい、わかりました。では」

三人はハウスを出ると結界の外に出る。カリー又はやはり不思議なところだと思いを新たにした。舞華を見ると角笛の様なものを取りだしていた。何をするのかとみていると、突然舞華の横に魔法陣が現れ、そこからワイバーンが出てきた。

「なっ！」

「あ、ごめんなさい。いきなりで驚かしてしまいました。これで学院へ戻りましょう」

舞華は先に立ってワイバーンへ乗り込むとカリー又はを手招きする。カリー又は舞華に従いワイバーンへ近づき舞華の後ろに乗った。

「フライとかで学院に戻ってもいいんですけど・・・」

「どうした？」

「ここの学院の人って、短いスカートとかローブでフライとかレビテーションって、恥ずかしくないのでしょうか？」

「あつ……」

子供のころから使っていて当たり前すぎて何とも思わなかったが、確かに恥ずかしいかもしれない。カリー又は首筋が赤くなるのを感じた。舞華は気付きもせず、

「ちょっとこの服で使うのはまだ苦手で、駄目ですね。郷に入れば郷に従えというのに」

「いえいえ、そういう気持ちも大切です」

家に戻れば見えるとか見えないという問題ではなく、娘たちにちゃんと行って聞かせようと思ったカリー又だった。

「これです。」

舞華がカリー又に渡した籠の中にはきれいな紫と白い色の花がそれぞれ鉢植えになっていた。結構大きなものだった。

「これは？」

「私の元々いた世界で私が育てていたもので『蘭』という花の一種で『カトレア』といいます」

「ほづ、娘と同じ名前だな」

「はいお聞きしたときに同じ名前の物があると思い出しました」

「そうか、娘も喜ぶだろう。ありがたくいただきますよ」

「はい、それでこれですが、この花の育て方が書いてあります。良ければこれも一緒にどうぞ」

「念のいったことだ。わざわざありがとう」

「いいえ、この花は夏咲だから咲いている時期は短いですが、ちゃんと育てれば長く花を付かせますし増やせますから。それとこの花は蘭の中で女王と言われるくらい有名なんですよ」

「そうかありがとう、次に会えることを楽しみにしているよ」

「こちらこそ、ありがとうございます」

二人はそこでお互いに挨拶をするとカリーヌは籠を大事そうに抱えて籠籠に乗り込み竜は飛び立っていった。

26・兄妹の進路相談

カリィ又の帰った後は、普通に学生に戻るだけだった。基本的なことは舞華が教えたことで間違いはないし、目的としては舞華たちが持ち込んだ作物をトリステンへ根付かせることなので魔法を使わないようにしたくても、元々魔法に頼る部分が多いのでいきなりは減らせない。結局は彼らに任せるだけであつた。

しかもカリィ又は才人達が学生ということを一に置いて、姫さまから言われた事業について手順を決めたようだった。予想されたド・オルニエールへの訪問など学業に負担のかかりそうなことは出来るだけ起きないようにヴァリエール家の方で手を打っていたのだつた。おかげで舞華が言っていた、才人やルイズが忙しくなるようなことはなかった。

慌ただしさがなくなり、いきなり何もやる事がなくなると舞華もハウスの庭先でぼうつとしていただけだった。

授業は昼からの始まっているし、昼はカリィ又さんと食べ、畑や樹の世話をするにも時間が中途半端に早い。

「本当にいきなりだったから終わっちゃうと本当にやることないなあ」

舞華はそう呟きながら、うつらうつら木陰で寝入ってしまった。

「舞華。こんなところで寝てると風邪ひくぞ」

才人の声で目が覚める。

「お兄ちゃん？」

「おう、こんなところで寝てると風邪ひくぞ。シャワーでも浴びて目を覚ましたら？」

「は、はい」

「終わったら夕食だから食堂へ行こう」

「ええ？もうそんな時間？」

「だよ」

才人の後ろでルイズとシエスタが笑いながらそんな兄妹を見ていた。

「やっと明日から普通の学生生活に戻れるな」

「？」

ルイズが不思議そうな顔をしてこちらを見る。

「え？明日からは普通に起きて勉強して、寝て食べる生活だよ」

「そっか」

「こつち来てから休む間なく色々あつたからなあ。それでもタバサとの約束もあるし、シエスタの実家にもいかなきゃいけないけど、もちろんルイズの実家にもな」

「でも、お兄ちゃん。夏休みだよな？シエスタさんの実家とルイズさんの家に行くのは」

「だな。それにキュルケの実家にも誘われている」

「え、え〜。なんでツエルブストーなんかと」

「ブラック・オパールの事かな？」

「そそ、結構あれ気にいったみたいだけどな」

「ああ、あの宝石」

「お金の心配なくなったからな。舞華、あれって他にあつたかな？」

「有りますよ。後で見とくね」

「任せた」

「でも、なんで結界から戻るのにみんなまで歩いてるのよ？龍が車使えばすぐでしょ？」

「時間あるし、のんびりするのでもいいんじゃない？」

「ですよ」

「まあ、いいけどね」

緊張していた気が弛んだのだろう、ルイズは学院に入学して以来、ひよっとするとこんなな心の中の底からのんびりした気持ちになったのは、物心がつき、魔法が使えない事がわかって以来のことだったかもしれない。と思った。

シエスタは、三人の会話を聞きながら、ミス・ヴァリエールはこんな表情と雰囲気为本当のミス・ヴァリエールかもしれないと思っていた。

そして、才さんがひいおじいちゃんと同じ国の人かもしれない。ということも思っていた。ひいおじいちゃんが頭がちよっとおかしいって、人に言われていたのは、才さんほど科学を知っていなかった。だからなのかもしれないと思った。自分が科学を知れば、ひいおじいちゃんの頭がちよっとおかしいというのは間違いだって、みんなが納得するかもしれない。

ひいおじいちゃんのこととはよく知らない。人の噂や両親の話だけだった。だけど、自分の大好きなタルブのブドウ畑や畑の肥料のこと、みんなが大好きな『ヨシエナヴェ』とか、みんなひいおじいちゃんが教えてくれたんだ。科学を知って、みんなが知っている変な話が本当はタルブをもっとよくするための、ひいおじいちゃんの話かもしれない。才さんは舞華さんと二人つきりでこのハルケギニアへ召還された。でもひいおじいちゃんは本当にひとりぼっちで、ここへ召還されたか、迷い込んでしまったんだと思う。

誰にも理解されなくて寂しかったんじゃないかな？せめて自分だけでも科学を知って、ひいおじいちゃんのことを、もっと知ってみようと思う。

そして、才人たちの会話を聞きながらシエスタは学院に来ることが出来たこと。

姫殿下から王家のメイドにしてもらったおかげで、どこかの貴族に

お金で買われる寸前で解放されたこと。
才人さんに知り合えたこと。
それらを始祖に感謝していた。

それで食事が終わった後、ルイズたち三人は部屋へ戻ってきたが、部屋の前に三人の人影があった。

「やあ、久しぶりだね」

「こんばんは」

「何でこんなところにいるのよ。ギーシュ?」

会話が成立したのはギーシュと舞華だけであった。会話というより挨拶であったが。

ギーシュと一緒にいるのは女性が二人。あの時一緒にいた二股された女性、一人はルイズと絡んでいたモンモランシー?だっけ。もう一人は誰だろう?ルイズたちと違う学年だけと見た目が幼いから一年生?

二人ともなんだか様子がぎこちないな?

「何か三人で来る用事でもあるのか?」

「いや、僕の方は君たちに謝りに来たんだ。それと三人そろってなんだが、お願いがあつてね」

「「「?」」」

「なにを？」
これは舞華。

「いや、君たちに決闘を申し込んだときの態度がだよ。今から考えれば、貴族としてどうかと思うよ。それで君たちに謝りに来たんだ。申し訳ない」

そういうとギーシュは片膝をついて頭を下げた。俺はこれが正式な謝罪になるのか、ハルケギニアの儀礼を知らないが、気持ちは本当だろう。ただ……

「えっと、ミスタ・ギーシュ。俺に頭を下げるのは違うと思うぞ。頭を下げるのはルイズと学院のメイドのシエスタだろ？」

「おお、そうだったね。だけど君たち兄妹に目を覚ましてもらったのと、妹君には傷を治してもらったと聞いているよ」

「そうか」

「改めてルイズには許しを請うよ。申し訳なかった」

「いいわよ。直接言われたわけじゃないし、才人が許してるなら問題ないわよ」

「ありがとう。メイド君にはこれから許しを請いに行くよ。だけどその前にお願いがあってだね」

メイジでない俺が、三人に教えられるようなことはないし。と思いきや困惑していると、代わりに舞華がそれに答える。

「何でしょう?」

「いや、ミス。あなたの魔法を教えていただきたい。それとメイドたちが使っている秘薬なんだがそれらも教えてほしい」

「?魔法はともかく、それは、魔法で同じものが作れると思うのですが?オールド・オスマンの話では同じものだといっていましたが?」

そして俺が横から口を出す。

「舞華の魔法の実力を認めてだと思っけど。舞華もルイズの被保護下だね。それにはルイズの許可があると思っんだ」

「別に使い魔はあんただけよ。舞華が好きにするのは勝手だわ。保護ってそれは私の責任よ。舞華のやることに駄目なんて言えないわよ」

「俺は?」

「あんたは私の使い魔。私の許可がなくちゃ色々やっちゃダメ」

「だそうだ。舞華どうする?」

「えっと、私で教えられることは教えますから。そんな怖い顔で睨まないでください」

よく見ると女性二人が結構真剣な顔で見ている。見ようによっては睨んでいるようにも見えるな。だけど舞華、お前、その昔、両手杖一本で、ゾンビの群れ相手に無双したろ?普段はこうなのに、あん

なときはお兄ちゃんが見ても怖かったんだけどな。

「え、」「あら」

女性二人が我に返り、改めて舞華に自己紹介とお願いをする。

「ごめんなさい。ミス・マイカ。私の名は、モンモランシー・マルガリタ・ラ・フェール・ド・モンモランシ。二つ名は『香水』というの。水の系統だけどあなたの治癒魔法と秘薬の作り方を教えてほしいのよ」

「申し訳ありません。ミス・マイカ。私の名は、ケティ・ド・ラ・ロッタ。二つ名は『熾火』まだドットですが火の系統です。私もミス・モンモランシと同じで魔法と秘薬を教えてくださいのです」

「僕も改めて自己紹介をしよう。ギーシュ・ド・グラモン。グラン門家の三男で知っている通り二つ名は『青銅』土のドットだ。僕の家は軍人の家系でもっと強くなりたいんだ。それにあの決闘の最中にミスタ・サイトに笑われてしまったのが気になってね。もしよければ、その訳も教えてほしいのだけれども」

俺はルイズの方を見る。ルイズはあつけにとられていた。俺の視線を感じるとルイズは、

「構わないわよ。才人は私の先生だし。舞華も、私の魔法の先生もしてもらっているからね。まあ、一緒に勉強する分にはいいでしょ？才人。」

「まあ、構わないけど。ならとりあえずミスタ・ギーシュはシエスタに謝ってくるのが先だよな？」

「ああ、確かにそうだと思う。ところで、僕たち三人を呼ぶのにミスタやミス入らないよ。見たところ君たちはルイズを呼ぶのにそうしているだろう?」

「ああ、ならギーシュと呼ばせてもらおう。俺の事は才人でいいぜ」

「私も舞華で構いませんから」

「では、僕はメイド君へあや・・「シエスタだよ」・・・シエスタ嬢へ謝りに行ってくるね。では」

舞華が辺りを見回して、それじゃ、少し時間もありますし、お茶でもいかがですか?そういつてルイズを含め三人を部屋へ招待した。

「どうぞ」

木製のスタックできる椅子を三脚取出し、部屋の中央の机の周りに並べる。机も折り畳み式だが少し背が高く丈夫で広目の物だ。もつとも寮の部屋にあるものなのでそれなりだが。

俺と舞華の椅子は机とセットになっている物をもってきている。

お茶は舞華が摘んできたハーブティー。ルイズやキュルケには好評だが、正直苦手だったりするが、夜なので仕方がない。

「正直、私が厨房の人たちに渡している秘薬と言われているものは、これとこれなんです。」

机の上に陶器とガラス瓶に入ったクリームが数種類。固形の石鹸が数種類。こっちは皿に載っている。

舞華はこの世界へ来てから何回目かの説明を始めた。

ルイズたちがそれぞれの部屋に帰った後、才人が舞華に尋ねた。

「でも、舞華どうする?」

「なにを?」

「産業。農業は今の根気強く進めるしかないよね?他のはどうしようか?」

「お兄ちゃんは何か考えてるの?」

「農業で出来たものの加工。醸造したもものから高純度アルコールの製造かな?」

「どうして?」

「出来るだけ簡単なやつがいい。出来たやつから売れる様なやつ」

「アルコールって、ランプ?売れるの?」

「こっちの明かりのほとんどが魔法のやつが多いから、あればね。燃料で売れるかも。でもそれより消費の早い物。お酒だよ」

「お酒?」

「そそ、ワインやビールはあるみたいだからそれよりアルコール度

の高いやつをね、焼酎とかウイスキー、ブランデー、ウオツカとかね。安い材料から作れるし、アルコール度が高いと消毒薬代わりに使えたりするでしょ？残りかすは肥料や飼料で」

「ないの？それとも農閑期対策？」

「ウイスキーやブランデーの類はないみたいだね、ついでにウオツカや焼酎も作ってみようか？」

「お兄ちゃん飲むの？」

「俺じゃないよ。簡単に高純度のアルコールが入っているやつは安く出回るだろうし、熟成させたやつは高級品で出回るから色々作れるね」

「そっか、特産品か」

「そそ、それにアルコールで舞華の好きな花から香料が取れるよね？後は紙の生産、養蜂かな？」

「紙に養蜂？」

「養蜂は産業じゃないかもしれないけど、果樹だけじゃなく麦でも稲でも実をつける為には必要でしょ？」

「あー！」

「幸いフローラン村で作った俺達の持ってきた本を参考にした巣箱がコンテナの中に置いてあったよね？それに遠心分離機も養蜂の他の道具と一緒に仕舞い込んであったよね？」

「それにミツバチの巣から出来る蜜蝋は蠟燭や舞華の作るクリームとかの材料に使えるだろう?」

「紙は便利だからね。何かからでも作れるし、まあ、麦やなんかの作物の穂なんかは畑に漉き込むだろう?だから、一年草なんかがいけどね。たぶんケナフは有るだろうけど、あれは無駄が多そうだし、繊維も取れるから麻とか亜麻があればいいけどね」

「教育をするにも商業をするにも紙は沢山必要だから需要はあると思うよ。書かれるものを作るなら、書くものも必要だけどね」

どちらにしても農業と切り離せないよね。と才人が言うのを舞華は頷いていた。

「まあ、始めるにしてもお金もいるし人も雇わないとね。そんな管理は俺達にはできないから、やっぱりルイズのお母さんに頼ることになるのかな?」

「将来の目標ということで手紙を書いて送るよ。ルイズさんをお願いして」

「だけど今すぐじゃないからな。無理強いすることないようにな? お金が必要なら俺達がもらっている分から出せばいいからな」

「それって投資でいいのかな?」

「そうそう、俺達が生活が良くなるためにやっていることを、人のお金でやるのもどうだか。俺達は俺達で使う物は使わないとな」

「はい」

「それに肥料だけど江戸時代の方法を使うかな？それともインチキ（魔法）しようかな？」

「？」

「ああ、分からなかったか。石鹼の材料のアルカリ。エルモア・アデンで海藻を焼いて水につけて作ってたよね？」

「うん、お兄ちゃんが考えてくれたやつね」

「あれ、TVで見た事あるんだ。ああやって昔はソーダ灰っていう物質を手に入れる方法をね。それで今なんだけど・・・昔か。俺達が元々いた世界ね、水とアンモニアと食塩に二酸化炭素から作ってたんだ。本に載ってたよ」

「へえ、ここでも作れるかな？」

「無理。ただし魔法なしの場合な」

「そうなの？」

「うん。何でも六百度くらいまで温度あげて高圧にしないとイケないらしい」

「俺もこつち来てからだし、真面目に本読んでないし、いい加減だけどな。最初の反応で重曹を作ってそれを何かと焼いて水酸化ナトリウムを作るんだよな。それが石鹼の材料」

「そっか原料が分かってるなら、魔力節約して錬金で合成が出来るよね？」

「こそ、ずるが出来る。でね、舞華」

「？、なに？」

「魔法で、錬金で化学反応を使うと、窒素と反応させてアンモニアが出来るんだ。それを使って肥料や火薬が作れるから。まだまだ本をよく読まないといけないけどね。貴族の人に科学を教えるきっかけにならないかな？今のままじゃ貴族が平民を見下してる、平民は貴族を憎むというか恨んでる。平民に経済力がついてきたらきっとぶつかるよね？」

「貴族が武力で制圧するの？」

「今まではそうだけど、俺達を作る作物で食料の心配がなくなれば、それに経済力が付けばどうだろう？一人で十人を相手に出来る貴族より、千人で一人を狙う平民が組織化されると・・・」

「銃？」

「そう、ルイズは銃の事知ってたろう？多分種子島の鉄砲レベルだと思っけど、織田信長の戦法使えば貴族だってわからないから」

「そっか、でも空飛べるよ？」

「ここでは魔法使っている間は他の魔法使えないだろう？この間の武器屋で弓買ったなら、なんでそんなのいるの？って言われたよ。それこそ空の上から短弓で矢の雨降らせれば兵は動けなくなるだろう」

「? だけど何も持っていないくて、ただの移動手段だとの的だよ」

「そっか」

「俺が考えている魔法兵はフライを使う時は一メートル以下で飛ぶ。出来たらその半分以下」

「それだと本当に地面すれすれだよ?」

「でないと、鉄砲と弓の的だ。だてに兵隊さんが匍匐前進してるわけじゃないから」

「そうなんだ」

「貴族でも、銃と弓を持って戦う。特に貴族がというよりメイジが待ち伏せとか、迂回して奇襲とか使えればやっつかいだろ?」

「そうだね。だけど貴族の人がやってくれるかな?」

「まあ、むりだと思う、だけどやらなくちゃね。もしトリステンが生き延びていくなら」

「生き延びていく?」

「舞華はこの間、ルイズに地図見せてもらわなかった? 確かロングビルさんの件でアルビオンって、トリステインのどこにあるの?」
「て」

「見たよ?」

「トリステインはゲルマニアとガリア、それにアルピオンに囲まれてるって驚いてただろ？」

「うん。アルピオンが動く空飛ぶ島だなんて思わなかったわ」

「だからだよ。周りが攻め込む気になれば、平野の多いトリステインは侵攻しやすい土地だもの。たぶん今は周りの国が共調してトリステインに敵対していないから攻められていないだけで、この三カ国のうち二国が共同すれば、もう一か国味方していても簡単に落ちるよ」

「そうなんだ」

「トリステインは結構危ない綱渡りの国なんだ。それにゲルマニアとトリステインの間の国を知ってる？」

「知らない」

「小さな独立国で簡単に言つと元々トリステインの一部だったのが独立したんだ」

「そうなの？」

「そそ、その時裏で糸を引いたのがゲルマニアって言われていて、それがルイズのゲルマニア嫌いの一つなんだ」

「へえ、お兄ちゃんよく調べたね」

「ギーシュとか結構あいつお喋りだぞ、お前も気をつけるよ。後、先生たちにも聞いたよ」

「そうなんだ」

「話が飛んじやったけど、トリステインは結構危ない国なんだ。で、平民からすればこのまま貴族が今と同じ態度なら、主人が誰になるうと関係ないからね。宗教が今までは、国がまとまる一つの手段だったけど、これからはどうか？まだ調べていないけど、アルビオンでレコン・キスタで運動があるらしいよ」

「スペインの？」

「それは、俺達の世界の話。こっちのレコン・キスタはハルケギニアの国がまとまってエルフの国に攻め込もってことらしい。舞華の聞いた話通り、バカの集団らしいからね」

「うわゝ、やだ」

「だからトリステインをまとめて、一つは宗教の力を弱める。舞華一人ならエルフとガチ行けるかもしれないけど、こっちの魔法じゃ勝てそうにないから」

「どうして？」

「何でかっていうと、キルレシオが百対一らしい」

「？」

「簡単に言つとエルフ一人殺すのに百人ハルケギニアの兵が死ぬんだと」

「！」

「でもって、実際はもっとひどいんじゃないかって話がね」

「えっ？」

「百対ゼロ」

「ええ〜！」

「こんなんでやるうっていうんだからほんとバカかも。ただ魔法があるからとんでもない方法があるのかもしれないのかも」

「結局この国って小さいけど平野が多いから農業とかで発展できる部分あるし、貴族と平民で仲違いしなきゃ周りは簡単に手を出せそうにないからね。気になるのはあの姫さまね」

「アンリエッタ姫？」

「そう、古参の貴族が嫌いみたいだけど嫌いでもうまく使わなきゃ身内から裏切られそうな気がする。卵が先か鶏が先かじゃなくてね。上に立つなら好き嫌い抜きで使う事考えなきゃ貴族と平民が本格的に仲違いするとこんな国すぐに倒れると思う」

「そっか〜」

「えっと、そうそう、バカで思い出した。この間キュルケ達にも実

「験したことあったらどう？」

「えっと、酸素がないと物が燃えないって？」

「そうそう、それでねバカなことを思いついたんだけど、笑わないでね。えっとね、錬金で空気を窒素と酸素に分けられる？」

「え、ええ？空気を窒素と酸素に分けるの？どうして？」

「見えないと難しい？」

「やれると思うけど、どうして？」

「うん、非殺傷広域範囲魔法を思いついて。単なる思い付きだけど」

「????？」

「簡単に言つとね、人間の頭の辺りの空気から酸素抜いてしまうの。大体地上から一から二メートルの範囲をね」

「窒息して死んじゃわない？」

「一酸化炭素なら即死かもしれないけど。窒素だから血液のヘモグロビンと結びつかないから助かる可能性が高いし、完全に分ける必要ないでしょ？」

「何でそんなこと思いついたの？」

「酸素がなければ燃えないっていうのを考えた時に、戦闘中に酸素減ったらどうかなって思った」

「ええ、それあげつないよ。ダメだよお兄ちゃん」

「だから全部減らさなくてもいいんだよ。半分でも四分の一でも十分の一でも十分役に立つから」

「??？」

「人間を含めて動物は呼吸しないといけないけどその時の酸素は大体二十%だよな？それが減ると息苦しくなるから。酸欠はねほんの数パーセントの酸素が減っても起きるんだ。マラソンの選手が高地トレーニングってよくやってたでしょ？だからメイジは魔法に集中できないだろうし、平民の兵士は重たい装備付だからすぐばてる。」

「何時もこっちは数が少なかったからな、逃げ足確保にはいい方法だろ？」

「・・・どう言っていていかわかんない。練習してみるよ。錬金というよりレビテーションに近い感覚かも」

「別に思いつきだから気にしないでいいよ。忙しいだろ」

「暇な時にやってみるよ。でも、お兄ちゃん変なこと思いつくね」

「だから、いつも逃げるとはこっちが少なかっただろ？だから楽しかっただけ」

「そっか、わかった」

なんだか危ない会話をする二人であった。その後、今日の会話を

まとめたもの（もちろん産業に関してだけだが）を舞華は手紙にし、ルイズに見てもらった後、ヴァリエール領に送ったのだった。そして、ルイズの母、カリィヌがその昔、『烈風』と呼ばれ、軍の中でもトップクラスの士官に値する優秀な軍人であることを二人は知らなかった。単に賤けや教育に敵しい高級貴族の母親であり、実際にはルイズだけでなく娘たちに対し、優しい気持ちで、だからこそ厳しく躰けている。そういう人だと思っており、その夫もさらに優秀な軍人であることを知らなかった。優秀な軍人の美德の一つに、即断即決、遅効より拙速を尊ぶ、見敵必戦。才人達はこれを見誤っていた。

簡単に言えば、数日後に届いたルイズの手紙を見たカリィヌさんは押しかけてきたのだ。今度は再びエレオノールさんを連れて。

26・兄妹の進路相談（後書き）

誤字・脱字等ありましたらお知らせください。
感想などもよろしく願います。

27・学院の日常・1（前書き）

そろそろ仕事の関係でしばらくは投稿できそうにありませんが
十月中ごろには続きを投稿したいと思います。

それにしても、話の進み方がカタツムリだ。
せめて牛ぐらいまでは早めたいです。

才人達の学院での生活は、まず朝起きてから、結界のあるハウスの方へ向かって軽くランニング。才人はルーンの力を使わずに木刀や日本刀で素振り、舞華は今まで見た魔法をメモを取りながら真似たり、アレンジしたりする練習。結界の近くなので魔法による覗き見は出来ないが、結界の中でやっているわけではないので、見学者が結構いたりする。

まず一緒に走ったり、ストレッチなどをルイズ、シエスタ、モンモランシ、ケティ、ギーシュがやっている。

その後、舞華とシエスタが洗濯等のため一緒に学院に戻る。ルイズたち女性陣はハウスの中でシャワーを浴びて汗を流すと学院に戻って行く。残った才人とギーシュは実戦的な訓練を行う。

実戦的とはいえ、才人はともかくギーシュはボンボンの学生・・・貴族のどうのこうのというところを、とりあえず無視して生き延びる方法を体に叩き込む。

とりあえず走る事、魔法に頼らないこと。本人には不満がたくさんあるだろうがこの際無視する。

才人と決闘をする前のギーシュであれば、決してこんなことを納得するはずもなかっただろうが、才人に負けあの夜会った後、才人と舞華による科学の勉強会へ参加するようになった。参加者はルイズ、シエスタ、キュルケ、タバサ、ギーシュ、モンモランシ、ケティである。

その中で原子と分子の話をし、舞華の錬金と絡みでギーシュのワルキューレについて才人の突込みがあり科学的な強度と魔法による強度それが累積するらしいという仮説・・・これは才人の仮説だがギーシュはとりあえずその仮説を検証することにした。

もっともそんな考えは今までしたこともなく、手探りであったが

才人と舞華のアドバイスもありなんとなくそんな傾向がありそうだということが分かり、ギーシュは科学という物に引き込まれていった。そして、参加するうちに才人と舞華が実戦を何度も経験しているシユバリ工相当の手練れということを知り強くなるための訓練を受ける事になったのだった。

才人は取敢えず自分の考えをギーシュに伝えた。魔法と通常の武器をTPOに合わせて使い分ける。魔力は切れたらお終い。だから剣、弓、槍、による戦い方を知る事。知らなければ対処が出来ない。知れば魔法を補う事もできるからだ。自分に相性の良い武器を知ること必要だった。魔法を使わないときの武器、遠距離用メイン武器と近接用サブ武器。

出来れば弓と短剣辺りがいいのだろうが、弓であれば矢のストックも必要なので重量の問題もある。

結局ギーシュが選んだのは短槍とレイピアだった。レイピアは才人にとって意外なことに、それと同時に武器屋での話を忘れていたのだが、貴族の軍人はレイピアのような軍刀をブレイドの魔法で強化して使っている。つまりギーシュは幼いころからレイピアの基本的な使い方は覚えていたのだった。残念ながらそれを重要なことだとはお思っていないかった。才人は決闘の時にレイピアも使っていた。初見だったし苦戦したかも知れなかったのに・・・「そう言った時、ギーシュは何を言われていたのか、わかっていなかったことからもである。

ギーシュの考え方が決定的に変わったのは、才人と舞華に見せてもらった才人達の世界での戦争の記録（おもに教科書）。赤い世界での戦争の記録。そしてエルモア・アデンでの才人達が集めた戦争の記録。

勝った者のみが勝利を喧伝できる。敗者は名誉もなく全ての罪を被る。生き延びなければ戦争の意味がないことを知った。

ギーシュが今やっているのは、レイピアを使い、速度を利用して切込む事。難しい技を使うより速度を利用して切込む。『一の太刀を疑わず』『二の太刀要らず』『先手必勝』要は示現流と同じ考え方で、所謂、兵法勝負は避け、一撃必殺を狙う。

素人のギーシュゆえの迷いを捨て、戦闘が始まれば見敵必戦。ただし才人はギーシュには無理だろうと思っっている。自分が初めて人と相対した時がそうだったから。とにかく生き延びれば先が始まる。その為の戦法を才人なりに考えていたのだった。ギーシュが生き残ればそれは正しかったと証明される方法であったが。それともうつ・・・

才人が見えなかった。ギーシュは草原の周囲を見渡した。低い高さの草が茂っている。もつと暑くなれば草の高さも延び才人を探すのは余計に難しくなるだろう。だが今でも見つけることが出来ない。十メートルもないところから、先をつぶした矢を使い、弓で狙っている。ここまで出来れば平民と馬鹿に出来ない。魔法を使わずに隠れているので魔法探知を応用して使う事も出来ない。もつとも才人が持ち込んだ魔力を持つ弓を使われた場合、もつと遠くからでも確実に殺されるのだが。

才人が言った言葉。隠れるのに魔法を使えば、魔法を使っている

かどうかは、偽金貨を探す魔道具などを応用すれば、かなり遠くから見つけることが出来るんじゃないか？ 実際軍ではこういつた物を警備に利用したりしてることをギーシュは父親や兄たちから聞いている。偽金貨を選別する魔道具は、平民が買うにはそれなりだが、それでも一般の店で持っている所もあり意外と普及したりしている。軍人として生きていくなら魔法に頼るなつてことか……。ギーシュは考えながら周囲を再度警戒する。とその時、何かが動いた気がした。ギーシュは弓をつがえる。そして何かが動いた辺りを注意深く変化を探る。

才人とギーシュの訓練の一つ、お互い離れたところから始め、才人は森の中から、ギーシュは草原の中で才人を迎え撃つ。単純な訓練だがギーシュは才人を見つけたことはない。

勝ち負けは簡単、お互いが持っている弓で相手を狙って当てればいい。万が一のことを考えて頭には剣道の面の様な物をかぶっている。ギーシュは才人の戦闘に対する本気度にいまだに圧倒されている。

何かが今草原を横切った！ 横切った方向に弓を向け目を凝らす。ギーシュは緊張して弓をつがえる。今まで一度も当てたことがなかったが、今回は初めて才人の動きが見えた。

草原に動きはなかった。ギーシュはひよつとしてウサギか何かが才人の殺気に驚いて逃げたのかもと思い。横切った動きの元に目を向ける。弓はもちろん引き絞ったままだ。そちらにも変化はないように思えた。

こんっ

とその時、ギーシュの面に何かが当たった。振り向くと才人が手で矢を持ってギーシュに矢を面に当てていた。

「なにっ」

「近づけなかったからな、弓を撃った時に見つからないように祈ってたよ」

「あれは弓を撃って・・・目くらましだったのかい？」

「そうそう。弓を緩く打って近づきやすいように目を背けたんだ」

「なっ・・・まだまだだね。もっと精進しないと・・・」

「でも最初のころより良くなっているよ。隙がなくて、弓を撃つても当たるかどうか自信がなかったんだ。もう少し近づければと思って、やってみたんだ。そのあと一気に注意が弓の方向に向いたから近づくのは楽になったけどね」

「そっか、・・・まだまだだな」

「でも集中力は大したものだよ、後は気を緩めないことだな。今回は本当にどうしようかと思ったからな」

「そっついわれると悪い気がしないな」

ギーシュと才人はハウスで汗を流すと学院へ向かっていった。

午前中の授業を終えると昼は厨房の隅で舞華と二人で簡単な食事をとっている。

エルモア・アデンでの生活では、戦闘などがあるときは朝からかなりのカロリーを得られる食事をし、昼もそれなりの量とカロリーが

得られるようにメニューを考えたりしていたが、ハルケギニアでの生活ではそれに匹敵、メニューによってはそれ以上に見える為、朝は舞華と二人で一食分、最近ではルイズも入って三人で一食分だけになり、昼は厨房でスープにパンとサラダ程度で済ましている。食事の合間に厨房の人や学院で働く使用人のためのクリームや傷薬、石鹸を作っていたりする。もともと才人や舞華がやるのは要所要所の確認や個々に合わせた成分の調整のアドバイスぐらいで、何度か作るうちに皆慣れたせいか才人や舞華が最後までつくることはめったになくなってしまったが。

食事が終わると二人は図書館へ移動してキュルケやタバサと一緒に本を読んで、字を覚えたり、自分の生まれたところやエルモア・アデンでの生活を話したり、キュルケやタバサの国の話を聞いたりして過ごしていた。

後、二人はフェニエのライブラリーへの出入許可書があったりする。これは例の植物図鑑や動物図鑑が物を言った。例えば学院長が許可書を発行しようとしても初めは図書館の司書のメイジが難色を示した。その時に学院長が舞華に何事か囁き舞華がその場を立ち去りしばらくしてから三冊の書物を持ってきたのだった。それを見た司書のメイジは驚いた。

学院長は司書に対し、

「彼等はどういった書物で『自然科学』という学問を学んでおる。わしらが彼らに教えてあげられるものは『魔法』じゃ。しかしながら、彼等の普段勉強している内容に対して君はこの図書館のどこが彼らが学ぶのにふさわしい内容の書物があると思うかね？」

司書は書物のプロである。司書は考えた。秘薬の材料ともなる内容が書かれてあるようだが、これだけの物を網羅している書物とな

れば、これはフェニエのライブラリーにしかない。彼等は見たところ学院の学生と同じくらいの年齢にしか見えない。東方の学生はアカデミー並みの学問を学んでいるというのだろうか？

先ほど兄の才人に「あなたはどれほど勉強していたのですか？」そういったところ、平均より少し下かな？そういった答えが返ってきた。

平均より少し下の学生が必要とする書物がこれなのか？司書は混乱していたが、学院長の手前、書物の内容を認めないわけにもいかず、結局は条件付だが認めることとした。

条件とはこの三冊の書物をフェニエのライブラリーへ寄付をお願いできるかという事。それとハルケギニアの言語への翻訳の手伝いだった。

舞華はこれは、「お兄ちゃんのお下がりだから寄付するわけにはいきません」と言い。代わりにこれは初等教育用なのでもう少し専門性のある図鑑を持ってくるといい。明日それと引き換えに許可書をもらうことになった。

司書はよく見るといくつかのページに落書きらしい書き込みがあったり、本の最後のページに名前らしきものが書かれているのを見せられ、さらに驚いてしまったのだった。

司書は更に兄妹がこの図書館に通うようになるのと図書館の意義という物に考えさせられるようになるのだがこれは別の話。

ちなみに舞華が持ってきたのは、新品で、表紙の作りが布で縫製してあるさらに丈夫な装丁の植物図鑑、動物図鑑、鉱物図鑑の三冊だった。この赤い世界の本屋から持ち込んだ三冊の図鑑は後世のハルケギニアの図鑑の基礎になる。

才人はこの事に関して、図書館の独立性が保たれているのか。こう

いうところは結構すげーよな。などと感心していた。実際は教師専用のフェニエのライブラリーへ貴族でもない学生を通すことに抵抗があっただけなのだが。

昼休みが終わると午後の授業、それが終わると夕方の食事まで舞華は結界の中へ、才人は草原の向こうの林の中で一人で訓練をする。目的は左手のルーンを利かさないうで武器を使う事。魔法が絡む武器は問答無用でルーンが発現してしまう。ただ不思議なことにデルフと一緒に使う時にはコントロールできてしまう。デルフがインテリジェンスソードだからなのか？

林に入らない時には、舞華と一緒に結界の中へ行き、赤い世界から持ってきた車やバイク、飛行機、ヘリコプターをルーンの力を意識して発現させ状態を確認する。

どういった理屈かは不明だが、才人がハルケギニアへ来て初めてパジェロを運転した時に感じた使い方や性能、状態が分かるといったルーンの性能を利用している。

教本なんかは一緒に持ち込んでいた為、それと一緒にルーンを使い運転や操作を覚えようと勉強している。ただ、ヘリコプターや飛行機はルーンが使えなくなつた時の反動がシャレにならないので、今の所乗機しての運転・訓練はしていないが。

銃の扱いはルーンの力を使い、教本等の知識も含め恐ろしい勢いで上達していった。更にルーンを意識して使わないようにしてもそれほど射撃の能力が落ちなかつたのである。銃以外に車両、バスー力砲の様な武器、赤い世界から持ち込んだ武器全般においても、であった。

才人は銃や車両についてはほぼこの状態で問題ないだろうと思ひ。この先起きるだろうことを考え、徒手空拳、一番苦手な素手や剣、弓、ボウガンといった武器や武術の習得をスキルなしで覚えるように訓練の方行を定めた。

銃があつてもそれに合う、銃弾やもつと言えば火薬の補充がおそらく出来なくなるであろうことからだった。もつともこれは舞華の思いつきで、後になって解決するのだが。

才人はデルフと一緒に赤い世界や自分の世界にあつた武術や武道のビデオや教本と一緒に読み（デルフに読み聞かせ）、剣を使って素振りをするのを欠かさなくなった。

最初は銃を扱う時と同じようにルーンを最大限利用して、型が出来るようになればルーンを制御して最後は使わないようにしていく予定だった。

舞華は基本的に結界内の植物の世話はシエスタにまかせっきりになっていた。魔法が使える舞華は何かと貴族の相手をする事が多いのだ。魔法が使えない才人に平気で声を掛けられるキュルケやタバサ、ギーシュなどはほぼ例外で、モンモランシ、やケティなどもどちらかという話し方がどうかするときこちなかつたりする。

学院最年少（舞華の『飛ぶ』前の年齢は十三歳）で、知っている人間は舞華の魔法がおそらく学院で一番強力な物を持っているようなことに気が付いているが、容姿が守つてあげたい感じの妹キャラ。背も低く、手足も細くまだ成長していない子供子供している様子から話やすいようだった。

舞華は昼の授業が終わつた後、結界に入った時が唯一世話が出るかと思いきや結構お願いが多くて閉口していたのである。

お願いとは、「ギーシュの治療の魔法はどうやって覚えるの？」「東方ってどういふところ？」「秘薬の作り方教えて」「サイトーン、

つて本当に兄なの？」「かわいい！」「今度の虚無の日にトリスタニアでお茶でも・・・」「・・・」等々
大半はどうでもいいことなのだが、一々まめに相手している舞華では時間がいくらあっても足りない。

それを見ているルイズがたまに切れて爆発させているが・・・

ハルケギニアの現状を知り、ルイズに才人が召喚された後のことから、舞華にしてみれば色々やりたいことはあるのだが、つつい相手をしてしまい、結局徹夜をしてしまうのだった。ただ、ハルケギニアは赤い世界よりも、エルモア・アデンよりも魔力が満ちている。そうでなければさすがに舞華も切れていたかもしれない。

皆が寝静まった夜の学院で一人舞華は本やPCソフトなどを駆使してワイバーンから記録した映像を基に簡易地図を作製したり、カリーヌへ渡した作物の質問への返答、授業の復習&予習、文字の学習、等々魔力の体力？変換がなければ倒れていたことだったろう。

才人は地球にいた頃よりも、疲れにくい、回復が早いというだけで舞華ほど魔力の恩恵はなかった。もともとルーンを切り、自力でのスキルアップを目指している関係上、仕方のないことなのだが。才人は舞華が寝ずで色々やっているのを知っていた。相変わらず舞華に負担をかけているのを気にしていた。

舞華は舞華で、結局自分は魔法を使えるがそれだけだ。と思い、自分が魔法を使うには最低一度は魔法を見なければならず。また、トレーニングはしているが、才人ほどの体力やスタミナがついているわけではなく、もし才人が懸念しているように、トリスタニアが混乱に巻き込まれた場合、自分は才人に守ってもらわなければ魔法を自在に使う事は難しいのでは？とエルモア・アデンでの何度も繰り返し返した戦闘の事を思いだし、せめてこんな事ぐらいはやっておかない

と、お兄ちゃんにいつも迷惑をかけてしまっ。そう思っていた。
二人とも似たもの兄妹なのだろう。

召喚から十一日目、フェオの月、ティワズの週、ダエグの曜日。

いつものように才人、舞華、ルイズで結界に向かって走っていた。恐らく少し遅れてキュルケ、タバサ、モンモランシ、ケティ、ギーシュが走ってくるはずだ。

結界付近でクールダウンをしながらみんながやって来るのを待っている。

実は最近になり、ルイズはノン・ルーンで爆発をさせることが出来るようになった。

これは魔力の流れを見ていた舞華と才人の会話から起きた事である。ルイズと一緒にルイズの魔法の訓練をしていた舞華がどんなルーンを唱えても、魔力の流れが違うからうまくいかないの。と才人に愚痴をこぼしたことに才人が舞華に、

「そんなにルーンが邪魔なら、ルーンを唱えないで爆発しろ！って思えば爆発だけ起きない？」

と、のたまったのである。当然ルイズからは、あんた何言ってるのよ！と怒鳴られてしまったが、ルーンが邪魔ならルーンなしで何とかなるんじゃないの？と軽く才人に言われ二の句が告げられなくなったルイズが舞華のとりなしもあり、取敢ずやってみることになったのだった。

最初は魔法も発現しなかったのだが、舞華が、杖の手前で魔力が消えています私がやってみたみたいに魔力が発生しています。といい、ルイズが初めて魔法を失敗したのを見たあと、舞華がルイズの魔法を真似ていた事、舞華は魔力の流れだけ真似てたんだっけ。と、舞華の特技を思い出したことで、それならっ、と心機一転念じたところ、成功してしまった。

もちろん本来のルーンを唱えていないため爆発も小さい物だったのだろうが、それでもクレータを、草原の一部を十マイルほど深さは数センチ程度の浅いの穴ぼこを出現させる程度であったが、自由に使えることが出来たのである。

思わずルイズと舞華が抱き合って成功を喜び、たまたま見ていたシエスタからも「なんだかわかりませんが、おめでとうございます」と、祝福？されたのだった。

反対に周りで見えていたキュルケ達は呆れかえりというか、ルーンなしで魔法を成功させたことに固まってしまったのである。

これを見ていた才人からもおめでとうと言われ、ルイズが張り切って魔法をバンバン使おうとすると、当の才人から再び疑問が出されたのだった。

ルーンなしで成功した魔法ってことはこれが限界の出力じゃないのか？と。

ルイズはその発言にカチンときたものの、確かにそうかもしれないと思い、じゃあ、この後どうするのよ？と、才人に詰め寄ったのだった。これを助けたのは舞華だった。

正規のルーンは皆で頑張つて見つけましょう。でも、せつかく覚えられたのですから、これをコントロールできるようにしましょう。

ルイズはこれが限界って言われてるんだけど？という疑問に舞華が、これが最大なら最少を探してみましょう。と軽く答えたのだった。

結局ルイズは魔力をコントロールし、爆発を手のひらで、そよ風をおこす程度に成功するのだがまだ先の事である。

取敢えずルイズの今の現状では才人をひっくり返せる程度から爆風で驚かせるくらいまでのコントロールは出来るようになったのであった。ただ、キュルケからそれがなんの役に立つの？といわれ、いつものようにキヤーキヤー言いあっているのはご愛嬌だが、才人

はこれがまともなルーン付なら面倒だと感じていた。

草原に出来た穴ぼこを見て、こっそり唱えていた対魔法スキルや舞華の対魔法抵抗、対魔法ダメージ低減用の各補助魔法がキャンセルされたのだった。確かに舞華の魔法でもキャンセルされることはある。ほぼ確率的な物だが魔法は絶対的な高位が低位に常に勝るとは限らない。それが分かっているから対魔法スキルや補助魔法を重複させてかけることがある。そうすればひとつキャンセルさせても最低あと一つでダメージを下げる事が出来るから。戦争や魔法を使う古竜との戦いでは必要なことだった。ところがルイズの魔法は今回は三重の対魔法防御をキャンセルしたのだった。それもルーンなしの魔法で。

おまけで言えば、これは火や水、風、土のどの系統の魔法攻撃より厄介に感じている。通常なら魔法により発現されたものがこちらに向かって飛んでくるのが普通なので、躲すなり吹飛ばすなりするのだが、攻撃対象にいきなり魔法が発現している。それも繰り返しになるが防御魔法無視で。

取敢えずルイズには、魔法を練習する場合、物を対象とする場合でも周りに他の物のない平原で行う事と人に向けての練習は禁止、ただし、威力やどのくらいコントロールできたかを見るために行う時には、自分に向けて魔法を使う事。と言い含めた。

ルイズは対象に向けて魔法を使う時対象の表面に爆発を発現させているが、万が一、中で発現させた場合、えらいことになるのは見えている。『魂の欠片』を無駄に貯め込んでいる自分や舞華であれば『リザレクシオン』（復活魔法）や『復活スクロール』（リザレクシオンの魔法を発現するスクロール）によってまず間違いなく魂と体が切れることなく復活する。

ルイズには、コントロールが完全じゃないんだから間違いました。じゃ、どうしようもないだろう？そう言って納得させた。周りも本人もどうして？という顔をしていたが。

さて、朝の食事前の訓練をしていると、シエスタが

「今日はルイズ様のお母様がいらっしやる日ですよね？」と、何かを思いだしたようにルイズに向かって尋ねると、ルイズはゲツとした顔で、

「そうだったわね、というか思わないようにしていたのに・・・」などとトンデモナイことを言い出していた。

キュルケが、「優しくそうなんだけど、何か威圧感が半端じゃないのよね」とタバサの方を向き、タバサは「彼女にはあの二人以外は、自分達が束になってもかないそうにない」と感想を呟いていた。

「優しくて美人で楽しそうな人でしたよ？」

舞華がみんなの意見に違和感を持ち自説を持ち出してきた。

「マイカは・・・まったく・・・」

ルイズが一人落ち込んでいた。そこへ才人が、

「おおい、そろそろ食事の時間だろ？シャワーでも浴びて学院に戻ったほうがいいんじゃないか？」

「えっ、もうそんな時間！急がなきゃ。先に行くわね」

「ちよつと待つて、・・・」

女性陣があわてて舞華と一緒にコンテナハウスの方へ向かっていく。舞華と一定の距離を離されると結界の罫にはまり、何も無いところへ突っ立つはめになる。幾度か繰り返されたことなのでみんな舞華を中心にバタバタ走ってゆく。

「忙しいなあ〜」

才人は自分の一言が招いた事態だが冷静に突っ込んでいる。どの道女性が全員でなければ自分とギーシュは使えないのだから、仕方なしにその場で待っている。

「サイト。お願いがあるんだけど」

ギーシュから話しかけてきた。お願いというのは鉱物図鑑や飛ばされる前に才人が買った元素図鑑という物を見せて欲しい（鉱物と元素について教えてほしい）という事だった。

才人と舞華がキュルケ達を前にして原子と分子について自分の知っていることを話をし、錬金は原子分子を合成・分解・変質・変換している可能性があるという自分達の考えを話したことであった。これについては、才人達に興味があった、シュヴルーズ先生、コルベール先生もいたため結構白熱した議論も交わされた。

金属の性質・・・錆びという現象についての話から始まった合金に關しての話は、ルイズやキュルケが食事について止めに入らなければエンドレスになる可能性もあつたのだった。

シュヴルーズ先生は「錬金について思いついたことが出来ました。執筆の神も舞い降りてきそうです」と意味不明なことを呟いて部屋を出て行き、コルベール先生は興奮したように、「今日は有意義でした。素晴らしい。いや、まったく素晴らしい」と、何がそんなに感銘を受けたのか本人以外には不明なことを叫びながら部屋を去っていったのだった。

舞華は、「先に固定化や強化の事を聞いて良かったです」と、相変わらずにこにこしていた。

舞華は『固定化』『強化』といった『錬金』とは別に土系統の得意なこの魔法についてギーシュから説明を受けていたのだが、悲しいかなギーシュはドット。

舞華はそれを真似ることはすぐに出来たのだが、いかせん効果が知れている。舞華曰く、「魔法の流れがあんまり流れてなくて澱んでいる感じで・・・」と、最後は口を濁す始末だった。

赤い世界に飛んだときに幽香さんから受けた説明、

「中では時間は進んでいるけど、老化したり、見た目が変わったりすることはないわ」

「あくまで外とは違う時間が進んでいるだけなの」

「時間は召喚した人の所へ行けば、また流れ始めるわ」

この話を覚えていて、結界内の物が今までは老化していなかった可能性があるのが、これからは老化が始まる可能性がある事に危惧を抱いていた。そこで対応を何か、錆びるのであれば油塗ったりしないといけないですよ？と、ルイズに相談していた時に、ルイズがそんなに気になるのなら土のメイジに固定化をお願いすればいいじゃない。やる気があるなら舞華が覚えればいいでしょ？と、軽く言い放ったのであった。

「固定化？強化ではなく？」

舞華は武器屋での会話を覚えており魔力を纏わりつかしての物質強化は、そんなのがあるんだ、今度教えてもらおう。程度であったものが、現状を維持できる。『固定化』『錬金』と組み合わせることで、劣化したものを復旧出来る可能性のある、チートな技に呆れながらも、それを早く覚えないと。とさっそく調べ始めたのだった。

固定化に関しては実質コモン化している魔法の様で、意外と唱える事の出来る生徒は結構いるのだが、効果は唱えている生徒自身が微妙というようにやはり土系統が有利らしい。

そこで最初の話に戻る訳になったのであるが、舞華はシュヴルーズ先生に教えを乞いに行き、ルイズの魔法であれこれあったものの、才人の貨幣の件がありこれ幸いと兄妹の部屋に向かったのだった。その途中でコルベール先生と会い（実はオスマン学院長がたまたまのぞいており、様子見と、万が一の火消しのためコルベール先生を向かわせたのだが、実際は火に油を・・・という事態になってしまったのだった）

そんなこんなで、話がおかしな方向へ向かう前に、土の系統でドットのギーシュ。トライアングルのシュヴルーズ先生。火系統とはいえトライアングルで実地経験の豊富なコルベル先生。この三人の固定化を真直に何度も見ることで、細かな差異を知りえたことにより舞華は自分なりのアレンジで固定化を使うことが出来るようになったのだった。ついでに強化も使えるようになり、これでお兄ちゃんの役に立てるね。と才人に向かってにこにこしながら報告するのだった。

因みに舞華は魔法に関してメモを取っているのだが、内容は学院の授業から見た魔法について魔力の流れを自分でわかりやすくメモっている。最初エルモア・アデンでの魔法を覚え始めた頃はB6版の小さなメモだったのだがだんだん増えてくると学校の授業で使うノートになり今ではルーズリーフにそれもファイルバインダーは10?幅の物である。

それが複数冊になってきたのでPDAにスキャナでコピーしている物も持ち歩いている。

中に書いてあるものは・・・

ウィンディアイシクル：アイスボルトと違って、腕から出た魔力をヴヨ〜んって感じで流して杖に着いた時点でビューンと飛ばして、色は最初はないけど、杖の手前3センチくらいから青から黄色を経由して黒でビューン。黄色は杖の・・・

こんな感じで、書いた本人もわかっているのだろうか？見せてもらった才人は、舞華の何かを期待する視線にしばし硬直化し、金輪際、舞華の書いたものは見ないようにしようとして心に決めたのだった。

こんな感じで舞華は才人と一緒に科学を教えるというだけでなく、

ハルケギニアの魔法を教えてもらったりして、それなりに有意義な日々を過ごしていたのだった。

そしてギーシュはルイズと同じ結論、科学を知れば魔法の強化にもつながる。

土の系統として元素の事を知る事。自分の使い魔ジャイアントモールのベルダンデイの特性から鉱物について知ることは、戦闘に強くなることと同じくらい重要なことと見抜いたのであった。

才人はギーシュのこういった純粹さからくる鋭さについて素直に感心し、自分の出来る範囲で協力する。と返事をしたのだった。

しばらくしてベルダンデイも結界にギーシュと一緒に入ってくるようになり、舞華と仲良くなり貴重な鉱物を舞華にプレゼントするようになってきたのである。

どうもその時にベルダンデイからギーシュにプレゼントしていいか許可をもらっているようなのだが、コルベール先生は使徒の特性からこういった例は聞いたことがない。といいこれもこの兄妹の特異性でしょうか？と首をひねるのだった。

この時ベルダンデイと仲良くなったことが、舞華がハルケギニアで魔法を誰よりも強力に使うことが出来、魔法を魔力器官を通じて体力を回復、ほとんど休むこともなく活動できる舞華の魔力の源泉を知ることが出来るきっかけとなったのだった。

才人は相変わらずルーンの制御に精を出していた。これまでにわかってる事は、魔法力のある武器を何も考えずに使うとルーンが暴走気味に発揮される。(つまり全力状態。武器を手放した状態で

いきなり体が疲れて、ひどい場合はたてなくなるくらい疲れてしま
う)
魔法力のない武器はルーンを割と自在に使うことが出来る。ほとん
どルーンの効力を消してしまう事も出来る。

そしてデルフ。これはルーンとセットで作られたのだろうか？完全
にルーンの効力を消し去ったり、逆に魔力のある武器を、ルーンの
力によりそれ以上の動きや技を使えたりする。更に暴走状態に比べ
ると、同じようなことをしても疲れ方がかなりましな状態になっ
ている。

そして慣れるに従い魔法力のある武器でもデルフと一緒に使うとル
ーンをコントロール下に置くことが出来る事を発見した。一番効率
がいいのが左手にデルフ、右手に他の武器である。

また最初のころに感じた車なんかの使い方やスペックが分かるル
ーン的能力だが、驚いたことに今まで使ったことがない物、例えば
飛行機などに関しても詳細に使い方が分かり、それどころか状態ま
でわかってしまうのである。例えば車の点火プラグのコードが抜け
かかっているといったことまで。飛行機やヘリコプターまでなぜか
わからないが完全に使える自信がわいてきたのである。これに関し
てもルーンを舞華に調べてもらうことにしている。ただいまは色々
舞華も忙しいので、今すぐ舞華にお願いする気はない。

今才人がやっているのは、ルーンが効いた状態を体に覚えさせ、
ルーンを使わないで自分の感覚にする訓練だ。戦闘中や飛行機、ヘ
リコプターを運転中にルーンの効果は切れました。そのまま墜落と
かはごめん。ということだ。飛行機も、ヘリコプターもルーン任せ
にすれば経験的に使える。けどそれはルーン之力、平賀才人とい
う個人の力ではない。自分でコントロールできない力は使いたくな
い。異世界へ飛ばされた才人のこだわりと言うか意地みたいなもの
だ、もつとも舞華や知合いが危険な目に合えばあっさりそれを捨て
去るだろうが。

28・学院の日常・2（後書き）

これでおそらく今月の投稿は終わりです。

もし記事が書けていればもちろん投稿していきませんが。

誤字脱字など有りましたらお知らせください。

感想などもよろしく願います。

29・結界の中の出来事 - 3 (前書き)

久しぶりになります。出張が終わりましたので出来た分を投稿します。

しかし、出張中は新しい文を書くことが出来ずに終わってから書いていたのですが、

出張中は投稿した文を見ていました。すると色々ミスが・・・書き換えたものが残っていたり、誤字脱字の山が・・・

おまけに感想で指摘されていますが、交配の仕方について基本的なところで

ミスがあり、こういった所も修正していかないと。と思っていますのでさらに

更新速度が遅くなりますが、よろしく願います。

今回そろばんや測量の話が出てきますが、この話では一度プリミルの現れた時期に

技術が断絶しているという脳内設定でお願いします。たぶん耕作地の測量はそれなりに

きっちりやっているだろうし、そろばんも似たようなものはヨーロッパにも

あったと思います。それでも、プリミルの現れた六千年前で科学技術といった物は

進歩が止まっており、代わりに魔法を頼りに社会が構築されていた。

そこへ技術だけが進歩していた世界から人々が召喚され、それを魔法で

内容を理解しないままそれだけを真似てきた。

そこへ才人達が現れた。この話はそう言った物語です。

*というか書いてる本人がそのことを忘れていて、あれね?と思っ
てたのは秘密です。

29・結界の中の出来事 - 3

「あれ、龍籠が降りてくるわね？」

キュルケが学院の正門前に竜が降りてくるところを見てタバサに向かって言った。

「あれは？ヴァリエール家の紋章が見える」

「ルイズのお母さんの？」

「多分そう」

「ルイズは食事に食堂へ行ったところね。教えてあげないと」

キュルケはタバサを伴い食堂へ向かった。

「ええ〜！お母様がいらしたの!？」

「る、ルイズさん、声が大きいですよ」

キュルケの連絡にいきなりテンバっている。どれだけ実の母親が苦手なんだか・・・

呆れて見ている才人に対して舞華は落ち着かせようと声をかけている。

因みに今は食事中。普通こういつた時には注目を集めるもののだが、最近キュルケがルイズに話しかけた後、大声でにぎやかになること

が多く、そしてそれを舞華が収めようとしていることは日常の光景になっているせいか、先生方も諦め、たまに誰かが窘めに行くくらいになっている。

因みに食堂の席順が二年生の中央付近にルイズがおり、その向かいにキュルケとタバサ。そしてルイズの左右にギーシュとモンモランシ。ケティは学年が違うので一年の席の中央ルイズのすぐ後ろにいる。もっとも学年毎の机の間隔はかなりあいているが。

才人と舞華はルイズの後ろで食べ終わるまで控えている。いないと収拾がつかなくなるかもしれないからだ。というかつかなくなることが多い。従って才人たちの食事はその後厨房に行ってからになる。才人達の昼食がパンとスープ、それにサラダになっている理由のもう一つが、これにより時間がないということがある。

それはともかく、カリィ又さんが来たという事は、今日は昼食抜きかな？ちらつと考えた才人であったが、ルイズに早く食べたらお迎に行こう。と提案をしたところ、タバサ並みの速さで食事を食べ始めたのだった。

ルイズが食べ終わった後、恐らく学院長室にいるだろうカリィ又を迎えに、ルイズ、才人、舞華の三人は学院長室へ向かった。

「ミス・ヴァリエール。お待ちしておりました」

本塔の階段を上がっていると上からシエスタが踊り場で声をかけてきた。

「シエスタ。お母様が着てるって本当？」

「はい。オールド・オスマンと皆様をお待ちしています」

「うわあ、本当に来てたんだ。才人行くわよ！」

「何気合い入れてんだよ？」

「黙ってついてくる！」

何かルイズがノシノシといった感じで学院長室に向かっていくのを俺達について行った。

お約束のやり取りをした後、ルイズたち四人は、部屋に入りオールド・オスマンとカリリーヌに挨拶をした。

「少し早く来すぎたようですね。食事は済みましたか？」

開口一番カリリーヌさんの口にした言葉だった。当然この中でルイズ以外は食事をしていないのであるが、

「まだの様ですね。オールド・オスマンがこれから食事でもどろろかと言ってらっしゃるのですが一緒に食事をしましょう」

で、なぜかで集まってハウスで食事をしている。・・・食事を済ましたルイズ、キュルケ、タバサ・・・もといタバサと一緒に食事

をしている。それに、モンモランシにギーシュにケティ。タバサ以外の皆はお茶を飲んでつき合っている。

しかし、コンテナハウスは広さが広さなのでオールド・オスマン、ミス・ロングビル、ルイズ、キュルケを始め、才人や舞華までの十一人が入ると狭く感じる。

そこで和やかに？食事が終わった後、何をやっていたかというと、学院長公認のお喋りタイムだったりする。

最初の話題がカリィ又さんの魔法と才人の防御についてどちらが強いかという話から始まり、才人が舞華の補助がなければ魔法使いと戦えないという話から、才人は嫌な予感がし、話を逸らそうと何とか舞華に話を振りつつ、舞華は天然モード全開中でスルーされを繰り返していくうちに結界の話になっていった。

「あの結界って魔法使ってないの？」

「はい、魔法じゃない別の力を使って構築したようです」

ルイズの質問に舞華が答える。そしてそれにキュルケが感想を付け加える。

「確かにこの結界の中じゃ魔力を感じないのよねえ？タバサはどう思う？」

「……確かに魔力は感じない。でも、魔力なしでこの結界を作るのは……」

「確かにこの結界は魔力なしで構築されたんですが……」

舞華が何か考えながら話そうか話すまいかといった、逡巡するよう
な口ぶりがあった。

「マイカ、どうかしたの？」

ルイズが舞華に尋ねると、

「えっと、まだはつきりしたことは分からないんですけど、この結
界は魔法以外の力で構築されているのですが、維持に少しだけで
すけど魔力を使っているようなんです」

「……………？」「……………」

「どづいづこと？」

今度は才人が重ねて聞くと、

「えっと、この結界を作る前に先生が私に話をしたことがあって、
その時は何の事だか分らなかったんですけど、今なら少しわかるよ
うな気がして、それを考えていくと、この結界は存在する土地から
魔力を少し借りてその魔力で結界内の植物とかを育てたりしている
ようなんです。後、水だとかも錬金じゃなくて・・・なんていうん
でしょう？錬金の代わりに魔力を直接使って植物に栄養と水を与え
ている？正確じゃないですけどそんな感じで結界内では季節とか環
境とか無視して植物を成育させているんです」

「なんと、真か？」

「完全に分かったわけじゃないですし、きつと、ヒントだけ与えて
後は自分で考えるように。という先生の考え方なんだと思います」

「なかなか厳しい先生じゃのう。しかし、それが解りかけているミス・マイカもなかなかじゃて。ところでなぜそれに気が付いたんじや？」

「それはシエスタさんに言われたんです。最初のころより数日しか経っていないんですけど、植物の育ち方が良くなったような気がする。って」

皆の注目がシエスタに集まり、シエスタは赤面しながら下を向いてしまった。

「なかなかすごい話じゃのう、じゃがそれと結界が魔法を使っているのはどうしてわかるんじや？」

「それでこの結界の事を考えながら見ていたんです。そしたら、結界が魔力を集めているような流れが見えるような感じで。えっと、不自然な流れが結界の周りに見えるんです。それでよく考えてみれば先生は私たちが前にいた世界でこの結界を作ったんですが、そこはここより魔力が薄いんです」

「薄い？」

「はい、ハルケギニアは前にいた世界に比べれば一般的な魔法技術は未開発なところが多いのですが、魔力そのものは前にいた世界よりはるかに濃いです。前にアイス・ボルトをお見せした時にトライアングルとオールド・オスマンはおっしゃっていましたが、あの魔法は初級の、ここで言うドットから始める魔法と同じような物なんです。ですが魔力が濃いために数倍の威力があるんです」

「たぶん今のまま魔力を結界が吸収していけば結界そのものが広がる。と思います」

「それは結界内部が広がるという事なのか？」

「そうですね。でも、広がるといつても恐らく何年も、多分何十年もたつてやっと広くなったかな？くらいだと思いますよ。それと、結界内は前の世界から飛ばされたときに、この世界との位置関係を、ええっと、なんて言うのかな？階段？例えて言うと、入り口に有る木の列に切れ目の部分がありますよね？入り口にしている」

皆を見渡してというと、頷きながらみんなが話に聞き入っている。俺もその話は初めて聞く、何とはなしにそういった感じは受けていたのだが。

「あそこが階段だと思えばいいんです。つまり、結界内が二階にあたるので普段は入ることが出来ないし、魔力を使っていないので魔法で階段を探すことが出来ないので。あ、ああ、そうか、少しだけ魔法を使っているので魔力の流れが分かるかもしれませんが、魔力は・・・そうですね家の周りの風の流れが少し違うというだけで上を見ることが出来ない人には決して見つけることは出来ないでしょうね」

「なるほど。決して見ることが出来ないのじゃな。魔力を使っていないという事は・・・科学でも無理かな？」

「無理だと思えます。魔力・・・魔法の力を例えば長さのように皆が区別つくように大きさを表したりできないですから、有ると解つても魔法は見つけることは出来ません。ましてや魔法でない力は・・・」

「なるほど、科学は皆が使えなければ意味のないことじゃったな。確かにそれではのう」

「あ、でもまだ完全にそうだと言いつ切れぬわけじゃないですから。ちゃんと流れも見切れているわけじゃないです」

「それにしてもよくそこまで見てるよな。俺なんか全然わからなかつたからな」

「先生はハルケギニアの事を知っているわけじゃなかったようですからね」

「あ、お茶替えますね」

そう言いながら舞華はティーポッドを持ってキッチンの方へ向かって行った。

「そういえば、ド・オルニエールの方では種蒔きの準備は出来ているそうですよ。明日は一緒にド・オルニエールの方へ皆で行ってみませんか？」

カリーヌさんから提案があった。そう言えば姫さまからお願いされているが、その土地を知らないのはまずいかもしれない。特に舞華はなんだかんだで気にしているようだったし。

才人から明日一緒に行つて明後日帰つてきていいですか？とオールド・オスマンへ許可を願つた。オールド・オスマンはルイズ、オ

人、舞華、シエスタの四名に関してのみ勅命のため特別許可を出す
こととした。

キユルケは何か言いたそうだったが学院長がいるせいか大人しくし
ていた。

舞華がお茶を入れなおして来たところで、ルイズがド・オルニエ
ールに行けば何しようかしらと言っている横で、舞華が地図作らな
いといけませんね。などと言ってカリーヌを固まらせたのだった。

「マイカ、地図を作るといつてもどうやって作るのです?」

「えっと、それほど正確でなくてもいいのなら、持ってきた機械で
写真を撮れば割とすぐに出来ますよ」

「割とすぐ。とはどのくらいの日数で?」

「大体写真を整理してあとはソフト任せだから写真の枚数によりま
すけど一週間あれば出来ると思います。ド・オルニエールはどのく
らいの広さなんですか?」

「三十アルバン、おおよそ十リーグ四方だな」

「私たちの単位で十キロ四方ですね。ならそこまでかからないかな
?」

「そ、そ、そうなのか?」

カリーヌが思わずもってしまつくらいに簡単に答える。

「でも、正確じゃないですよ？比較出来るものがあれば正確になりますし」

「どうやって作るんじゃない？」

「竜等で空の上から写真を撮ります。後はパソコンにお任せだから・・・」

舞華が俺の方を向いて最後は口ごもる。

「ええと、パソコンというのは俺達の世界で使われていた機械です。電気の力で動くのですがそれにソフトウェア。なんて説明しよう？要はパソコンを動かす命令です。それがいくつもあります。そのうちの地図を作るものを使います。それで出来ます。ただそれにはいくつか欠点があります。一つは写真では正確に長さが分からないので長さの分かっているもので、出来るだけ長い物がいいです。それを基準にして長さを決めていくんです」

話だけでは分かりにくいでしょうから、学院の地図を作っておりますからお見せしますね。舞華がそう言いながら上の部屋に上がりA1に縮尺を落とした地図を持ってきて皆に見せた。

「これは・・・」「なんと・・・」「わあ・・・」「へえ」

色々な反応が返ってきた。これは航空写真ベースの物だがこの世界にはないのだろうか？幾何学の知識があれば、俺達作った、少なくとも航空写真ベースの物よりましな物があるはずだが？確か中世以前のギリシャ辺りで幾何学の基礎はできていたよな？地球の大きさも測れてたはずだし、だよな？日本でもかなり正確な地図があった、はずだよな？あれ？

「これはしゃしんとかそんな、という物を使って作ったのか？」

「はい、俺は写真を撮るのを手伝いましたが最後までやったのは舞華です。が、どうかしたんですか？」

「この地図には高低差があるが？」

「ええ、大体ですが写真の角度によっては高度も結構正確に出せるんです。もっともこの地図はGPSがないから地上で測量したほうが正確に出来たでしょうけど」

「ジーピーえす？そくりょう？何ですかそれは？」

「あ、GPSというのは空の上、人工衛星という物を打ち上げてその電波を使って位置を測定する機械です」

「じんこうえいせい？でんぱ？」

「かえって解り難かったですね。絵に書いて説明しますね」

俺は紙に地球を書き適当に三か所に衛星の絵を書きそれを地上の一点で結ぶ線を引いた。またそれを上から見た図も書き同じように線を引いた。

「電波というのは簡単に言えば目に見えない光と思ってもらえればいいです。その光を受ける機械で三か所から電波という光を受けます」

「それぞれの衛星の位置が決まっていれば三角形は角度が固定され

ますから・・・」

説明を始めた。しかしこれは中々の鬼門だった。まず地球を書いたことから丸い球体の上に俺達が立っていられることに驚き、そんなことがあるのか？と聞かれ、まず俺が、だってみなさん地面が丸いのはよくご存じでしょう？とまぜっ返したのでそれが一騒ぎ起りそれが静まるまでしばらく時間がかかった。

結局俺はタバサとカリー又に聞いたのだ、山や高い塔、マストをもつた船を空から見た事はないのか？と。また地平線や水平線が丸くなかったか？と。地球が平面なら山や塔、マストは根元もてっぺんも一緒に見え始めなければおかしいでしょう？と、丸いから上の方から見え始めるでしょう？そして、やはり絵に描いて説明した。そしてカリー又やタバサが言われてみればそうだった様な気がする。と言い。反対側が落ちないのと同じように皆の目の前でコレールの皿を落とし、落とした物は下に落ちるでしょ？ルイズからそんなの当り前じゃない！といわれ、コレールの皿が割れないことがまた一悶着したためそっちの説明は、取敢えず後日するという事で逃げたのだった。

取敢えずこういう風に物が落ちるのはそういう力が働いているから、俺達は『万有引力』と習ったと説明し、意味は全ての質量、重さじゃないという説明をして、質量の有るものにはお互いにその力が働きあっていると説明した。ルイズが、何で重さと質量って二つあるのよ？と突っ込まれ、お互いに力が働いているなら離れたら小さくなりそうだろう？実際に俺達の世界では小さくなるのが実験で出来たんだよ。それで、重さと質量をちゃんと分けて考えないとおかしいことになるんだ。例えば？という質問に、俺達は宇宙に行ってたからな。やっぱりあれか、仕方ないな。と呟き、これは内緒だぜといって壁にスクリーンを張ってプロテクターで俺が録画して

いた国営放送の宇宙特集、確かアメリカから有名な科学者、下手な俳優よりかつこよかったよな。などと思いつきながらビデオを見せたのだった。

宇宙では重さがない。そんな説明より、みんな宇宙の美しい映像に夢中になっていた。太陽の様子、惑星の想像図。宇宙に向かって行く宇宙船。そして宇宙から見た地球の様子。

もうここまでくればものついでだった。科学は常に進歩している。そのビデオから数年たった俺がこの世界に来る前のビデオやCD・DVD（俺が結構こういう物が好きだったのでよく録画していた。不思議なことに赤い世界ではその手の物はほとんどなかった。あってもそれは俺達の時代より古い物ばかりだった）をみんなに適当に見せた。

そしてこういった別の星を観測していくことで俺達の地球で起きた事。例えば部屋を冷やすのに使われていたフロンという物質が地球に有害といったことが分かったのも、金星という惑星の探査が始まりだった事。

もったいなかったけど、残り少なくなっていたカップラーメンやインスタントスープやレトルトのスープを目の前で作りこれも宇宙や月に人を送ることをやっているうちに新しい技術として還元されたことを説明して、重力がないことから、地球では難しい合金や薬を作る実験をやっていたこと、等々説明していた。

それを聞いていたオールド・オスマンが、あ奴らがこの場におらんではんと良かったわい。と呟いていたのをロングビルは素知らぬ風に聞いていた。

才人と舞華は録画していた内容を二人で説明していき、結構これが

疲れるのだった。

そして測量の話にやっと戻った。そして驚いたことに幾何について軽く考えられていたのだった。確かに才人も舞華も幾何は苦手だった。ただそれが重要な学問ということは理解していた。才人はバイクいじりが好きでパーツを親父に頼んで作ってもらったこともある。そこで図面を引くこと。そこまでいなくても、タイヤのセンター出しが幾何の原理であることは理解していたし、数学の先生から地図や土木建築で設計だけでなく現場でも必要な知識という事。昔の職人が使っていた計算を例として説明を受けたことを覚えていた。

それと比べても技術的に上でありそうなハルケギニアで幾何や計算がそれほど重要視されていないことを知り本当に驚いてしまったのだった。キュルケから金の計算に必要な、所謂金利計算の様なもの以外に、幾何とかがなぜそんなに大事か聞かれ、土地の大きさから年貢とか予定してそれから国の予算とか考えるんじゃないの？と逆に質問したのだが、結局六千年も同じことをやっている、どこそこはいくら。みたいな感じで年間予算が決まっているそうだ。じゃ、領地の面積とか都市計画とかは？と突っ込むのもこの時点で疲れていたのでスルーしたのだった。

しかし学生たちと違いカリィヌとオールド・オスマンは学院の地図を見て考えこんでいた。

この地図が竜を飛ばすだけで作れるのであれば軍の作戦計画がかなり簡単になる部分がある。また敵がこのような物を作る、もしくは持てば陣地を作る計画や会戦の場所設定など戦術的な優位が起きる。逆もしかり。

どう扱うべきか悩むのだった。それに耕作面積に関しても昔はこうだった。とはいえ実際にそうか？と言えば、だれも確認したものはいない。

そういえばサイトは地上で測量といったような？
カーリー又は確かめることにした。

「サイト、あなたは測量を地上でやった方が確実と言いましたね？
それはどういう事ですか？」

「簡単に言うと三角測量です。測量すべき場所を小さな三角形の集まりと考えて、細かく角度と距離を測っていきます。それを最後にまとめればその土地の広さや高低が解ります。それを最後に図面にすればいいのです」

そういうとまた紙に三角形を書き、角度、距離、高さを適当に書き込みそれを線で結び等高線として表現し、三角形はこういう式で計算できます。証明は今は勘弁してください。

必要なら今度勉強しなおしてから説明します。俺達はどういったものがありますから。そう言って取出したのは関数電卓。それこそちよっとした文房具屋や電気屋で売っている一台千いくらのソーラ電卓だった。それを見せて簡単な計算を口で言いながらやって見せる。

「それ、私に使い方を教えなさい」

ルイズがそれを見て興奮したように叫んだ。それをカーリーが一声で抑える。

「ルイズ」

「はい、お母様・・・」

見るとキュルケ、タバサ、シエスタそれにオスマンやロングビルも欲しそうな顔をしている。
やばい地雷踏んだか？才人はそう思ったが、その時まで黙っていた舞華が割り込んできた。

「皆さんは計算機が必要ですか？」

「計算機？その機械のこと？」

「ええ、そうです。私たちは電卓と呼んでいました」

ルイズの質問に舞華が答える。

「デントク？」

「電子卓上計算機。略して電卓」

今度は才人が答える。

「デنش？電気ではなく？」

「ごめん、それについては説明出来ないや。電子をちゃんと説明出来ないから」

「ふうん、まあ、いいわ。その計算機が欲しいなあ。って思ってるんだけど、無理？」

「舞華、在庫有ったか？」

「あります。でも、その前にソロバンとかがいいかもしれないです」

「ああ、あれか。でも、この人に使えるのかな？俺達も結構苦労したよな？」

「そろばん？なんなの？」

「持ってきますね」

舞華が自分の部屋へ戻って行きほどなく帰ってきた。手にはそろばんを携えて。

「これは？」

ロングビルさんが困った顔をして聞いてきた。見ただけでは何をどうするかわからないだろう。

舞華が使い方を説明し始めた。簡単に言えば足し算引き算をする計算機代わりに、人が計算をするのを助けてくれる器具なんです。と説明した。上の一つのコマと下の四つのコマが数字を表している。これの桁をあわせることでコマの列が続く限り大きな数字を扱える。実際にそろばんを使いながら足し算、引き算を目の前で見せていく。

そして自分達が普段使っていた数字を見せて0から9までを、それで桁を増やして数字を表すと説明すると、表記が微妙に違うがハルケギニアでも似たような感じだったので、これで計算をしてみても結果があってるか間違っているのかわかりますね。と舞華が言い。ルイズが舞華にそれでも電卓の方が計算が速いんじゃない？と聞いてきたときに、それじゃと言ってオールド・オスマンへ足し算、引き算の問題を出してもらえませんか？と、お願いをした。オールド・

オスマンはそれではと舞華の持ってきた紙に計算問題をいくつか作ると、舞華が、お兄ちゃんそろばんお願いな、といって自分は計算機を使います。といって才人と並んで、計算を始めた。

競争なのだが、才人もあまり使わなくなつたとはいへ、舞華と一緒にそろばん塾に通わされた経験があり、それなりに覚えていたので、電卓とほとんど同じような早さで計算を終わらした。

これでも才人はエルモア・アデンで色々計算することが多かったので、そろばんの経験による暗算は普通にやっていたので、手が少しきこちないがけっこうできる子なのだ。

見ていたオールド・オスマンはじめ皆は計算の速さに驚いていた。そしてこの後、舞華がそろばんを使わずに別の計算を暗算で解いてしまったのである。

さすがにオールド・オスマンもカリリーも驚いてしまいどういふことか説明を求めてきたのだった。

そろばんは慣れてくると頭の中でそろばんを思い浮かべることで何もなくてもこれくらいの計算は誰でも出来るし、これは足し算、引き算だけでなくかけ算、割り算もできますよ。といってそれも実演して見せたのだった。

これなら木があれば、なくても同じような構造のものができれば、量産は簡単だし、計算が誰でもできますから便利ですよ。そうやって計算の基礎ができないと、もっと難しい計算を計算機でやるにも間違つた計算をしてしまいますよ。舞華はそう言って皆の顔を見渡した。

ルイズはそれを見てチャレンジ精神を刺激されたのだろう。真っ

先に才人に受かつて教えなさい。と言い放ち、そろばん。というのね。これまだあるの？などと舞華に質問を始めたのだった。シエスタ、タバサ、それにミス・ロングビル達と同じように覚えられますか？教えて下さい等等と次々に話始めたのだった。

結局電卓は、使う人が計算のレベルが低い、というか概念のわからない人に持つていてもらっても仕方ない（何故に関数電卓やプログラム電卓ばかり・・・）ので、そろばんを舞華と才人が追加の科目として教える。そろばんそのものは舞華がいくつか持っているものでそれを提供する。それを元にしていくつか作ってみることになり、それに関しては、オールド・オスマンが、偶には研究馬鹿にも役だつてもらわんと。といって見本のそろばんを一つ借りて作らせることとした。おそらく練金を利用して作るのだろうが、誰に作らせるのか目処は立っているようだった。

製作数は取り敢ず二十台として足りなくなれば追加で製作することとした。また才人の持つているそろばんに関しては、ヴァリエール家へ提供してそれを複製したものをルイズが使う事になった。もっとも出来るまではオールド・オスマンが製作したものを使うことになるのだろうが。

そして、カリー又は最初の話題、地図の製作に関して才人と舞華に教えを請うた。これにはミス・ロングビルが驚いてしまった。貴族が、それも公爵家を使い魔とはいえ平民に頭を下げてお願いしたのだ。オールド・オスマンはそれほど驚いていないようだったが。見ると、シエスタは口を大きく開け、両手で口に当てて驚いているし、ルイズやキュルケも驚いた顔をしている。タバサは相変わらずだが、少し強張っているように見える。ギーシュやモンモランシ、ケティは言わずもがな、である。

才人と舞華は最初の話にもどって器具を使って測量していくんです。といって今度は才人がハウスから出て道具を取りに行った。舞華は才人がいない間、これは最初やり方が解らなかつたのですが、

前にいた世界で測量をすることになったので二人で一生懸命に勉強したんです。後で、コンピューターを使う方法を知ったんですが、この世界にもGPSが無いので精度が落ちるんですよ。と笑いながらその時のエピソードを話していた。

才人がトランシットや測量用のはかり等器具を持ってきて説明を始めた。

時間はかかりますがこうやって測量をした方が空から撮影して地図を作るより精度が出ますよ。といいながら使い方や理論を、用語を、都度その説明・補足を入れながら説明していった。

最後に才人は、でもこれだけじゃ何もわからないでしょ？自分たちも最初は全然駄目だったんですよ。実際に器具を使って計算をやっていたってやっと、理解できたんです。

ド・オルニエールの測量なんかも、もしやるならじつくり腰を据えてやらないと中途半端な役に立たない地図しかできないと思います。そう自分の経験を加えて感想を言うのだった。

そろそろ時間も遅くなったので解散の時間も近くなったな、といった頃、キュルケから質問が出たのである。才人と舞華は前の世界でそれなりの実力を持つ剣士とメイジだと。

だけど元いた場所では、刀とかの武器とかは使ってなかったの？とキュルケにしてみれば、才人が前の世界で剣士だったがまさか十年以上の時間を過ごしていたとは思っておらず、刀を自分のいたところの武器と言い最近になって使い始めたような言動があり少し疑問に思っていたのだった。元いた場所でも、それなりに訓練を積んだ、そう自分の友人のような立場にいたのではないかと推理を巡らしていたので刀以外にも武器があるのかと。だからキュルケにはそれほど深く考えずに質問したのだ。だが、それにルイズが反応した。過剰なほど。そのため却って周りから不信感をもたれ、何故？と思

われたのだった。

才人はルイズに対して、俺達を思ってたの事なんだろうが、もう少しスルー出来るようになれよな？と思いつながら赤い世界で集めた武器について話をしなきゃいけないかな？と思つた。同じタイミングで舞華も、仕方ないなあ、ルイズさんは。と思つていった。

才人がパソコンのデータを入替えてプロジェクターを準備し、舞華が自分の持っている武器を取出して、これが私の持っている、私たちの世界の武器です。刀とかは今でも武器ですけど、戦争に使うようなものではなくなっています。と説明したのだった。赤い世界は正確には自分の居た世界に似ているが、違う世界なのだが、この際、細かいことを話しても仕方ないと思いつ省略して説明した。最もみんなが注目したのは、舞華がスカートの裾を持ち上げて拳銃を取出したときに、またルイズが叫んだ事なのだが。

オールド・オスマンは驚いた。同じくロングビルやルイズ達も驚いていた。学院では一年生の時に学院の説明の際、宝物庫の中も案内される。警備上の問題もあり数人ずつ教師の引率の元だが、その際その中にある『破壊の杖』にそっくりなものをプロジェクター上に見たのだった。

「ミスタ・サイトこれらの武器は君の世界の武器なのかね？」

突然オールド・オスマンから質問を受けたが、才人はそうですとだけ答えた。

「サイト。この武器に似ているものは私はこの学院の中でみたわ」

ルイズが叫ぶように才人に向かって話し出した。

「私たちは『破壊の杖』と説明されたわ。オールド・オスマン。これはそれに似ていませんか？」

才人と舞華は驚いてしまった。シエスタの曾祖父に次いで俺たちの世界が似た世界から持ち込まれた武器。前は日本刀だった。今度は対戦車ロケット弾かミサイルの類だろう。

どうなっているんだ？と舞華と一緒に考えてしまった。幽香さんから聞いていた、繋がっているような匂いがする。と彼女独特の表現で表したことが目の前に展開されようとしているのだから。

オールド・オスマンは仕方ない、という風に話し始めた。

始まりは三十年前のことだった。オールド・オスマンが森林の中でワイバーンに襲われた時に、見知らぬ風体の男に助けられたことを。その男は「ここはどこだ？帰りたい」そういつて息を引き取ったのだった。その男の持っていた武器が『破壊の杖』と名付け学院の宝物庫にへ納めていたのだった。

才人はおそらく物を見ていないので、確証はないですが、似ているのであれば、俺達の世界の武器でしょう。と、答えたのだった。今度それを見てくれないか？とオールド・オスマンに言われ、了承した才人と舞華だった。

ロングビルはこの学院にきた理由の一つがその『破壊の杖』だったが、それがマジックアイテムでもなく平民の武器と聞き、舞華にフーケを止めるよう言われ、それを了承したことは、正解だったねと思った。どんなに強力な武器でも平民の武器では、売値はたかがしれているのだ。何も危険を冒すほどのことはなかった。

カリリーも才人達が使っているという、武器に興味があった。ル

イズの様子から何かを隠している。よく考えれば母親の私にさえサイトとマイカのことを詳しくは教えてくれない。二人のことは本人から聞いたことばかりだ。ルイズは何を隠しているのだろうか？

タバサはルイズの言動に不審を抱いた。彼らが強力な剣技と魔法を使い、その手に持つ武器や防具は、これまでにハルケギニアで知られているものを凌駕している。伝説級ともいえる。その彼らが『破壊の杖』クラスの武器を持っていても何の不思議はないだろうに何を隠さなければいけないのだろうか？やはりよくわからない。

カリーヌの提案で今日はもう遅いので、明日、二人の世界の武器を見せてもらうようをお願いした。そして、明日、最初に宝物庫に置いてある『破壊の杖』を二人に見てもらい、次に彼ら二人の武器を見せてもらうことになった。

特徴的なことはルイズが不機嫌極まりない様子になっていることだ。才人は後でフオローしないと、思っていたのだが、先に舞華がルイズに不機嫌な理由を尋ねていたのだった。

ハウスでのお茶会。にしてはかなり長時間に及んだものだが、その後ルイズに舞華が尋ねたところによると不機嫌になった理由が、二人の武器が平民の武器であり、簡単に言えば二人が持っている剣や杖、これもハルケギニアの水準から見ればかなりの威力を持っているが、二人が持っている銃などの武器はそれを超えていると。才人や舞華は魔力やスキルを使う能力や、そのものの体力など傍から見れば『特別』そのものだと。それに対して、銃を使わせてもらったルイズだからこそ、才人達の持っている銃は『特別』は必要ない。それに才人が言っていた百発百中が不要ない武器というのは、百発百中を狙わなければいけないメイジにとって人口比率からいっても驚異だというのである。それは魔法（貴族）至上主義なのかな？と考えていた舞華に対し、ルイズが誰かがそのことを教会に告げ

口すれば、最悪異端として二人の安全に支障を来すのよ！とルイズに言われたのだった。そして、二人はそのことに無頓着すぎる。とも言ったのである。

舞華はそんなことを言われて、結構大事にされてるんだ。程度に喜んでいいるのだからやっぱり無頓着というか大物かもしれない。才人は、銃のある世界でそんなに大騒ぎするほどの事か？と思ってた。現に今現在、種子島レベルの銃が有るのに。と思っていたが、これは才人が織田信長の武田騎馬隊を破ったといわれる三段撃ちなど、戦国時代の銃の活躍を知っていたからで、今現在のハルケギニアでは、銃はライフリングもなく余程近づかなければ当たらない、平民の玩具程度に思われているのを知らないからであった。

射程にしても実際問題メイジの魔法と同じかメイジからアウトレンジを食らう程度のもので、弓の方がよほど怖い存在であった。そもそも銃の存在がどのようにして広まったのかがいまいちはつきりしていないこと、火薬の生産の問題、等々があり、表向きにはプリミル教として、威力が子供の玩具＝平民同士ではそれなりであっても、メイジ相手では効果のほどがはっきりしていない為、今の所それほど問題視されていないという状態であった。

しかし、ルイズは一部のプリミル教の司教たちが銃の存在を嫌がっている事を知っていた。これは銃の威力がどうこうではなく、始祖の時代に存在していない物を平民が使うのを良しとしなかったというだけであったが、ルイズはそのことを知っており、その時は平民がやっつてることに一々気にしても仕方ないでしょう。という態度だったが、才人達の銃の威力を知り、これが悪い方向へ動いた場合のことを心配したのであった。

実はルイズたちは知らないことであったが、最近になり銃の使用量が増え、大砲までが戦争に普通に使われ始めたことで、一部の司

教からはルイズの懸念が実際になり始めていたのだが、逆に戦争で有効な武器ということで、使っている方から、その司教と宗教的立場の違う層に対して逆の働きかけがされており銃の問題は内部の権力闘争として別の動きを始めていた。まだほとんど誰にも見えていない所での話であったが。

翌日になりいつものように才人と舞華は着替えてハウスの方へ向かって走っていた。

ルイズはカリィヌが学院のゲストハウスではなくルイズの部屋に泊まったせいか、まだ出てきていなかったなのでそのまま声をかけずに二人で出てきたのだった。

せつかく母親が来ているからと気を利かせたのだが・・・

「サイト！何で呼んでくれなかったのよ！」

と、後でカリィヌのいない所で怒られていた才人であった。

さて、三々五々人が集まってきたいつものようにめいめいがトレーニングをしている所へカリィヌがルイズと一緒にやって来た。

「おはようございます」

「おはようございます。皆さん朝から頑張っているのね」

先に気が付いた才人と舞華の挨拶に返事をするように、カリリーが返事をし、それに気が付いた他の皆が口々に挨拶を交わしている。ルイズが才人をにらんでいる。

多分おいて行ったことを根に持ってんだな。と思ったのだが、同時に、いつも起こすのは舞華の仕事なんだが・・・と理不尽なご主人様にきずかれないように苦笑していた。

「皆さんは虚無の曜日の食事はどうしてるのですか？」

普段なら食事に行く時間が近づいているものの誰も食事に行こうとしないため、カリリー又はルイズのそう訊ねた。

「は、はい、お母様。シエスタが食事を準備して持ってきてくれますので。昨日のうちにお願いしていたんです」

「そうですか、それで彼女はいないのですね。でも彼女は皆のメイドでもないでしょうに・・・そのあたりは大丈夫なのですか？食事の準備だけでも一人では大変でしょうに。それにその食費の費用は？」

「カリリー又さん大丈夫ですよ。ハウスの中で作っていますから。昨日のうちに仕込みを一緒にやっておいたので」

才人がカリリー又へ食事の説明をしたのだった。

「まあ、そうですね準備がいいのですね」

「お母様。今日はどういう予定ですか？籠籠でド・オルニエールに行かなければいけませんし、オールド・オスマンの『破壊の杖』やサイトや舞華の武器も見るのでしょうか？」

「ええ、ですから午前中はそれらを見せていただくかと思つてます。昼食前にド・オルニエールへ行くつもりです。朝食が終わればオールド・オスマンの元へ行きましょう」

「あ、でも大丈夫かもしれませんよ？オスマン先生がいらつしやいました」

舞華の声に従つて学院の方へ眼を向けると四人の人影がこちらにフライで飛んできてるのが見えた。

オールド・オスマンにロングビルさん、後の二人はコルベール先生にシュブリース先生だ。心なしかオールド・オスマンの表情がさえない。

『破壊の杖』をロングビルさんが持っている。近づくにつれ、それはどう見ても対戦車ロケットランチャーにしか見えない。

「おはようございます」

舞華が先生たちに挨拶をする。少し遅れて俺達が口々に挨拶をしていく。

「おお、おはよう。皆朝早くから元気じゃな」

オールド・オスマンが挨拶を返し先生たちも挨拶を返す中、カリィ又とオールド・オスマンが話し出す。

「オールド・オスマン。あなたも彼等の武器が気になりますか？」

「まあ、あれにも関係しているようなのでな、彼が彼等の国から来たのが気になるのじゃよ」

オールド・オスマンはミス・ロングビルの方をちらりと見ながら返事をした。

「そうですか。しかし早いおこしですね。彼等はまだ食事もしていませんよ」

「そうか、それは申し訳ないことをしたようじゃの」

「カーリー又さん。オスマン先生、もし食事がまだでしたらこれからですので一緒にどうでしょう？食べていてもお茶ぐらいは大丈夫ですよ？」

舞華がそう言うと、オールド・オスマンが、そうじゃのう、お茶をよばれるとしようかのう。と言い、舞華と結界の中へ向かって行った。みんなは慌てて舞華と一緒に結界の中へ向かって行き、俺はルイズとカーリー又さんを伴ってその後ろをついて行った。

結界の中ではシエスタが一人で鍋と格闘していた。

ハウス前に色気のない戦略自衛隊のテントが張っており、その下でテーブルとイスが並べられており、奥の方にキャンプ用品を利用したかまどなどがあり、そこでシエスタはスープなどを作っていたようだ。

そこへ舞華が、ごめんなさいシエスタさん。昨日言った人数より増えたけど大丈夫かな？大丈夫ですよ舞華さん。少し多目に作っておりますし、舞華さんに教えてもらった簡単料理レシピで何とかしますから。などと話をしていた。

舞華とシエスタは普段から話をよくしているせいか、舞華と俺の名前の発音がきれいに聞こえるようになったなあ。などと、関係のない思いも浮かんだりした。

舞華とシエスタは、テーブルとイスを追加して皆が座れるようにしていた。その間に女の子たちがハウスの中でシャワーを浴びに行っていた。

30・結界の中の出来事 - 4 (後書き)

感想などありましたら投稿よろしく願います。

誤字脱字や間違っている説明等も有りましたらご指摘よろしく願います。

最近フアラデー著「ろうそくの科学」を手に入れました。

この物語で才人がルイズ達に説明している内容はこれを元にしていること

思っていました。昔この本を手にしたときに結構感動した覚えがあり、

そう思って、今読み直してみると色々勘違いしてますね。自分の記憶って

当てにならないなあ。と改めてしまいます。

ルイズさんたちに科学を教えるのにこの本を元になると時代的に結構いけると思っっているので、この先描写が出てくるかどうかはわかりませんが

この本の内容に沿った感じで才人先生がルイズさんたちへ教えていると

思っていただければ。と思っています。

31・VSゴーレム・1（前書き）

この話はほんの出来心です。最初VSフーケ戦を考えていたのでその戦闘シーンをいじくり倒した（端折った）物です。

VSゴーレムとはいうものの射的競技状態ですからVSでもなんでもないので。

この話を復活させた狙いは、この話の中だけの設定ですが、東方とエルフは紛争状態。でもエルフに勝てない。そんな話が東方との交易で噂として流れています。つまり才人達の武器から東方では平民の武器が魔法を超えている。それでもエルフには勝てない状態。じゃあハルケギニアの各国はレコン・キスタなどに乗せられてエルフと遣り合えるの？と疑問を持つてくれたらということ。ちろん才人達はそんなことは露とも思っていない。)

才人達が別の世界からきていることを理解しているオスマン学院長、コルベール、シュブリース先生、ルイズ、キュルケ、タバサ、カリヌ（ヴァリエール公爵家）は別にして才人達が東方からきていると信じているギーシュ、モンモランシ、ケティはこの事をどう思うか？特にギーシュ、モンモランシの二人は原作での扱いはともかく、この話の中では学院内ではそれなりに一目置かれているという事になっています。

ギーシュは親が元帥、モンモランシの実家は外されたとはいえ元々水精霊との交渉役だったわけで、原作内で学院内での描写を見ると、それなりに影響力がある（学年全体に影響があるかどうかは別として、グループのリーダーですよ）ので彼らが疑問を持てば・・・という事です。

シエスタの作っていたスープにパンと目玉焼き、ハムにサラダそれに牛乳。朝食を食べてきた先生たちにはお茶を出し、あまり甘くないお菓子をお茶請け代わりに出して、当たり障りのない会話でワイワイ言いながら食事をしていた。

ここでは、シエスタも遠慮がちだが一緒に食事をしている。シエスタは今でもやっぱり慣れていないのか皆が食べている間は給仕などの世話を焼こうとしているが、意外なことにカリー又さんがそんな事はめいめいでやればいいの。軍隊だと専属のメイドなんてつかないんだから。と笑いながら話していた。

才人はあれ？貴族が戦争に行くときって従者が付くんじゃなかったのかな？などと思っていたが、まあ、いいかと思ひ。食べることに専念していった。

皆が当たり障りのない話をしていた理由。当然みんなして才人達の武器に興味があるのだがここで話題に出してルイズが暴走した場合、見せてもらえなくなるかもしれない。と思ひ話題にしなかったのである。それだけ前日のルイズは切れていたように見えたのだった。

キュルケも当然ルイズをからかったり、才人や舞華にそれとなく聞いてみたい気がしていたのだが、昨日のルイズの様子がただ事ではない。と思っていたので、じつと我慢をしていたのだ。

「これじゃな」

才人にオールド・オスマンから渡されたものは、見た目はバズーカ砲に似ているがルーンが教えてくれた。『M72 LAW』ベトナム戦争当時にアメリカ軍が使用していた使い捨て式対戦車口ケツ

ト弾そのものだ。そしてなかの弾薬が『生きて』いる。

「オスマン先生。これには固定化がかかっているんですか？」

「そうじゃ、それがどうかしたのかな？」

「これは俺達の世界の武器です。まだ使えます」

「なんと、本当かね？」

「はい。先生は昨日これを持っていた人はこれを使った。といいましたが、先生は使おうとしなかったのですか？」

「使おうとしたのじゃが使い方がわからんでな」

「そうですね・・・、これを使った人のお墓はこの近くの近くなのですか？」

「うむ、学院の中ではないが、まあ、遠くではないな」

「後で教えてくれますか？舞華と二人でお参りに行ってきます」

「丁寧なことじゃ。今日は忙しかろうって。次の虚無の日にも一緒に行くかどうかのう」

「ありがとうございます」

俺と舞華はオールド・オスマンへ頭を下げた。

そんな会話の中にもみんなは『破壊の杖』を手に取り眺めていた。

「これがワイバーンを倒したのかい？」

「魔力が感じられないわね？タバサどう思う？」

「『場違いな工芸品』であれば見かけによらないのだと思う」

「そうよねえ」

みんな口々に話をし最後に才人達の方を見ていた。

「この武器は使い捨てなんです」

「そうなのか？」

「オスマン先生。亡くなられた方が持っていた『破壊の杖』はこれより長くなっていますでしたか？」

「そういえばそういうじゃのう。どうやっても長くならなかったのじやが？」

「それでいいんです。この筒を伸ばすと安全装置が外れて、いつでも爆発するようになりますから」

「なんと。それは本当かね」

「はい、間違いありません。使ってしまったていいのであればこれから証明しますが」

「……君たちは同じものを持っているのじゃったな？」

「いえ、これより後に作られたもので威力や使い方が少し変わって
いたりします」

「強力になっているのかな？」

「とは限りません。武器は常に強い方が勝つわけじゃないですから」

「そうなのかね」

「はい、世の中には強力すぎて使えない武器もあるんですよ」

「想像もつかんのう」

「そうかも知れないですね。」

「そうじゃのう。わしらが持っていても使えんし、一度使えばそれ
で終わりなんじゃな、なら、どんな物か見せてもらおうかのう」

「オールド・オスマン！」

ミス・ロングビルが驚いたようにこちらを見る。

「どうせ誰も使えんし、それに『場違いな工芸品』がどついった物
か知るのにもよいじゃろ」

「ミスタ・サイトも言っておつたる強力すぎて使えない武器がある
と。ただの一発でワイバーンを倒す武器じゃ。これもそうかもしれ
んのう」

「は、はあ……」

「でもどこへ向けて撃つのです？ここにワイバーンなぞいませんぞ？」

コルベール先生がこちらに向かって話しかけてきた。

「舞華。ギーシュのゴーレム。あれの大きな奴作れるか？」

「何にするの？ゴーレムを的にするの？」

「そそ。それで大きな奴。人型じゃ的として小さいから」

「銃も使って見せるんだよね？」

「そっちはギーシュのゴーレムにでもお願いしようかと思う」

そういった話を才人と舞華がしているとミス・ロングビルがミス・シュブリーズへ話しかけた。

「シュブリーズ先生。土石をお持ちでしょうか？」

「ええ、いくつか持っていますか・・・まさかそれでゴーレムをお作りになるの？」

「はい、これでも土のトライアングルですから、ドットや東方のメイジよりはうまく作れると思いますわ」

暗にギーシュや舞華よりうまくゴーレムを作れることをアピールしている。自分の狙ったものがどういった物か知りたいがための興味本位の発言であり、本当は土石がなくても攻城戦クラスの大ゴ

ーレムを作ること出来る。が、今はそれを表だつて見せても仕方がない。土石を使えばそれなりのもを作り出す事が出来て当たり前だから欺瞞にもなる。

「それでしたらお持ちしますわ。それに『破壊の杖』と同じものをミスタ・サイトは持っているとか。であればゴーレムは二体必要でしょう」

そういうとミセス・シュブリーズは舞華に一度結界の外へ出してもらうようお願いし土石を持つてくるのでそれまで待つていてほしいとお願いした。舞華はわかりましたと言い。オールド・オスマンの許可をもらいシュブリーズと一緒にハウスを出て行った。

「なんだか大事になって来たわね」

キュルケはそう言い。ギーシュはミセス・シュブリーズ以外にミス・ロングビルも土のトライアングルであることに興味をひかれ、錬成するゴーレムがどういった物であるか興味を持つているようだった。土石を使用して錬成するゴーレムは通常、戦場でしかお目にかかれないもの。という事だった。なるほど、それでギーシュが興味を持つたのか。と思い。舞華に後でいい物が見れるな。そう言うおもうと思つていた。

ミセス・シュブリーズが舞華と一緒に戻つてきた。手にしているのは拳より一回り小さな石ころ、にしか見えないが土石と呼ばれる土の魔力を帯びたマジックアイテムの一種だそうだ。余り離れるとゴーレムを維持できないということで掩体壕のように地面に穴を掘りその周りに土囊代わりに土を盛り上げ外側を石に錬金したものを準備した。その穴の中からゴーレムを操ることになっている。

最初にミス・ロングビルがゴーレムを錬成する。全長三十メートルにもなる大型の攻城戦用と変わらないものだそうだ。ただ攻城戦用

と違うのは土で出来ている事。これでは同じ土メイジの攻撃で破壊されやすく拠点攻撃には向かないそうだ。

「こつちの方が動きが早いですから。強度必要ならこつやって・・・」

ミス・ロングビルはゴーレムの動きを止めると表面を岩に錬成し、強度を出した状態にした。

「こつやって近づいてからゴーレムを硬くする方が有効だと、どこかの戦術教本に出ていましたわ」

「おお、ミスはフェニエのライブラリーのあれを読んだのですか？」

ミスタ・コルベールが驚いたように声をかけた。

「これでも秘書ですから、学院の購入した本は一応目を通しています。あれは私が最初に購入に立ち会った本ですから。もっとも自分と同じ土系統の所しか読んでいませんが」

最後に苦笑いをして可愛く話すロングビルに皆騙されているが、本当は、これ幸いとフーケ（貴族襲撃犯）の何か役に立つこととは思っていただけなのだが。

拠点破壊用に体中を岩に錬成してそびえ立つゴーレムに才人は五百メートルほど離れたところに立っていた。

「えらく離れたところにいるんじゃないの？」

オールド・オスマンの質問に舞華は

「あの武器は距離は関係ないんです。当たればほぼ同じ威力になりますから」

「それにしてもかなり離れているのじゃが？」

「あのゴーレムは動きませんから、動く物に当てるならもっと近づいてもっと沢山撃たないといけませんけど。あまり命中するものじゃないんです」

「そうか、それにしても動かなければ彼は当てられるのかな？」

「大丈夫だと思います。それにあの武器はあまり近すぎると自分にも危険なので」

「なんと、真かの？」

「はい、最低十マイルは離れないといけませんし、それと最大射程は千マイルくらいですね」

「な、何？千マイルと・・・」

オールド・オスマンと舞華の会話を聞いていた周りの人々は驚いていた。千マイル。そんな離れたところから命中させることが出来る武器。これが東方（才人達の世界）の武器なのかと。ルイズはあくあ、言っちゃった。この兄妹は全く・・・と、召喚の日以来何度繰り返したかわからない思いを持っていた。

「いきますよ」

大きな声で才人が手を振りながらこれから『破壊の杖』を使う事

をアピールしていた。

才人の傍にはキュルケとタバサがいる。ゴーレムの傍には他の人々が間近で『破壊の杖』の威力を見ようとしていた。

キュルケとタバサに後ろに付かずに分身の真横で少し離れたところで見てるように言い含めると、二人がその通りにしたのを確かめM72の後部の筒を引き伸ばし狙いをつけ発射した。盛大に派手な炎を後方に放つことに比べ、小さな音を、それでも派手な音だが撒き散らして何かゴーレムに向かって飛んで行った。そしてゴーレムが四散した。

皆が掩体壕から出るとゴーレムは上半身が吹き飛んでおり、錬金が解けたのか土に戻っていった。そこには土が山になって残っただけだった。

「これじゃあ、城の門でも一発で壊されるかもしれませぬね」

呆れたようにロングビルが言うと、コルベールが何とすごい威力なんでしょう。これが彼等の世界の武器の威力なんですか？これではさすがのワイバーンもたまらなかつたでしょうね。等と口々に話し合いながらゴーレムだったものを見に山を取り囲んでいた。そんな中、舞華が、あつた、これですね。等と言いながら、土の中を何やらごそごそ探していたのだが、皆がそれに注目すると舞華の手に先ほどより少し小さくなったようだが手に握られていたのは土石であつた。

「表面を岩にして中は土のままだったんですね」

そう言いながらロングビルへ土石を渡す。

「それがどうしたんだい？」

ギーシュがその言葉に対して質問をしてきた。
岩を破壊した力は土で衝撃を吸収されたんですね。ちょうど土石の所に命中しましたが、それでこの土石が壊れなかったんですね。そうニコニコしながら解説していたのだった。

一度才人が掩体壕の方へ近づいて、次はこれを使いますね。と言つて見せてくれたのは一般に『110mm個人携帯対戦車弾』等と呼ばれている使い捨て式の無反動砲である。

これを自分達の世界の武器として見せるのはこういつた武器は自分達の携行武器としては邪魔で使い難いからである。ならこういつた時に練習がてら使いつぶしてもいいかな？そんな軽い気持ちである。

「次は自分達が持っている武器を使いますね」

そう言つて手にしている武器を見せたのだった。

「見た目は違いますがこれも使い捨ての武器です」

「先ほどの『破壊の杖』より後に出来たものなんです」

「それでは準備しますね」

才人はそう言つて先ほどと同じ場所に向かって歩いて行った。

さきほどの発射地点より約百メートルほど掩体壕に近づいた方向で立ち止まると射撃の体勢に入った。

同じように、いきますよ。と声をかけてを振つて合図をした。

今度はミセス・シュブリーズがゴーレムを出していた。ミス・ロングビルと同じように土石を使い先ほどの黒い土でできたゴーレムとは違い、赤土で出来たゴーレムだった。そしてそのゴーレムは土の盾を持っていた。そしてミセス・シュブリーズが更に呪文を唱えると盾が鉄になったのだった。

「なるほど」

才人は呟き、射撃を開始した。

先ほどに比べると後ろに出る炎は少なく一瞬で終わったのだが、威力が違っていた。

盾を貫いた爆発は盾とゴーレム本体の間で派手な爆発を起こした。

ゴーレムは盾を保持できずに手放し、赤土へ戻っていった。ゴーレムも仰向けにひっくり返り、その場に倒れそのまま、盾と同じく赤土に戻っていった。

「ねえタバサ。あなたならあんな敵がいたらどうする？」

タバサは声のした方をゆっくり振り向くと一言。

「逃げる」

「そうよねえ。無駄死にする必要ないわよね」

二人はまじまじと崩れたゴーレムの方へ顔を向け崩れた赤土を見つめた。

「二人はその武器をどのくらい持っているの？」

キュルケは掩体壕に集まった皆の前で聞いてみた。

「まだ少しありますけど、聞いてどうします？」

舞華は少し警戒してキュルケに答えた。

「ああ、ごめんごめん。何かしようと思っているわけじゃないのよ。ただこれが後どのくらいあるのかな？って思ったの」

「使えない物も有りますから・・・」

「使えないって？壊れているの？」

「いえ、中に色々あるのでいざという時のブービートラップに仕込んでいるのもあるんです」

「ブービートラップって・・・結界の中にそんなの仕込んでいるの？」

「ええ、まあ念のためですけど」

舞華の話に青くなるキュルケ。そこへ才人が何かを思い出したかのようには話を繋ぐ。

「あはは、キュルケ。そんなに心配しなくていいよ。普通に畑やハウスに入るところには仕掛けていないから」

「そ、そりゃそうよ。そんなの有ったら怖くて歩けないじゃないの」

「舞華の絶対入っちゃダメってところは入らなければ大丈夫だよ。こんなもの他に魔法やなんかの仕掛けもあるからね」

「そ、そうなの？」

「色々鍵代わりに仕掛けているから、鍵を外すと仕掛けが発動するやつとかね。まあハウスの中は命まで取るうってやつは余り無いけどな」

「わ、わかったわよ」

才人はそう言うと舞華に向かってウイंकをするのだった。

32・V S ゴーレム - 2

オールド・オスマンとカリーヌに向かって、才人は、

「これはオスマン先生の『破壊の杖』の絡みが有ったので使った武器ですが普段はこんなもの使いません。練習でもめったに使わない物ですから」

才人の説明にカリーヌが質問をしてくる。

「こういった武器は貴方達は使わないというの？」

「はい、持つてるだけです。前の世界ではその世界の武器と魔法とスキルを使いましたから」

「では、元いた場所ではどういった武器を使っていたのですか？」

「昨日、舞華のお見せした銃です」

「なるほど。次はそれも見せてくれるのですね」

「はい。ここまで来たら一緒ですから」

「よろしくお願いします」

別に銃はエルモア・アデンでしか使っていなかったのだが、ややこしくなりそうだったので、もういいや。と思い適当なことを言っていたのである。

そう会話を交わすと才人はギーシュにゴーレムをワルクューレを出すようにお願いした。ギーシュはワルクューレを四体出すと、先ほどのゴーレムの居た辺りに適当な間隔を置いて並べた。

才人と舞華は何時かルイズに見せたように機関銃と拳銃を取出して見せた。あの時と違うのは才人が使う銃がM4になっている点である。

「では行きますね」

舞華が声をかけてから二人は射撃を始めた。

最初に才人のM4が射撃を開始したワルクューレとの距離は約二百メートル。

三点バーストで射撃を行う。少し角度を変え近づいた位置で舞華がVZ・61の射撃を開始する。こちらはセミオートで射撃を行う。ワルクューレ二体がたちまちの内に銃弾で穴だらけになっていった。そしてワルクューレはそのままバラの造花の花びらへと戻っていった。

そして二人は銃を拳銃に切り替え、残りの二体のワルクューレへ単発だが確実に狙って当てていく。もちろん機関銃の射程では当たらないので大分近づいているのだが。それでも四十メートルは離れておりメイジと対する平民としては弓を使うのでなければ、かなり離れているのだが、ワルクューレは確実に穴だらけになっていく。舞華も才人もマガジンを一度入れ替え射撃を続けていった。

取敢えずそこで銃弾が切れたため射撃はそこで終わりを告げた。キュルケが嘆息するように

「サイトの国の武器って・・・これじゃメイジは戦争でお払い箱ね」

「俺の国にはメイジはいなかったからな。お払い箱以前の問題だし、それに前の世界では魔法を使ってたぞ」

「どうして魔法を使う必要があったの？こんな武器があるのに」

「俺達は科学を使っていたからな。科学が発達していない所では銃の弾丸の補給が出来ないからな。それに部品が壊れても代わりも無いし」

「それもそうよね。それにしてもすごい威力ね。何とかゲルマニアで作れないかしら？」

「俺達が使っている武器は無理だぞ」

「科学がないから？」

「そうじゃなくて、同じ部品をいくつも作れないだろう？同じ部品と胸を張って証明できる方法もないだろう？」

「ミスタ・サイト。それは、同じ部品が作れなければその銃は作れないというのですかな？」

「えっと、俺達の事は、才人、舞華で構いませんよ。それで同じ部品が必要な理由ですがこの銃は沢山の銃弾を消費します。それで銃の色々な部分が痛むのです。それで悪くなつた部品を交換することが出来なければ銃そのものが無駄になりますから。それに同じ銃弾が供給されなければ銃を使うことが出来ませんから」

「なるほど、それでその銃は発射された銃の爆発を利用して次の弾の装填をしているんだね」

「わかるんですか？」

「うむ、なんとなくだがそういう風に見えたんだよ」

「すごいっ…!」

舞華が驚き感心している。

「まあ、これが俺達の世界の武器です」

「何ともすごい物じゃ。『場違いな工芸品』か・・・」

「『場違いな工芸品』というのは、まだあるのですか?」

舞華がオールド・オスマンの呟きに質問をする。

「うむ。ハルケギニアにはハルケギニアでは作る事の出来ない物が時々出てきておつてな。そういった物を『場違いな工芸品』といってこの学院にもまだいくつがあるぞ。それは東方からの交易によってもたらされることもあるし、ロマリアが、教会がその蒐集に熱心なんじゃ」

「ロマリアって、プリミル教の総本山の?」

舞華の質問にルイズが答える。

「そうよ。ロマリアはプリミルの弟子が建国した国と言われているわ」

「トリスティンやガリア、アルビオンそれにゲルマニアは?」

「トリスティン、ガリア、アルビオンはプリミルの子供たちが起こした国って言われているわ。ゲルマニアはプリミルとは関係ないわよ」

「へえ。そうなんですね」

「ここ片付けてハウスの方でお茶でもどうですか？」

話が長くなりそうだったので、才人は休憩するつもりでお茶にしようと言った。

「そうじゃのう。皆もどうかな？」

オールド・オスマンが賛意を示したのでそのままゴーレムだった土を飛ばしたりして跡が残らないように片付けていった。もともと爆発の跡や掩体壕の作成のための穴の跡などの草がなくなったところは隠しようがなかったが。

「なんか最近、ここでお茶ばかり頂いているような気がしますわ」

ミス・ロングビルがそう言いながらティーカップに口をつける。

「まったくじゃて。しかしここに有るものは全て『場違いな工芸品』じゃな」

「そうなんですか？」

舞華が驚いたようにオールド・オスマンに尋ねる。

「うむ。ミスタ・コルベールにミセス・シュブリーズおぬしらもそう思っじやる？」

最初にミスタ・コルベールが答える。

「はい。オールド・オスマン。まずはここの明かりですな。外の天気や時刻に関係なくいつも同じ明るさですな。それにこの部屋自体がいつも暑くもなく寒くもなく。さすがに人が増えれば暑くなりませんがな。それでもどこからともなく風が吹いてきて部屋を冷ましてくれていますな。それなのに魔法の働きが一切ありませんな」

続けてミセス・シュブリーズが答える。

「この皿やカップですね。この薄さで、一見東方渡来の薄い磁器の皿かと思いますが、磁器であれば一枚一枚中の構成と言いますか組成と言いますか同じもので出来ていても個性があり、違っているのですが、この皿はほぼ同じものなんです。こんなことは東方の物でもあり得ませんわ」

「そんなことまでわかるのですか？」

舞華は驚いてミセス・シュブリーズに思わず詰め寄って聞いてしまふ。すぐにそのことに気が付き、ごめんなさい。と言いながら自分の席で姿勢を正す。

ミセス・シュブリーズはそんな姿に苦笑いしながら、土系統は元々物の成り立ちや構成を感じる感性が強いです。でも、他の系統でもその感覚は鋭くすることは可能なんですよ。これはディティクドマジックの応用というか・・・まあ、そういう物なんです、ミス・マイカは中々鋭いところがありますからそのうち覚えるので

はないでしょうか？土系統が得意とはいっても火の系統であるミスタ・コルベールもなかなか使いこなしていますから。

そう聞くと舞華はミスタ・コルベールを尊敬したまなざしで見つめている。

そんな視線に照れているのか、ミスタ・コルベールは、ごほん。と咳をすると、いやいや、等と言いながら自分が錬金の時などに使う感覚を舞華に説明するのだった。

そして面白そうにミセス・シュブリーズも物質を分析するときを使う錬金の応用を舞華へレクチャーしていったのだった。これは同じ土であるギーシュヤ、水や火であるモンモランシヤケティについても興味を持って聞いており、キュルケ、タバサもなるほど思いながら、どうしてこういったことを授業で教えないのかしら？とも考えていたのだった。

「ミス達は学院の授業でこういったことを教えていないのが不満なのですか？」

突然ミスタ・コルベールが熱心に聴いていた五人へ向かって尋ねてきた。

「ええ、こういったことは実務的で色々役に立つと思いますけど？」

キュルケが代表して答えた。

「うむ、一つは授業に対する態度ですな。残念ながら皆さんの授業態度が皆が皆とは言いませんが、こういったことを教えるに値していないのは確かです」

「もう一つ言えば、それぞれの系統に対する固定観念というかやれ戦争ではどれが強いだのどうだのと、口を開けばそればかりです。」

また、ドット、ライン、トライアングル、スクウェアとランクが上
がれば偉いとはかりの態度。確かにそういった傾向がある事は否め
ませんぞ。しかし、基礎が出来ていなければランクのことを言っ
ても仕方がありません」

「ミス・マイカは我々でもその魔法の威力については一目置いてい
ます。しかし私たち教師が一番一目置いているのは、基礎や基本に
対する熱心さです」

「残念ながらこの学院で教職を二十年とって参りましたが、いまだ
かつて、火のドットスペル『発火』について質問してきた生徒は唯
の一人、ミス・マイカのみです」

続けてミセス・シユブリーズが話を繋ぎました。

「確かにそうですね。ミス・マイカは考えすぎるくらいがあります。
ですが質問をするときには何が分からないのかを、はっきりさせて
から質問に来ます。たとえドットスペルであってもです。その姿勢
があるからこそ、私たちは彼女の疑問に真剣に受け答えをしている
のですよ。」

「そしてそういった姿勢がなければ、そう、自分から学んでいくと
いう姿勢がなければこういったことを教えても表面的な物になり、
応用技だからこそ却ってメイジの力を発揮することは出来ないの
ですよ」

「そうですね」

キュルケはそう返事して黙り込んでしまった。他の四名もである。
舞華が時々教師の居る塔へ向かっている事は知っていたし、図書館

の中でもフェニエのライブラリーでミスタ・コルベルやミセス・シュブリーズやほかの教師たちとも、あの、偏屈なミスタ・ギトーとともにここにこしながら話をしていたことを見たものも少なくないが、それがそう言ったことだとは誰も知らなかったのである。

「まあ、なんにせよ熱心な学生は教師のためにもなりますからね。ミス・マイカもこれからもよろしくお願いしますね」

ミセス・シュブリーズにそう言われて、舞華は顔を真っ赤にして、こちらこそよろしくお願いします。と返していた。

そろそろお昼ですね。とカリーンの声で皆が時間の事に気が付き、もうそんな時間。お腹すいた。等と話し出したときに才人がここで食事をしていきますか？といい。久しぶりだから俺が作るよ。舞華はみなとゆっくりしていた。といい、少し顔を赤くしたシエスタと二人で外の厨房（仮設）の方へ向かっていき、シエスタがすぐに外から戻ってきてお茶を入れ替え、しばらくしたら出来るそうですからと言い、ティーポッドを置いたまますぐに外へ戻っていったのだった。

外の厨房では才人が大鍋を相手に肉を一生懸命炒めていた。

エルモア・アデンで手に入れたサーマル・バッファローの肉、沢山手に入れたから冷凍にして貯め込んでいたけど、これももう終わりかな？マルトーさんに頼んでまた何かの肉を手に入れないと。等と思いつながら準備する。

肉を炒めながら、砂糖、しょうゆで味をつけ、玉ねぎにじゃがいもを入れて中火で煮こむ。赤い世界でも手に入れられなくてこんなにやくがないんだよね。等と言いつながら、サラダをシエスタが準備し

ている。さすがに十人以上ともなると結構な量になってくる。大人四人に生徒が八人女性はそれほどでも・・・一人例外としても結構な量を準備する。いまいち貨幣価値が解っていない才人と舞華にとつて、王都での食糧購入は結構大変なためマルトーさんに舞華の畑で採れない物・・・肉やら卵やらをお願いしようと考えている。もっともここで食べるのは、虚無の日ぐらいなのでそれほど沢山必要なわけではないのだが。

でもしょうゆとか味噌はここじゃ無理だろうし、今有るのがなくなったら終わりだなあ。麴を作るのがなあ。カビを分離すればいいんだけど、エルモア・アデンじゃ時間がなくて結局できなかったんだよな。そんなことを思いながら所謂、こんにやくなしの肉じゃがを作っていた。

「才人さん、おいしいです」

「おいしい」

「これはなかなか」

・・・

肉じゃがはこんにやくがなかったもののなかなか評判が良く、鍋がすぐに空になってしまった。

「サイトの所で食事をする食べ過ぎるのよね」

等とキュルケは感想を言っていた。

「これは美味しいですね。どうやって作ったのですか？」

「カレー又が肉じゃがについて質問をしてくる。」

才人が肉を炒めて、しょうゆこれは自分達が元いたところに有った調味料でこれに砂糖を加えてじゃがいもとたまねぎを加えて煮込むと出来あがり。そう説明し、ついでにしょうゆがもう無くなるのでこれからは作れなくなるかもしれないが、そう言った時、シエスタがしょうゆってミソやサケと同じように白っぽいカビで作るものですか？そう言ったのだった。

「味噌？有るの？味噌が？」

才人がそう言い、舞華が驚いて、えっ。といった状態で口をぽかーんと開けて何も言えずにシエスタを見つめていた。

「はい、以前お話したうちの曾お祖父ちゃんが、麦と豆を使ってミソを作り始めたのが始まりで」

「味噌って・・・大豆がないの？」

「えっと、さっき言った白っぽいカビ？それから作った『ムギコウジ』という物を使ってえんどう豆でミソを作るんです。曾お祖父ちゃんは大豆で作ったミソとシヨウユで食事がしたいと何度も言ってたそうです」

「舞華、やっぱり近いうちにシエスタさんの実家へ行こう。味噌にしょうゆ・・・多分俺達と同じ日本人なんだよな。きっと。どういった経緯でここに来たのかわからないけど、少なくとも俺達はシエスタさんの曾お爺さんに、会いに行かなきゃいけない」

「はい」

「ま、待つてください。うちの曾お祖父ちゃんはもう亡くなっています。ですからそんなに急がなくても……」

「でも俺達は二人でここに来たし、このハウスを見ての通りで一緒に色々な物を持ってきてるんだ。でも話だけから察するに、シエスタさんの曾お祖父ちゃんて、着の身着のままここにたどり着いたんじゃないかな？」

「お父さんたちの話からするとそのようです。あまり持ち物を持っていなかっただって言います。この間お話した日本刀とあと身の回りの何に使うのかわからない道具をいくつか……あとはあの、『竜の羽衣』ですね」

「ミスタにミス。その日本刀や『竜の羽衣』というのは『場違いな工芸品』かね」

それまで静かに二人の話を聞いていたオールド・オスマンが聞いてきた。恐らくそうだと思えますが日本刀は自分も持っています。昨日見てもらったやつですね。これと同じものだと思います。そう言っただけの部屋から日本刀を取りに行きそれを見せ、これは自分達の世界の武器だったものでこの世界の剣と同じだと考えてもらって構いません。でも、『竜の羽衣』は見当がつかないです。そうオールド・オスマンに説明するのだった。

オールド・オスマンは才人に向かって、明日の夕方からフリッグの舞踏会がある。これは学院の行事なので必ず出席するように伝え、明日の授業はド・オルニエルでの仕事があるから出席は無用じゃ。とも言い。そして、必要があればエオーの曜日以降にマスターであるルイズと舞華、シエスタと、共にタルブへ行き『竜の羽衣』が何

であるか確かめに行っても構わないことを告げた。

「何故そんな簡単に許可を出すのですか？」

才人は疑問に思いオールド・オスマンに尋ねた。オールド・オスマンは、

「『場違いな工芸品』は先ほど見せてもらった通りわしらが扱うには危険な物じゃ。実際儂は『破壊の杖』があのように威力のあるものとは、実際に目にしておったのにな。それも儂らが扱えずに、たまたま事故にならんかったが、一歩間違えればこの学院を破壊しておったかも知れん。そのタルブに有るといふ『竜の羽衣』にしても、どのような物かもしれんのじゃ。何か起きる前に知っておく必要があるかも知れん。そう言うわけじゃ」

「わかりました。今すぐには姫さまからお願いされたこともありま
すから無理ですが出来るだけ早いうちにタルブへ向かってみます」

「私からもお願いします。やはりあなた方がルイズに召喚されたのは、何か始祖の考えがあるのかもしれない。もし何か掛る費用があれば、私の方で何とかしますのでお金の心配はしなくてもいいです。学業が・・・そちらの方は少し心配ですが先生方のお話から貴方達の学業に対する心構えはわかりました。多少の遅れは何とでもなると思います。ルイズ。あなたは彼等のマスターです。そのことを心得ておきなさい」

「は、はい。お母様」

ルイズはわけもわからずに返事をする。

「今日はこの辺りにしておいて、ド・オルニエールへ向かいましょう。少し遅くなりましたが種を運ぶだけなら別に問題はないでしょう。」

カリーヌの一言でこの場は解散となった。

3.2・V S ゴーレム・2（後書き）

感想などありましたら投稿よろしく願いします。
誤字脱字や間違っている説明等も有りましたらご指摘よろしく願
します。

なんだか端折りっぱなし、話が唐突につながっています。

読んでいただいている方には申し訳ないのですがこの話のまとめ方
が出来ない所が

作者の今の限界です。

ここで悩んでいても仕方ないので、取敢えず物語を進めて時間を
おいて

話をまとめてみようと思っています。

33・ド・オルニエール・1（前書き）

書いてて悩んだのは時系列に無理がありすぎることです。

学院からド・オルニエールまで竜駕籠でどのくらいかかるんでしょ
う？

なんだか近所の茶店へお茶しに行く感覚で時系列が・・・

前話でお昼食べながらの移動にしてしまったほうが良かったですね。
書いてる人焦りすぎです。

ちよつと無理がありました。が、今回はこのままいきます

カリィ又さん、ルイズ、俺と舞華、それにシエスタの五人でヴァリエール家の竜籠に乗っている。もちろんド・オルニエールに向かうためだ、あと一頭の竜籠が並走している。こちらにはド・オルニエールに蒔くための色々な作物の種やらなんやらを積んでいる。結局季節的な物も有り、竜籠一つに収まってしまったのだ。季節が変わればまたド・オルニエールへ竜籠を出さなくてはいけないと考えている。

ただ、半径二百マイル（もうメートルだとかマイルとかめんどくさいので、最近は舞華も単位はハルケギニアの呼び方を使っている。何も考えていなければ勝手に魔法が翻訳？をしてくれていたようなのだが、長さの単位とかを調べたり聞いたりするうちに発音が変わって来たらしい。魔法のいい加減な。というか便利。というか理解できない所だ）程度の土地にハウスが有り、コンテナいっぱい、車もいっぱい（ついでに飛行機やヘリコプターまで）に有るところに畑なんぞいくらかも作れるものじゃない。

エルモア・アデンにいた頃は農業の事なんかろくに知らずに、フローラン村で知り合った農家の人に頼まれて小麦やジャガイモを渡して最初は沢山の収穫があったが、収穫があるという事はそれだけ土地に負担がかかっている。という事もわからずに後で反動がきたりして、結構苦勞した経験があり、その分農業という物の難しさを理解したのだが。

そこで出来たものを今回はド・オルニエールで使う事になる。今回は最初から失敗は出来そうもないしやっぱり変な意味で緊張する。

舞華はカーリ又さんやルイズ、シエスタと魔法の話で盛り上がっている。というか、シエスタは最初、料理の話のときはいろいろ話を振ったりしてたのだが、魔法の話になってからは相槌を打つ専門になっている。

ルイズは爆発専門魔法しか使えないが、コモンの魔法が発動しないが、爆発しなくなってきたらしい。おかげで舞華と話をしている時の機嫌の良いこと良いこと、魔法がまともに使えなかった事はかなりストレスになっていたようだ。

「でも、マイカはいいわね。人の魔法を見れば真似出来るんだから。お母様の『偏在』をその場で真似できたんだし。ねえ、今はどのくらい『偏在』の数を増やせるの？」

「簡単じゃないですよ。ここの魔法は魔力の流れを真似るだけでは完全にまねできない物があるんですよ」

「ほう？」

「そんなことがあるの？」

「はい。例えば錬金ですけど、『気持ち』がいらしますね。こんな風になれ。みたいな」

「ちがうのか？」

「はい。魔法は魔力の流れで発現する内容が決まってくるのに、こ

ここではそれだけだと同じにならないんです。シュブリーズ先生に教えていただいたのですが、念じることで望む物に変化しますね。だけど本当に錬金を使える人は流れを真似ると同じになるんですよね。ほんと不思議です。同じように『偏在』ですが、カリー又さんと魔力の流れは全く同じはずです。でもカリー又さんのように五人にもなりません。ただ真似れば二人にしかありません。魔力の流れ自体は変化も含めて簡単なので真似はほぼ完全に出来てます」

「マイカ、すごい！完全にお母様と同じことが出来るんだ」

「でも結果は同じじゃないですよ。だからこの魔法はそう言ったところが難しいですね」

「ほう。マイカはこの魔法が難しいのか。では、前にいたところの魔法は簡単なのか？」

「このこと違って魔力の流れが結構細かくて複雑でしたけど、同じ流れが出来れば結果は同じになりますから」

「でも、いいなー。見れたら同じこと出来るんだから。系統だって関係無いでしょ？」

「はい。系統は魔力の流れに関係ないですから。でも不思議ですね」

「系統に関係なく魔法が使える事？」

「はい、私が最初に魔法を覚えたところでも、それぞれ魔法の習得には色々制限がかかっていたんです。でも私は制限に関係なかったですし、お兄ちゃんのスキルも使えますから」

「ええー！マイカはサイトのスキルも使えるの？無敵じゃない！」

「無敵なんてことはないですよ。スキルだって使えるだけで、お兄ちゃんみたいに強くないですよ」

「なんか、マイカはずるい」

「そ、そんなことはないですよ」

・・・

カーリー又は娘たちの賑やかな年相応の会話を、聞くでもなく聞いてうつらうつらと、この短期間に起きたことを思い返している。

そしてルイズのマイカとサイトへの、特にマイカへの依存の強さに心配しているのだった。

厳しく育てたせいだろうか？マイカは、そしてサイトはそれを許しているような感じだが、彼等は少なくとも、サイトはルイズと同一年でマイカはサイトより三つ下。その舞華に姉に甘える妹のように見えるのだ。家で見せるカトレアに甘えるような感じでだ。

それと同時にマイカとサイトの年齢に合わない落ち着いた考え方もまるでこうなる事を知っていたような私たちに対する態度。最初の頃はルイズに対してかなり言いたい事を言っていたのではないのか？当時召喚の儀式に立ち会っていたミスタ・コルベールや学院長や秘書の話からもそれは窺がえる。なら今の態度はなんなのだろうか？

更に、給金の事もだ。以前話した月に百エキユー出すといったが、

彼等はそれを。それで年額に直すと十人の人を雇えますね。といいド・オルニエールで自分の考えていることをやってみたいからと人を雇ってもらえるように言ってきた。

どの道、肥料作りやなんかでいくら人を雇わなければいけないのだが、まだ何か考えているようだ。それが何かはわからない。それが私たちの不利益になるような物でもないようだが。

しかし、人を雇うといつても十人ともなると所謂平民の奉公人になる。平民でいったい何をしようとしているのだろうか？今は考えて整理しているので纏めたら手紙を送ります。そうマイカは言っていた。

それにマイカやサイトが言っていたこと、自分達は学生だから体力とか普通にはないですよ。だって、俺達の世界では自分で農業や漁業をやらなくてもすべて店で買えますから。移動だって普通の平民でも何リーグも歩くななんて滅多にはないです。『自転車』や『自動車』で移動できます。『免許』？なければ『バス』という乗り物がある。『定期』もあるし。俺は『バイク』で通学してました。時々舞華も一緒に乗せて通学とか『ツーリング』ちよつとした旅行ですね学生だから日帰りですけど、近くに行つてました。ここで？道が悪いんです。俺達の所は『舗装』していたから。『舗装』？ああ、石畳じゃなくて、それだとかたがたして乗り心地が悪いでしょ？だからそれは『アスファルト』という油の不純物を練り固めたような・・・まあ一種の粘土だと思つてください。焼かなくても硬くなる粘土ですよ。それが、『コンクリート』。石灰を・・・えつと、焼いた『セメント』という物に砂とか小石を混ぜたものなんですけど、それを水と混ぜて流し込むんです。そうすれば平らな道路の出来上がりです。真つ平らにしてしまつと水がたまるので中央を少し高くするの

がコツなんですね。そうすれば雨が降っても水が道路の真ん中にたまらないから……

そう言った所々わからない言葉もあったが、彼等の世界では魔法は必要ない世界なのか、想像も出来ない。ルイズは相変わらず一人で賑やかにマイカやシエスタに話しかけている。二人は慣れているのだろう、にこにこしながら返事をしたり、相槌をうったりしている。本当に私がいるのに、この二人がいるときには……今でも私と二人つきりになると押し黙ってしまう。何処かで何かを間違えたのかしら……

ルイズの言っていた、魔法なんて必要ない世界からやって来たのね。

やって来たんじゃないだろう。ルイズに呼ばれてきたんだよ。

そんなやり取りも思い出した。『呼ばれてきた』無理やり『召喚』したのに、二人は今では『呼ばれてきた』、そう言いきっている。どういう心境なのだろう？

私たちには、『場違いな工芸品』、それを見せてくれる。

ルイズの様子から少なくともルイズにとって彼等の召喚は正解だった。でも、彼等は住んでいる所から無理やり『未開』ともいえる場所に呼ばれている。両親も死んでしまったそうだ。それからマイカは『先生』に魔法を『使える』ようにしてもらった。そして彼等はこの世界へ『召喚』された。

これは彼等にとっても良いことは有るのだろうか？彼等の周りにいる人々には良いことは沢山ありそうだ。特に平民については。

学院のメイドへ貴族からの引き抜きが多くあったそうだ。最初は

シエスタ嬢。その後も何件があつたらしい。それを知つた姫さまが、学院に対するメイドの引き抜きを禁止する諭旨の告文を發布した。罰則は無いし、強制力も無いものの今のところ貴族が引き抜くという事は起きていない。

メイドの引き抜きが多発した理由もこの二人が原因だ。この二人の作る秘薬のおかげでメイドたちが美しくなつたらしい。本人たちは、手荒れとかが少し良くなります。と言っていたのだが、どうしてもして、私が行くたびにメイドたちは美しくなっていく。年齢的に少し肌の手入れをすれば美人になるのだろうが、平民の学院勤めではなかなかそこまで普段の手入れは難しいだろう。それをあの二人は水メイジの作るものと大して違わない秘薬を魔法を使わずに作り出し、それをただで分け与え、あまつさえ作り方を教えていると聞く。

洗濯などに必要な秘薬も作っているという。材料は学院で不要になつた食材などを利用してしていると聞いている。他にも彼等に聞いて学院の外に菜園などを作り、メイド達が交代で面倒を見ているそうだ。

ルイズは言っていた。わざわざ王都にまでやってきて高いお金を出してまで秘薬や秘薬の材料を買わなくても、この程度の秘薬であれば身の回りの物から作れたんです。といい、それらは最初は平民のメイドたちが、今では金のないメイジ達までもが同じことをやっていると聞いている。

王都等から来たものとはかく、地方から出て来た者にとっては学院の今の生活は天国なのだろう。以前は金の為に貴族に買われるようにわざと目立つ行動をしていた者がいたと聞いているが、今ではそんな事はないそうだ。彼等は勤め上げれば自分の生まれ育つた

町や村へ戻り学院で覚えたことを使って生活していきたい。そう言っているそうだ。

本当に彼等の意図が読めない。行動に何か一本の糸でつながっているようで、行き当たりばつたりの様な気もしている。

夫に話をしているが、夫は真意を掴みかねる。そう感想を言った。

さらに姫さまにも困ったものだ。普段から古参貴族を嫌っているのは知っていたが、その彼等を掣肘するために、一つの種まきとして、本当に思いつきで彼等の作物を利用することを考えたのだろう。種をまくために・・・

我儘な事だが、彼等は最初から考えていたように、姫さまの提案に一定の歯止めをかけたうえで、姫さまの話に乗った。こちらの狙いも良くわからない。誰がどう利を得るのだろうか？

559

「お母様？お疲れですか？」

ふと気が付くとルイズが体をゆすっている。皆が心配そうにこちらを見ている。

「ルイズ。休ませてあげなよ。カリィヌさんは疲れているだろうし」

サイトがルイズを窘めている。

「何でそんな事があんだにわかるのよ？」

「なんでって、そのおかげで俺達は学院から出なくても良かったんだろう？自分達の仕事がなくなっても、仕事そのものは無くならんいんだからな。誰かがやらなくちゃいけないんだから」

「そ、そんなことは解っているわよ！」

「ルイズ。静かになさい。皆さん驚いていますよ」

「は、はい。お母様」

誰かが・・・か。私も最初は解らなかつたことだな、何でこの年でそんなことまでわかるのだろう？彼等の事は色々聞けば教えてくれる・・・でも全てを教えてくださいているわけじゃないだろう。いや、全てを聞いていないのかもしれない。彼等は聞けば教えてくれている、なのに何か話がつながらない・・・何か肝心なことを聞いていないのかもしれない。ひょっとするとそこをはぐらかしているのかもしれない。どちらにしても根気強く接するしかないのか・・・。

竜籠は降下して行く。その先に少し周りの家々と違い広い庭を持った屋敷が、それでもトリストアニアに有る貴族の屋敷に比べれば少し田舎っぽさを持つ造りをしている。

その庭に竜籠が降下し、着陸した。隣に種を積んだ竜籠が同じように着陸した。

「お待ちしておりました」

以前学院で出会ったヴァリエール家配下の貴族が迎えに来ていた。

おおこれがそうですか。これだけあれば用意した土地に・・・等々、カリー又さんと一緒に持つてきた竜籠に載っている種などを見てあれこれ話をしている。しかし、言葉のあちこちに感嘆詞やらなんやら少し大げさじゃないの？といった感じもするが、それがこの習わしなんだろうな。そんな感じで才人は様子を見ていた。

一方の舞華はその貴族さんとこの芋は蔓を植えるのが普通なんですけど今回は数が少ないので輪切りにして・・・、だとかもう明日の事を話題に何だか盛り上がっている。

そしてルイズとシエスタは学院の外の世界だが、俺達と違い自分達の実家にいるのと様子が変わらないのだろうか？龍籠の中と違い割と淡々としている。

ここは以前領主がいた屋敷だそうで、領主が不在となつてからは屋敷の奉公人も暇を出されたそうなのだが、今回の件で何人かはヴァリエール家の方で雇い直したという事らしい。そして若い人がここを出て行ったという事で、耕作可能だが耕作人の不在地で屋敷に近いところを準備したという事らしい。新たな耕作人はヴァリエール家の耕作人の二男や三男で土地を継げずに王都等で働きに出ようとしていた人たちを何人が雇い入れたという事だった。数年間はここで麦の品種改良や種の数を増やす事になるので食費などは全てヴァリエール家で支給する。もちろん半分くらいは王家というか姫さまが出している。そうカリー又さんは言っていた。

畑は区分けしており、食費が出るとはいえ農業をやっている所が食料を全て買っていったのでは無駄すぎる。という事で、自給分の畑もあるという事だった。後は、水。一応畑があつた所は井戸も有り、一応水は足りているのだが魔道具で湧き出しているようなところはいいのだが、一般に領主もおらず配下の貴族たちもいない所では、そう言った便利な物などあるはずもなく川から水をひいたりするの

だが、生憎ここは領主が健在な時は魔道具も有りそう言った心配がなかったのだが、現在では領主不在のおりいつの間にかそう言った魔道具が消えてしまった。という事だった。

カリー又さんから聞いていた俺達は手動式だが井戸のポンプを持ってきていた。春蒔きの種以外を置いてきた理由だった。中空のパイプがほとんどはいえ真鍮製のポンプは結構重い。竜が苦勞して持ってきてくれたお蔭で一か所だけが取敢えず取付けてみたのだった。

俺達の所で取付けるとなると固定がどうのこうのとなるが、ここはチートな錬金魔法で、土で仮に固定した井戸水ポンプを、土を岩にしてもらい一体化することでいとも簡単に取付けが終了してしまっ

た。少し疲れるが種を蒔く分に関しては回数で補う事で一応の水は足りることになる。本格的な畑用の水は何でも荒れ放題の水路などを清掃することによって賄えるという事だった。

ただ畑を優先にしていた為、そこが間に合わなかったと言っていた。一息ついていいる間に皆で水を確保することになっているらしい。後、水ポンプは人手が足りないド・オルニエールでは見ていた皆が感心しており、取敢えずは今有るものは固定化と強化で盗難防止と破損防止をしている、そして、手がすけばあちこちに複製を作り、老人が増えたド・オルニエールでこれを増やそうと計画していた。

実は学院では既に洗濯場に取り付けてあり、魔道具の水だけでは水が溜まるのに時間がかかるの為、結構メイドの皆さんには利用されており、ミス・ロングビルがこれを気にいり、いくつか錬金で複製を行っているのだった。

この事を皆に説明し、ロングビルさんから購入する。または作り方を教えてもらえばどうかと提案してみた。ロングビルさんも最初はうまくいかずに苦労したのだが、今では時間を掛けて作ることに成功している。ロングビルさんには購入の費用＋授業料が入るし、皆には無駄に失敗をせずに確実に動作するものが手に入るのだからという事だった。今すぐというわけではないだろうし、キャリアアップさんが間に入り調整をすることで話がまとまったのだった。

33・ド・オルニエール - 1 (後書き)

10/24 こっそり訂正を・・・

34・ド・オルニエール - 2

「ちょっと、サイト何やってるのよ!」

ルイズが怒鳴っている。舞華もシエスタも何故か嫌そうな顔をしてこちらを見ている。

当然こんな状況なのでカリィ又さん始めヴァリエール家の皆さんやその使用人の方々も嫌そうな顔をしてこちらを見ている。

まあ、当然だろう。俺が今いるのは、昔人が住んでいた家の便所。そりゃそうだ、俺も本当は居たくない。だけどこれは・・・、舞華は嫌そうな顔をしているが仕方ないことだと割り切ってくれているというか。実は感謝してくれているというか、まあ、あれだ・・・なんだっけ?

「・・・相棒。おめえ何やってんだ?」

デルフまで呆れかえっている。まあ、本当に廃屋の便所で壁やら床やらごそごそやってればそりゃ怪しい人だし、俺だって東京でそんな人見たらおまわりさん呼ぶよ!

「サイト、何をしていますか?」

恐る恐るといった感じでカリィ又さんが話しかけてきた。舞華はいつの間にか俺がやるうとしてることを理解して廃屋から鍋やらなんやら集めてきてくれている。

「じゃ、薪やらなんやらよろしく」

俺が舞華に言うと、舞華は便所の臭いに閉口しているのか本当に

嫌そうな顔で頷いて何人かの使用人に俺がお願いしたことを伝えている。使用人の人たちはカーリー又さんや管理している貴族の人の顔を伺い、目と頷きを確認するとそそくさと探しに行ったようだった。

「サイト。何やってんのって聞いているの！ご主人様には返事なさい！」

なんか久しぶりにルイズの怒鳴り声を聞いたような気がする。思わず笑ってしまったのだが、それを見て余計に、ルイズの機嫌が悪くなったのを感じた。

「らちが明かないせいとかカーリー又さんがおずおずと尋ねてきた。」

「サイト。そこで何を集めているのですか？」

「ああ、これはちょっと実験したかったので……」

「サイト！実験ってこんなところで何をやるっていつのよー！」

「こら、カーリー又さんが耳押さえてるぞ。お前貴族の御令嬢なんだから」

「うっ、でもでもサイトが変な事してるからじゃない、そ、その……えっと……」

「直ぐに解るようにするから、今は邪魔するな」

「な、なによ……」

結構たくさん取れたのを確認すると、舞華が準備している庭の方に向かって行った。

「舞華、錬金できるか？時間かけると面倒だからちやっちやっとなつちまわないとな」

採って来た物を水につけ舞華が持ってきた布を利用して濾しに掛ける。

いつものように灰汁と混ぜ、そしてここで本当はトコトコ煮込む。しかし今回はここで舞華に錬金をお願いする。もうなんだかこのいい加減さに毒されてきたような気がする。

舞華は錬金で『合成』そして水と沈殿物を『分離』分離したものは所謂『硝石』これにピエモンの秘薬屋で買ってきた『硫黄』と自家製の『木炭粉』を混ぜる。割合は結構適当。

一応割合は調べて来たけど、物が物のせいかわからないところは解らなかった。

今回は硝石の入手を確実にするための方法をカリー又さんに教える事。そしてこれで化学に興味でも持つてくれたらと思っている。

これは昔の鉄砲の火薬の作り方が今回はそれに付随して育った技術・・・日本の夏の風物詩、『花火』だ。もちろん打上げ花火はいきなりは無理なので、それでもやってみたいのでちよつと冒険してみる事にはしている。今回は広げた紙に火薬と金属粉を少し混ぜて色を付けた物を置いて丸めることによって花火にしていく。よく実験でやった炎色反応というやつだ。あと残った火薬で少し大きな玉を作り・・・。

夜になり夕食が終わると才人達は屋敷の庭に出て来た。才人の『実験』を見るためだ。

「ルイズこつちに来いよ」

「な、何をするのよ」

「今日は時間がないし、明日の夜には何か学校の行事があるんだろ
う?」

「そ、そうだけど、これは何よ?」

「カリー又さんもどうぞ」

何気にビビリなルイズを軽く無視して、カリー又さんにも手作り花火を渡す。うまく火が付いて燃えてくれたらいいのだけ。音だけしてそれで終わりとか湿けて何もないつてなったらやだなあ。等と思いながら、予めこれも用意していた蠟燭で火をつける。

周りを皆が見ている。

パチパチ・・・火が付き始め火花が散りながら即席だが確かに色が
変わりながら火が燃えている。紙の質の問題か火薬が適当なのか思
ったより早く燃えている。

あっという間にカリー又さんの花火が終わった。

「どうです。面白いでしょ?」

「・・・これは、火薬なのですか？」

「ええ、そうです。話を聞いててひよっとしたら有るのかな？と思っていたので。上手く出来てよかったです。失敗する確率の方が大きかったので」

あはは、と言いながら照れ隠しの笑いで誤魔化しながらこれをやった理由を説明始める。
所詮は色々な理由の後付けなのだが。

ここは特に特徴がないですね。ワインは有名らしいですが、タルブに比べるとやっぱり落ちるとか、元々貴族の錬金魔法で、農業を何とか維持していたけど、領主がいなくなると継ぎ手がない。

本当にいい土地なら誰かが後を継ごうとするでしょ？何でも無位無官の貴族もそれなりにいてそっちの手当ても大変だと聞いていますから。いい土地なら欲しがる人も大勢いますよね。理由なんて後からつければいいのだから。
で、考えたんです。俺達の世界に有った技術で何か使えないかな？
って。

それで火薬です。実は俺が集めていた物は、人の糞尿や動物の死骸、雑草を抜いたものとかを集めて乾燥させずに、雨で濡らさないようにすると、舞華が依然教えてた肥料と同じように、土の中で変化が起きてそれが火薬の原料になるんです。

本当はそれが出来るのに今言った材料を、例えば小屋の様なものを作ってそこで作り始めても五年くらいかかります。ちよっと詳しいことは俺も勉強不足でよくは知らないですけど。

それで既にそれが出来ている家があると思つて。人が住んでいれ
ばこんなことやると追い出されるでしょ？でも、ここは人がいない
家がたくさんあると聞いたので、それでどこかにそういう施設を作
ると毎年計画的に火薬が取れます。

もちろん皆さん軍人の方なら大砲の弾薬とか考えるでしょうけど、
俺の国には戦争の無い時に火薬を作つてそれで花火を作る事を生業
にした人たちがいたんです。もちろん俺はそれを本で読んだだけで
全てを知っているわけじゃないですけど、どうでしょう？農業の無
い時とかにこれで余所の町で見世物や売り物にしては？もちろん戦
争になれば国に買い上げて貰わなければいけないでしょうけど。農
業の収入が無い時のちよつと収入源にならないですか？

才人がそう言い終えると

「サイト。ちよつとどころじゃないですよ。これだけの火薬が今の
わずかな間に出来るのは・・・それも計画的に毎年できるのですか
？これは国家的な事業ですよ」

そうカリ又さんが言つと周りを見渡し、宣言した。

「皆の者。今聞いた事。目にした事。一切の他言は無用。もし破つ
た者がいれば裁判なしの死罪に相当すると思え」

「え？ええ〜！ちよ、ちよつとカリ又さん」

「何だ、サイト？」

「何だ。・・・つて。なんか大袈裟じゃないですか？」

「何を言う。火薬の原料の硝石といったな、それは東方から輸入するか、『火石』を利用したものか、『硫黄』『石炭』『木炭』を、秘薬を利用して錬金したものの以外無いのですよ」

「それを、こんな事で作れるなど・・・呆れて物も言えません！」

「って・・・」

「貴方は・・・いえ、貴方達は自分がどれほどの者かという事を今一度理解してほしいです。たかが種を蒔く事ぐらいで、こんなことを宣言せねばならない破目になる、こちらの身になってください」

なぜか逆切れだよね・・・これって。ねえ、って舞華何故目を逸らす。な、なんで？鉄砲有るんだよね。大砲まであるって、空飛ぶ船に大砲並べて飛んでいるって・・・あれ？どうしてこうなるの？なんかカリィ又さんだけじゃなくてルイズに、代理やってる貴族さんまでこっち睨んでるよ・・・あれ？どうして？

「サイト、このトリステインでは、軍にも銃が少しずつ導入されてきています。そして大型の大砲も。もちろん貴方の国の武器のような破壊力は有りません。しかし、これからの戦争で影響を持つ事は確実です。各国とも銃はともかく大砲を陸亀に積んで会戦時の決戦兵器にしようとしたり、船に積んだり、城の防御の為に配置したりです。その中で火薬の手配だけは各国共どうしようもないのですよ。全て輸入と言ってもいくらいい手に入れにくいものなんです。もちろん錬金による物も有ります。ですがそれは安定していませんし、量を作るのも向いていません。それを貴方は廃屋から簡単に作り出したのですよ。私達から見ればエキュー金貨を錬金で土から作

っているようなものです。これは各国の情勢にも影響を与えますよ。表立っては言えませんが・・・鳥の骨には伝えていたほうがいいでしょうね。黙っていれば謀反の準備ととられても仕方ないですから」

「ごめんなさい」

「まあ、サイトは知らなかったのだから仕方ありませんね。でも気を付けてください」

「わかりました」

「ところでまだ何かあるのでしょうか？早く見せてくれませんか？」

「あ、は、はい。少しお待ちください」

才人はそういうと木の幹をくりぬいたもの・・・約三十センチほどの長さの筒状になったものを持って来ると地面に固定した。これは舞華が錬金でしっかり固定してくれた。

そこへ火薬を入れ、最後に玉状の花火を入れた。そして筒の底に近い部分にひも状のものが出ている。そこへ蝋燭を使って火をつける。と、そこから急いで離れた。

ボン。短い音がすると少し甲高い音が夜空に吸い込まれるように伸びていった。

そして先ほどカリーヌの手の先でパチパチ燃えていた花火を大きくした感じで空に火で出来た花が咲いた。赤、緑、黄色と色を変えていく・・・。

「ほう・・・」

カリーヌが感嘆の声を上げ花の咲いた後の煙を惜しんでるように見ていた。

周りでは、おお。とか、うわあ。すごい。といった声が聞かれた。

「見よう見まねでしたけど何とかうまくいきました」

才人がカリーヌに話しかける。

これはサイトの国では、良く作られていたのか？と問いかけ、俺の国では特に夏の夜に何千発も打ち上げてお祭りみたいになっていました。何箇所か有名なところもあって、そこでは余所の土地からの旅人も沢山旅行に来ることも有ったんですよ。そんな話をして、花火について説明していた。

翌日になり、種時きが終わり昼の食事が終わった後、皆で食堂でお茶を飲んでいた。もちろん才人たちの話はいつ国家機密になるかわからないので、サイレンスを掛けての話だが。

「そうすると、これは武器にも使えるわけか」

カリーヌにルイズ、才人に舞華、シエスタの五人が旧領主の館の客間でお茶を飲みながら話をしていた。

「はい、これが花火でお祭りだけに使えるのならその方が一番いいのですが、これはコインの表裏の関係です。武器にもなりますし、夜にこれをやってお祭りを盛り上げたりすることにも使えます」

「なるほど・・・常に需要があるから技術が廃れる事もなく、技術

は伝承されるというわけか」

「ですね。だから、最後の打上げ花火は空ではなく地上に向けて落ちるタイミングで色を着ける火薬の代わりに鉄の破片や銃の弾丸を入れておけば兵は傷付くでしょう」

「なるほど・・・これを私に見せた理由は？」

才人は少し前に舞華と話をした、自分達の知りえた範囲での考えを、ハルケギニアの国際情勢とトリステインの状況を説明した。

「つまり、平民も兵力にしてメイジも平民も同じように戦えるようにしなければトリステインはどこかの国に併合されるというわけか」

「可能性ですけど、なんとなくそんな気がしてたんです」

「・・・」

ふう。とカーリー又は息をつくくと、召喚された一流の戦士が見ればトリステインはそう見えるわけか。と呟き。そして。それがあながち間違いに聞こえないというか、そう私も見ていますよ。そう言うのと再び、ふう。と息を吐いた。

少し、二呼吸ほどおいてカーリー又は、わかりました。あなた方の献策はトリステインにとって悪くないと思います・・・が、誰が指揮を執りましょうか？先ほども言った通り火薬の製造は国家的な事業です。影響が大きすぎます。私にはどうしていいのかわかりませんよ。本当に・・・。そう言うつと少し苦笑いをして肩をすくめた。

才人はその仕草に、やっぱりルイズの母ちゃんだな、結構いい歳な

のに可愛いかったりするし。などと何時もの益体もない考えをしていたりする。

誰かメイジの軍に近い人がいいですけどね。才人はそう言い。それとバランス感覚のある、平民にもメイジにも厳しい人ですね。平等に怒れる人です。これはカリリー又さんの話を聞くと、国家機密ですからどちらにも厳しい人がいいです。

カリリー又さんは軍人か？だがそう言った人物はこういう生産に関する段取りは出来ないが、何か考えがあるのか？と問われ。段取りは平民でもメイジでも下の人間がやればいいですよ。要はこれの指揮を執る人が誰かに臍盾にする人であればその対極にいる人が裏切りやすいでしょう？ちゃんと全体を見て、何かあつたら自分で問題を調べて客観的に見れる人がいいわけです。それで物が物だけに軍事知識があつたほうがいいと思つてます。それに軍人ならこれが戦場と考えられるなら、被害最少を考えて進めていきますし、例えば平民でも兵力を徒に損耗させるような方針を取る事は無いと思つてます。

作戦家というわけか、成程、指揮官を決めて、生産の段取りを参謀どもに考えさせ、輜重に生産を実行させると考えればいいわけか・・・わかりました、なら私にも考えが出来ました。

ただ実行するためには、前もって理解者を増やしておく必要がありますね。時間がかかりますが進めていかなければいけませんね。また夫に迷惑を掛けますが・・・仕方ありません。シエスタさん、彼を・・・そうです。ここへ呼んできてもらえますか？お願いします。

そこまでカリリー又さんと話をするシエスタは部屋を出て呼びに行き、一人のメイジを連れて帰ってきた。種蒔きを命じられたヴァ

リエール家のメイジの人の部下だっけ？

忙しいところをすみませんがお願いがあります。そう前置きして、カリィ又さんは話し始めた。先ほど見ての通り、火の秘薬はああやって東方のメイジは簡単に作る方法を知っている。見ての通りなので、今からサイトについてあの花火の色の着け方を含めて明日ヴァリエール領に戻ればすぐ実践できるように覚えてくれ。そう、明日実践できるようにだ。理由は言わずとも解るな？ヴァリエール領でも生産を始める。ああ、そうだ。ヴァリエール領の向こうにはゲルマニアのツェルプストーが戦力を常に展開している。奴等の鼻先であの花火を打上げてみよ。牽制には充分だろ？それと大砲の備蓄にも回せるしな。新年のお祝いに盛大にやるからな。その為にはヴァリエール公を説得せねばなんだろ？汚れ役をお願いして申し訳ないが、やってくれ。そう、便所掃除だ、思い出した、お前入隊早々私に便所掃除命じられたな？前は罰だが、今回は名誉の便所掃除だ。頼むぞ。

そうカリィ又さんは命じると一度部屋を出るように言うと、サイトに、申し訳ないが聞いた通りだ彼に先ほどの採集しての生産方法後、連続製造の方法も教えてくれ。舞華が残りの種を蒔いている間にお願ひする。夕方には学院に戻らなければいけないのだろう？

わかりました。細かいことは舞華の時と同じでいいですね。問題ない。短い遣り取りの後、再び彼を部屋に招き才人と一緒に部屋を出て行った。

お互いついてないですね。いきなり便所掃除ですからね。お前がいきなりやり始めた事だろう？何を考えてるんだ。等と口調はともかく友好的に作業を始めた。手順を説明し、勘所も併せて説明する。さっきの便所へもう一度行きましょう。と才人が言うと。ああ、仕

事だ。そう言いながら二人は先ほど才人が硝石の原料を採取した便所へ向かうのだった。

後でカリリーヌから聞いたところヴァリエール家の使用人たちには舞華はメイジ、才人は賢者か博士相当の人物だと思われるそうだ。彼等の前では剣や銃を使わず、舞華と一緒にいて、何時も舞華にアドバイスして常に控えている。

ルイズに召喚されている事は内々ながら公表されており、ルイズに対しても何かしらアドバイスを与えており、ルイズの魔法がコントロールされた爆発になっており、コモンも爆発することがなくなり、ルイズの表情が明るくなっている。

それにルイズの才人に対することなく甘えた様子から、才人の東方の若年の賢者もしくは博士に相当するという見解を強化することになっていた。

それが証拠に才人が平民と言っているにも係わらず貴族に対しての対応を常にとっていた。そして、学院の中での噂と同じく舞華と才人は兄妹の振りをしている東方の・・・所謂、貴種流離譚だと。

カリリーヌ、ルイズ、シエスタ、そして彼ら二人の居ない所で、結構噂話で盛り上がっていたりする。今回同行している若い貴族にとつて幼い姫を守ることは有る意味理想であり、平民たちは二人の平民に対する態度と魔法を使わない見知らぬ作物や文物に対して、そう言った噂話を同情からくる好意と見知らぬ東方の知恵という物に感心しており、そういうものだと思っているのだった。

34・ド・オルニエール - 2 (後書き)

昔の火薬は、便所から原料を集めていたというので、今回はその話です。

色々将来への布石ですね。

しかし、原作ではどうやって火薬を作ってたんでしょうか？

召喚者の知識を元に錬金していたのでしょうか？

誤字脱字などありましたら、感想共々よろしく願います。

と言いながらやってしまいました。早々の訂正が入りましたが、

まだ抜けているところがあればお知らせください。(10/24)

35・舞踏会（前書き）

フリッグの舞踏会です。二人の正装です。がどうしようかと思いましたが、やっぱり女の子は着物だよな。と言っわけで舞華さんは着物姿です。才人は羽織袴を考えたのですが、それだとルイズさんたちと踊れないなあ。と、後、羽織袴には家紋が入ります。平賀家の家紋は三階菱かな？と思ってたのですが、どこかのサイトで左三つ巴が有ることを知りましたのでそっちにしています。形としてわかりやすいのはFSSのバツシュの肩なんかにあるオタマジャクシ三匹が頭を寄せているようなマークです。かつこいいのがいいですから設定だけしていました。しかし、平民で家紋もちとなるとそこで騒動が起きてまた話が変な方向へ・・・と思いましたが今回はパス。でもいつかは、せつかくエピソードを書いていますので入れる予定です。

35・舞踏会

夕方ギリギリフリッグの舞踏会の直前に四人は学院に戻ってこれた。

ルイズの、さあ、マイカ急ぐわよ！の掛け声でルイズはシエスタを伴い自室に飛び込んでいった。

舞華は舞踏会とはいえそんな服は才人共々持ってい無い。前の虚無の曜日に購入したのは

あくまで普段着だ。どうしようかという舞華に才人は、日本人なんだからあれがあるじゃないか。舞華はお袋たちが買ってくれただろう？そう言われてコンテナへ向かって行った。

アルヴィーズの食堂の上の階に有る大きなホールで舞踏会が行われている。特にルイズや舞華ほど着飾る様な服も持っていない才人は早々に到着するとバルコニーで皿に取分けた料理を食べつつ、所在無げにホールを見ていた。

才人は学生服を着ていた。学生は学生服を着ていれば正装扱いされる日本を懐かしみ、なんとなく落ち込んでいた。

キュルケは相変わらず男子学生を周囲に侍らせて輪の中にいる。タバサは黒いパーティードレスを着ているが彼女は料理と格闘することを選んだようだった。

ホールの門に控えていた衛士が声を上げた。

「ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおな~~~~~~~~り~~~~~~~~！」

門から白いパーティードレスを着たルイズが高貴さを醸し出しながら入場してきた。そして後ろに、舞華が着物を着て後をつけてきた。

学士の音楽が鳴りはじめ、貴族たちがダンスを踊り始めた。

近づいてきたルイズ達にデルフリンガーが、

「お、馬子にも衣装じゃねえか」

等と言いながら騒いでいた。

ルイズに才人は、きれいだね、似合うよ。といい、舞華に、一人で着付けできたか、忘れてなくてよかったな。等と言い、ちよつとこれじゃ踊れないから次の機会の時にはドレスを作ろう。といい、舞華は頷いていた。

ルイズに舞華は正装だけど、あんたは何で学生服なの？と、問い詰められ。基本俺の国じゃ学生服着ていれば学生は正装扱いだったからな。女の子は着飾るもんだろ？俺は男だからこれでいいんだよ。そういう物だから。そうルイズを言いくるめると、ルイズと舞華の様子を窺うように男子学生が遠巻きに見ているのを顔で指して、みんな待っているぞ、早く相手してあげるのもマナーだろ？と焚き付けていた。

他に皆どうしているかと周りを見渡すと一角に異様なオーラを醸し出しているテーブルがあった。

ギーシュはモンモランシとケティの二人を相手しており、どちらを先に踊りに誘うのか、二人の駆け引きとギーシュの優柔不断さで一種緊張の走っており、それをマリコルヌが怪しいオーラを出して見ており、それをさらに何人かの二年の男子学生が遠巻きに見ている。

少し手持無沙汰になったサイトの元へミスタ・コルベールとミス・

ロングビルがやって来た。

「やあ、サイト君楽しんでくれているかね？」

「はい、それにしてもすごいですね、俺達の世界じゃ、ことういった舞踏会は無かったですから」

「そうなのかね？」

「はい、その代わり・・・」

才人は学生の行事として文化祭や体育祭そう言った行事についての説明をしていくのだった。そしてそう言った行事はこの学院ではないのか？と、問。ミスタ・コルベールが残念ながらありませんね。といい。そもそも学院に学院外の無関係な人間を入れることは稀ですから。それにほかの学校と行っても貴族向けの学校以外は基本私塾なので規模もそんなに大きくありませんから。それにしても、予算からすべて学生で企画運営するのですか？素晴らしい、自立しているのですな。ほう、ミス・マイカの学校にもあるのですか？生徒会？それが自主独立しているのですか・・・予算から独自で、成程本当に自立しているのですね。一種の疑似社会ですね・・・いや、素晴らしい。貴方達となると本当に私自身の勉強になります。私は魔法を社会の役に立てるにはどうすればいいのか、社会の中でメイジの役割など考えてきましたが、すでにそう言った社会があるのですね。また、暴走モードに入ったようだ。

ミス・ロングビルが苦笑している。才人はミスタ・コルベールとミス・ロングビルに踊られないのですか？俺は踊ったことがありますせんから、いやいや、何事も経験だよ。等と言いつつてるうちになぜか、ロングビルさんと一緒に踊る羽目になってしまった。

お上手ですね。等と言われながら踊り終わると、ジト目のルイズと次は私と等と言っているキュルケが待ち受けていた。

バルコニーにいるデルフは、今の使い手はもてるね。おでれーた！等と煩い。

舞華が騒ぎが大きくなる前に、お兄ちゃん、ルイズさんと・・・と言われルイズが何か騒ぎ出そうとしたところをタバサがサイレンスを掛け、そのまま踊りの輪の中に放り込まれたのだった。

舞華はミス・ロングビルとミスタ・コルベールと一緒に何か話しているかと思うと、二人の背を押して同じく踊りの輪の中に放り込んでいた。

才人が踊り終わるとそのままキュルケに拉致され、終わるや否や、今度はキュルケ・舞華連合により、タバサの料理の皿が取り上げられ才人は踊りの輪に戻る事となった。

バルコニーで子供ともいえる容姿の、そしてハルケギニアでは見かけない衣装を着た少女がパーティー会場で騒いでいるルイズやキュルケを見ながら話をしていた。もっとも話し相手は剣の形をしている。

「妹の娘っこ、おめえは踊らないのか？」

「着物じゃ踊れないですよ、それにしてもデルフさんって記憶が戻ったんですか？さっき今の使い手って」

「うっ、その事だけだな、な、なんか頭に引っかけたって思い出せないんだよな」

「そっか。残念」

「まあ、そのうち思い出すと俺は思うな」

「ですね、無理することはないですよ。六千年生きていれば、剣でも昔の事は忘れるだろうしね」

「そうそう、今回の使い手はいろいろ変わっているからな」

「変わってるの？」

「おうよ、少なくとも今までの使い手は賢者なんて言われるような頭いいやつはあんまりいなかったしな、それにハルケギニア以外から来た奴はいなかったな」

「そっかー、いたらどうやって来たかわかれば、戻れたかもしれないのね」

「妹の娘っこは戻りたいのか？」

「判らない。でも、お兄ちゃんはまだ少し幸せになってもいいと思っよ」

「相棒の事じゃなくて娘っこ、お前の事だぞ？」

「使い手や相棒でも娘っこ、でもなくて、才人と舞華だよ？」

「おおわりい、つい癖でな、直すようにするからよ。で、どうよ？」

「だから判らないって、もともと住んでたところは壊れて無くなって、お父さんもお母さんも死んじゃったし、次の世界は人がいなく

て、その次は・・・お兄ちゃんは・・・出来たけど・・・私は・・・足手纏いの事が多かったし・・・」

「むすめっ・・・マイカだっけ？おめえほどのメイジが足手纏いなのか？おでれーた！どんなところだ！おでれーた！」

「でも、みんな親切だったから・・・」

「おめえは戻りたいのか？」

「今は解らないし、前の世界では時間が動いてなかったから・・・」

「時間が動いてないって？どういうこと？」

「難しいけど、成長しなかったの、ずっとこのままだったから・・・もしここで時間が動き出したのならここで暮らせという事かもね」

「サイトはここで暮らす気みたいだぞ？」

「お兄ちゃんもルイズさんたちもはつきりさせればいいのに」

「なに？はつきりってよ」

「お兄ちゃんは鈍いからね、キュルケさんやシエスタさんとはともかくルイズさんもタバサさんもお兄ちゃんが気になるみたいだよ？」

「そつなのか？あの髪の子の青い娘っこなんかいつも本読んでるぞ？」

「お兄ちゃんという時はページが進んでないよ、この間なんか取落した本逆さまに持ったままずっと本読んでる振りしてるし」

「良く見てるな・・・だけど、それにしたってもてるね。心が震えてねーのに強えーしな」

「心が震えてる？」

「そうよ、ガンダールヴのルーンは心が震えるとそれにつれて力が強くなるんだ」

「あれ？じゃ、お兄ちゃん全然本気出してないってことじゃん」

「なに？本気出してねーて？おでれーた！本当におどれーた！」

「お兄ちゃんに剣を覚えてくれた人は、頭はいつも冷まして、心は熱く持って戦え。って」

「それじゃあ、本当に本気出してねえんだ。おでれーた！」

「ねえ、デルフさんは、本当はどういう使い方するの？」

「本当の使い方？何だそれ？おれっちは剣だぜそれ以外の使い方ってなんだよ？」

「戦場で使う剣は剣として敵を切るだけじゃないよ？戦闘をするだけなら剣より槍や弓の方が強いしね」

「ああ、そうか・・・おれっちは神の左手って言われてたんだけど・・・左手に持つのかな？やっぱり」

「なにそれ？でも神の左手なのね？」

「まあ。そう言われてたような・・・」

全部忘れてるんだー。等と好き放題言われているのだが、デルフの方は思い出せないのだから仕方ない。

「戦場で剣って、メインの武器じゃないから、木を切ったりテントや幕張った時のアンカー替わりになったりするんだよ？デルフさんインテリジェンスウエポンだからもつと別の使い方が有ったのかと思っちゃった」

等とけらけら笑いながら、舞華に言われて、そう言えばなんか有ったような？なんだっけ？等と相変わらず、とぼけているのか、忘れてしまっているのか舞華の笑いを誘っていた。

「でも、デルフさんって知り合いとかお友達はいないのですか？」

「知合い？友達？なにそれ？」

「だって、盾なのに左手で剣だし、お兄ちゃんは左手に盾を持って右手に剣だから。両手に剣を持つ時もあるけどルイズさん守るならそれは無いなあ、って思ったの、だからお友達がいて右手の人とかいるのかな？って」

「むう、右手か。なんかいたような気もするけどなあ？」

悪い思い出せない。と言い、右手が盾じゃ駄目なのか？と聞いてきて、お兄ちゃんはずっと左手に盾持ちだから多分やりにくいと思うよ。と答えた。

そんなこんなしているうちに、シエスタが料理の皿とワインの入ったグラスを持ってやって来た。

「ここでしたか？料理をどうぞ」

「ありがとう」

「どうかしましたか？」

舞華がシエスタをじっと見つめている。

「お嬢ちゃんも相棒の事が気になるのか？」

「え、え〜っ！な、なんですか、いきなり・・・そ、その、才人さんの事は・・・っ」

「シエスタさんもなんですね」

「な、な、なんのことでしょう」

「気になる。ってことですよ。好きとかどうかは別にして、ですよ？」

「いえ、その、みぶんが、その・・・すきって、それは、その・・・」

「だから別に気にしてくれてるんだな。って思ってたんですよ。それにお兄ちゃんは身分とか気にしないですから、どうせ貴族の居な

い所にいたんですからね」

「い、いえ、その、あの・・・」

「シエスタさんも自分の気持ちに素直になつたほうがいいよ？お兄ちゃん結構優柔不断だから、こういう事って結構グダグダしちゃうからね」

少し離れたところからシエスタを呼ぶ声がする。メイド仲間が何か用事があるのだろう、舞華と話をしているのを見て、しまった。という顔をしている。舞華がそのメイドに軽く会釈して、シエスタの背を押すようにそちらへ向かわすとまた一人になり傍らの剣と話を始めた。

お兄ちゃんがここに残る気になっているのは、私のせいだから。なんでだ？と問いかける剣に対して、舞華は、ここに来る前の世界ではね私は弱かったんだよ。本当にね。そして前にいた世界で何度も死んだといった。剣は、死んだ人間が何でここにいるんだ？と、当然の質問をすると、それぞれの世界では、その世界の決まりごとがあるの。でね、前の世界では魂が簡単には体から離れないので、蘇生魔法が発達していたんですよ。と、そして、蘇生魔法はこの世界でも有効ですよ、でも、魂が弱いんでしょうね。復活しないんです。虫や鳥、森の方へ行くといくらでも動物の死骸を見つけられるので何度か試したんですよ。自分の蘇生魔法は結構優秀で蘇生する確率も高くて、リスクも少ないんですよ。リスク？それは蘇つた時に自身が持つてた力や能力が落ちるんです。でも、私の蘇生魔法は落ちる量というかそう言うのが少なくて、結構名指しで呼ばれることも有ったんです。でね、そう言った能力あるメイジは当然戦争な

んかでは最優先目標なんですよ。もちろん、ただではやられないんですけど、それでも私何度も死んだんですよ。うん、十数回ね。だけれどね、お兄ちゃんは私を助けるために身代わりに何度も死んだんですよ。

ただどこだと、私を簡単に殺せる魔法や武器がないんですよ。もちろん色々死ぬ方法はあるんですけどね、私も人間だし。それで、お兄ちゃんは私が生き延びやすいこの世界に残る事にしたみたいなの。なんとなくだけどね、わかるから。お兄ちゃんあれでも結婚してお嫁さんがいたんですよ。前の世界に残ってるから会えないですけど。だから、お兄ちゃんはこの世界に残るのは・・・頑固だからね、絶対ね。だから、だれかすきなひとできておにいちゃんは、すきな・・・ふああ、眠い・・・なんでだろう、寝なくてもせんぜんへいきなのに・・・さっきのわいんのせいかなあ、ねえデルフさん・・・ひとりで、ろくせんねんいきてたつて、・・・。

「寝ちまったか・・・。まあ、色々あるわなあ」

少しして、才人達がわいわい言いながらバルコニーへやって来た。舞華、寝てるのか？こんなところで。まったく、デルフ。声かけて部屋で寝るように言うのが年長者の態度だろ？剣だからと言っても声ぐらいかけられるだろう？あら、ワインなんか飲んで、こいつ昔からアルコール弱かったんだよなあ。お袋のフルーツケーキにかけたブランドーで寝たことあったし。

等と言いながら才人は、舞華を抱っこするとシエスタと一緒に部屋まで同行してくれるようにお願いすると。そのまま部屋へ戻ってい

った。

もちろんシエスタを連れて行ったのは舞華を着替えさせるため。
シエスタにお礼を言い、シエスタが部屋を辞するとそのまま才人も
ベッドで寝入ったのだった。

ルイズは夢を見ていた。
昔から時々見る夢だ。

十年ほど前のヴァリエールの領地に有る自分の屋敷での出来事だ。

自分を追いかけてくる足音をやり過ごし、自分が『秘密の場所』と呼んでいる中庭の池に浮かんでいる小舟に向かって行った。

小舟の中に忍び込むとそこに用意してある毛布に潜り込む。

中庭にかかる霧の中から歳はルイズより十ばかり上に見える立派な身なりをし、精悍さを持ち合わせた青年が現れた。

羽織ったマントを翻し小舟に乗り込むと、優しく話しかけてきた。

「泣いているのかい？ルイズ」

つばの広い帽子に隠れて顔が見えないが、ルイズには誰だかわかっている。

最近ヴァリエール領の近くの領地を相続したという貴族。まだ若く見えるが後見人もなく相続したのだ、彼に対する周りの評価もそれで解ろうという物だ。

「子爵様、いらしていたの？」

「今日は君のお父上に呼ばれたのさ。あの話の事だね」

「まあ！」

「いけない人ですわ。子爵様は……」

「ルイズ。僕の小さなルイズ。きみは僕の事が嫌いかい？」

「いえ、そんなことは有りませんわ。でも……。わたし、まだ小さいし、よくわかりませんわ」

会話は続き子爵と呼ばれた青年はルイズへ手を差し伸べた、何時もならそこで夢は終わりを告げるのだが今日は続きがあつた。

その手を握ろうとしたルイズは突然風が子爵の帽子を飛ばし、その顔を見たルイズは驚いた。そしていつの間にかルイズは学園にいる姿になつていた。

手を差し伸べた子爵はいつの間にかにっこり笑っている女性の顔になつていた。

チエツクのスカートを穿き、白いブラウス、その上にスカートと同じチエツクのベストを羽織り、黄色いチーフをしている緑色の髪をした、赤い目の女性だった。

その女性は優しく微笑みながらも、少し困つたように腕を組んで片手は顎に乗せ、少し首をかしげながら

「貴方が望んだことなのよ？立上らないの？」

「え？ええ？あ、あなたは・・・？」

「その内わかるわよ。そこから立上りたくて・・・」

ルイズは夢から覚めた。何か大事なことを言われていたような気がしたのだが何かまったく思い出せなかった。ただ、子爵様のいつもの夢を見た事だけは覚えていた。サイトを召還して以来見た事がなく忘れていたのに・・・。

そうよ、あれは昔の事。今は・・・まだ時間はかかるかもしれないけど、昔みたいにイジイジしなくても良くなるのよ。何であんな昔の事・・・子爵様の事を想い、あれは昔の父との約束、最近では軍務に忙しいのか連絡も取っていない。彼は彼の人生を送っているだろう。私もいじめてたけど、それはもう終わり。まだやりたい事はわからないけど、これからはサイトとマイカに科学を教えるもらって、魔法を使えるようになって、それから・・・やっぱり、人の為になる事を。私は貴族、そしてメイジだから、メイジとして出来る事をやろう。

珍しくルイズは自分で起き、舞華が寝坊をしてぼくとしているのを笑ってみており、毎朝自分に言われていることを、舞華に言っている。

そのことをキュルケがからかうのだが、ルイズはなぜか余裕をもって答えている自分に気が付いていた。

キュルケはなんだか今日は嵐が来るのかしら。と傍らの青い髪の少

女に話しかけている。

才人は舞華とルイズに昔日本には硝石が出来なかったため、初期の頃はド・オルニールで見たような家の便所の土から硝石を採取する方法を、そして効率よく取り出すために硝石丘と呼ばれる物を作りそれから連続して取り出す方法を説明していた。

もちろん物が物だけに、今回はハウスの中で非公開で行い。聞いているのは舞華、ルイズ、シエスタの三人だった。

エルモア・アデンには花火があり、ゴーレムの一部に火薬式の銃を装備していたことも有り、才人はそれを扱っているドワーフから簡単に、（肝心なところは教えてくれない。）教えてもらい知っていた。

そして自分なりに自分の世界での歴史を考え少しずつ調べていた。今回はそれのおかげで、もちろん舞華も知っていたが、うまくいった。ただ、才人達が持っていた本などでも大まかな調合割合などしか書いておらず、細かいところはトライアンドエラーになる。

自分が四六時中ついて、実験やらをやるわけにはいかないのだから、カリィ又さんに段取りからなんやらお任せしっぱなしになるのだ。だからルイズには理論的なことを説明して何かあればルイズも力になれるようにしたかったのだ。

そしてルイズ達に、火薬の製法は・・・別の見方をすれば、肥料造りにも応用が利くはずなのでそちらへも期待していた。

カリー又はそれらに対し、どれも大切だが、まずは食料の生産、特に才人から譲り受けた小麦や豆、芋の数を増やす事。ついで舞華から教えてもらった肥料造り。そしてその次がハルケギニアの植物と掛け合わせをすること。その次に井戸ポンプと才人が言っていた魔法を使わなくて井戸を掘る方法。所謂『カズサボリ』と言われる技法の習得。これは才人が前の世界で何度もやった方法らしいので段取りから教えてくれるという事だ。そして『手押しポンプ』の作り方。最後が火薬の生産だ。

カリー又は自分の中で順番を間違えてはいけない。そう考えていた。今ド・オルニエールとヴァリエールに有るもの、無い物を考えて優先順位を付けた。火薬は軍務についていた経験と公爵家という政治的な立場から優先順位を上げたかったが、費用や人材より政治的に問題が出ることは分かっている。これはじっくりやらなければいけない。そう自分に言い聞かせ、夫たるヴァリエール公爵へ件の配下の貴族とともに説明にあたった。

ヴァリエール公爵は屋敷の中に使われていない建物を整理してルイズ達が学院を卒業するまでに彼等の居場所を作るつもりでいた。ラ・フォンテーヌ領へも現当主へ話を通し妹の為に協力をしてもらう事の了解を取り付けた。こうしてある意味、才人包囲網を着々とヴァリエール公爵は敷いていた。

カリー又は夫の性格からして、絶対しそもない筈なのに、なぜか嬉しそうに部下と打ち合わせをする姿に何か不安を感じていた。

火薬に関しても自分の手元の軍人から土メイジを中心に件の配下の貴族と共に製作の方を徐々に始めていったのだった。

フレイヤの週、ユルの曜日の夜に行われたフリッグの舞踏会が終わり、才人達の学院生活に落ち着きを見せ、才人と舞華はカリーヌへ送る産業の育成策。策というよりは提案に近い物であり、才人と舞華の知識でハルケギニアで行えそうな産業を提案しようという事だった。

やはり彼らが生活していくには少し窮屈なところ、食事や服などだが、うまくやれば元いたところに近い水準まではもってこれそうな感じがしており、せこいことかもしれないがそういった事を楽しみにして頑張っている所もあるのだった。

何しろ十年を超えるエルモア・アデンでの生活において、お菓子の類やコーラのような飲み物はとっくになくなっており、調味料に關しても作る事が出来ず、もう時期在庫がなくなることは確定しており、食に關しては将来の見通しは非常に暗いのだ。

またMP3オーディオや簡易無線機やデジタルカメラ、PDA、等々細かい生活用品やガジェット・・・PDAなどは漫画や小説なども入っており、ちょっととした時間に・・・今まで何度も読んでいた物だが、それでも読むのが楽しみだし、数少ない自分の生きていた時代、という大袈裟かもしれないが二人にとってはそれなりに切実な事。

それが電池の寿命、充電式の物に關しても充電回数限界での寿命が来ているものがかかなりあり、二人にとってはそれなりに暗い将来なのである。

それが舞華は、ミスタ・コルベールを始めとする教師やミス・ロングビル。彼等から土の錬金に関する魔法の応用。物の状態を知る魔法、物の変化を止める固定化や破壊されないようにする強化。そして錬金そのものである、錬金の合成、分離、変性。そして錬金の本質そのものともいえる物質変換。

それらを学んだことにより、電池を復活させることが出来るかも知れないことに気が付き彼等教師やミス・ロングビルの元へそれこそ『日参』という言葉が似合うほど顔を出していた。

彼等は舞華や才人が使っている魔道具ではないが魔道具にしか見えない『場違いな工芸品』について驚き、原理を知りたがり、彼等から知識を吸収していったのだった。

とある日の学院での授業などが終わり、何時ものトレーニングも終わり二人でカリーヌに送る手紙の内容を吟味していた時の話である。

「お兄ちゃん」

「なに？」

「これ、カリーヌさんに送る手紙の養蜂の話なんだけど」

「どうかした？」

「前にお兄ちゃん養蜂で麦とかの受粉の話してたでしょ？」

「ああ、言った言った」

「今、品種改良のやり方調べてたんだけど、これね」

舞華の指示した本を才人は覗き込む。

「お兄ちゃんの言ってた蜂とかで受粉しないみたいだよ？」

「ありゃ？本当だ・・・自家受粉なんだ。知らなかった」

「うん、カリィ又さんに嘘言わなくてよかったね」

「だな・・・まだほかに変なところあるかな？」

「特になさそうだけど、えっとね、これだと方針を少し変えなきゃいけないかも？」

「何を変えるの？」

「蜂とか使わないから、専用の温室みたいな隔離する建物はいらないよね？それで、代わりに交配させる物同士を一緒の袋に入れるか、ピンセットで花粉を一つずつ受粉させるんだって」

「成程・・・あ、でも交配した麦が勝手に受粉しないように工夫があるね。で、それだけ？」

「えっとね、自分の花粉を使わないようにおしべを先に取っちゃうみたい」

「ピンセットって有ったよね？」

「確かあったよ」

「じゃ、準備してるよ。コンテナの場所だけ教えて、これもここにあるだけじゃ足りないだろうから作ってもらわなきゃ」

そんな感じで前に考えていた、紙の生産、養蜂などを一からなる為、道具の作り方から説明している書類をパソコンで原稿を作っていた。

そしてそれをハルケギニアの文字に直して手紙へ舞華が書いて行き、ある程度まとまれば舞華がルイズに見てもらおうようにするつもりだった。

もちろん手紙には才人や舞華が持っている道具の類を添えて送るつもりでいたし、送れそうも無いものに関しては写真を同送するつもりだった。

そして週が変わりヘイムダルの週に変わったところで、ミスタ・コルベールの協力も有り、まずは使いきっていたはずの乾電池が再生されてきた。舞華はそれを他の、それなりにくたびれてきたハウスの蓄電池のユニット、そういった物のリフレッシュに応用をしていく予定だった。

舞華はこれに応用すればあまり使われていない車の燃料なども十分作れると考えていた。そしてそれを才人に伝えていた。才人は元々未舗装路に於いて軍用車とはいえ積極的に車を使う気はなかったのだが燃料などに問題がなくなれば舗装をして行き将来的には使う事もいいかな？という考えをしていた。

どちらにしても、電池はまだ手探りのように復活させており、試し

に一日かけて三本ほど復活させただけであり、蓄電池のリフレッシュはまだまだ先の話になりそうだし、車の燃料などは、今の段階では鬼が笑いそうになる話であった。

そして日が過ぎて行きマンの曜日が終わわり、ラーグの曜日の授業。担当の教師はギトー先生だった。

この先生は全学年の生徒からの不人気教師であり、本人もそれを自覚しているというか、そう見えるように行動しているのだろう。

トリステインでは珍しい黒髪を伸ばし、漆黒のマントを羽織り、表情まで冷たい雰囲気を出すように表情を出さず、話し方もつつけんどうな感じである。

才人からすれば、これも一種の教師としても権威づけだろうが、やりすぎじゃないの？等と思っている。

そして学院七不思議の一つこのギトー先生に積極的に魔法の教えを乞っているのは舞華である。

学院の生徒達からすれば、他の授業の実技より舞華の魔法であればギトーに教えてもらわなくても十分使えるだろう。そう思っていた。

舞華にすればこっちの魔法は単純に魔力の流れを真似るだけでは十分でない所があり、出来るだけそう言った所を直すというか理解しておきたかったのだった。

そこで各教師に今は、主にドット魔法を、風であればフライヤレビテーションを単に浮いたり飛んだりすることだけでなく、細かい

制御、例えば急加速に急制動それに急旋回の方法。

これも普通に考えれば例えばバイクで旋回するように曲がる方向に傾いて曲がるのだが、なぜか人により、傾ける人もいれば、傾かせることなく曲げる人もいる。

舞華は実際に両方を何とかやってみるのだが慣れてないのでどっちにしても疲れ方というか、効率が変わらない。色々術者に聞いても意識していない人が大半・・・というか意識していないのである。

そこで、舞華はギトーへ一般的な運動時の人の姿勢などから、それと魔法を使う時の動かす物質の姿勢について質問したのだった。

最初はまともに取り合わなかったギトーだったが、自分がそれに気を付けて魔法を行使すると、確かに姿勢を傾けた方が効率がいい。舞華の言ったとおり速度に応じて傾きを変えてみても色々発見があった。それに重心の位置、これは舞華が才人のバイクによく乗せてもらってたからこそ知っていた事であるが、よくやるように体を地面に水平にしてフライをする方法と立ったままの状態でフライをする時に重心位置を低くしたりわざと高くすることで速度が速いまま旋回したりする、目から鱗であった。

フライの状態での姿勢と重心の位置の取り方、それだけで実技と理論で授業が何週間かにわたって出来そうな感じであった。まあ、学院のほとんどの生徒には理解できないことであろうが、軍人には必要な技能ではないか？

昔、軍にいた頃のライバル・・・同じスクエアでありながら彼には勝てそうもなかった。彼はそれを意識して行っていたから実技でこの私より常に優秀な成績を収めていたのだろうか？いや、おそら

く無意識に行っていたのだろう。彼はそれをただ練習といていたが、意識してやっているなら何度も試行錯誤していたはず。彼はなんと言うこともなくやってのけた。

剣技や魔法力を高める努力はすごい物だったがメイジの技に関してはそれほど努力をしていなかったように見えた。何で出来ないのだ？そんな目で私を含めた同僚を見ていた。あの目は私は忘れない。だからこそ軍を諦めた、そして王都でくすぶっていた私をオールド・オスマンがスカウトし、ここの教師になったのだ。

ギターは他にエアーカーターのについても、秘かに（プライドの問題その他から）試してみたのだった。その結果、確かに傾ける時に意識して向きを小まめに変えていくと意外と旋回半径を小さく出来る事に気が付いた。

威力のあるエアーカーターであれば速度も高く追尾させるときに旋回半径は大きくなる為、軌道を読めれば意外と躲せる・・・ただしそれは高位の風同士での話なのだが、感覚が鋭敏であれば躲してしまいうメイジもいるのだが、これであれば躲しづらいと思えた。

これによりギターは、コルベルやシュヴルーズの言っていた、東方から来た舞華はハルケギニアのメイジとは別の感覚で魔法を行使している。それは、我々にとっても有意義な考え方をしている。そう言った話を実感として理解したのだった。

そしてそれは、才人に対する見方も変えていったのだった。

最初の頃と違い知れば知るほど、不思議な。と言っているのか、

効果を表すハルケギニアの魔法について、舞華は他人の魔法の流れを真似るだけではハルケギニアの魔法は同じにならない。

このことに関して、ガンダールブのルーンをいまいち信用しきれしていない才人と言い、やはり結果が同じにならないと言ふ事からハルケギニアの魔法についてどこか釈然としない物を感じる舞華とは、似たもの兄妹なのだろう。

そしてある一定のプライドや技術、自負心を持つ教師にとって、学生とはいえ自分の教えに対して真剣に向かってくる舞華は今までと違う気持ちで持って学生の待つ教室に向かうのであった。

そしてその一人であるミスタ・ギトーは、特に最近授業態度の変わってきた何人かの生徒も含めて、今日は自分の持つ最高と信じる魔法を生徒に見せようと、朝から意気込んでいたのだった。

そして、二年の学生が待つ教室の扉を開け、中へ入っていった。

36 学院の日常・3 (後書き)

男爵様から指摘のあった稲と麦の受粉の話ですが、取敢えず今回で修正をしました。

ご指摘ありがとうございます。

これから収穫量を増やして、品種改良をして・・・小麦なので年二回の耕作を行うと言う、チートですがそれでも、トリストインでの農業に

影響が出てくるのは早くて後六年後ぐらいでしょうか？芋や豆類は後数年で

何かしら影響が出るのでは？そう思っています。取敢えず、今年起きるイベントには

何も影響を与えないだろうと思っています。

ただ武器類はいくつか、例えば紙で作られた銃弾（薬莖）、黒色火薬を使った物が

初期のポルトアクションの銃であったそうなので間に合うかな？と思っ

色々考えています。

知らなかったのですが幕末の日本で量産してたそうですから、なんとかなるかな？

困ったときは舞華さんに・・・メアリー・スーと化していますね。

無理しない程度に・・・もうしていますが、シュブリース先生、コルベール先生、

ロングビルさんの三人で開発して、それを、ヴァリエール家他で生産に移せれば

何とかなるかな？なんてお気楽に考えていますが・・・やっぱり無理かな？

誤字脱字などありましたら、感想共々よろしくお願いします。

37・姫さまの訪問（前書き）

仕事だなんだでずいぶん間があいてしまいました。

毎日少しずつでも書いておこうと思っていましたがなかなか進みません。

元々書き溜めていた色々なメモ的な物をつないでいだけなので書いた時期が

前後したり、原作も進んで行ったり早この段階で矛盾だらけになりそれを修正していくのがして結構面倒だったりします。

一応VS七万の後で終わる予定の話なので急がずに書いて行こうと思っっています。

37 姫さまの訪問

ミスタ・ギトーは不機嫌だった。

自分は朝から今日の授業の予行演習をしていた。そして完璧な体調と精神の状態を持って、今日の授業を迎えたのだった。

それをいよいよ自分の最高の風の魔法を行使しようとした矢先に・
・。

『姫さまの学院への訪問』

学院としては最高の名誉であり、自分の授業を潰されたのでなければ、自分もそれを名誉として受け入れられただろうが、よりによってつぶれた授業が自分の・・・それも・・・理解はするが感情は納得できない。

そして浮かれる学生の中で何名かの学生は残念そうにしていた。その中に学内で一番小柄な女子生徒がいた。

ギトーはなぜか、今日の借りは何時か返す。そんな気分になっていた。

ミスタ・ギトーのホンの鬱憤晴らしが、自分の授業を潰した、ミスタ・コルベルがかつらを滑らせ、最前列の二番目に小柄な女子生徒に突っ込まれたことであつたが・・・
意外とこの人って小物？

学院の玄関前に緋色の絨毯が敷かれ、その先は王女の乗っている馬車の扉まで続いている。

馬車という言い方は果たしてこの場合正しいのだろうか？馬車を引いているのは馬ではなくユニコーンであった。

ユニコーンは王女の純潔の証であり、その背には処女しか乗せないといわれている。

馬車の扉から降りてきた王女は、正しくユニコーンにひかれる馬車に乗る事に相応しく思えた容姿をしていた。

もともと最初に下りてきたのは『鳥の骨』と呼ばれるこのトリステインの宰相であり、俗世を離れたところでは枢機卿と呼ばれるプリミル教の、立場で言えば上から数えた方が早いくらい高位の人物であった。

そういう立場の人間が降りてきたときの学生の反応はブーイングに近い物であり、国のトップに近い人物でもあり、宗教的にもトップに近い人物に対するものとしては、なんだこの反応は？才人は驚いてしまった。

思わず一瞬周りを見渡すと、学年に関係なくそれなりの貴族は心の内はともかく、敬意を払っている様子であった。もちろんルイズを始めとする古参や重要な地位にいる貴族の子弟はさすがに礼を失することは無かった。

その直後、ルイズは少し顔を赤らめると食い入るように王女の一行を見ていた。

才人と舞華はルイズの様子に気が付きルイズの視線の先を探し、その視線が一人の立派な貴族を見ている事に気が付いた。

良く周りを見てみると女子生徒の何割かは王女ではなく周りを護衛しているその貴族を中心としている一団に見惚れている事に気が付いた。

更によく見てみると、男子生徒の中にも彼等を、そう、野球やサッ

カーのスター選手を見るように見ている事に気が付いた。

才人も舞華も彼ら護衛についている貴族はメイジの中でも特別な存在なのだろうと見当をつけた。

そしてキュルケもルイズと同じ貴族の若者を見ている事に気が付いた。

きつと様子から独身のエリート貴族なのだろうな。と見当をつけ、おそらく王女の護衛なので実力・・・おそらく魔法やひよっとすると彼等が剣を持っていることから、魔法だけでなく、自分達の世界の特殊部隊のように格闘術や剣技に於いても一流なのではと思ってみた。

因みに相変わらず青い髪の少女は座り込み、周りの様子はどこ吹く風で読書にいそしんでいた。

彼女に才人は、頭を撫でながら、読書は悪いことじゃないけど、他国とはいえ、礼儀はちゃんとしておかないと、いざって時に困る事もあるかもしれないよ？そう言って王女の一行に目を戻した。ちらっと才人に目をくれると黙って立上り、周りの生徒と同じように杖を上げ歓迎の姿勢を見せたのだった。

その夜、ルイズは自分の部屋で才人と舞華と一緒にとりとめのない話をしていた。授業がつぶれて自由時間になってからずっとだ。

授業が半端につぶれた後、授業がないからと言ってこんな時に、学院のいつもの警備の衛士だけであればまだしも、王妃の護衛と一緒に学院の警備をしている現在、目に付くような行動をとるわけに

はいかないため、学院を出てトレーニングやらなんやらという訳にはいかないからだ。

それにルイズは王妃から使い魔の関係で色々お願いされている。何かしら呼び出しがあるかも？といった感も有り、こうして才人達といたのである。

「これだけ時間がつぶれるなら、キュルケさんやタバサさんやモンモランシさん達を呼んで勉強してればよかったですね」

舞華がお茶を飲みながらルイズに話しかけた。

「そうよね。それにしても舞華の持ってきたお茶ってあそこで育ててるんでしょ？最近東方から輸入されてる『お茶』と同じものなのかな？」

「『お茶』ですか？」

「『カフェ』という物が最近トリスタニアに出来たそうよ？今度の虚無の日にも行かない？」

「どんなものか飲んでみたいですね」

「『カフェ』はお茶だけじゃないよね？他に何か食べ物とかもあるの？」

才人が興味を持ったように話しかけてきた。普段舞華とルイズが魔法や科学以外の話のときは黙っているのだが、珍しく口を挟んできた。

「ケーキがおいしいらしいという話だね。クックベリーパイも有るか

しら？」

「ケーキは別腹。っていうけど、本当にルイズは好きだな」

「な、なによ。好きなんだからいいじゃない」

「そつだな、今度何か作るうか？」

「やったー。じゃ、次のダエグの曜日をお願い」

「まてまて、材料から揃えなきゃいけないんだぞ？マルトーさんに相談してからな」

「お兄ちゃん、もち米と餡子がまだ作れるからおはぎ作るうか？」

そんな話をしていた時、ルイズの部屋の扉をたたく音が聞こえた。長く二回ノックし、次に三回短くノックする。まるで合図のように。

それを聞いたルイズはハツとし、身だしなみを急いで整えると、扉を開けた。

入ってきた人物は黒い頭巾をかぶった少女だった。

辺りをうかがうように部屋に入ると、素早く扉を閉め、『ディティクトマジック』を唱えた。

「妃殿下！」

ルイズが膝をつき、才人と舞華もそれに倣う。

「久しぶりねルイズ。それにサイトさんにマイカさん」

「姫殿下このような所に・・・」「お久しぶりです」

「ルイズ、あなたと私はおともだち、おともだちじゃないの」

「ここには枢機卿も母上も宮廷貴族もないのよ！堅苦しい挨拶は
必要ないわ！」

「姫殿下・・・」

「貴方は忘れたかもしれませんが、一緒になって宮廷の中庭で蝶を
追いかけたじゃないの！泥だらけになって！」

「・・・ええ、お召し物を汚してしまって、侍従のラ・ボルト様に
叱られました」

「そうよ！そうよルイズ！あなたまでがよそよそしい態度を取られ
たら、私には心を許せる友達は無くなってしまっわ！そうしたら
わたくし死んでしまっわ！」

姫さまがそう言うのと二人は見詰め合いしばらくするとどちらともな
く笑い出したのだった。

「ああ、ルイズ！昔を思い出して涙が出てしまっわ」

「姫さまがそんな昔のことまで覚えてくださっていただけで、感激
です。とっくに忘れていらっしやるものと思っていました」

「忘れるわけじゃないあのころは毎日が楽しかったわ。何も悩みもなく」

「姫さまどうされたのですか？」

ルイズはどことなく不審げな感じで姫さまに問いかけた。

「ルイズ。私、・・・結婚するのよ。ゲルマニアの皇帝の元へ」

「・・・おめでとーございます」

どことなく沈んだへ目さまの声に、ルイズは素直に祝福することが出来なかった。

しかも嫁ぎ先がゲルマニアの皇帝の元へだ。

恐らく今回の婚姻は対アルビオン、いや、対レコン・キスタ対策なのだろう。

昔、アルビオンにレコン・キスタが勢力を拡大するようになってからハルケギニアの王権を持つ国家へ、また、プリミル教を信奉する国家へ、レコン・キスタはプリミル教による統一軍により、エルフにより奪われた聖地へ進撃し、取り返そう！と檄文が走っていたことを、聖戦を始めようと伝えていることをルイズは知っていた。

もちろんこれまでのエルフの守る聖地への過去の軍事行動がすべて失敗に終わり、その余りの被害の大きさから、各国ともそれを無視しており、王権を持つ三ヶ国、アルビオン、トリステイン、ガリアにより対レコン・キスタ同盟が結ばれていた。

しかし、それは形だけであり、風評ではアルビオンはもう王軍は敗北するといわれていた。そしてレコン・キスタの次の目標はトリステインと言われていた。

アルビオンの貴族がほとんど参加しているレコン・キスタには、トリステインはまず勝ち目がないといわれていた。

プリミル教の教義からレコン・キスタの掲げる聖戦にはプリミル教による国家であるロマリアは表立って反対することは出来ず、精々プリミルに授けられた王権を戦いで失うことは望まないという教皇の談話としてレコン・キスタへ伝えるのみであった。

また、レコン・キスタへはトリステイン、ガリア両国の一部貴族が影から支援しているとも言われていた。

そして、自分の使い魔もトリステインの危機を感じていたではないか。

「姫さま、ゲルマニアへ嫁ぐこと以外にも、何か心配されるようなことがありなのですか？」

「ルイズ。おお、何という……始祖プリミルよ……この不幸な姫をお救いください！」

「姫様この婚姻を妨げる何かがあるのですか？ 言って、姫さまの婚姻を妨げるものを！」

「……私がしたためた一通の手紙なのです」

「それはどのような内容の手紙なのですか？」

「・・・言えません。しかしそれがゲルマニアの皇帝が読めば、ゲルマニアの皇帝は怒り、婚約を破棄してしまうでしょう。そうなれば、あの強力なアルビオンにトリステインは一国で対峙しなければなりません。そうなつては、トリステインは破滅です」

「それは今どこに？」

「アルビオンに・・・」

「では、その手紙はすでに敵の手に・・・」

「いえ、それはアルビオンのウェールズ王子が持っているのです」

「あの、りりしい王子さまが？」

「ああ、でも、アルビオンは今にも王家が全滅するとか・・・そしてその手紙が敵の手に渡ってしまえば・・・トリステインは破滅です」

二人の半端演劇のような会話が続けている。しかし内容は・・・なんか、とんでもないことを話している。普通に考えたら恋文レベルの事か？舞華の顔も何気に厳しくなっている。

纏めると、現在アルビオンでは王党派とレコン・キスタと自称している貴族派とが争っていて、まず間違いなく王党派は負ける。そして、トリステインは次の目標にされているのは、衆目の一致す

る所。ここまででは俺達でもわかる範囲の話、だから今更ながら、この世界に残る事に決めた（戻れない&別世界に移動できない訳だし）俺達は少しでも平穩に生きられるように、この国へ微力ながら何かできないか？と、やれそうなことをルイズの母ちゃんにお願いして色々している。

まあ、この姫さまの願いも有ったわけだが・・・流されてる。ともいうかもしれない。

ここで姫さまがばらされると非常にまずい内容の手紙多分様子から恋文？をアルビオンに送ったらしい。それも相手はアルビオンの王子みたいだ。

それは今の所レコン・キスタというアルビオンの貴族派とってたな、そちらの手に渡っていないらしい。しかし万が一にもそれが敵の手に渡り、姫さまの婚約相手であるゲルマニアの皇帝に渡るとゲルマニアとの間に結ばれる予定の同盟が破棄され、そのままトリステイン単独でアルビオンとの戦いに突入する。という訳か。

なんか次から次へと・・・ルイズは手紙を取り戻すと姫さまに訴えているが・・・どう考えても無理だろう。戦時下の都市へ、それも負け戦の最中の相手の所へ・・・。

どうやってそこへ行くのか、おそらく今の状態ならこっそり潜入か敵である貴族派の占領地へ戦時物資輸送目的の空飛ぶ船に乗って・・・それからそこを抜け出し、王党派の・・・相手は王子様なら本拠地だよな。入れてくれるか？今さら手助けしてくれない同盟の使者なんて相手にされるか？それもある意味手切りのためだ。普通に考えて友好的に接してくれるわけがない。

どう考えても無理だよなあ？舞華は半端睨みつけるようにルイズを見ていて。あの顔つて、単純に怒ってないなあ？

何に怒っているんだ？友達と言いながら死地ともいえる所へ地位を（と意識していなくても）利用したお願いにか？

やっぱりルイズは行くと言うか。後先考えないのが、らしいといえづらいけど、それじゃあ無駄死にするな。俺と舞華にルイズじや相手があれば気がするのに、いなければ余計にだな。どうしよう、俺と舞華はそう簡単には死にそうにないけど、ルイズはそうはいかないからなあ。

「アンリエッタ姫さま」

舞華が姫さまに話かけ始めた。

「マイカ。失礼よ！」

「ルイズいいのです。ミス・マイカなんでしょう？」

「姫さまが・・・王家の人だけじゃなく相手とある程度地位の差があれば、自分がこうしたい。と思う事は、実際にはお願いじゃなくて命令になることを解ってお話しされていますか？」

「なんですって?」「マイカやめなさい！」

「ルイズさんに、愚痴を聞いてほしかったのかもしれませんが、ここまで機密に類することをお話されるという事は、それを聞いた人は特命を受けたに等しいのですが、わかっていらっしやいますか？」

「・・・」

「もしルイズさんが、それなりの地位を持ち、確かにルイズさんは公爵家令嬢ではありますが、三女でありただの学生です。力があれ

ば実力ある家人や配下の者に命令を下し、もしくはそう言った専門の者を使う事で問題を解決できるかもしれません」

「しかし、ルイズさんはそれらは無理です。そうなる後は本人が現地へ向かうだけです。拒否は王家との関係から考えても有得ないでしょうから」

「そうなるとう度はルイズさんの現地での実力になります。公爵家の係累ともなれば使者としては問題ないと思います」

「しかし、これが平時の使者であれば供回り数人で行くことも問題ないでしょう。ご機嫌伺いでもすれば公式にしても構わないですから、理由は何とでも付きます。しかし、今現地は戦場になっていると聞きます。学生がこのこ行ける所でしょうか？」

「同行者は誰を想定していますか？ルイズさんにお兄ちゃん、それにわたしくらいはついていきます。しかしそれでは、現地の事情に疎い私達では同行者としては色々な意味で不足しています。最後までルイズさんと一緒に使者としてその王子様の所に案内できる実力を持った人が必要です。いざとなれば私たちが囿となって動く必要がありますから」

そう言うつと舞華は姫さまとルイズへ俺が考えていたことをほぼ同じことを考えていた。そして最悪、敵地から王子様の居る所へ潜入しなければいけない。その時には俺と舞華が囿になると言い切ったのだった。

姫さまとルイズは絶句していた。いや普通に考えればそうするしかなかないような気がしていたのだけれど、舞華に言われて初めて気が付いたのだろう。

姫さまは、声を・・・呻くように、それに付いては当てがありません。と言っていた。そして舞華に確かにそうでした。私の立場であればお願いであっても命令になってしまうのですね。そう言っていた。

舞華はそれに続いて、仕方ないのかもしれないでしょうが。やお怒りになられるでしょうけど・・・等と言いながら、今更ですが姫さまは何かしたいと思えばそれをするための人を、信用できる人を作らなければいけません。そう言いい、姫さまは自分で何かしたくても周りが許さないでしょうし、自分で何かするための事より、させるように教えられてきたはずですから。

そう言つて、それを作つてこられなかったのはやはり怠慢だったとお思います。

そう言つと。このまま変わらずに嘆いてばかりでは、ルイズさんがいなくなった後はどうなさるのですか？そう言ったのだった。

深読みすれば、三人とも死んでしまうという事なのだが、ルイズも姫さまもその真意に気が付いたようだった。ルイズは姫さまのためなら死んでも、なんて言っている。それを聞いて舞華は完全に機嫌を悪くしている。姫さまは舞華の言いたいことが分かったようだった。

姫さまは、舞華と俺に、ルイズをよろしくお願いします。そう言つた。

その時、俺と舞華は気配を感じた。この気配は・・・失敗したかも知れない。

俺はスキルをいくつか唱えると気配を消して扉に素早く近づいた。

38 姫さまの依頼

才人が気配もなく扉を開けると、思った通りギーシュが扉に引かれるように転がり込んできた。こいつに気配を消す訓練をつけたのは俺なんだよな。

やっちゃった。という顔をして才人は顔をしかめた。

「ギーシュ！あんだ、女子寮で何やってるのよ！」

ルイズが喚いていた。舞華は俺が扉を開ける直前に部屋から音が漏れないようにサイレントを掛け物音を遮断した。

ギーシュは、

「姫殿下！、その困難な任務、是非ともこのギーシュ・ド・グラモンに仰せつけますよう」

姫様は展開の速さに混乱しているようだった。

「あなたは？」

「はい、姫殿下。私はギーシュ、ギーシュ・ド・グラモンといいます！」

ギーシュといいルイズといい会話の内容を聞いていたのであれば、いくらサイレントをかけたからといって大声を出しても良いわけではないのは判るだろうに。

最も二人ともサイレントを掛けた事自体気がついてなさそうだけど。

「グラモン、あのグラモン元帥の？」

「息子でございませう。姫殿下」

ギーシュはそういって恭しく一礼する。

「あなたも私の力になってくれるというの？」

「任務の一員に加えてくださるなら。これはもう、望外の幸せにございませう」

ルイズは才人と舞華のほうを盗み見ている。

さすがにギーシュには心配をしているようだ。まあ、才人は訓練と一緒にやってきた事も有るので弾除けにはなるかな？と、ひどい事を考えている。

王女から命令されているのであれば、参加させなかったのだろうか、自分から会話を盗み聞いて参加を表明しているのだ。才人にはとめる権利がないと判っている。ギーシュの判断が甘ければそれは自分の命で払えばいいだけだと、冷たいがそう判断している。

舞華は納得できないところも有るが、ギーシュが自分で言っているので表立って反対はしない。ただし、顔にははっきり反対という字が出ている。

ルイズは何時にない舞華の厳しい顔におどおどしている。

そして結局四人はアンリエッタ姫から手紙の回収という任務を引き受けたのだった。才人はアンリエッタ姫から最悪のことを考えてこの四人に加えて実力の有る協力者の参加に念を入れてお願いしたのだった。

行き当たりばつたりの計画で上手くいくとは到底思えなかったための保険というか、最後は力押しになるだろうな。と想像したからだった。

この夜は五人目の参加者は誰かはわからなかったが、姫様は明日の朝に必ず馬小屋の前に現れることを説明するとそのまま宿舎にっている学院のゲストルームへ戻っていった。

才人たちも自分達の部屋に戻ると舞華と打合せを始めた。

「なんだかんだで俺達流されてるよな？」

「アルビオンに行くこと？」

「そそ。姫さまの言う事もわかるし。立場もわかるけど頼れるのがルイズって・・・ルイズの父さんや母さんにはれたらえらいことになるぞ」

「そうだね。それでもお兄ちゃんに行くことにしたんでしょ？」

「使い魔だしな。養ってもらってる義理は果たさないと。それより舞華も本当に来るのか？無理しなくてもいいぞ。手紙もらってくるだけなんだから」

「でも、姫様が協力者を呼んで来るんでしょ？ワイバーン召喚してピツと行ってピツと戻るわけにはいかないかも？」

「あんまりそういった人たちの前でワイバーン見せないほうがいいのかな？」

「なんとなくそう思う。だから私も行くよ」

「本当にいいのか？」

「うん。それに気になることがあるから」

「なに？」

「ロングビルさんから話聞いているんだけど、手紙もらう王子様の方ね。なんかもう負けそうなんだって。後いくらかも・・・一週間持たないって」

「ええ。そんなの聞いてないよ。まだしばらくは持つと思ってたんだけど」

「それでね。空軍っていうのかな？空飛ぶ船の軍隊ね、丸ごとレコン・キスタに寝返ったんだって」

「船が全部？」

「そそ。ロングビルさんもおかしいって言ってたよ。あちこちに有る部隊が一斉に寝返って今は王子様の方に有る船は一・二隻だけだろって」

「あっ、ちゃあ〜」

「でね、お兄ちゃんも聞いてるだろうけど、アルビオンに行くのに船に乗っていくから、ひよっとしたら船を相手にしないといけないかも?」

「対空ミサイルなんて無理だぞ、持っていくの」

「だよ。でね考えたんだけど、聞いてくれる?」

「何?」

「私がお兄ちゃんの武器と防具持って行ってお兄ちゃんは銃とナイフ、それに弓ならどうだろう?」

「???」

「わしはお嬢ちゃんに持っていかれるのか? 反対するぞ断固反対!」

「デルフさんはお兄ちゃんの背中だよ。私が言ってるのはお兄ちゃんの武器を魔法剣にして盾二つ、鎧とローブそれに片手杖を私が持つていくから。それで二人分になるよね?」

「ブーツやガントレットは?」

「それも私が持つからお兄ちゃんは魔法防御のアクセサリーは付けて、後はさっき言ったように銃と弓を持っていけば? 私はルイズさんと同じタクト型の杖を持っていくから見た目の武器はお兄ちゃんは弓とナイフで私は杖だから。あ、デルフさんもね」

「なんかわしの立場って・・・」

カチヤン。才人がデルフを鞘に収めた。

「何かあつたら武器を差し出して油断を誘つのか」

「そうそうスクロールとポッド《回復薬》もいくつか持っていていけば何とかやり過ごせるかも」

「そういうからには銃にも何かあるんだろ？」

「えつとね色々考えたんだけど最悪、今度は久しぶりの戦争になると思うの」

「それは、・・・確かにそうだな」

「それで相手は人に亜人、最悪は船も」

「それで？」

なんか嫌な予感がする・・・

「対物ライフルがあつたでしょ？あれなら船を牽制できるかも？」

「対物ライフルって、あれ？あれは、使えるけど弾薬とか重量とか半端ないぞ。それにそれだけ持つていくわけにもいかないだろう？」

「だからね、HK417ってM24と同じ弾丸使うライフルがあるから」

「なんで？UMPとかじゃだめ？」

「亜人つて二丁三マイルある大型で人型の・・・熊の頭いいやつだ
と思うから・・・」

「弾が当たっても下手すると見境なく暴れるくちかも？って心配？」

「そうなの。それとM4と同じグレネード使えるし、ある程度狙撃
も出来ると思うよ」

「それに拳銃と銃剣か。なんだか重そうだな」

「だから他の武器は私が持つからね。本当は初めから鎧と盾に剣が
いいと思うけどルーンが暴走すると後が大変でしょ？」

「あちゃ〜。完全に忘れてた。戦場で暴走するわけには行かないよ
な」

「うん。だから考えてみたんだよ」

「・・・ありがとう。じゃ、それで行こうか」

才人も舞華も何か勘違いしているのだ。ちゃんとした軍事教練な
どを受けていないため、自分達が普段どれだけの重量物を持って学
院をうろつろしているのかわかっていない。

普通、軍でも行軍の際は四十キロぐらいとか、武士の鎧がそれぐ
らいとか言われているのに、更に自分達の体格・・・才人は十六歳
(もうじき十七歳になる前に召喚)舞華は十三歳で、才人は身長百
七十センチ(約170cm)体重約六十キロ。舞華は百四十七サン

ト体重四十キロ程度。普通はそんなにもてない。
エルモア・アデンで周りが周りだったうえに、携行重量が少なめだったが実際その年とその体格でそれだけ持つのは異常だし、それだけ持つての行動の素早さにいたっては、もう何も言えない位のチート状態である。

ただ二人の暢気さは魔法を使える人はこれ以上を普通に持てる。そう思っていることだったりする。

で、今回二人の携行する物は・・・舞華が考えたのだがもちろん舞華は銃の威力を知っているわけではなく自分達が持ってきた中からこれまでの経験からこれがよさそう。そのレベルで選んだだけだったりする。

亜人がエルモア・アデンのモンスターと同程度の敵と認識しているため、小さな銃弾はそれほど威力がないと判断。

もちろん実際は違うのだが、経験のみしか頼る物のない二人にとってこの判断は絶対だったりする。

後にハルケギニア製の銃を使うようになってからこの考え方を改めるのだが今はこの考え方しか出来なかつたりする。

才人は舞華の言うとおりHK417とバレットM82それに舞華と同じP230JPという名前の拳銃。それにデルフを背中に背負い、弓を左手に矢筒も背中に背負っている。一応魔法よけのアクセサリーを装備し、予備の銃弾もポッケにいれている。

ルーンのお陰で多分これらの装備も使えるだろう、ただ使い慣れない武器というものはルーンの手で問題なく使えるというのがわかっているのに何か不安が有る。

舞華は才人の重鎧一式と自分のローブ一式、それにいつものVZ61とP230JPという銃の組み合わせ。本当は見かけ以上に体力が付いていて、才人とほぼ同じ銃が使えたりするが二人ともそれに気が付いていない。あとは、それに魔法剣と杖それに見せ武器と

してのタクト状の杖。後は才人の銃の予備の弾薬。結構二人とも一杯一杯の携行重量だったりする。それでもエルモア・アデンの普通のナイトやなんかだと二人の倍の装備重量だったりする。

ルイズも最近になりシエスタと一緒に拳銃やら小銃の練習したりするのだが、まだ十分扱いに慣れていないので今回は持っていないことに決めている。

舞華は才人と一緒にスキルを使って姿を隠し、普段は城の警護をしている騎士達の目の前を堂々と抜けてハウスマで行き、そこで装備を整えまた戻ってきた。

ルイズには姫様が退室してから大体のことは話をして有る。ラ・ロシエール迄馬で移動し、そこから船でアルビオンへ移動。おそらくそこは貴族派の支配下に有ると思われるので、そこから貴族派の軍の薄いところについて王党派の支配地域へ侵入するというものだった。

ただ薄いといっても王党派の支配地域がかなり少なくなっているので、どうやっても貴族派との戦闘は避けられないであろう。と考えられるので、才人と舞華が状況次第で貴族派に喧嘩を吹っかける場合によってはギーシュも含めてだ。

そうして、その間にルイズと姫様が派遣してくれる協力者が侵入することになる。それを確認したら騒ぎを起こした才人と舞華は各々

脱出することになる。

策でもなんでもない。ただ、こうなったらいいな。程度の考えではない。

後、姫様にも才人と舞華の魔法やスキルに関しては詳しく説明していない。ましてやルイズの召喚した使い魔がガンダールヴということもだ。なので、姫様の協力者についても、もちろん正体を話さないということである。

特にルイズがガンダールヴを召喚したと言うのは絶対に才人がガンダールヴとばれてもらわなければくれる様に言い含めている。今の王家に反対する立場、つまりは貴族派が王家打倒の旗頭に使われる可能性が有るからだ。

ルイズはそのことを才人と舞華に言われて身震いしていた。ブリミル教の支配するハルケギニアの特異性から言って、ガンダールヴを召喚したルイズとアンリエッタ姫とどちらが王家の正当性があるか？なんて事になれば国が割れる可能性が高いことに思い当たったからだ。

才人は将来のことはわからないが、今は姫様を助けないと。そう言っただけそうなるルイズの頭を撫でていた。

翌朝、馬小屋の前にはルイズ、才人、舞華が馬にまたがりギースユともう一人の同行者を待っていた。舞華は馬に負担がかからないように、補助魔法を、今回は重量軽減、移動速度上昇、体力回復の魔法を随時掛けて行く予定にしている。

ルイズやギーシュと違い才人と舞華は人間で言えば三人分に近い重量になっているのだから。そして今回は今までハルケギニアに召喚されてからは使わなかった、補助魔法の力のこめられているスクロールを準備していた。舞華が魔法をかけられない場合、例えば貴族派に囚われている時にこっそり掛ける必要が有るかもしれないと、勘でだが各々持ってきていた。

二人の服装は舞華はいつものセーラー服だが才人は少し前に王都で購入した少し値の張る平民の服だった。いつものジーンズにパーカーや学生服では目立ちそうだったため、これなら馬に乗っていてもそれほど違和感がない。舞華はセーラー服だがマントを羽織っているためこちらでも違和感があまりなかったりする。

ギーシュが才人に話しかけてきた。

「サイト、僕の使い魔を連れて行っていいかな？」

「別に邪魔じゃなければいいんじゃないか？」

「ありがとう、じゃ、一緒に連れて行くよ」

「連れて行く、ってどこにいるのよ？」

ルイズが半端呆れたように尋ねてきた。

「1111」

ギーシュは地面を指さした。

「「「」」」」

ギーシュは悪戯を考え付いた子供のような顔をして、地面を足でコンコンというように叩いた。すると、地面が盛り上がり、ギーシュは腰をかがめ膝をつくと地面から出て来た茶色の大きな生き物を抱きしめた。

「ジャイアント・モールじゃない。あんたの使い魔ってジャイアント・モールだったの？」

「ああ、そうだよ。ヴェルダンデ！ああ、僕の可愛いヴェルダンデ」

ギーシュは使い魔の紹介もそこそこに、使い魔を抱擁している。いや、悪くわないけど……。ヴェルダンデと聞き、よく読んでいた漫画雑誌のヒロインの女神さまを思いだし、そして抱き合っている二人？を見て、何かため息が出るのだった。

「ねえ、ギーシュ。やっぱりダメよ。ジャイアントモールは地面の中を進んでいくんでしょう？ 私たちは馬で移動するのよ？ それに聞いてたでしょう？ 目的地はアルビオンなのよ。どうやって地面の中を進んでいくジャイアントモールが空の上のアルビオンへ行くの？」

ギーシュはがくつ、と膝をつくと再びヴェルダンデへ抱きついた。

「お別れなんて、つらい。つらすぎるよ……。ヴェルダンデ……」

「

そんなこんなしていると、ヴェルダンデが鼻をひくつかせると、やにわルイズへのしかかっていた。

「おいおい、お前と一緒に女好きなのか？」

あわてて、ヴェルダンデを引き剥がそうとする才人だったが、何気に毛並みの良いヴェルダンデは掴みにくい。そうこうするうちにヴェルダンデがルイズの指に光る水のルビーに鼻をすり寄せて行った。

「なるほど指輪か。ヴェルダンデは宝石が大好きだからね」

「でも、何とかしないと、ルイズさん怪我しますよ」

「仕方ない、舞華。レビテーションでモグラを浮かせて」

「あ、はい」

舞華がヴェルダンデにレビテーションを掛けようとしたとき、舞華が杖を止めた。

風がヴェルダンデを巻き上げた。慌てて舞華がヴェルダンデをレビテーションで受け止め静かに地面に降ろした。

「誰だっ！」

霧の中から馬のような、翼の生えている……よく見ると四足だが、驚の後ろに馬の後ろ半分をつけたような姿を、更によく見ると馬というよりは虎かライオンの様な感じだが幻獣という物だろう。その幻獣に乗騎しているのは、長身の立派な身なりをしているマントを羽織った青年の貴族だった。

「女王陛下の魔法衛士隊、グリフォン隊隊長、ワルド子爵だ」

長身の貴族は帽子を取りながらそう自己紹介した。

ギーシュは何か言いたそうにしていたのを、彼の自己紹介を聞いて黙ってうなだれている。

「すまない。婚約者がモグラに襲われているのを見て見ぬふりはできなくてね」

えっ。という顔をして舞華がワルドと名乗った貴族を見る。そして、ルイズを見る。

ルイズが顔を真っ赤にして俯いて小さな声で、

「ワルドさま……」

立上ったルイズにワルドは近づくと、

「久しぶりだな！ルイズ！僕のルイズ！」

ワルドは人なつっこい笑みを浮かべると、ルイズに駆け寄り、抱き上げた。

「お久しぶりでございます」

「相変わらず軽いなきみは！まるで羽のようだね！」

「……お恥ずかしいですわ」

「彼らを紹介してくれたまえ」

「あ、あの・・・ギーシュ・ド・グラモンと、使い魔のサイト、それにサイトの妹のマイカです」

「はじめまして」「よろしくお願いします」

「ねえ、サイト。お母様相手だと、マイカでも疲れてるんだね」

またとんでもないこといいだしてんな。と思いながら才人が応じる。

「ルイズの母さんだからじゃなくて、大勢の人に責任あるから準備やらなんやらで頑張ってるんだろうな」

「そうなの？」

「食べ物を作るんだから。それも大勢の人に影響あるようなことをね。お金もたくさん動いているんだろ？」

「そ、そうね。だけどマイカ、大丈夫なの？前に聞いたけど魔力があると体力に替えられるから寝る必要ないって・・・」

「前の世界で寝ても四時間くらいかな？平均三時間くらいだったはずだよ。ここに来てからは寝なくてもいいか寝ても一時間くらいだったからな。あんなのは久しぶりに見たよ」

「なら、すごく疲れているのね」

「今のところは、少し頑張って夜更かししてる程度だからな。もっと無理するようなら止めたりするけどな」

舞華と才人がそれぞれ挨拶をする。婚約者と言つものには驚いたが、中世に近い世界で、貴族であればそういったことも有るだろうと理解した。

何しろ自分達が住んでいた日本であっても、昔のそういった時代では、十代に入ったところでの婚約どころか結婚すら当たり前だったのだ、そういった知識としては知っていたし、エルモア・アデンでもヒューマンであれば、寿命的な意味からもそれは当たり前のことだったのだから。

結果、二人はルイズの婚約者は将来自分達の生活に何かしら干渉が有るだろう。そう考え、できればその干渉がよい方向へ行くことを願ひ、ワルドと名乗った貴族へそれなりの対応をすることとなったのである。

一方ギーシュはまだ衝撃から立ち直れないようであった。

「どうした？もしかして、アルビオンへ行くのが怖いのかい？なあに！何も怖いことなんかあるもんか。君だってグラモン元帥のご子息なんだろう？君の兄上がどれほどの人物かを僕は知っている。君に流れている血筋と言う物を信じたまえ。きつと無事に任務を遂行できるさ！」

そういうと、あっはっは、と豪傑笑いをした。

へえ、と才人は思った。この人はかっこの付け方を知っているな、と。トリステインの貴族は演劇でもするように話をしたり、身振り手振りも大げさだったりする。

結構な貴族は自分の見えかたに気をつけているが、自分自身がどういったものか判っていないと思う人が多かった。特に若いギーシュなんかは。

この人はひげを蓄えて若さで軽くなりがちな部分を押さえて、それでも若さから来る快活さで周りの雰囲気を作るのだろう。

見た目より若くて二十五歳前後かな？とも思える。それで隊長なんだからたいした人物なのだろうな。そっかルイズの家は公爵家だから家柄か将来性の有る人物かを選んでるんだろうな。この人は後者か、子爵だけどこれから上にながって行くんだろうな。

ルイズは三女だからこの人がヴァリエール家を継ぐわけじゃないよな。などと考えを巡らして行く。おそらくこの分じゃ、いくら使い魔とはいえルイズについて彼の家に行くわけにはいかないよな。やっぱり学院をルイズが卒業したら、独立してどこかに家を構えて商売でも始めなきゃな。などと妄想に入っていたのだが、

「お兄ちゃん、お兄ちゃん」

「あれ？何？」

「何じゃないって。いい加減出発しましょう」

「だな」

俺達は馬にそれぞれ乗ると出発できるように準備をした。それを見てワルド子爵が、おいで、ルイズ。といいルイズを抱え、自分のグリフォンに乗せた。そして杖を掲げ、

「では、諸君出発だ！」

グリフォンが駆け出した。見るとギーシユのヴェルダンデが地面にもぐつていく。SFXでもかかっているようにあつという間に地面に穴を開けてもぐつていった。おそらく地面の中を進んでギーシユに付いて行くのだろう。

才人と舞華も二呼吸ほど遅れて出発した。

アンリエッタは出発する一行を学院長室の窓から見つめていた。

「彼女たちに、加護をお与えください。始祖プリミルよ・・・」

アンリエッタは同室しているオールド・オスマンへ見送らないのですか？そう問うと、オスマンは、もう始まってしまった物はわしらが何を言っても始まりませんのじゃ。

後は彼らの努力に期待しましょうといい。その為にあなたも彼を彼らのために付けたのでしよう。と言ったのだった。

38 姫さまの依頼（後書き）

今回はここまでです。

何か感想でもありましたらよろしくお願いします。

あと、感想いただいた方ありがとうございます。

現在修正作業も並行して行っています。

ご指摘ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6035v/>

テスト投稿：ゼロの使い魔二次作品

2012年1月5日00時53分発行